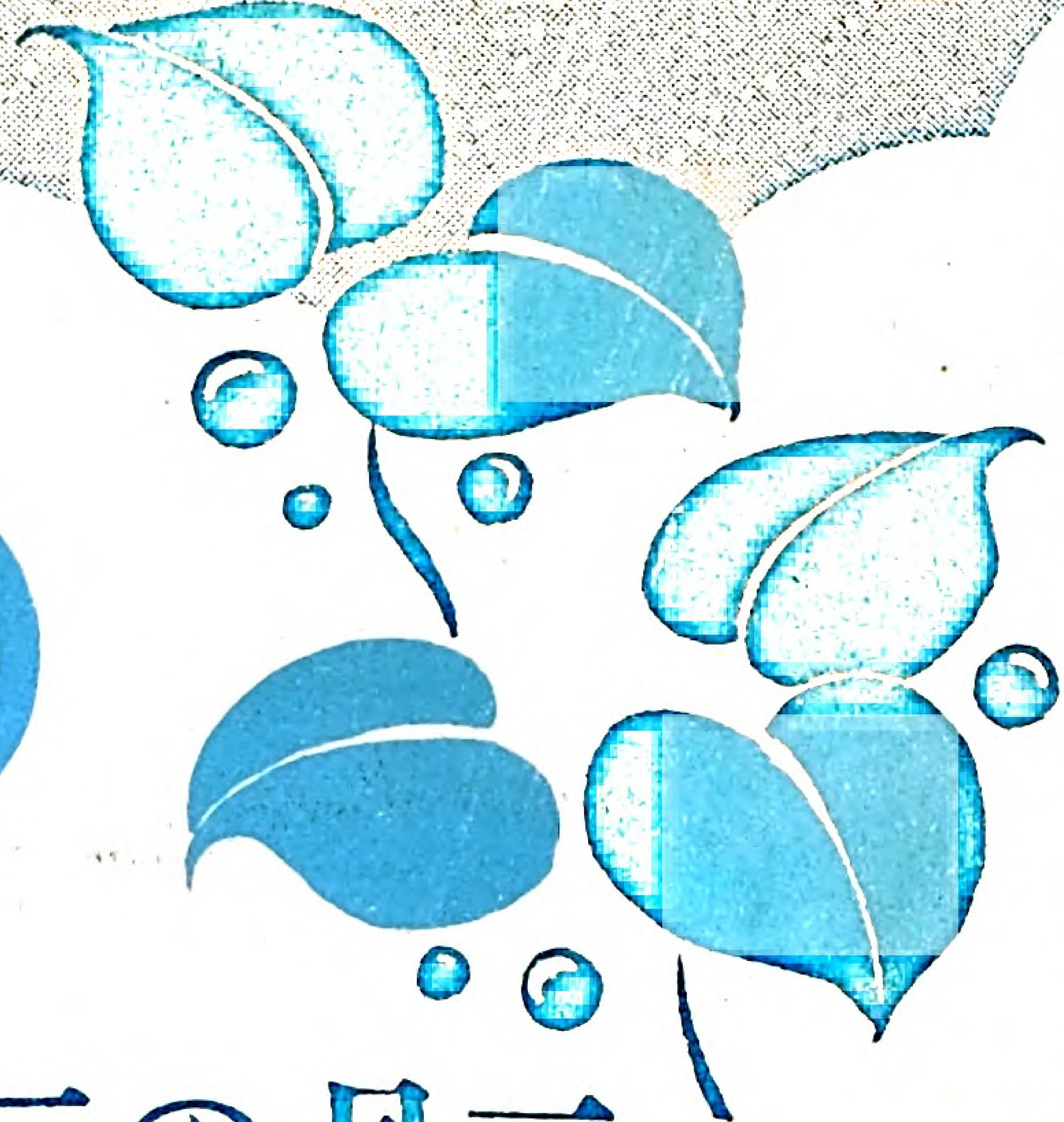
KAIZO

改造

二月號

改正定價金五拾錢

1927



二月の三越

……早や春景色の三越……

早くも春は三越に訪れてまゐりました。此の月を彩る主な催物としては、例年御好評の雛人形陳列會を初め、帯側陳列、其の他各種の美術展覽會など、何れも趣味に滿ちた數々を御高覽に供します。何卒御來觀の程偏に御願ひ申上ます

◆三越新宿分店（新宿驛前）

◆三越青山分店（青山學院前）

三越呉服店

東京市 駿河町

A85

改造二月號目次

無產階級文學の社會進出批判

婦人と功名心の問題

創作

◇市川一郎譯著◇（四六判最上製美本 全壹册六百餘頁箱入 正價金五圓八拾錢 送料金廿七錢）◇

好評 中學校・上級用 哲學の一斑 基礎概念講義

（哲學初步研究者）（必備の參考用書）本書は高等學校初級生若くはそれと同程度の素養を有する人々に廣義の哲學概念を與へ從來閑却せられてゐた新しき世界に對する興味を喚起せしめ兼ねて既得の自然科學の知識を完成せしめる爲に叙述せるものである。尚心理學・論理學・倫理學等をも所謂廣義の哲學的學科と認めて加へられてゐる。今や哲學は一部の智識的階級の専有物でなく一般人にとつて必要な智識となつて來た時本書の如きは誠に貢獻する所多からんと信ず。（萬朝報）

高橋穣著 西洋哲學史 講義 參圓八拾錢 送料十八錢

稲毛金七著 哲學教科書 參圓八拾錢 送料十八錢

市川一郎著 高尚な理論平易に講義 哲學概論 四圓八拾錢 送料廿七錢

渡部政盛著 最新哲學辭典 五圓八拾錢 送料廿七錢

高橋爲男著 ベルクソン哲學 現代教育 正價金貳圓 送料十八錢

一條忠衛著 社會道徳論 參圓五拾錢 送料十八錢

吉波彦作著 精要 韓非子詳解 參圓八拾錢 送料十八錢

森山右一著 文驗受檢用 史記選釋 參圓五拾錢 送料十八錢

森山右一著 神皇正統記新釋

四六判最上美本 全壹册四百餘頁 正價金貳圓五拾錢 送料十二錢

神皇正統記の價値は其「史論」と「史論」の述べ方にあり。本書は實に著者多年の抱負と痛快なる研讃とに基き御歴代中より特に「國號論」「神器論」以下其眞髓を爲す三十餘篇を究明嚴選して浮立たせ一見最も印象的に中心思想の把捉を得しむる樣苦心せると共に全卷其要に隨ひて詳密なる「註釋」「通解」「批評」を施し縱横無盡の語學的解剖を試みたるものにして精要の宜しきを得たる無類の良書なり吁本書出で正統記は究明し盡さる

東京市神田區表神保町七番地 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

謹て　大行天皇の御崩御
を悼みたてまつる

本誌の値下げと十倍擴張運動

我國の思想界、及文壇に本誌がどれほど寄與したかは今更玆に呶々する必要がない。海外の思想界及文壇でも『日本』と云へば「改造」を想起させ、「改造」といへば日本で尤も權威ある評論雜誌として識者に重んぜられて居る。單に我國ばかりでなく歐米の諸國にも本誌ほどの權威を保てる雜誌が他にあらうか。我々はいたづらに發行部數の多いのを競ふものでない。本誌の一言一動が時代を示標して錯誤なく、大衆の先驅者として比類なき任務を盡せば足るのである。本誌は雜人の掣肘をも受けず、そして何等の背景にたのむ所がない。自分の云はんとする所を責任を以つて云ひ、自分の行はんと欲する所を勇敢に戰ふだけである。從つて我誌は社會及讀者に有益なりと思ふことは何事でもグングン斷行する。

我誌は玆に思ふところありて本月號より誌面の一大革命を斷行した。劈頭先づ定價八十錢を五十錢に引き下げた。勿論、我社は多大の物的犧牲を忍ぶつもりで一大冒險を敢へてした譯だが、現在までの九ポイント活字を八ポイントとし十七行組、廿行組を廿三行、廿五行組として今までの雜誌より內容がズット豐富になり、增加せられたのである。勿論、主義、主張なりに變革のあるべき筈はない、唯だ大衆的の綜合雜誌としてその編輯振りが聊か或部面に偏局したところは今後に於てドシ〳〵是正する。そして權威と品格とを映發することに一層の努力を惜まないが、これと同時に百萬大衆の肩のこらぬ伴侶として成長することを念としたい。女性たちの間にも容易に這入れるやうに考察して編輯するつもりである。何分唐突の斷行とて編輯上に新しい機軸を出す準備の時間に乏しかつたのは遺憾

であつたが、三月號よりは思ひ切つた改革面が見られることを斷言するものである。
我々は世の人がよく云ふやうに行き詰ると云ふことのあらう筈がないと思ふ。經濟界でも、政治界でもそして出版界でも。展望はいたづらに廣くして開拓の地は永劫無窮だからである。ただ限られたる境界を戰闘地區とすることに依つて行詰りが生じ、梗塞が生じ、破滅の幕が下る。だが我々の戰線には殆んど境界がないといつてもよい。本社が今回十倍擴張運動を起しても、それは可能の問題であり、危ぶまれる成功ではないのである。財界は著しく不況であり、世相は著しく複雜となつて行く。このときすべての世相を照鏡し、綜合的に大衆の何處に行くべきかを摯實に批判し示唆するのは雜誌『改造』の崇高なる一大任務であらねばならぬ。生活が一層複雜を加へ、生活難が一日は一日と加重するにつれて聰明にして廻りくどくない指導者が一層必要になつてくる。眞率にしてたのもしい相談相手としみじみ肌を合はしたくなる。我『改造』は實に眞率にて勇氣あり、情味濃かにして底深く潜熱を藏する我國人の絕好の相談相手である。何人に對しても、何ものに對しても、はばかるところなき一本氣の眞劍味であり、且つ不屈の氣概を以つて時代の動向を遠慮會釋なく圖星を指す。
今回我誌の値下げは我經濟界の不況に處する適應策でもあるが、此際を機緣として買ひたくて買ひ得ぬ大衆の爲に我誌の門戶を廣く開放したのである。我社は此計畫にて豫期以上の成績を舉げ得るに於ては大量生產の結果として尙一層の値下を斷行する。だが、一冊五十錢で此頁數を以つてしては現在の三倍の讀者を絕對必要とする。現在の讀者が十倍に擴大さるることになれば三十五錢限度への値下は易々たることであらう。本誌は今回の思ひ切つた値下を斷行しても內容に於て世界的權威を保持する上に編輯上にはこれ迄以上の嚴格さを以つて當ることを一言して置きたい。

ムッソリーニの思想と風格

高畠素之

一 映畫『永遠の都』

明けて一昨年の暮、それも押しつまつた二十三四日頃だつたと思ふ。活動の變り目とあり、例によつて例の如き怪奇的な廣告が夕刊に巾を利かしてゐた。中で一つ、特に興味を刺激されたのは、東京館の『永遠の都』といふ題名のそれである。『伊太利首相、黑襯衣國首相ムッソリーニ氏主演』なる手前味噌を、まさか文字通り盲信した譯でもないが、米國の某映畫會社が伊太利までロケーションに出掛け、ファッシオの宣傳寫眞を撮影したといふ噂を聞いてゐたので、傍ら彈壓の片鱗を瞥見せんとする茶氣も手傳ひ、氷雨そぼ降る中を御苦勞にも淺草まで遠征した。ところが、主演といふ觸れ込みにも拘らず、肝心の『彈壓』は大會の席上で演說してゐる實寫と、コンスルのデスクに倚つてペンを走らせてゐる實寫と、それも昔の明星よろしくチラリと姿を見せるだけ、片鱗を捉へやうにも近眼をかこつの外なかつた事を記憶してゐる。

しかし、その朧ろげな視力を通して瞥見し得た印象は、一言に盡せば妙に化物染みた感じだつたことである。普通の人間に比較すると、顏の造作ばかり獸に大きく、蛞蝓を二つ重ねたやうな上下の唇を動かし、面積的にも容積的にも巾廣で部厚な手を振り、その顏に比較して尙ほ且つ大きい慈姑のやうな例の白眼を剝かれた時など、どうやら梅幸の四谷怪談を見るやうな不氣味さを覺えた。相貌に於ける斯うした畸形感は、彼れの思想乃至性向と不可分の關係を有するらしく、若し東洋流の面ら魂といふ言葉が許されるならば、この不氣味にして不均整な相貌こそ、彼れの全部を表象する運命でなければならない。鍛冶屋の伜から小學教師となり、それから革命的サンヂカリストの群に投じ、乞食の如く官憲に追ひまわされた身を以つて國家中樞の獨裁權を掌握せるまで、その數奇無限の過去は言はずもがな、『反動的』行動に出でながら所謂反動派と抗爭し、社會主義的政策を採りながら所謂赤色派を排擊する現在と雖も、彼れの出頭沒頭は飽くまで常人の格調を破つてゐる。隨つて彼れを、何づれの意味からにしろ一個の典型として見るのは誤りで、特に一定の主義に對する殉教者と解するのは誤りである。


Mussolini

現に彼れの實際家たる面目は、右の『永遠の都』なる一篇の筋書によつて明瞭に看取せられる。當時の記憶にして誤りなければ、デヴイッドと稱する親なし子が、乞食の手から救はれて平和主義の老學者に養はれ、その娘との熱愛にも拘らず祖國の難に赴いて戰場に馳驅し、やがてはファスシスチに投じて赤色暴徒と戰爭成金とを退治る、といふのが大體の經緯であつた。お定りの藝術的價値を云々する段になれば、古都羅馬を背景とせるモッブの扱ひに多少の感心があつたのみで、主人公に扮したバート・ライテルも、女主人公に扮したバーバラ・ラ・マールも、敵役の成金に扮したライオネル・バリモアも、共に俗臭紛々たる米國映畫の低級さを呆れさせたに過ぎない。が、唯だこの一篇中のモテーヴとすべきファスシチの宣傳的效果からいへば、隨所に感心させられる部分が多かつたのは事實である。即ち無名の一靑年が、平和主義や戀愛感情を突破して國旗に忠良なりしこと、同じくその立場から非國民的な暴徒や成金を蹂躙すること、而もその故に『馬の骨』たる分際を以つて、彈壓宰相から最高の名譽と戀愛とが是正されること、等、等、等。大手搦手から黑襯衣團の功德を宣傳する用意周到さは、どうして『初戀の味』で賣り出したカルピス主人の料金負擔で、新聞全頁のメッセーヂを日本國民に廣告した以上の手際である。それもこれも、莫迦らしいといへばそれ迄だが、氣恥づかしさを一段の高さから克服し、淸濁併合の氣持ちに直入し得るところは、生れながらなる彼れの偉大さを表明したものである。この稚氣あり、この衒氣あり、而してこの洒落氣あつて、初めて有象無象を掻き集め得たのであらうし、同時にこの烏合の衆を以つて天下を取り得たのであらう。その點、彼れが常に比較されるマッチニーなどと違つた意味で、或る時代的な新しさを感受せしめる所以である。

以下すこしく、彼れの生涯と人物に就いて妄評多謝するつもりであるが、當否の判斷は素より勝手に下して頂きたい。

二　蛇は寸にして

ムソリーニ、その名をベニトー、一八八三年七月二十九日伊太利は東海岸のフオルリ縣プレッタピオといふ寒村に生れた。父はアレッサンドロといつて鍛冶屋を業とし、母はローザといふ女教員である。兄弟は二人、弟のアナルドーは後年に兄貴の新聞經營を助け、ファスシチの隱れた功勞者となつた。甚六にも拘らず、ベニトーは手に負へない腕白小僧で、三ツ兒の魂を多分に藏し、近所近邊の憎まれッ子で通つてゐた。それでも母親の希望でどうやら師範學校だけは卒業し、十九歲の時に初めて小學校の教員となるを得た。當時の彼れは、腕白の名殘りを留めながらお多分に洩れぬ靑春の憂鬱に陷り、些か鬼の霍亂たるを免れないが、暇さへあれば文學書を耽讀し、自分でも進んで詩や小說を書いてゐたと傳へられる。傳記によれば、それらは總べて天才の閃めきが輝いてゐたとあるが、素より眞僞の程は保證の限りでない。

しかし根が傲岸不屈で、而も野心勃々たる彼れであつたから、間もなく教員をやめ、井中の蛙が大海を志す煩悶よろしくあつたのち、僅かばかりの金を懷ろにして瑞西に出發した。恰も國境に差しかかつた折りも折り、新聞紙は彼れの父親アレッサンドロの捕縛を傳へた。

　元來、彼れの父は堅氣の鍛冶屋を生業としてゐたが、この子にしてこの親ありの譬に洩れず、深くもバクーニンの思想に傾倒し、土地の社會主義者連の親分として通つてゐた男である。玆において流石のベニトーも、行かうか戻ろかの岐路に迷つたが、ままよ乘りかかつた船といふので瑞西に向つた。だが、憧れの瑞西も決して彼れのために『幸ちある國』ではなかつた。パレトーの社會學を聽かんがため、あらゆる勞働の苦しみを耐へ忍んだものの、遠慮なく餓死の危險は切迫する、浮浪人として拘留される、各地を轉々する中に各國の亡命客と知り合ふやうになる、それに親讓りの血潮も手傳つて遂に勞働階級の中に投じ、組合の組織や罷業の指導に專念する事となつたのである。それがため彼れは、瑞西官憲から追放される結果となり、河岸を代へ佛蘭西に渡つたものの、そこでも同樣な運命は彼れを待ち設けてゐた。唯だしかし、佛蘭西遊行が彼れに幸ひしたところは、多くの革命的サンヂカリストと交る機會を得たことであつた。殊にジョーヂ・ソレルからは、南歐人特有の熱情をいやが上にも煽られ、總同盟罷業によつて遂行する革命の烽火に、詩的興奮を唆られるところ多かつた模樣である。後年、彼れがファスシスチ運動を起すに當つて採用せる戰術は、直接に當時の影響を反映せるものであつて、ファスシズムそのものも理論蔑視の傾向に於いて多分にサンヂカリズムと類似してゐるのは、かうした因緣からに外ならない。

　佛蘭西を追はれてやむなく歸國すると同時に、彼れの唯一の安息所たりし慈母を失ふ悲運に際會した。母の死によつて蒙れる心的打擊は餘程ひどかつたものらしく、一時は悲嘆の餘り失神狀態に陷り、暫らくは病床から離れなかつたと傳へられる。病氣恢復と同時に、天涯孤客の感じを痛切にした彼れは、又もや墺太利に入り、トレントの社會主義新聞『國民（イル・ポポロ）』の編輯人となつたが、玆でも筆禍を買つて三度目の追放命令を受けたのである。

　かうした周圍の迫害は、性來の負けじ魂を一層昂揚し、社會主義による祖國革命の決心を却つて堅固ならしめた。即ち故郷フォルリ市に於いて週刊新聞『階級鬪爭（ラ・ロッタ・ディ・クラス）』を創刊する一方、ソレル仕込みの新知識を傾け、他日の總同盟罷業に備へるため各工場の『細胞』組織に專念した。それがため、翌年は黨の幹部會に擧げられ、その翌年はミラノに於ける社會黨中央機關紙『前衛（アヴァンチ）』の主幹となるなど、一躍して押しも押されもせぬ領袖の地位を獲得したのである。

　以上は一九一〇年から一三年まで、僅か數年間の記錄であるが、彼れはその間に於いて妻を迎へ一女を擧げたほか、トリポリ戰爭に反對して投獄される等、一身上の變化も經驗した。而も彼れの非戰論の論據たるや、社會黨流の常套口吻とは全く異なり、國家に利益あれば植民戰爭も大いに結構だが、この戰爭は何らの利益を齎さないから反對だといふにあつた。言ふまでもなく、黨の領袖たる彼れが斯うした議論を公表したことは、物情を騷然たらしむるに充分である。曰く、餘りに國家主義的である。少しも社會主義者らしくない、といふのが非難の中心であつた。だが、ムッソリーニは『予の要望するところは、經濟的並びに精神的の二重なる貧困より國民を救ふにある』と、豪語して介意する色はなかつた。

かうした經緯が、彼れと他の領袖連との確執を來たすは當然であ

る。彼等は彼れを非難し、彼れは彼等の民主々義的弱氣と朋黨的妥協性とを輕蔑し、好んで喧嘩を賣つて出たものである。『愛と憎しみの網の目が十重二十重に身邊を圍んでゐたから、寂寞たる人生も耐へ得られた』のであらう。彼れのこの述懷によれば、寧ろ鬪犬と同じやうな生理的必要から、喧嘩を賣つたものと見える。また曰く、『予の半生は、勉強、鬪爭、貧乏の三字に盡くされる』と。實際その頃の彼れは、五十圓に足らぬ收入で生計を立て、邊幅を飾らず、粗食に甘んじ、無精鬚のまま默々と讀書に耽り、時に得意とするヴァイオリンを奏でて、僅かに憂ひを慰めるにすぎなかつた。

三　天に聲あり

幾多の同僚との斯くの如き確執にも拘らず、ムッソリーニの迫眞力と實行力とは、依然黨内に重きをなすに充分であつた。隨つて彼れを支持する黨員も多く、また隨つて、領袖たる地位も主幹たる地位も搖ぎなく、寧ろ一九一三年から一四年にかけての彼れは、社會黨の唯一者として自他共に許してゐたのである。

かかる形勢を持續する間に、世界大戰は勃發した。伊太利はこの時に際し、聯合側と協商側とから必死の誘引に攻められ、國内の輿論また甲論乙駁といふ有樣で、久しくその態度を決し得ないでゐた。社會黨は一も二もなく參戰に反對し、ムッソリーニもその機關紙に於いて伊太利が中立を嚴守すべき所以を切言したものである。

然るに如何なる理由か、ムッソリーニは翌十月に至り、突如として黨の決議を破り、嘗ての自説を拋つて對墺宣戰を布告すべきことを主張し、同時に『前衛（アヴァンチ）』を棄て新しく『伊太利國民（イル・ポポロ・ディタリア）』なる日刊新聞を創刊し、椽大の筆を揮つて主戰論を力説高調したのである。

その變化たるや實に突然である。バイロンの故智を學ぶなら、一朝眼覺れば、非戰論者ムッソリーニは主戰論者ムッソリーニに甦生してゐたのである。

ムッソリーニのかくの如き態度豹變が、抑も何に因由するかといふ詮索は、全く不明であると共に全く不用である。或る傳記者はこれを評して、聖書に於けるポーロの轉機に比較し、凡人の計り知るべからざるインスピレーションのせゐにしてゐる。必ずしも荒唐無稽の痴言として葬り去るべきではない。元々ムッソリーニは、合理主義を排斥するサンヂカリストであり、直感主義のベルグソン哲學を間接的なりに繼承する者である。その限りに於いて、飛躍はサンヂカリストの特性であつて、彼れの影響者ソレルが加特力の僧院に隱遁した心理經過と、尚ほ具體的には山川氏が議會主義に豹變した心理經過と、靈犀相通ずる所があるのであらう。それかあらぬか、山川均氏が自己の豹變に就いて何らの辯解を試みられたことがないのと同じく、ムッソリーニもまた嘗て彼れの所謂豹變に就き辯解を試みたことがない。しかしインスピレーションの效能を知らぬ我々だが、他人の疝氣を頭痛に病む程度に解釋すれば、凡そこんな事でもあらうかと目安だけつけられる。即ち戰爭によつて、國民の惡習と文弱を一掃し、對外的には伊太利の國際的地位を向上せしめると共に、對内的には經濟生活の革命を斷行し、延いて社會的價値の觀念を變更せんとした一事である。ムッソリーニに於ては、かかる事が伊太利革命の意義と解されてゐたの

である。蓋し彼れがその演說で、露西亞のボルシエヰーキ革命とこれを對比し、『伊太利はファスシスチ革命を斷行した』と自負してゐるのは、全くかうした理由に出づるものと思はれるからである。

それは兎にかく、ムッソリーニの主戰論への轉向は、單り彼れの同志のみならず、全國民を驚倒せしむるに充分であつた。社會黨は直ちにムッソリーニ査問の大會を開きつひに大多數を以つて除名することを決議した。當日ムッソリーニが、要求されて壇上に立つた時である。あらゆる罵詈の聲は雨と降り、熱狂せる群集は身邊ちかく押し寄せて、今にも危險が迫らんかと怪ぶまれた。而も漸くにして口を開いた彼れは、要求された一身上の辯解には一言も觸れず、やをら伊太利社會黨の攻擊に移り、君等は優柔卑屈で、日和見主義で、小ブルヂオア的だとアベコベに毒づき、揚句の果ては『諸君の手による伊太利革命は絕對に不可能である』と極言したのである。何と我が自稱革命家の口吻と髣髴たりながら、何とその意氣の相違することよ、と更めて感心するのほかはない。

この大會はムッソリーニをして、社會黨と永久の怨敵たるべく運命づけた。不屈傲岸の彼れは、これを動機として過速的に社會黨一派と隔離し、やがては『反動的』諸分子と聯繫する結果を助長したとも言ひ得る。

『伊太利國民』（イル・ポポロ・デイタリア）に據れるムッソリーニは、何人の掣肘をも受けることなく、聯合側加盟の輿論喚起に努めてゐたが、翌一五年五月に至り愈々伊太利は參戰に決した。多情多感な彼れは義勇兵を志願し、漸く許されて伍長に昇進した一七年二月、カルソーの大戰に敵彈を浴び、重傷の身を松葉杖にすがつて鬪休しなければならなかつた。その後の彼れは不眠不休で活動を續け、筆陣に舌陣に倦むを知らぬ有樣であつた。

『國家は否定すべきでなく、克服すべきである。民主々義とは標準を下げることでなく、下層階級をヨリ高い標準に上げることである。』

『今度の戰爭は最初の中こそ民主的であつたが、今では大分貴族的になつてゐる。大衆の中から選ばれた最良の鬪士よ、これが今日の最大問題である。』實にムッソリーニの主戰論はそれが支配階級への迎合に非ずして、大衆の意志伸揚にほかならなかつた。而してあらゆる腐妄的なもの貴族的なものの爆碎こそ、彼れが戰爭參加によつて達成せんとした目的らしく考へられる。『伊太利は未だ若い。潑剌たる生命を有してゐる。しかしその政治形態は、餘りに老朽して役に立たない。』

ムッソリーニはファスシズム革命の雄圖を、既にその當時から計畫してゐたといふのは、果して贔屓の引き倒しとのみ言ひ得るであらうか！

四　毒を以つて制す

論理的に見たファスシズムは、デモクラシーの無力と無爲とに對する反抗として生れたと言ひ得る。それはムッソリーニが、議會政治を目して『その政治形態は、餘りに老朽して役に立たない』と、喝破したことに於いて有力に證據立てられる。實際、戰前から戰後にかけての伊太利議會は、十三乃至十七の小黨に分立し、責任組閣の實力を有する政黨なきこと、恰も獨逸や佛蘭西の例と同じであつたが、その亂

脈は兩國に比して更らに甚だしきものがあつた。そこで已むなく、ブロック・システムに依る聯合內閣を組織し、辛うじてその日暮しの政治を行つて來たが、歷史的並びに階級的利害の複雜性は、各黨をして相互に三すくみの狀態たらしめ、些かも政治の實績を擧げることが出來なかつた。こんな鹽梅であるから、伊太利の議院政治は最初から腐敗の歷史を繰り返し選擧干涉、官權濫用、投票買收、暴力行使といつた罪惡が無遠慮に繰り返へされた。而もその複雜な政局は頻繁に政變を馴致するところから、解散に次ぐ解散といふ具合で、ます〳〵議會の腐敗を助長した傾きが大い。

他方、社會的に見ても、伊太利は天然の資源に薄く、產業は萎微して振はず、それがため勞働階級には『危險』思想が充滿してゐた。殊に戰後に於いては、さらでだに疲弊せる國力が著しく疲弊し、產業の沈滯は各方面に失業者を出だすといふ狀態で、財政の窮乏は言語道斷であつた。かうした社會的不安は各地のストライキを誘ひ、勞働者の工場占領は病的流行となり、社會主義者や共產主義者の傍若無人ぶりは、ます〳〵露骨に發揮されて停止するところがない。而も無力なる政府は、これを徒らに拱手傍觀するの外なく、露西亞に次ぐ伊太利革命は單なる時日の問題と觀測されたのである。

ムッソリーニがファスシスチを次第に膨脹せしめ得たのは、巧みにこの氣勢を利用したからである。卽ち赤色分子の反對酵素として、その亂行に正比して內容を增大し、在鄉軍人、靑年學生、農民等、雜多な分子のこれに來たり投ずるもの次第に大きを加へるやうになつた。ムッソリーニは彼等に克己と奉仕を說べ、秩序と訓練を與へて、瞬く間に不動の勢力となるを得たのである。

事態がかくなる上は、所謂赤色分子との衝突は免れない。最初の衝突はボロニヤに於いて行はれた。對手は一トたまりもなく黑襯衣に蹴散らされ、赤色派の出鼻はやや挫かれた形である。加ふるに社會黨は內訌に內訌を重ね、黨員のヒステリックな騷擾が人氣を損ねたる上中央部に於いても、戰後ニッチ內閣に迫つて凱旋軍人の入京を阻止し凱旋門の撤去を行はしめたのに味を占め、陛下の勅語奉讀に革命歌を以つて酬いるといつた狂燥的態度を示すやうなこと多く、ます〳〵人氣を喪失したのも自業自得である。

社會黨の勢力失墜すると見るや、ファスシスチは幾何級數的に增大した。そして一九二一年には、僅か三月の間に死傷者五千名を出だす程の猛威を逞しうし、やがて解散後の總選擧に際しては、一躍四十名の代議士を議會へ送る程の表面的勢力となつた。四十名の議員は素より議會を左右し得る勢力でないだが、赤色派抑壓を以つて目前の關心事とする反社會黨聯合は、實際的に黑襯衣の暴力的保護を必要とする餘り、ファスシスチ黨に厭でも應でも屈伏せねばならなかつたのである。

ムッソリーニこそ旭日昇天の勢ひである。彼れは斯くして、政爭の眞ッ只中に乘りだした。そしてボノミ內閣を威嚇して退かしめた上、醋だの蒟蒻だのと駄々をこね、オルランド、デ・ニコラ、ヂオリッチ、ファクタと堂々めぐりをさせた揚句、最も無力なファクタに政權を取らせた。ところが上り氣味のファクタは、目前の急場を凌ぐべく社會黨案の財產稅重課を採用したといふので暴れ出し、たうとうこれを倒

してしまつた。かくて伊太利は、又もや無政府狀態に陷つたが、ファスシオの暴力威嚇と社會黨の罷業威嚇に震えあがつた政治家共は誰れしも組閣の責任を引き受ける者なく、やむを得ずファクタに改造内閣を組織せしめた。

『今や伊太利には二個の政府が存在する。一はファクタによつて代表さるる虚僞の政府であり、一はファスシスチによつて代表さるる眞實の政府である』——この傍若無人の宣言をなして、ムッソリーニが堂々五十萬の黨員と三十萬の義勇兵とを擁して羅馬に進出したのは、それから僅か五十餘日目のことである。

五　水火を辭せず

伊太利に於いてファスシズムが、如何なる社會的乃至政治的必然を胎んで生れたかといふ問題は、如上の概觀で簡單ながら大體の見當がついたことと思ふ。そこで今度はファスシズムまたはファスシスチに就いて、いま少し分析的な調査を進めて見たい。

先づ最初に、ファスシオといふ言葉の意味から詮索したい。これは『縛り合つたもの』即ち『結束』といふ意味なさうである。一論には古代羅馬時代にファスシと稱する飾杖があつて、それが正義を象徴する武器として、尊重されたところから出たといふ人もある。しかし下位春吉氏の說によれば、それは全然虛構の事實なさうである。若し然りとすれば、ファスシオの名稱そのものが武斷的だといふやうな非難は當らぬことになる。

ファスシスチは黨旗として黒旗を用ひ、制服として黒襯衣を着る。黒色が彼等と如何なる因緣を有するのか詳らかでないが、恐らく赤色に對する無政府黨の黒色みたいな話しであらう。黒襯衣と共に、彼等には常に佩用するところの徽章がある。それには『メ・ネ・フレゴー』（水火を辭せずとの意）の文字が印刻され、團體的規律を尊重する彼等の心意氣を表示してある。そして例の棍棒を提げ、左手を高く『ア、ヤア、ア、ヤア、アアラアラア』と呼び交はし、隊伍堂々と市中を練り歩く彼等の示威運動は、さぞ勇壯活潑なものであらうと想像される。

しかし斯うした組織は、ファスシオが政黨的に組合的に大成された後のもので、その最初は如何に贔負目にみても有象無象の烏合であつたことは疑ひない。現にヂオリッチ内閣の下に於いて、盛んに市井で社會主義者と抗爭してゐた頃は、文字どほりの暴徒に齊しく、訓練も統制もあつたものでない。蓋しそれは、ファスシオそのものが最初から確固たる理想に統一されたものでなく、國權伸張論者や赤化思想拒否者や、さては戰後の恩賞に不平を有つ在鄕軍人やが雜然と集り、唯だ事あれかしと喧嘩を賣つたに過ぎないのである。そんな譯であるから、ファスシオ運動の濫觴を正確に指摘することは出來ないが、一般的解釋ではダヌンチオのフイウメ占領を出發點としてゐる。だがそれは異なる結果で、遠くアンリコ・コラディニーの指導する國民黨の活動が濫觴だとする見解もある。何づれにもせよ、ダヌンチオも國民黨の活動と無關係でなかつた意味に於いて、彼れとファスシオとが密接な關係を有することは否定し得ない。

戀愛詩人としてのみ知られたダヌンチオが、現實社會の正面に初め

て姿を現はしたのは、大戰の初頭に於いて伊太利が獨墺に向ひ宣戰すべきことを强論した時に始まる。遲れ走せながら、ムツソリーニも亦主戰論を唱導し、玆に兩者の因緣は締結されたが、ヨリ緊密な因緣は寧ろ戰後に開かれたのである。

一九一九年十一月、ヴエルサイユ平和會議の結果、ウイルソンとこれを支持する英佛の干渉により、當然その手に歸すべしと思はれたフイウメは嚴しく拒まれ、伊太利國民の憤激は絕頂に達した。この國民的義憤を代表せるダヌンチオは疾風迅雷的に義勇兵を率ゐてフイウメを占領し、彼等の希望が容れられる一九二一年一月まで、獨立國の面目を確保したのであつた。當時彼れの麾下に參じた者は、大戰の凱旋將卒を始め、社會のあらゆる階級の熱情的分子を含んでゐたが、これらは何づれも後年ファスシチの中堅要素となつた意味で、ムツソリーニはカヴールに對するマッチニーの如く、ダヌンチオの正系を踏襲したとも言ひ得るであらう。

それはそれとし、ムツソリーニが社會黨の復讐に備へんとして第一ファスシオを組織したのは、ダヌンチオのフイウメ占領に先立つこと半歲、即ち一九一九年三月二十三日のことに屬する。最初わづか百四十五人の團隊であつたが、創立に際しては一萬七千を算し、翌年は三萬その翌年には五十萬、今では概算百萬といはれてゐる。ファスシスチが斯く急速の發達を遂げたのは、前述の如き社會的並びに政治的理由に基づくが、而もムツソリーニ自身の時代に對する洞察力は、彌やが上にも增大を加へしめた感がある。例へば餘りに遊戲化した議會政治に對する絕望は、他方に何か壓力的なものを讚仰する氣分を釀成しつゝあつたが、炯眼なる彼れは早くもこの傾向に着眼し、暴力行使が烈しければ烈しいほど國民的人氣に投合し得ることを知り、必要以上の暴力行使をも敢てなし、以つてその英雄崇拜感を煽揚した如き、時代に對する彼れの明敏なる洞察の然らしむるところでなければならぬ。これ即ち、彼れが一部の軍人や學生のみならず、資本家にも勞働者にも、商人にも農民にも、あらゆる階級から崇拜を捧げられた所以である。

六　武器を逆用す

『年少にして社會主義者たらざる者は怯懦である。長じてこれを棄てざる者は痴愚である。』これはムツソリーニが、ある自由黨議員から彼れの變節を難詰された時、當意即妙的に答へた遁辭である。しかしそれは遁辭なりに、主義乃至理想といふものに對する根本態度を語るものである。更らにまたいふ。『事實は書物よりも、經驗は教養よりも、ヨリ大なる價値を有する。』

これらの言葉から歸納して論ずれば、ムツソリーニの思想は『思想そのものを無視する思想』と呼ぶを適當とすべく、隨つてその代名詞たるファスシズムも亦、何ら明確な概念を表示するものでない。少なくとも主義の主義たり得るところの、積極的意義を捕捉することは困難である。唯だそれなりに、消極的に斯く斯くの主義と一致せぬといふことだけは明瞭にし得られる。以下すこしく彼れ自身の言葉を通してファスシズムの檢討を試みたいと思ふ。

『我等の眼前に於いて現に行はるる戰後の經驗によれば、自由主義は

既に敗滅した事が證明されてゐる。露西亞及び伊太利にあつては、自由主義的理想を度外視して、立派に統治し得ることを證明した。コムミュニズム及びファスシズムは、自由主義の圏外に立つものである。』『ファスシズムは一切の偶像を認めず、且つこれを尊敬せざることを銘記せよ。新時代の青年は扮飾せる自由の女神像を蹂躙し、更らに必要ある時は、再び舞ひ戻つてこれを蹂躙すべきである。』

自由主義に對する斯くの如き憎惡は、政治上には議會拒否の態度となつて反映し、經濟上には獨特の勞資協調論となつて展開される。『私有財産制度より生ずる弊害は、階級闘爭主義に代ふるに階級の共同勞働を以つてし、勞働尊重の原則を確立することに依つて輕減し得る。企業家は勞働者壓迫のためにその經濟的勢力を利用すべきでなく國家の大部分が勞働大衆より成る事に思ひを致し、勞働大衆をして生活不安及び失業狀態にあらしむるは、國家の偉大さを減損する所以なるを忘れてはならない。同時に勞働大衆も亦、國家のためにその安寧秩序を脅威するが如きことがあつてはならない。』

彈壓宰相に似もやらず、まるで協調會囑託の口吻である。だが、折角の注文を對手が肯んじなかつたらどうなるのであるか。ムッソリーニは『それにつけても』と言はぬばかりに言葉を續ける。『勞働者にも企業家にも恐れず、また煽動政策も金權政策も行はぬ強固な政府の存在によつてのみ、社會の平和は初めて保持し得るのである。』映畫『永遠の都』の筋書は、茲において初めて明瞭となつた。ファスシズムは、勞働者のためにも企業家のためにも存しない。唯だ單位的に包括した國民のためにのみ存するのである。

然らば國民と國家との關係は如何?『國民は國家を超越すべきである。』『國民は現存する國家の全メカニズムを破却すべきである。』ムッソリーニの理論は、茲に於いて一般政治學の常識圏外に飛び去つてしまふ。思ふにムッソリーニは、大戰參加によつて急速に昂進した國民的感情と、統一後なほ若くして未だ熟成せざる國家的感情と、伊太利人のかかるギャップとを如實に代表したものであらうが、それにしても強力な獨裁權を主張する彼れが、國民と國家を斯く二元的に解釋するのは不思議である。而も不思議はこれに止まらない。彼れは政治上に於いてこそ熱心な集權主義者であるが、經濟上に於いてはこれに劣らざる熱心な分權主義者である。卽ち統一的計畫は政治原則のみに適用し、經濟原則には適用しないのである。『經濟政策上の集産主義は、單に一個の思索方法たるに過ぎない。國家は決して現存する個人の集合に非ず、また經濟上、相互に事業の連絡を有する株式會社でもない。故にもし、各個人の特性を平均化せんとし、或はその創造性を無視せんとする時は、却つて各個人の生産力を減ずると共に、國家有機體の活動力をも滅殺する結果ともなる。』

ファスシズムの斯かる政治的集權主義と經濟的分權主義を評し、或人は皮肉にも國家サンヂカリズムと命名したが、啻に戰術といはず、ムッソリーニの思想乃至感情に於いても、多分にサンヂカリズムの影響が發見されるのである。例へば政治蔑視の傾向である。彼れはそれあるが故に、中央政府の退却を平氣で要求したり、傍若無人な獨裁權の執行を要したり、果てはメカニズムの名に於いて合意主義をコキ下ろしたり出來たのである。これ恰も、彼れが目の敵にしてゐるフリー

・メーソンと同じく、『國家内に國家をつくる』傾向といはれなければならない。

要するにフアスシズムは、未だ星霎時代に彷徨すると言ひ得べく、寧ろその曖昧模糊たるところに、包容性もあり、融通性もあつて面白いとせねばなるまい。

七　多面錐體の頂點

ボリシエヰーキを過激派と呼ぶ如く、フアスシスチを國粋團と呼ぶ一般的習慣は、單なる文字の表面的意味により、實體と似もつかぬ印象を與へてゐる部分が多い。ボリシエヰーキもフアスシスチも、今では一黨を以つてよく國政を支へ、一定の組織によつて完全に統制を保つてゐるのである。

『我等は美術家がその傑作をつくるために、材料を使用するが如く大衆を利用する』と豪語したムッソリーニも、内外の狀勢平靜に歸るや多少の民主々義的讓歩を聲明してゐるが、依然『命令をなす者は予一人である』といつた獨裁制を、多面錐體の頂點に於いて强行してゐる。即ち内閣總大臣兼攝四相として國政執行の任に當ると同時に、最高評議會を任免監督し、中央執行部を指揮監督し、國防義勇軍を指揮任免し、更らにフアスシスチ國民黨を總裁し、フアスシスチ組合團體を統轄する等、千手觀音の如く何から何まで切り廻してゐる。全く驚嘆すべき精力である。

最高評議會はフアスシスチ寡頭政治の最高機關として、法制上には中央執行部を補助監督することになつてゐる。しかしその實、ムッソリーニの獨裁制を飾る樞密顧問官の如く、最高の實務は中央執行部が處理してゐる。中央執行部は集中主義の原則から委員四人制とし、最高評議會の選任にかかるものである。四人の委員は夫々に監察局、宣傳局、新聞局、監督局を分擔してゐる。國防義勇軍は、一般軍隊に加はらざるフアスシスチの私設軍隊である。主として政治警察に携はり謂はば反對派威嚇の常設的用心棒である。

フアスシスチ國民黨に至つては、黨員みづから首長を選任する資格なく、又みづから團體を管理する權能なき意味に於いて、政黨とは單なる名稱のみである。しかしこれは、根が烏合の黑衣團を中央集權的に組織したもので、國防義勇軍の現役的意義に對する豫備的意義を有し、早い話が一種の革命機關を司るにすぎない。隨つて所謂フアスシスチ議員は、彼等によつて選出された彼等の代表者といふ譯ではない。尙ほフアスシスチ議員に就いて一言すれば、一九二四年の總選擧で、彼等は四十名から一躍三百五十六名に激增したが、それにはカラクリがあつて『有效投票の二十五パーセントを得たる黨派は、下院五百三十五席の三分二を贏ち得る』といふ、箆棒な改正選擧法で得た數字である。勿論、この改正選擧法に對しては、各黨が擧つて反對したが、ムッソリーニは得意の彈壓で鎧袖一觸し、遮二無二强行したといふ後日物語もあつた

それは偖て措き、次はフアスシスチ産業組合である。元來、ムッソリーニはサンヂカリスト出身であり、彼れ自身が勞働階級の組織と指導の天才であつたことは前述の通りである。隨つて彼れが、第一フアスシオ運動を起すや、いづれ勞働階級をも吸收すべしとは何人も想像

した所である。蓋し多數の勞働者は、少なくとも赤色組合に屬せざる勞働者は、社會主義者の暴威と議會の無力に愛憎をつかし、寧ろ黑襯衣團に好感を示してゐたからである。果して幾多の團體はファスシオの傘下に來たり投じ、同時に嘗ての同志たりしロッソニを始め、ベッツオリ、ラッヘル等も參加し、遂に一九二二年ロッソニを指揮者と仰ぐ勞働團體が、ファスシオの別働隊として新たに生れたのである。斯くして新ファスシオは日毎に多きを加へ、嘗て赤色黨徒として横行した分子まで吸收し、今では三百萬以上に達したといはれてゐる。これだけの勢力となつてしまへば、赤色組合もへちまもあつたものぢやないが、而も今ではこの新分子がムッソリーニを飽くまで支持し、以つて極端右翼からの牽制を防禦する位置に立つてゐるから、彈壓宰相の今後の自由なる活動は餘ほど面白いものであらうと思ふ。

この産業團體に並行するもう一つの團體は、知識階級によつて構成されるところの組合である。これはヂアコモと稱する辯護士が統率し職業的知識階級團體、衞生團體教育團體の三大組合に分れ、いづれもファスシオ一流の縱斷的組織を以つて固められてゐる。

斯くの如くムッソリーニは、逸早く内部組織を所謂細胞主義で固めると共に、國民生活そのものに對しても、國家を强大ならしめるには先づ經濟的効果を擧げよといふ見地から、經濟機能の改善を圖り、鐵道政策を改良し、金屬工業を奬勵し、電氣事業、石油事業等を補助し、さては行政、財政、稅制をも根本的に刷新するなど、矢繼早やに新政策を實行して僅か數年間に、全く見違へるほどの業蹟を擧げた。その他對外的には移殖民地の開拓を企て、外交政策の如きもニッチ以來の追從主義を放棄し、一流の我武者羅で伊太利の帝國主義を硬論し、押しも押されもせぬ地位を領有するに至つた。

人にして帝國主義的傾向を有せざる者はない。民にして强きを欲せざる者はない。若しこれありとすれば、その國民は滅亡するのほかはない。』『ファシスシスチ政府は平和を政策とする。我政府は世界の平和を紊さんとする意志は毫末もない。ウイルソン流の陳腐な文句を用ふれば、伊太利は正當にして且つ永久的な平和を望むものである。しかしこの平和たるや、我等の正當にして且つ神聖なる利益を滿足せしむるに足るものでなければならぬ。』

その意氣の壯んなことは、對内的のみならず、對外的にも何ら外交辭令を加へようとせぬ。この壓力と直情こそ、ムッソリーニの身上といはねばならない。

八　盲人の象探り

多分の稚氣を露出してムッソリーニはいふ。『今や全世界を擧げて、ファスシスチの讃美者と呪咀者とに二分されてゐる』と。言や些か奇矯であるが、ファスシズムに對する贊否兩論は全く極端と極端である。これ何に起因するかといへば、盲人の象探りの譬に洩れず、單なる一局面のみを見て感情的に好惡を決定してしまふからである。當時の伊太利に取つて、即ち議會的無力と赤色的攪亂とを防止する途は、國民的處女參戰によつて昂揚された愛國的情熱に對し、これに一定の方向を與へて反對毒素となすのほか方法がなかつたのである。その限りに於いて、善惡正邪の彼岸に立つ一の社會的必然の現はれと解する

の外はない。誠にムッソリーニの偉大は無比である。けれども、若し彼れを英國に生れしめたなら、決してあれだけ華やかな事業は成就し得なかつたであらう。時難にして英雄現はるといふ。その筆法から行けば、伊太利の特殊的國難が彼れを生んだといひ得べく、假りにレーニンと生國を轉倒せしむれば、レーニンもファスシスチ革命の手段に出でたかも知れないのである。而も單なる外部的結果のみを見て、レーニンの革命は共產主義的なるが故に是正（或は拒否）し、ムッソリーニの革命なるが故に拒否（或は是正）するといふ如きは、愚の骨頂といはねばならぬ。齊しく特殊の社會的必然に立脚し、國民的性向に立脚するものであつて見れば、直ちに以つて日本に移殖すべしと考へるのは、餘りに物の道理が判らなすぎやう。

而も物の道理の判らないのは、何もかうした連中だけに限らない。例へば横文字心醉派である。彼等が假りに英語を讀めば、直ちに英語國民の判斷を無批判に受け容れ、伊太利の帝國主義を云々し、獨裁政治を惡魔の權化の如く罵倒する。しかし英國民が帝國主義を云々するのは、伊太利の强大が直ちにアドリヤ沿岸その他の利害衝突を豫定するが故であり、米國民が暴政を云々するのは、彼等が神様の御托宜と心得るデモクラシーを遵守しなかつたが故である。しかし伊太利それ自身にして見れば、衣食足つてこそ贅澤もいはうが、國家的破滅を控へて他國の氣嫌氣褄を取つてゐる餘裕があらう道理はない。全く不必要なお節介である。

かくの如く伊太利にあつては、ムッソリーニの出現も、ファスシスチの生起も、悉く社會的必然に立脚するものである。無論、色々な不平分子もあらうが、謂はば彼等は暖簾を取られたことに對する私憤でこれを一々取り上げ强いて『輿論』にしなくともよろしい。單なる暴力的脅嚇と熱病的發作の所產と見るべく、ファスシスチの團結は餘りにも組織的であり、且つ決定である。隨つて、ムッソリーニの暗殺が成功しやうがしまいが、ファスシオの勢力は不動と見るのほかはない。勿論、ボリシェキーキに內訌が絕えないやうに、ファスシスチにも幾多の內訌要素は伏在してゐる。例へばムッソリーニの施爲施設を手緩しとし、制止を破つて街頭に頻々暴行をなす右派と、反對に彼れの政策が無產大衆本位でないと言つて非難する左派との抗爭、さては第一ファスシオ（黑襯衣團）と新ファスシオ（產業團體）との確執等、小波瀾は時々あるが、ムッソリーニの旗本たる正統派は結束してファスシスチの大を勵精してゐる。現內相たるフエデルゾニー、現書記長たるファリナッシーは、夫々に正統派の勢力を代表し、一は表面の女房役たり、一は裏面の留守師團長たり、共にムッソリーニの後繼者として思慕されてゐる。更らに軍部方面には、年少氣鋭のバルボと老練熟達のボノとがあり、これも後顧の憂ひなからしめてゐる。

今やファスシスチ革命も、破壞時代を經過して建設時代に入つた。元來が多血漢の集團であるから、鬪爭の外部的標識を失つたために、或はこれが內部の軌轢に轉化せんかといふ縣念もないではない。しかしそれがため全勢力が分裂するといふやうなことは、今のところ先づ考へられない。恐らく次第に自然的必要から或る程度まで民主化しながらも、三ツ子の面影を示して新伊太利の中心勢力を保持して行くことであらう。（終）

權力と經濟原理の交爭

阿部賢一

一

社會の歴史は、之をある點から觀れば、權力と其否定が不斷に爭鬪を續けてゐるところに、其要機が潛んでゐるやうにも思はれる。而してこれは容易に手出しの出來ない大きい問題ではあるが、それが吾々の經濟生活に關係する限り、其片影の幾分かを認めることはできる。

掛引なしに現代各國の實狀を表徵する言葉は混迷の二字に盡きる。而して何故に然るかを少しく考察するに、全く、權力と經濟の道理とが、恰度調子の會はないオーケストラのやうに、めい／＼勝手な方向に奔走して、其間に階調の合理的一致を缺くところに時代的苦惱の原因が宿つてゐるやうである。我國も決して其例外をなすものではない。世界の惱み、而して我國の苦しみ。これ等のものが果して生みの苦みであるか、將たまた死の苦みであるか、の診斷は適當な醫師に委することとして、吾々は事態の形勢を少しく觀察して、それが持つべき意味を闡明したいと思ふ。

今吾々の身の廻りを觀る。吾々が日々に營むところの經濟生活の中に這入つて觀る。若しこの日々の營みが防水裝置か何かによつて他の生活と絶對に絶緣狀態に置かれたものであるならば、如何に經濟學は容易な學問であるよ。否、經濟學等と云ふ學問等は無に歸して、ドレ丈人々は助かるか解らない。そうなれば極めて簡單な計算によつて吾々の行爲や福祉を勘定し得るかも知れない。其處には算盤人（イコノミックマン）があり彼の行動は丁度動物園の檻の中の熊の散歩のやうに一定の型に這入つた數理であるから、之を觀察することは、實に易いからである。

從來一派の學派、特に謂ゆる動界効用學派に屬する學者の說明する所の經濟學は、總てとは云はないが、概して算盤人を抽象した行動學に過ぎなかつた。無論この研究方法は一定の範圍に於ては可成有効であることを否むことは能きない。併し乍ら、人生は花も實もある活物である。生きた算盤としての器械だけでは人間の經濟の核心に觸れたものとは云ひ難い。この點に於て墺太利限界効用學派の頭領とも目すべきウィザー教授が、謂ゆる純理經濟學を樹立して一時は一世を風靡し乍らも、尙ほ國民經濟行爲は社會的行爲であるから、英國正統學派の純個人的見解に滿足することができない。よろしく一步を進んで經濟理論の基礎に社會學的基礎を與へねばならぬ。それは力（Macht）に外ならない。となして經濟に對する社會的意味を究明するに專念したことは

力の原理、(一九二六年著作序文)等に意味の深いものがあると思ふ。

　云ふまでもなく吾々の生活の様式、吾々の意志は、吾々が氣付く前に既に業に、一定の型に鑄込まれてゐる。自分の撰擇なしに、一定の社會經濟制度の中に生み落されてゐるのであつて、本人の好むと好まざるを問はないのである。何としても發生的には個人の好惡や、意思に無關係な世界若くは環境若くは歷史に織込まれて終つてゐる。然もこの世界は、政治とか、經濟とか藝術とか宗教とかに完全に分れて、防水防火壁のやうに全然相互に無關係に絕緣せられてゐるかと云へば、決して然うではない。之等の事相は一體として渾然一個の人間を全的に支配する。從つて彼の營むところの經濟は藝術的制約を受け又政治的制約を受ける。政治に於ても、宗教に於ても、又藝術に於ても經濟の制約を受けることは云ふまでもない。而してこれ等の吾々の諸々の生活力が他の生活方面を如何に支配し、制約するか、の問題に至つては後に論ずるの機會があるであらう。

二

　吾々の社會生活は多方面に亘つてゐて、謂ゆる複數的生活內容を有してゐるが、その經濟に關係する限りに於ては、何時、如何なる處に於ても、何等かの權力的統制の下に羈束せられざるはなかつた。勿論この經濟の權力的統制の目的に於て、意味に於て、內容に於ては又其緩嚴の度に於ては、時と處によつて同一ではない。例を擧げるまでもないが、古くはスパルタの軍國經濟統制や米國のイマナ共產經濟社會や、更には勞農露國の統制經濟組織の如きものは、それ〴〵目的、意味及び經濟內容に於ては其間に甚だしい相異はあるが、經濟が權力によつて多分に節度化せられてゐることに於ては相似てゐる。又他の方面に於ては無政府的秩序の下に尙ほ嚴然として昔乍らの經濟節度を自律的に保持してゐる支那の如き國に於ては、外部よりする權力は屢々その經濟生活を攪亂はしてゐるが、經濟の統制力としの權力の作用は比較的に緩漫な國であると稱し得るであらう。

　尤も此處に謂ふところの權力は主として政治的權力を意味するのであるが、それが如何なる形式に於て表はれるかは之を問はない。故に例へば權力の法的表現として、各國に於て、法律上最高地位を占めるところの憲法の如きもそれが如何なる形式を有するかは此處では重要な問題ではない。成文憲法であらうが又英國の如く不文憲法であらうが、その法的權力の作用に於ては變りはない。何れにしても憲法は國家內の諸權力の牽制關係の表現と觀得るのである。今一ッ注意したいのは權力の及ぶ限りに於て有は有であり、無も又有であることである。權力を振りかざして經濟統制に當るとき權力は名實共に存するが、權力の名は隱れて、然も事實に於て權力が强大な統制力を有する場合がある。英國の如き個人的自由放任國は此の著例であつて、其名は國家權力の表面的否定であるが、其實は資本權力の徹底的統制に外ならない。

　かやうに權力の表現や形式に就て云へば、各國それ〴〵の特殊性はあるであらうが、何等かの權力的統制なしには經濟生活は曾て營まれなかつたのである。これが歷史的事實である。從つてこの權力を掌握することは、やがて經濟的支配としても最も有効な捷徑であつたから

權力に對する競爭が何れの社會に於ても不斷に行はれた。而して政權は富の掠奪及び富の蓄積の手段として、いつの時代に於ても最も露骨に爭はれたものであつて、今日各國の政治の動きは決して其例外をなすものではない。

而して若しこの權力が同階級者に轉じやうが、又異なる階級者に轉じやうが、その權力が思ふ存分に階級的自利のために實行せられ盡して遺憾なきまでに至り得るならば恐らくは問題は此處に終りを告ぐるであらう。併し乍ら權力は易々凝固化する。化石化する。その故に權力は常に裏切られてゐるのである。この權力の凝固化することゝ、權力は自己の中に自己否定の種子を胎すと云ふことは、つまり一見金城鐵壁の如く見ゆる權力の力としての限界を指示するものと云はなければならぬ。而してこの事が現代各國の經濟にとつて如何なる意味を有するか。少しく考察を進めやうと思ふ。

三

社會上に於て權力が必要とせられるのは一の社會群が他の社會群を何かの目的のために強制するために外ならない。さうでなければ敢て必ずしも權力と呼ぶ方法を必要としないであらう。そして社會の進化に伴ふて、社會內部に分化作用が行はれれば、行はれるほど幾多の社會群が簇生する。身分上からも、利害關係上からも、また職業關係からも、一社會內に多くの團體や群が發生して、各自自群の利益の維持と發展のために相爭ふことゝなるのである。勿論個々の群の內部に於ては各人間の相互扶助はある。またある程度までは異なつた社會群の間にも相倚相賴の關係があつて、ある一種の協同作用もないではない。併し乍ら事の經驗的過程から觀れば一群が他群を支配することが自分にとつて利益であり、又滿足を生ずる限り、そこに支配關係を生ずることは云ふを俟たないことであつて、こゝに各群は支配の最有効方法としての權力の把握に對して相競ふことゝなるのである。

併し無限の力を持つかに見ゆる權力も決して萬能ではない。經濟的搾取若くは強制のために用ゆる權力は知らぬ間に裏切られ勝ちである。之に關する事例を三四擧げて論じて見やう。

經濟的權力が最も露骨に使用せられたのは云ふまでもなく奴隷勞働であつた。今奴隷制度の歷史等に就て論ずる必要はないが、古代から最近世に至るまで人間の苦役は奴隷によつて擔はれて來た。文明の下積は常に彼等であつた。家畜の一種として虐使せられた彼等は只默々として働くの外はなかつた。この制度を維持する鞭である所の支配者の權力は、何の容赦もなしに用ひられたのであつた。一見權力は無限の力を有し、支配者の目的は遺憾なきまでに達せられたと思はれるのであるが、事實に於ては權力は自己を否定する原因を有つてゐたのである。それは鞭による勞働、權力に依る生產力の減退である。面從腹誹より生ずるところの仕事の能率の減退である。權力よりも偉大な經濟の原理の勝利であつた。かくて奴隷制度は各國に於て撤廢せられるに至つたのである。勿論キリスト敎的同情も勞働撤廢に與つて力があつたであらう。奴隷使用者の中にも個人としては志士あり仁人あつたことを否定しやうとするのではない。また謂ゆる人格尊重の精神が世界を風靡したことも否むのではない。併し乍ら歷史上に牢乎として抜くべ

からざる奴隷制度が春雪の朝日に融けるが如く、比較的に容易に、制度として此世から姿を消したのは何と云つても奴隷勞働の無能率に歸しなければならぬ。根本的には決して奴隷使用階級の愛情の爲ではなかつた。またその階級の制度維持上の權力が失墜したからでもなかつた。否支配者の權力は近世勞働使用上の資本力に轉ずるや、更に一層強大なものとなつてゐたのである。即ち無限度に強く見へた權力は無限度に弱く見へた奴隷勞働の無能率と云ふ經濟理論に、時來らば、容易に打壞されてしまつたのである。弱きものゝ勝利であつた。强きが如く見へた權力はその故に自己を否定したものと云はねばならぬ。

次に權力に對する反逆として租稅の負擔轉轉を擧げ得やう。租稅は支配階級者がその地位と榮譽と利益を護り、更に之等のものを增大累積するために、社會の最も無力なる所から徵取するものとも觀得る。古來からの社會的優者は社會の外に對して又內に對し、軍隊や司法組織によつて自己を守り、其力を以て直接間接に經濟的利益の搾取獲得に專念した。而してその爲に要する所の費用は社會上の劣勢者から徵した所の租稅を以て之を充當するを例としたのである。故に一國の租稅制度を觀察すれば大概其國の政權上に於ける權力の配合や關係を大凡そ推定し得るのである。ところがこの權力關係によつて定まつた租稅の負擔が、果して立法者即ち換言すれば權力上優勢階級の制度的擁護者の豫想通りに落着くものであるか、どうかと云ふことは可成長い間の學者間の問題であつた。今此處で租稅の負擔の歸着や轉嫁に關する學說の歷史や其批判を試みはしないが、何しろ租稅負擔の問題を稍々學理的に推定したのはまづ十七世紀後半英國に於てペテー之を論じ次の世紀の始めには佛國のフキジヲクラット學派の人々、而して其世紀の末葉に於てアダムスミス最も明確に之を究明した。之等學者の論じた所は單純な演繹法によつて推論を出でなかつたのであつて、個々の租稅の負擔の落着く先はもう最初から定まつてゐる。例へば地租は地主に、賃銀稅や生活の必要品に課けた租稅等は雇主や資本家に轉嫁する者であると獨斷したのであつた。なほ之等謂ゆる正統學派に屬しない學者の中にも租稅負擔の行衞が、丁度汽車か電車のやうに一定の軌道を通つて、一定の豫定地に落着く者であるやうに考へた學者は決して尠なくはなかつた。今日でもかやうに考へてゐる向もないでもない。併し經濟の理論研究が積まれ、また比較的精密な統計的研究が試みられた結果、租稅の負擔は必ずしも立法者の豫期するやうに歸着するものではないことが漸時明かになつて來たのである。つまり權力を以て租稅負擔の流れを強いて、自分勝手に定めやうとしても、到底敵はない所の强い原理が社會生活の中に漲り流れてゐるのである。だから租稅は資本家に課けやうとして設けられたものでも、次の瞬間にはもう勞働者階級の負擔になり終つてゐるものもある。また勞働者階級の負擔に終らしめやうと志して設けたものが、何時の間にか資本家に掛つてゐたりすることもあり得る。家主に掛けたつもりの家屋稅が知らぬ間に憐むべき借家人の身を切る負擔となつてゐる事などは吾々の日常經驗するところなのである。かやうな例を擧げて行けば數限りなくあるから、もうこれ以上論ずることを省くが兎も角租稅轉嫁の理論と言葉が、時の權力の裏をかいて、飄逸に、權力の無力を嗤笑するやうな事のあることを認めぬ譯にはゆかぬ。

權力が自己を覆す底の危險なる經濟原理の崖上に立つ今一ッの例を吾々は獨占に於て觀るのである。獨占は教科用の本では財若くは勤務の給供を自由に増減して價格を任意に決定し得る地位を占むるものとなつてゐるが、實はそのやうな生優しいものではない。それは資本主義經濟組織に於ては必然の過程であり、更に金融資本が企業存在にとつて絶對的の最大條件となつてからは、獨占の傾向が特に甚しくなつて來た。勿論一概に獨占と云ふも、それが獨占となるに至つた原因は決して一ではない。或ひは法律によつて獨占化せられたもの例へば專賣事業の如きもある。又特殊技術の原因によるもの例へば特許品の生産や一家秘傳の製品の如きものもある。又天然的に獨占のもの、特定の地形や地理に支配せられるもの、例へば交通機關の布敷や又は一地方の特産物の如きは之である。之等のものも獨占の性質を十分に有してゐるから、それ相當の經濟的權力を有してゐる。併し乍ら之等のものは獨占化力、即ち同種の他の事業を併合し又は聯絡ある他種の事業を同一系統の支配下に持ち來すの力、に於ては遠く資本の力に及ばない。この力あればこそ交通々信機關に於て、凡ゆる種類と云つて過言でないほど製造工業に於て、銀行其他金融事業に於て、金融資本の獨占化力が其侵冠を擅にし得るのである。

　何れにせよ、獨占は一つの權力である。これは時とし直ちに政治的權力である場合もある。例へば植民政策上に於ける特許會社の如きはそれである。併し現代の社會に於ては獨占は、多くは間接に又は隱密に政權を支配することによつて、自己の權威を弄ぶを常とする所の甚だ性質の惡いものである。かやうに獨占の權力の表現には直接及び間接のものがあるが、その獨占は自から一の權力であると云ふことは否むことはできぬ。而して現代の如く各人各己が何の邪魔もなしに、自由に自分の力を無限に伸ばし得ると稱する社會に於ては、武力に代る大權力たる獨占は、無限に其權力を振ふことができるやうである。又多くの人は如かく考へてゐる。併し乍ら事實に於ては獨占の力は色々の方面から掣肘せられてゐるのである。今其一二を擧げるならば次の如きものがある。まづ第一には獨占者が暴利を貪つて物の價格を引上げるときは、多くの消費者は引込んで終ふ。勿論生活の必要品とか固定的な嗜好品であれば、消費減退の處も又程度も小であらうし、又一時は消費が減退してもやがて古き習慣が頭を出して消費の増加を來すこともあらう。然し大體から觀て獨占も其力を以て無限に財の價格を引上げることはできない。のみならず獨占物の價格を法外に高く引上げる場合は、何處からか同種品や類似品やまた代用品の競爭が顯はれて來るのである。晏如として獨占者が泰平を唱へてゐる間に、恐るべき競爭者が市場に出現して、後で泥縄的に狼狽する例は決して尠なしとしない。最近では我國の樟腦專賣の如き其適切な例であらう。世界の樟腦消費高は八千萬斤とかであつて其九割九分位まで我國特に臺灣が供給してゐた。そこで政府は之を專賣して世界市場を左右するの勢力を名實共に有してゐたのである。ところが代用品ナフタリンが出たばかりか、最近では實物以上の人造樟腦が例の獨逸の研究室で發明せられた。芳香と殺菌効力に於て天然樟腦に勝るとも劣らず、然も値段が比較にならぬ程安いと云ふので、文字通りに破竹の勢で、日本樟腦を歐米各地の市場から驅逐しつゝあるとの事である。かやうな例は他

にも少くはない。

次に大きな問題は獨占の資本收益力の行詰りである。此問題は利潤率減少の問題として容易ならざる問題であるが、こゝにはこの點に就ては詳論しまい。併し要するに個々の資本家にしても、また資本家階級としても、資本の運用上の收益率はある點までは累增するであろう。此はアダムスミス既に喝破するところであつた。然しある點以上に於ては資本收益率は却つて累減するのである。土地の利用上に於ける此の傾向はリカード既に之を闡明したが資本に於ても夙に經驗せられてゐる。何故に然るかに就ても、資本利用上に於ける個人の能力や投資事業の經營上の能率度や又市場の財貨消化力、引いては一般消費者の購買力其ものゝ大小、購買力分配の撰擇等其他色々の點に就て精細に考察を重ねなければならぬが、何れにせよ資本投下の有効度には程度があるとは明である。獨占の力を以てしてもこの經濟理論には打勝ち難い。近頃フォード自働車會社が一週勞働日數を五日と定めたと云ふことが新聞紙上で傳へられた。而して其理由としては中流社會の自働車の消費は米國內に於ては稍々飽和狀態に達して、近年迄觀たやうな消費力が累增する傾向が行詰つたので更に勞働階級を的にして更に大生產を企て其爲に勞働能率を高めるために之を斷行したものと傳へられてゐる。事の眞僞は保證の限りではないが、一定の生產技術方法と勞働組織を以てしては、資本の收益率はやがて行詰まることは明である。たゞこの行詰を打破するために新技術の發明を要し、勞働能率の增進を計らなければならない。然もこれが何處まで期待できるものか豫想の限ではない。こは獨占事業でなくてもそうであるが、獨占事業に於ても、かやうな一つの限界が目前にあることを認めぬ譯にゆかぬ。

權力に對する反逆として最後に今一つ擧げやうと思ふのは權力と勞働力の關係である。この事は既に奴隷制度の經濟的意義を論じた場合にも觸れたが、奴隷制度でなくてもかやうな現象の起り得ることを認めねばならぬ。而して其適切な例を露勞農國に於て觀察し得るのである。此處に事新らしく說くまでもなく、露國は革命によつて凡ゆる產業を社會の手に收めた。そして農民の方面に於ては、一定の生活必要額を殘して、其餘分は總て政府の徵收するところとなつた。而して之を都會に送り、工業品に代へ、之を農民間に配給するの方法に出でたのである。ところがこの經濟政策は事の理論から云へば共產社會の立前として當然のことであつて、マルクス及びエンゲルスの曾て力說したる所であり、レニンは之を其儘に忠實に實行したものに外ならない。而してこの理論を農民が豫想通りに實行しないのは、如何にも理解のない腑甲斐のない話のやうではあるが、其處に權力を以ては尙ほ十分に克服することのできない經濟の道理があつたやうに思ふ。兎に角農民は一夜の中に天國共產社會が出現すると、恐らくは想象したのであらうが、自分の勞働の成果が結局に於て失ふ所が、得る所より多いのを悟つた。其擧句彼等は一種の無抵抗的武器を以て臨んだ。即ち農民は一般に精を出さなくなつて、農產物の產額の減少を成したのである。甚だ心許ない事であつた。人間は利己心のみによつて行動する動物ではないが、利己心は、他のより强い心理か理想かによつて置き代へられない限り、人間の最も强い衝動の一つである。この際勞働力の

減退の外にも凶作だとか又他の色々の原因が働いたことは言ふを俟たないが、事實分配に先だつ生産力が崩れて來ては、恰度砂丘が崩れるやうに、如何とも支へやうがなくなつた。こゝで人も知る通りレニンの新經濟政策が已むを得ず出現した。そして現物徴收法は根本から改正せられた。農産物の一部を租税として徴收して其餘分は自由に貯へてよろしい。又自由に交換してもよろしい。否農民諸君は自から商人の如く合理的でなければならぬ、等、と云ふやうなことをレニンは咽喉を嗄らして叫んだ。小蓄積が各々の家に行はれ出した。而して名は國有であつても、土地に對する愛着の念が、傳統的に最も甚しい農民の手に一旦歸つた土地は、實に於ては私有と大して變らないことゝなつた。妄りに之を搖がすことができなくなつた。農民の手と都會勞働者の手とを強く握らうとしたレニンの苦衷はこゝに思ふやうに實現はできない。余は露國革命の史的意義だとか、思想的意義とか、又それが露國大衆に對して如何なる文化的福祉的結果を齎したとかの問題には觸れない。またかゝる政策が世間でよく云ふやうに露國經濟の右化であると斷ずべきか又は社會主義的の資本蓄積方法となすべきや、又は一時の事局緩和であつて、將來更に一層共産社會への飛躍の用意であるとなすべきや。これも大問題である。併しこの小文の目的とするところは兎に角何年もかゝつて勞農政府が權力を以て强行しやうとした政策が、見事に裏切られたことを事實として觀やうと云ふのである。尤も勞農政府治下の教育を受けた少年少女の成長の後、その教育の結果を如何に經濟組織に反映するであらうかは、世界の問題である。また今日の處に於ても勞農政府の權力は多方面に亙つて可成有効に又福祉的に働いてゐることも認めはする。併し乍ら尚ほ最も人の胸奥に潜むところの生活原理を支配することはできなかつたものと云ひ得ると思ふ。

權力は其强壓力の度が増すほど、其効果は大であるやうであるが、事實は物理的法則の如く反動力も增加するが如くである。この點露國が極小の相續を除いて相續制度を全然撤廢したのに反して、伊太利のファショ政府が、相續税の中最近親者の相續税を全廢して、各人の自利心を刺戟し之によつて資本蓄積の助成に資しやうとするのは面白き行き方である。筆者は斷じて之に與するものではないが、一方に强力を以て壓し乍ら、他方何處にか壓力の逃げ穴をこしらへてある用意に一種の巧智を認めるのである。

以上種々なる場合を摘んで、權力の限界、時として權力の無力を示すものを考へた。尚ほ此の外に此の經濟の道理を證明する場合は非常に多いことは云ふを俟たない。特に自然現象に對する人間の權力が如何に孱弱なものであるかは此處に論ずるまでもない。實は自然的技術的法則ではあるが、一般に經濟的法則であると云ひ馴されてゐる例の報酬漸減の法則の如きも、人力を以て其法則力を幾分かは之を緩和することはできるがその窮極に於て如何に人類の生活、否最も適切に我國民の經濟生活に影響してゐるか。この天文地文が社會生活の基本的支配力であることはこゝに論ずる必要はないであらう。

四

權力そのものは元來盲目なものである。昔の人が好んで云つたやう

に殺人劍でもあり、また活人劍でもあるのだから此の權力であるが、この生來盲目なる權力が如何なる階級者によつて掌握せられ、また實行せられるかを問はず、一旦權力の歸屬が定まれば、その瞬間から、この權力は凝固し、化石化する。特に一定の社會階級の利益に基いてこの權力が制度化せられる場合、例へば軍隊力の目的設定により、また成文法の制定によつて權力の發現の方向が定まると、それは丁度眼隱をした馬車馬の如くになつて、一目的の方向に突進するのである。そこに何等の批判もなく、また價値の選擇もない。與へられた方向に忠實に打突かるだけのことである。然もこの猪突的な權力作用に方向を與へるところの基調が、主として一階級の利害によつたものである限りそれだけ該階級にとつては都合は好からうが、他階級にとつては迷惑至極とならざるを得ないこと勿論である。尤もこの權力作用も、階級的利害の內容の變遷に伴ふて多少は變動せぬでもないが、概して固定し易い。作用者たる法官や武人の固定性は云ふまでもないが、制度としての權力そのものが兎角取り殘され氣味なのである。これは自己の中に發達性を有しないものゝ宿性であつて致方はない。

權力はかやうにすぐに固定するの性質を有するから、動搖性の富かな社會經濟の內容から見れば、權力の確定はそれと同時に早や其權力を否定しやうとする力の蛹を生じてゐるものと云はねばならない。換言すれば經濟上より見て一旦は社會經濟制度の統一統として力があると思はれた權力は、當の相手方からは反抗せられることは云ふを俟たないが、これを以て自己保存の武器とし又要塞としてまで依賴した階級からも無力視せられるやうにまでなるのである。

今權力を全然否認して、それなき社會に人間の眞の生活を夢想しやうとした無政府主義の所論は之を措いて問はない。併し曾ては權力的干渉を極度にまで否定して、其處には各人の徹底的な自利心が働き、無限の創造が滾々として湧き出でゝ、社會全體の幸福は强て求めずして、完全に之を獲得し得るものと考へた自由主義の母國である英國は如何か從來英國はアダムスミスの遺訓を守つて國防司法及び個人に委して置いても望み難き事業等のみを國家權力を以て當り、他の方面一切の活動は擧げて之を個人の創意と努力に委した。そして百年餘を閱して今日に至つたのである。然るに近年世界經濟の變動は英國自身さへ枕を高くして安きを貪ぼることはできなくなつた。特に世界大戰の影響は英國をして却つて國際貸借上の借金國たらしむることゝなり、最近東京市債の英國市場に於ての應募に就ても、資金の流出を虞れるの餘り論客ケーンスをして寧ろ之を自由に放任すべきものでないとの口吻を洩らさしめてゐる。即ち從來英國の經濟的從つて政治的支配階級は國家權力の干渉の尠なきことを望み、たゞ優勢なる海軍力を以て海外に於ける自己の利益を守らしめ內にあつては司法裁判力によつて資本主義經濟を擁護せしむるを最も自己の利益に適ふものであると考へてゐたのである。然るに階級的自利心は久しく金融の世界自由市場であつた英國の門戶を閉して以て金融統制に積極的權力干渉を要求するに至つた。之は丁度爾餘の國に於ての支配階級が貿易上の保護關稅を要求し又は他種の階級的法律の制定を要求するのと同巧であつて、何等の奇はない。併し乍ら階級的經濟利益の要求と權力の喰ひ違いの一例として之を觀察し得るであらう。

併し乍ら更に考へるに、現代の經濟關係は一權力内に踢蹐せられ盡す底のものではない。それは國境を越へ、權力を越えて更に大なる何等かの力を把握しやうとするのであつて、其兆候が歴然として顯はれてをる。而して最も端的にこの兆候が顯はれるのが國際經濟上の變調である。その二三の例を擧げやう。アメリカが歐洲の事實上の盟主たるの地位に君臨し大戰中は勿論のこと、其後と雖も事々に各國の政府あれども無きが如くに振舞ふてゐる譯は何であるか。其は單に比較的少數の米國大金融業者が世界大戰に際して英佛伊諸國の臺所を賄い、また今日に於て債權によつて歐洲各國の首玉を把んでゐる爲に外ならない。こゝにアメリカ帝國主義の經濟的必然過程が見られる。國際貸借の統計を揭げることを省くが、這般の消息はアメリカ果してシャイロツク否やと云ふことが歐洲は勿論、當の本國の識者間に於てもの論題であるに徵しても明であろう。昨年初夏老虎クレマンソーの借金棒引論が幾多の共鳴者を米國に得たとき、其公開狀を受けた當の大統領クーリッヂ氏の答辯的意見として傳へられたものは、あまりに經綸を缺きあまりに米國國家の權力を擧げて紐育二三の金融資本に叩頭したやうな印象を人々に與へたのであつた。そしてこゝに國家權力を越へてより廣き世界を支配する資本力を觀るのである。

米國が政治にモンロー主義を唱へ乍ら、經濟に歐洲の干渉王として陰に陽に采配を振つてゐる時に際して、歐洲に於ては佛國、獨逸、白耳義及びルクセンブルグ諸國の鐵鋼業者は國境を越へて鐵鋼カルテルを成立せしめた。その目的とするところは之等四個國の鐵鋼業者の鋼鐵價格の安定策であつて、その爲に關係國の生産額を協定し、生産合計を二千七百五十萬噸とし之を佛國は三割一分一厘九毛、獨逸は四割三分五厘、白耳義は一割一分五厘六毛、ルクセンブルグは八分五厘、ザールは五分二厘五毛等と割當てるのである。この國際的協定は昨年十月一日から有效になつてゐるが、之によつて鐵鋼價格は安定せられるかも知れないが、其價格の引上は社會民衆にとつて果して幾何の福祉を齎らすであろうか、何れにせよ從來の仇敵たりし國々の資本家が利害の前に一致協同の態度に出でたことは興味深きものがある。

次に注目すべきものは殆んど時を同ふして歐米の主要銀行家及び實業家百八十四名が歐洲の通商上に於ける制限撤廢を提唱したマニフエストである。而して署名者は英、米、獨、佛、白、墺、チツエコスロバキア、丁抹、和蘭、匈牙利、諾威、ルーマニア、瑞典、瑞西、等の十四五個國に互るのであつて、世に著名な大金融業者にして其名を列ねてゐるものが尠なくない。此の金融業者中心のマニフエストは何れかと云へば自由主義系統の人々のものであるから、其心積で觀察しなければならぬが、其要旨は世界大戰後各國が稍もすれば排他的な經濟政策を定めるのに對して、反對意見を陳べたものである。即ち關税の輕減や、運賃の低下や、各國間の不平等取扱の撤廢や、人間及び貨物輸送の便宜や、排外思想感情の融和等を主張するものに外ならない。

この金融業者の國際的協調主義は鐵鋼トラストの如く、直ちに其實を結ぶものでない。併し乍ら爲れ等の超國家的權力的の資本家階級者の握手をば吾々は興味を以て觀るものである。從來國家權力の障壁を頼りに封國的に蟄居してゐた企業家、資本家階級は舊來の心狹き愛國

心や自己の利害に反した愛國心や、また行きがゝりの感情等をかなぐり捨てゝ資本の擁護に走らねばならなくなつた。彼等個々人の善惡曲非の問題ではなしに、資本と稱する一つの收益力を擁護し、培養するの客觀的必要がこゝに至らしめたものと解せねばならぬ。見様によつては彼等の行動はそれ等各國の國家權力に對する不信任を表白し、それに代へて經濟的權力の爲めに更に大なる結合を企てたものであると觀察して果して誤りであらうか。この點に於て自由貿易論者と保護貿易論者の間には、社會的意義の上から觀て何等の相違はない。否、勞働運動の國際化よりは餘程利己的であり、露骨であると云ひ得ると思ふ。

五

權力をあまりに見縊つたかも知れない。否、權力をあまりに過大視してゐるから、如上の說が出たのかも知れぬ。この小文の當面の目的は權力に對して、それに相當する地位を與へることであつて、之を過褒し、また過貶しやうとするのではないのである。權力は萬能薬ではなく、さりとて何の効能もない水薬でもない。それはそれ自身として相當の力を持つてゐる。少なくとも一定の社會事情に應ずる對症薬としての効果を十分に備へてゐることを否むことはできない。然も權力が一つの資本主義經濟社會内に於て資本階級の利益擁護のために如何に其全力を擧げてゐるかに就ては此處に說明する少しの必要も感ぜぬ事はあまりに明白であるからである。たゞ此處では經濟が斷へず權力の發生を促し乍ら斷へず之を出し拔いてゐることを知ろうとするにある。而して權力が經濟に關する限り、如何なる地位を社會上に占めるかに就て粗雜ながら考察を重ねた結果、權力は二個の限界によつて封じ込められつゝあるを觀た。その一は權力がその壓力を強ふるときに經濟の道理は常に何處にか反逆の因を成して權力を緩和し、時として無に歸せしめることである。而して他は現代資本主義經濟は當初に於ては權力を最も有効な傀儡として驅使して來もし、また現今我國の如き尙ほ其域に漸く達した程度にすぎないが、資本主義經濟の發達は國家權力を超へた經濟的結合の權力を形成しつゝあること之である。かく相方からの不信任の間に挾まつて、漸く其地位を保つてゐるのが權力である。

併しこゝで一寸立止まつて考へねばならぬ。それは此處まで論じ來つた所の謂ゆる權力なるものが、また經濟の社會的原理によつて大に生成せられ、培養せられ、支持せられてゐること之である。權力は經濟によつてのみ生成せられると云ふのではない。經濟は唯一の原因ではない。經濟の基調をなすところの財の生産力は必然の論理過程として社會進化を促すのではなく、歷史過程の最大動因として其作用を社會の構成や生成に及ぼすものと觀ずる。何となれば生産力は一つの可能（ポシビリテー）の觀念であつて、この可能が社會の構成や權力の歸屬に如何なる支配力を有するかは、生産力を奪取する者の主張、更に換言すれば社會の表裏に漲つてゐるところの社會階級者の生活慾の優劣によつて定められるものと云はざるを得ない。

かくして歷史的事實として、權力は生産力の社會的壟斷者によつて占められて來た。併し權力は既に論じたやうに易々固定し易きものであり從つて支配階級者の希望通りに自在に伸縮するものではないか

ら、權力自身は所詮は狹き範域に自分を封じ込められるやうになるのである。この意味に於て權力は資本家支配階級の根によつて育ち乍ら如何かして居る間に遊離して獨立したかの如き性質を有し、それがために資本家階級からも、被支配階級からのことは云ふまでもなく、賴りにされないこと丶たるらしい。而してこ丶にまた權力と經濟利害の相反交爭の現象が起るものと考へる。

例へて云へば英國に於て、また我國に於て、今更思ひ出したやうに自由主義が事新らしく提唱せられるのは果して何を語るのであるか。自由主義者が頭に新(ニュー)の字を付して新自由主義と稱してゐる理由は不敏なる筆者には解し難い。謂ゆる新自由主義の哲學的根據や、また經濟理論に就て觀るになるほどスミス流の自由論とは遠く離れてゐるが、十九世紀初頭の思想的洗禮を受けたミルの經濟的自由論と甚だ相接近せるが如くである。何れにせよ、我國に於ては所謂個人的自由思想が十分に發達しなかつたとは云へ、尙ほ資本主義經濟の發達は一方に自由主義を唱へつ丶、他方國家權力を自由に操縱し乍ら、文字通りに長足の進歩をなして來たのでめる。然るに、今に至つて謂ゆる新自由主義が提唱せられる所以のものは、資本主義經濟の孵化した權力が今や似てもつかぬ家鴨であつたに驚いた形である。語を代へて云へば權力の經濟的統制に對する不信任であると云へやう。

もう筆を擱くべき時が來た。筆者の觀やうとした點は經濟と權力の接觸點であり交爭點であつた。この二者の勢力の不均衡に現代の苦惱があると觀た。資本主義經濟が胎内に孕んだ權力が前後左右から愛想をつかされ始めたと觀た。若しこの苦腦が一階級の負擔であれば事甚だ小であるが、實は社會を擧げての苦腦が、この經濟と權力の交爭に原因するものと觀るからは、問題は社會全野を蔽ふこと丶なる。今日の急務は經濟と權力の合理的調和、若くは調和的平行でなければならぬ。この二者の交叉がよろしくない。この二者の交叉は經濟社會の組織の存在にとつてのシャイネストック兆候を意味する。然らば吾々の要求するところ、吾々の經濟制度的可能の標目は何であるか。思ふにそは決して單なる職業間階級間に於ける勢力均衡ではない。而してそは國民多衆の勢力を端的に代表する權力が經濟理論に基いて、徹底的に社會經濟生活を合理的に統制するにあることを信ずるのである。

大正より昭和へ

大正から昭和へ移るに當つて

野口米次郎

私は先帝陛下の御不例から御崩御にかけての間に日本國民が擧つて帝室に捧げた敬愛と憂慮の感情に觸れて、私の心は感激した。そしてその感激は反省的思想へと私を誘ふに至つた。日本國民は深夜水垢離を取つて陛下の御平癒を祈念した、僧侶は讀經の聲で佛殿を動かし、學校の生徒は默禱の行列を組んで二重橋前や明治神宮にその祈願をこめた。この敬虔嚴肅な陛下の御全快を願ふの外他意のない行爲は何を語つたか……簡單にいふと帝室崇拜の思想が感動の姿で顯れたものに外ならない。帝室は日本の宗家であつて、日本の山川草木は悉く天孫降臨のこの方我が帝王へ奉仕するために示顯したものだといふ思想は傳統的に私共日本人の血に流れてゐる。日本に於ける過去の偉大な詩人は皆なこの思想を歌つてゐる、そしてこの根本的思想が小さく分れて家族制となり故國の自然禮讃となり、また再び大きく集つて祖先崇拜の觀念となつた。柿本人麿が『掛文ゆゆしきかも言はまくも奇に畏き朝日香の眞神の原に久方の天つ御門を懼くも定め給ひて神さぶと磐隱ります』と『高市皇子尊城上殯宮之時』に歌つたのは則ちこの帝室崇拜の信仰が纏綿たる感情に反應したものに外ならない。又『天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を天つ原振放け見れば渡る日の影も隱ろひ照る月の光も見えず白雲もいゆき憚り不時ぞ雪は降りける』の山部赤人の不盡山の長歌は、祖先崇拜者が語つた最も偉大な自然禮讃の言葉である。又彼の帝室崇拜が叙景情調に結びついた時、『八隅知し我ご大王の高知らす芳野の宮は疊つく靑垣隱り河次の清き河内ぞ春べは花咲きををり我されば霧立ち渡る其の山のいやますにこの河の絶ゆることなく百しきの大宮人は常に通はず』と天皇（聖武）の吉野へ行幸の時などに歌つてゐる。西行法師は世を捨ててすべての自然に佛の姿を認めて安養淨土の法樂に入らんとした風流僧であつたが、それでも伊勢の神前に額づいて祖先崇拜の有難い涙を流して

墨染の衣をぬらしてゐる……『宮柱したつ岩根にしき建てて露もくもらぬ日の光かな』とか、或は『神路山月さやかなる誓にて天の下をば照すなりけり』とか歌つて比類のない國土に生を得たことを感謝してゐる。芭蕉は人の知るやうに彼の自然觀は今日の言葉でいふと虚無思想に近いものであつた。然るに彼は外宮の遷宮を拜して『たふとさに皆押合ぬ御遷宮』の一句を書いてゐる。勿論この句は芭蕉としては立派なものでないが、それでも彼の祖先崇拜から流れ出る敬虔の感情を十分に説明してゐる。

ここで私は考へさせられる……それは外でない、西行でも芭蕉でも祖先崇拜乃至は帝室崇拜の問題になると平日の主義主張をけろりと忘れて類型的の一日本人と成つて仕舞つてゐることである。これは確に彼等の矛盾であるが、私共近代の日本人も等しくこの矛盾に喜んで順應してゐる、又この矛盾を極めて自然なものと眺めて私共は決して討議しようとしない。更に又この矛盾を問題として議論することを不都合な非國民的行爲であるとさへ考へることもある。私共日本人は相互に『これは日本人獨特の矛盾性だ、又この不思議な矛盾を常識化し融和合一せしめて行く點に我等の特異な價値がある』といつて濟まさるであらうか、研究好きな外國人がこの問題に觸れるとさう簡單に濟して置かない。彼等はいふであらう……日本人の近代思想と帝室崇拜乃至は祖先崇拜との關係はどうか。日本人の近代思想といつても中途半端なものでまだまだ世界的に變化したものでないが、彼等が言葉通りに世界的になつて世界共通の思想と感情を信ずる場合になつた時、日本人はどうして前記の思想や感情を始末するであらうか。一言でいふと何時まで日本人の祖先崇拜又帝室崇拜が維持繼續されるであらうか。

確にこの問題は彼等外國人の興味を持つ大きな問題であらう……私共日本人は彼等に對して解けない一の謎であるに相違ない。彼等は私共が御不例發表當時から御崩御後に至る間に表現した國民性を眺めて驚いた、そしていつた……『これは正直な國民だ嚴粛な國民だ感情の麗しい國民だ實に尊敬に値する國民だ、然し不思議な國民だ。今西洋諸國を見るに所謂近代思想に支配され又それに降服してゐない國民はゐない。近代思想とは何であるかに答へる詳細な知識は私にないが、少くも私は近代思想は民主々義を基調としてゐると信ずる。西洋諸國の人々は信じてゐる……我々人間は本質的に相違がない、我々に階級の上下がある筈がない。我々は個性を發揮してそれぞれ人生の問題を解決せねばならない、そしてそれが人間生活を十分に發達させる所以に外ならない。私共日本人もこの近代思想を否定するものでない。私共の大部分のものは或は近代思想家を以て任じてゐるであらうが、私共の祖先崇拜或は帝室に對する尊敬心は決して所謂近代思想に破壞されないとすると、私共日本人は外國人のいふ如く不思議な國民である。私共は維然として彼等には切腹と浮世繪の國民である。私共は彼等には舊日本の日本人である……若し私共に昔と異つた點があるとすると、ちよん髷を散髮にし瓦屋根を亜鉛葺きにした程度の變化に過ぎないであらう。かういふ工合に私共が今日も將來も彼等から眺められてゐると、私共は世界の一國として極めて窮屈な立場に置かれ事々物々に誤解され易いことになるであらう。彼等は無論私共に近代的思想

と生活に適應する同情と理解がないとは思はなくても、私共の一方の舊思想が彼等には鎧兜の幽靈のやうに思はれ永久に彼等を威嚇すると感ずるであらう。從つて私共は少くも對外的問題の上には、始終說明せねばならぬ立場になつてその苦惱に堪へられない狀態を招くかも知れない。其時私共が彼等に、彼等の信ずるやうな舊思想がない又彼等に矛盾と見えるものも私共は妥協させて世界共通の思想に順應してゐるといつた所で、彼等は恐らく私共を信じないであらう。事實、私共の精神的二重生活は彼等には永遠に興味の問題となるであらう。

然し考へるに私共日本人がその思想にその感情に全然西洋化して、遂には西洋の精神的屬國みたやうな國となつた所で何の價値があらう。私共に西洋と異つた特殊の文化が花を咲けばこそ西洋は私共に感謝するであらう…如何となればそれに依つて彼等の生活も豐富になるからである。實際、外國人でも所謂西洋文明の沒落を語りその平面的な物質美を極力否定してゐる人がある。かういふ主張の人は、若し日本が西洋流の三等國になつて仕舞つたならばどんなにそれを歎くであらう。彼等に三等國が必要であれば伊太利や西班牙で澤山だ、何も日本までその目錄に加入しなければならぬ理由がない日本は何處までも東洋の日本であつてほしいと彼等は思ふであらう。

私は嘗て英文で前記の祖先崇拜を論じて、この原始的信仰は變化してゆく私共の近代生活に對してどうして昔日の權威を保ち得るかと疑ひ必然の結果としてそれは近代思想と融和しないであらうと結論したことがある。私はいつた『この日本の簡單な神秘主義、云ひかへると影(シャドウ)の信仰」だが、當然に民主々義の電燈に照らされて弱められる。都會生活は散文的である科學的である平面的である、從つて祖先崇拜の幽怪味に共鳴しない。假りにここに外國へ移住した日本人があるとする…彼等は日本人に附屬する過去の精神狀態を全然忘れて新生活に入らねばならぬと信ずるであらう。又日本本國に於ても在來の家族制は亡びてゆくかの感がある。分家したもの又その分家から更に分家したものがその祖先の靈に忠實であることは不可能であらう。かういふ工合に破壞されて行つたならば、私共の祖先崇拜は再び昔日の光榮を持ち得るものでない。」この私の議論は少くも理論の上では是認せられるものと信ずるが、最近日本人が帝室の御不幸に關聯して表示した國民性の發露から見ると私の議論は否定せられるやうに私は感ずる。國家が戰爭か何かで危急な場合に出合ふとか或は帝室に意外な事件でも起つたといふ時には、私共日本人は直に個人的思想や感情の相違を捨てて、幾千萬人といふ日本人がたつた一人の思想になり感情になつて單純化されるといふことは、實に驚くべき世界無比の現象と云はねばならない。私は今『大正より昭和へ』といふ題を課せられて感想文を草するに當つて、これ位私を動かす現象はないので私はこの事を書きつつあるのである。そして私は信ずる、日本の昭和文化はこの驚くべき現象の土壤のなかから芽ぐみ花咲かねばならない、そして日本の特殊文明を發揮して世界の文化へ一大貢獻する所がなくてはならない。然し私共の道は危險である。世界的といふと極めて誤解され易い道であるが、何も他外國を恐れるには當らない。我れに信念あり希望あるに於ては斷然として進むべき道へ進むべきのみである。

最近日本に自國の古典研究が盛んになり又盛んになりつつあるが、

この現象は何を語るであらうか。私は今日になつて漸く私共が過去の藝術文藝、一言でいふと文化を整理懺悔する時が來たやうに感ずる。私共は過去五十年以上に渡つて一意專念に西洋文明を理解吸收しようとして、どの位私共の生氣を浪費し努力を盡したか知れない。然しその結果はどうであつたか。今日になつて私共東洋人はどこまでも東洋人であるといふ結論に達したのではあるまいか。如何に私共が西洋人にならうとした所で、物質的問題は別として到底滿足な收穫を得られる筈がない。又私共は西洋人にならうとしても成れる理由がない。

私共日本人は日本人であらねばならぬ。又諸外國人も私共が日本人でないことを希望しては居ない。私共は『不思議な國民』で澤山である、謎の國民で結構だ。不思議な國民として又謎の國民として最善を盡し特殊の文化を創造することが私共がこの昭和時代に於ける一大仕事でなくて何であらう。事實物質的にも精神的にも所謂二重生活は浪費である無駄である。私共は昭和時代にその二重生活を一つの生活として渾然たる日本文明を作ることが、私の將に來りつつある新時代に對する希望である、私にこれ以上大きな希望はないと信ずる。

昭和日本新舞臺の展開

高橋龜吉

一

明治天皇崩御の際、倫敦タイムス東京通信員は長文の電報を送つて大正日本の前途を論じ、タイムス亦一大長論文を社説に、掲げて共に大正日本の前途多難なることを指摘し、當時の我が朝野に多大の感動を與へた。その要旨は、『明治日本は多大の苦心と努力とを以て歐米の物質文明を採用し、驚くべき速度を以て長足の進歩を遂げた。しかし乍ら、考ふべきは、過去のこの物質的變革が大正日本に及すべき影響と之に伴つて日本人の精神が今後如何に變遷すべきかの點である。これ等の事實は思ふに、明治日本がしかく容易に且つ手際よく發展し來りしとは趣を異にし、大正日本は其處に幾多の難關と危險とを包藏してゐる』と云ふに在つたと記憶する。

事實、明治時代は資本主義文明の移植模倣に專念し、そのことに由つて、然りそのことのみに專念することに由つて、容易に且つ驚くべき効果を擧げて、明治日本をして彼れの如く長足の進歩を遂げしめることが出來たのであつた。然るに、明治末期に於ては、已にこの種の發展は漸くその行詰期に轉入し、大正日本に入ると共に益々その傾向は顯著となつた。そのわけは、要するに、一は資本主義文明の採用が

一巡終を告げたる所へ、その長所が漸く廢頽すると共に、その短所が著しく頭を擡げ始めたことに在る。

二

斯樣のわけで、大正日本の時代に於ては、明治日本より承繼した多くの遺産がそのまゝでは年と共に行詰り、凋落し行く事實に直面し、こゝに、その改造の難關を突破する必要に迫らるゝことになつた。例へばその最も著しい現象としては、(一)勞働運動、社會運動等の勃興(二)普選制度の實施、(三)官僚政治乃至軍國主義の凋落等を擧げることが出來る。

而して、これ等大正日本の三大現象の中、(一)及び(二)は積極的な改造現象であり、(三)はその結果としての消極的な自滅現象である。そもく、明治日本發展の根源は、之をその機關より見る限り、官僚と軍人との二つに還元し得る。即ち、歐米の物質文明即ち資本主義文明の移植模倣――それが明治日本文明發展のすべてゞある――は、專ら官僚の手に由つて行はれた。極度の中央集權制度に由り、少數の有能有爲の官僚の指揮の下に、全國的に資本主義的文物制度を天下り的に移植すると云ふのがその方法であつた。然るに斯樣な方法に由る我國の發展はその後三つの方面から困難となつた。その一は、歐米文明の移植模倣が一巡終つて、最早その餘地が殆んどなくなつたことである。尠くとも容易に移植模倣し得るものは種切れになつたことである。がこの點については私の他の場合に於て屢說し來つた所であるから紙面の都合上その詳述を茲に避ける。いま一つの明治日本發展方法の行詰は官僚の實力それ自身の退化である。顧るに、明治維新以後暫くの間、官界は唯一の靑年登龍門であつた。加ふるに、その中心に立つ所謂官僚の親玉連は、維新革命の前後、世の荒浪にもまれ、死活の境を突破して來た百戰練磨の人傑であつた。斯樣なわけで、官僚は一時我國最高の人材を網羅した唯一の指導機關であつた。明治日本の大發展がこれ等官僚の指導の下に敢行せられたと云ふことは決して偶然ではない。所が、國會開設以來、官僚の位地は從來のそれとは玆に一變し、加ふるに歲費の削減に由り人材の養成、吸收にも多大の支障を起した。然るにこの秋に方り、民間の事業は一大發展の域に達し、人材をして自由に驥足を伸ばしむる舞臺を提供した。かくて、人材の多くが漸く民間に走り、官界從來の獨占を破りし所へ、更に官界に於ては、所謂文官任用令の鐵門に由り、一方には門外の人材を全く遮斷して入れず、一方には門內の人材を溫室育てにして顯要の職にまでトコロ天式に押し進めた。斯くて、愈々官僚の實力は退化しつゝあつた所へ更に、明治維新以來の有力者は、大方或は死し或は老ひ、愈々、官僚の實力及びその威令は凋落するに至つたのである。云ふまでもなく、その結果、我が政治は從來の如き効果を擧げることを得ずして、少からぬ破綻を各所に曝露したのである。

更に又、明治日本を斯くの如く一大飛躍せしめた他の根因は我國の兵力であつた。このことは、日淸日露の二大戰爭が、如何に我國力を伸展したかを顧るだけで十分だ。斯樣のわけで、我が朝野の間には、長く軍國主義に由る「國力伸展」と云ふことが國民の希望となつてゐた。然るに、この希望は、歐洲戰後に於て殆んど完膚なきまでに打ち潰さ

れた。歐洲戰中に於て、我が手に收め得たと確信してゐた對支廿一ケ條要求に基く獲得、對獨宣戰による膠州灣の占領、シベリヤ出征に包藏せられたる領土擴張欲等々が戰後に於て元も子もなく吐き出されたと云ふ苦い經驗がその無言の幻滅曝露者である。その斯の如き結果になつたと云ふことは、要するに帝國主義的發展時代の世界的凋落に基因することであつて、その理由も無論あるのであるが、こゝには、斯様な事實のため、我國民の間に、兵力を以て我國將來の國力伸展を圖り得ると云ふ希望の漸く消失するに至つたと云ふことを示すだけに止める。その結果が即ち軍國主義の凋落である。これ大正日本が難局に立つた第三の方面である。

三

大正日本は、斯様にして、明治日本最高の功勞者官僚と軍閥とを二人とも緘首せざるを得ざるに至つた。而して、之に代る者として採用したものは、「普通選擧」制度であつた。しかし乍ら、この普通選擧制度は、斯様なハッキリした意味に於て實現したものであつたかと云ふに決してさうではなかつた。

按するに、明治日本の建設者、官僚と軍閥との機能が退化した時に於て、大正日本は又、明治日本を發展せしめた所の資本主義制度そのものの退化にも亦直面したのであつた。若しも、この資本主義制度の退化がなかつたならば、官僚と軍閥との退化は、資本家に由つて代られた筈であつたであつたらう。さうすることに由つて、大正日本は更にその發展を續けることが出來たわけであるからだ。然るに、その資本主義制度そのものがこの秋に於て退化した（そのわけはこゝに紙面がないので說かないが、改造大正十四年八月號參照）のであるから、この官僚乃至軍閥から資本家への權力更代は、先進國の如く旨く運ばなかつた。否、或る點まではさうした更代は行はれた——原敬以來の政黨內閣の樹立の如き——のであつたが、さうした更代に由つて大正日本の難關は毫も突破せられず、却つて益々その行詰を深化さした。而して、この結果を最も痛感したものは、今日の制度上、無產階級であつた。

大正五年以來、歐洲戰爭の一時的影響に由つて、アルコール興奮の如く景氣立つた我が經濟界は、大正九年春の反動に由つて、慘澹たる悲況に陷つた。而して、この悲況を救濟する策としては、爲政者及資本家階級に殘された方法は、只管に無產階級の勞働條件を低下さすことのみであつた。こゝに於て、無產階級の間には之に反抗する勞働爭議乃至小作爭議が各地に勃興し、こゝに、勞資の間に、互に死活のための鬪ひが戰はれるに至つた。いかにも、大正九年以前に於ても、勞働爭議はないでは無かつたが、しかしその爭議は利得したる利益の分前の大小の爭ひであつて、大正九年以降の如き死活の爭ひではなかつた。この結果は支配階級をして所謂「思想の惡化」「世相の險惡」を切りに想はしめ、その緩和策の必要を痛感せしめることゝなつた。之れ、支配階級側に於て普選制度の必要を認むるに至つた根本事情であつた。彼等は、であるから、既成政黨從來の政治が行詰つて、之を甦生さすために普選の必要が起つたのだとは夢にも考へなかつたのであつた。このことは、普選案の上程せられた議會の速記錄を一見しても

のには誰にも容易に看取出來ることである。

しかし乍ら、民衆の多數が普選を要望するに至つた根因は、意識せると無意識なるとの差はあるが、資本家的既成政黨に愛想を盡かした結果であると一致してゐた。既成勢力には大正日本現在の我國難局打開の能力なしと見たからである。大正日本の發展は、我國の政治を、從來の官僚、軍閥、資本家等の占有より解放して、之を無產階級（財產に寄食せず自らの腕によつて衣食しつゝある階級）の手に取戾す外になしと自覺したからである。このことは、例へば普選問題と前後して無產階級の經濟的及び政治的運動勃興し、大に新興階級の要求に投じつゝあることが之を證明する。

四

さり乍ら、大正日本は、以上の如き新日本誕生の陣痛に惱み、その誕生の準備に漸く着手するやせざるやに、遽かに逝いて、それの發展それの完成は擧て之を昭和日本の双肩に荷はし去つたのである。例へば、普選の實施にしても、支配階級の人々は、未だ之を歐米先進國のそれと同一視し、國民の多數も亦、漫然とこれをさう見てゐるかのやうである。しかし乍ら、歐米先進國のそれは資本主義發展期に於て實施せられたものであつて日本のそれは資本主義末期に實施せられたものである。從つて、その意味もその發展の形式も、その完成の目標も、歐米先進國の普選實施の日のそれとは、日本のそれは著しく色彩を異にしたものであること云ふ迄もない。此等のすべての證明と實現とは、昭和日本のために殘されてゐる。

又、その實行責任者たる無產階級運動——經濟及政治兩行動に於ける——の陣營に於ても、大正日本は僅かにその第一步を踏み出したのみであつて、その陣容の整備、その戰術の鍛煉、客體的狀態の認識の練達等々は、すべてこれ昭和日本の双肩に荷はされた使命である。思ふに、昭和日本は、此等の點を中心にして、目覺しき活劇を演ずるであらう。

就中この點に關連して私の最も興味を有することは、次の二點である。その第一は、昭和日本に於ては、日本自體の研究が益々旺になりその特殊性と共通性とのより正確なる認識に由つて、昭和日本改造のコースが今後如何に變化するであらうかと云ふことである。その第二は、これ迄、無產階級の社會改造の基礎理論となつた資本主義的社會現象の法則は、專ら、資本主義發展期に於けるものであつたが、資本主義の發展期が行止り、それが下り坂になると、これ等の法則はどう變化するか、と云ふことが今後は無產階級の直面する重大問題となるのであるが、昭和日本は如何に之に對するかである。この點について從來のマルキシスト一派は、資本主義發展の行詰即其の沒落、——社會主義の實現と云ふ風に漠然と考へてゐるのではないかに見へる。（尤も資本主義沒落期に於ては勞資の鬪爭が必死となり、愈々激化すると云ふ一點は強く主張せられてゐること周知の如し）尠くとも資本主義發展行止の時期から社會主義實現の時期迄の間に於ける資本主義現象そのものゝ從來の公式が如何に變化すべきかの研究が疎かにされ、漫然と從來の考へ方を續け、その認識の上に、將來の政策を樹てゝゐるかのやうに見へる。例へば、大衆はプロレタリヤー化す運命にあると云

ふ資本主義の公式は、資本主義衰退期には之をそのまゝ受け入れることは出來ないで、他の傾向に轉ずると云ふ如き事實あるにも拘らず、依然、大衆はプロレタリヤー化す運命の者だと云ふ前提の下に編出された政策が無條件に強調せられつゝあるが如きである。思ふに、昭和日本の改造、その發展の實現する前提として、この資本主義行詰期乃至沒落期に於ける社會現象の科學研究が新に世の注意を惹き、多大の發達をなすであらう。而して、その結果、從來の考方が尠からず訂正せらるるのではないであらうか（一九二七・一・三記）

元旦試筆

室伏高信

一

大行天皇は恐らくは近來の明君であつたと私には思はれる。キング・キヤン・ドゥウ・ノオ・ロングといふの立場からいつても、しらすの政治の立場からいつても、殆んど理想的であつたといふことができるであらう。王道の立場からいふも、私の見るところでは、理想的である。

日本の皇室は宗教的であるといふ見方は保守反動の諸君がこれを說くところである。自由主義はこれに對して政治的に解釋しようとしてゐるごとくである。保守反動の立場はその動機において誤つてゐる。それは一種の陰謀である。日出づる國においては許すべからざる陰性的な企である。けれども日本の過去の歷史において皇室の立場をもとめるとすればそれは宗教的な意味において理解すべきものであり、そしてまた宗教的にのみ理解することができるものである。しらすの政治であつたからである。キング・キヤン・ドゥウ・ノオ・ロングであつたからである。

私はこゝには王道についてはたゞ孔子の言葉だけをいふであらう。、、にして治まるはそれ舜かと。、、にして治まる、王道の本質はこゝにある。治めるのではない。治まるのである。支配するのではない。支配を要しないのである。權力ではない。德なのである。日本の皇室の存在、そしてその永續の根據は私はこの點にあつたと考へるのである。、、、、にして治まるといふことにおいて私は日本の皇室を理解してゐるのである。そして、この意味において、大行天皇は最も理想的な帝王の一人であつたと私は考へてゐるのである。

二

孔子が無爲にして治まるはそれ舜かといふた時に、孔子は老子の立

場に稍々近づいてゐたことは事實である。けれどもたゞ一歩を進めたといふだけである。孔子はそれによつてたゞ王を意味しただけであるからである。政治一般を意味したものではないからである。彼はそれによつて賢者の政治を期待したのである。

幸か不幸か、私は敢て幸か不幸かといふが、堯舜のもとには多くの賢才があつた。老子的立場からすれば不幸にして賢才があつたのである。そして一般の政治的立場からすれば幸にして賢才があつたのである。堯舜に比べて大行天皇の場合はどうであつたのであるか。私はこゝには不幸にして賢才がなかつたといふのである。

大行天皇は王道を行ひ、そしてその王道が國民に行はれなかつたといふことは何を意味するであらうか。國民と天皇との間に何ものかの介在があつたがためであるといふことはいふまでもないことである。天皇の德が偏なく黨なく王道平々であつたのに對して、政治階級なるものが介在して、偏あり、黨あり、否、偏と黨とのみが支配して黨々偏々たる政治の眞面目が遺憾なく發揮されてきたのである。

資本家階級の Ausschuss とマアクスのいふたところのものがこの間において未前の發展をとげた。言葉の正しき意味において階級と政治とが完全に一致したのは實に大行天皇の治世においてであるといふことができるのである。

この間において古き門閥階級は仆れた。第一回及び第二回憲政擁護運動なるものにおいて門閥の破滅が記錄されたのである、門閥が破滅して階級が名實ともにこれに代つたのである。憲政擁護運動なるものは門閥打破の運動であり、そして階級擁護の運動であつたことはいふまでもないことである。第一次憲政擁護運動が大正元年から始まつたごとくに、大正の時代は階級全盛の時代として序幕を開き、そしてまたその幕を閉ぢたのである。

獨り政治のうへにおいてだけでは勿論ない。政治は寧ろ徴候であつたといふに過ぎないのである。Ausschuss は Ausschuss である。それは一つの樞軸ではある。けれども本體ではないからである。

資本家階級が羽翼を伸ばしたのは實に大正の時代である。世界大戰の不當利得を味はつたから日本の資本家階級はその富を二倍にし三倍にした。大正年間に日本の富が三百二十億から一千億以上に增加したといはれるのであるが、その富の大部分が資本家階級に歸したことはいふまでもないことである。資本家階級はその富を二倍にし、三倍にし、そしてまたそれによつて權力を二倍にし、三倍にしたのである。獨り政治的權力だけではない。經濟的、社會的、政治的のあらゆる權力を二倍にし、三倍にし、マンモンが高く王位に即いたのである。

デモクラシイの思想が外來思想であるといはれながら、しかも尙ほ天下を席捲したのは何のためであるか。それがたゞなる外來思想ではなくして、資本家階級の勃興、黃金政治、都會時代から必然的に生れたところの時代の精神を意味したからである。社會主義思想が大正の時代において勃興したといふこともまたこの意味にほかならないのである。

大正の時代はあらゆる意味において資本家時代であり、黃金政治の時代であり、都會の時代である。高度資本主義の時代であり、そして高度都會主義の時代である。一方に社會主義の問題が起り、他方に農

村の問題が時を同じうして起つたといふことは、資本主義と都會主義とがたまたま一つのシノニムであるといふことを證明したのである。

われわれは大正の時代を日本における資本主義の全盛時代として記憶するであらう。明治時代の半開化に對して大正の時代は全開化の時代であつたのである。あらゆる古きものはこゝに亡びた。あらゆる日本的なるものはこゝに亡びた。あらゆる亞細亞的なるものはその殘骸の悉くこゝに一掃されたのである。そして亞米利加式文明が丸ビルとともに大正の時代を貫いたのである。そしてまた遂に私の謂ふところのラヂオ文明の時代がこゝにもちきたされたのである。

こゝに改元のことが起つた。

三

昭和といふ言葉が舜典から出たことは明らかである。克明俊德。以親九族。九族既睦。平章百姓。百姓昭明。萬邦協和。黎民於變時雍。放勳追慕九族を親しみ、百姓を昭明し、萬邦平和の理想を期待する。の情見るべく、再び王道の宣明である。私はもとより言葉の末によつて時代を論ぜんとしてゐるのではない。けれども私はこゝにたまたま眞にたまたま時代の象徴を見ることができるといふのである。勅語のうちに經濟は時に利害同じからざるありといふに至つてわれわれはそこに一層時代の暗示を見ることができると思ふのである。その言葉自體においてではない。この言葉のなかるべからざる事態においてである。

經濟のことはまことに時に利害同じからざるあり。利害同じからずして階級あり、都鄙がある。階級あり、都鄙ありて國は亡びたのである。人々利を爭ふて國危うしではない。國は既に亡びたのである。ゲマインシヤフトとしての國は既に遠く亡びたのである。勅語のうちに時代の暗示を見るといふよりは時代の陰影を見るべきである。「經濟ハ時ニ利害同ジカラザルアリ」、われわれはこの言葉を再誦し三誦し、そしてそこに時代の深き陰影を髣髴するのである。日本の社會生活は既にこの時代に到達したのである。たゞ日に進み、月に擴大するといふたところの大正の時代の純粋に唯物的なる、亞米利加的なる、外延的なる征服的なる國是に對して、われわれは反省の時代に到達したのである。少數の豫言者によつて考へられてきたところのものが今日は時代の常識として人々の心を囚へはじめてきたのである。時代の行詰まりが最後の段楷に向つて一歩々々近づきつゝあるとを示してゐるのである。

四

昭和は日本の廿世紀であると私には思はれる。大正は十九世紀である。明治は十八世紀である。日本は歐羅巴の一世紀を費したものを最初は五十年でなしとげ、次には十五年間でなしとげ、そして昭和を迎えてから第廿世紀にとはいつたのである。廿世紀が十九世紀文明の總決算期であるごとくに、昭和の時代は大正文明の總決算の時代であると私には思はれる。そして日本の明治、大正の文明が悉く直譯であつただけそれだけ、その倒るゝやまた多くの時間を必要とはしないのである。日本の高度資本主義、高度都會主義、高度文明の悉くはバラック建てである。社會主義でさへもバラック建てである。無産政黨といは

れるものもまたバラック建てである。その仆るゝや大地震を必要とはしないのである。その成るや早く、その仆るゝや早く、われ〳〵が高度文明の時代がたりつゝあると考へてゐる間に崩衆の時代がきてゐるのである。われ〳〵の資本主義、都會主義、高度文明の悉くがたゞ進めといはれた時代から反省の時代に入つたといふことは、それによつてより堅實の時代に入つたのでもなく、和洋折衷の時代に入つたのでもない。飜譯の時代が終つたといふことを意味するのである。「譯述」といふ言葉が行はれてゐる。譯述は飜譯でもなく著作でもなく、飜譯のは Spätzeit を意味する。書物の飜譯が Spätzeit に入つたばかりでない。われ〳〵の生活における飜譯時代が Spätzeit に入つたのである。總じて資本主義、都會主義、文明が Spätzeit に入つたのである。われ〳〵の生活が反省を要求されてきたといふことは、そして資本主義も、社會主義も、政治も、經濟も、總じてわれ〳〵の明治大正の建設物の悉くが批判と反省との對象になつてきたといふことは、時代の行詰まりにおいて、新らしい評價の標準がもとめられてきたことを意味するものではなくてはならないのである。

五

私は昭和において再び王道の宣明であるといつた。堯舜を要すること今日のごとくに急なることはないと私には思はれる。欽明文思安安允恭克讓。まことにうや〳〵しくしてよく讓る。堯は舜に讓り、はこやの山に四子を見て天下を忘る。權力ではない。征服ではない。名譽ではない。放棄である。辭讓である德である。外にもとむるところなくして內にもとめたのである。評價の內部的要求である。外部的帝王にしてまことの王、まことの價値の要求である。昭和の宣明において日本の王道がいよ〳〵高さを加へたことを私は思ふのである

こゝに經濟は時に利害同じからず。經濟に對する批判が宣明されたのである。經濟から德への要求が宣明されたのである。經濟的世界から道德的世界への宣明が行はれたのである。道德的評價の標準によつて資本主義的評價に對する嚴肅なる批判が行はれ、それによつてまことの王道への方向が指示されたのである。

私はかくのごとくに理解する。またかくのごとくに理解したのである。そしてまた時代はかくのごとき理解を必要としてゐると私には思はれるのである（元朝）

觀念的少數派運動より現實的大衆運動へ

西尾末廣

準備時代（大正元——七年）

日本の勞働組合運動は、明治二十年頃に佐久間氏等によつて初めて起されたが、時機到らずして間もなく失敗に終り、三十年頃には佐久間、高野、片山、島田の諸氏によつて再び開始され、相當の成績を擧げたのであつたが、之れまた、治安警察法の實施、その他の方法による官憲の壓迫のために破滅の非運に陷つて終ひ、その後、明治時代には殆んど見るべき運動は起らなかつた。

ところが、明治が大正と改元された第二日目の大正元年八月一日に現在の日本勞働總同盟の前身たる友愛會は、現在の總同盟本部内の一室に於て、日本の近代的無産階級運動の先驅をなして呱々の聲を擧げたのである。

而して、此の友愛會は、明治三十年頃の組合運動の失敗に鑑み、また四十三年の幸德事件のために反動的風潮の社會に漲つてゐることを考慮して、努めて穩健着實なる運動方針をとつたのである。その指導精神は人道主義的であり、實際鬪爭は、交渉、談合によつて解決せんとする、所謂協調主義を脱し切れないものであつた。

時は『大正維新』の時代である。一般國民の間に、舊來の文化に倦怠を感じ、何んとはなく『新しきを求める』てふ風潮の漲つてゐる時代であつた。藩閥官僚的舊勢力に民主々義的政黨勢力の挑戰しつゝあつた時代である。

それ故に、桑田熊藏、堀江歸一、高野岩三郎、内ヶ崎作三郎、關一氏等も喜んで友愛會を援助し、勞働者もまた進んで入會するといふ有様であつた。創立一週年には組合員一千五百名となり、大正七年には三萬人となりまた支部は全國重要なる工業地には到るところに出來るといふ活況を呈したのであつた。

私は、この時代——元年から七年まで——を日本の近代的勞働組合運動の準備時代と稱してゐるのであるが、此の時代の運動は、先づ成功したものと考へてゐる。此れを委しく云へば、一般社會事情と、從つてそれから起つてくる當時の社會思想と、勞働者の自覺の程度、等を充分に考慮し、これに適應した運動方針を採用したこと、にあるのである。

飛躍時代（八年——十一年）

大正三年の中頃、世界大戰爭の幕が切つて落されるや、海外貿易の一時杜絶のため我が產業界は一時大恐慌を來し工場を閉鎖する者相次ぐ有樣であつた。然しながら、間もなく交戰先進國の販路を奪ふに至り、空前絶後の好景氣を惹起し、猫も杓子も、『都市へ、工場へ』となだれ込んだ。それがまた、戰爭の終結とともに、歐洲の經濟界が恢復するに連れて事業縮少が行はれ、職工の解雇が行はれ、爲政者等は『農村に歸れ』と叫び出した。

斯くの如き、經濟界の變動と、勞働者の急激なる移動は、當然に活發なる組合運動を起さしめたのであつた。大正八年に四百九十七件、九年には二百八十二件の同盟罷業が起り組合の簇生するもの、大正八年に七十一、九年に六十六、十年には七十一、といふ狀態であつた。

斯くして、組合運動は、日本の經濟界の發展、變動てふ事實によつて量的に大躍進を遂げたのであるが、質的にも、また之れに劣らざる躍進を遂げたのである。

勞働組合運動が右の如く活潑に起つて來ると、幸德事件以來、當局の壓迫のために鳴りを靜めてゐた、社會主義者等が徐ろに活動を開始し出した。大杉氏は機關紙『勞働運動』を出して熾んにアナーキズムサンヂカリズムを宣傳し、小川、荒畑氏等も大體サンヂカリズム的宣傳をしてゐたのであつた、此の時森戸辰男氏が『クロポトキンの社會思想』といふ論文を發表して下獄されたが、そのために一層サンヂカリズムの思潮が流行することとなつた。

一方また、ロシア革命、ドイツ革命等の歐洲の社會運動の狀勢が盛んに紹介されるに到り、殊に、共產黨インタナシヨナルが、モスコーに成立してよりマルキシズムの紹介が主として山川氏等によつて行はれ、漸次、サンヂカリズムよりマルキシズムへと轉換されたのであつた。

此の思想的激流に見舞はれて、勞働運動に携はれる實際運動家は應酬に遑なく、揉みに揉まれてヘト／＼になり、多くの前途ある鬪士は戰線から落伍したのであつた。

昨日は、普選要求運動、今日は政治否定、今日の革命主義者は昨日の協調主義者であつた。この間に組合と組合個人と個人、との間にどうすることも出來ない不自然なる『行き掛り』が出來て幾何に多く組合運動の發達を阻害したことであらう。けれども一面には、この理論鬪爭によつて勞働階級解放の理論的確信を得ることが出來たのであつた。

私は、此の時代大正八年から十一年までの四年間を飛躍時代と稱してゐるのであるが此の時代の運動は、稍失敗の感あるものと思ふのである。そしてその失敗の原因は、此れを一言にして言へば、足が地から離れてゐたことである。理論鬪爭に熱中の餘り或は理論鬪爭に影響されて、實際の事實——一般國民の腦裏に流れてゐる社會思想、殊に勞働者階級の自覺の程度、及び組織勞働者の實力。強大なる根を深く下してゐる資本主義勢力——を等閑視してゐたからである。從つて、その理論鬪爭も、日本の社會事情を考慮した上に爲されたものではなく一般的普遍性のものであり、抽象的概念的のものであつた。

此の思想的激流の中に於て、『理論はそふであるかも知れぬが實際はそふは行かぬぞ』と云ふ一部の實際運動家もあつたのであるが、彼れ

等と雖も、未だ實際の經驗によつて、この概念的、非實際的な理論家に對抗する程の理論と確信とを持つまでにはなつて居なかつたのである。

英國の勞働運動の如く、勞働者の實際的經驗によつて漸次發達したのではなく。實際運動者は、實際運動に何等の經驗もない、飜譯的理論家に引きづり廻されてゐたのであつた。これが、此の飛躍時代の失敗の原因であつた。

現實化時代（大正十二年――）

事實と一致しない理論は永く大衆の支持を受ける事は出來ない。現實を無視した運動は行き詰まらざるを得ない。大正十年頃から『現實を直視せよ』『大衆の中に歸れ』と云ふ聲が漸次起りつゝあつた。大正十一年五月、私と藤岡文六君とは上京して、堺、山川氏等を訪問して、彼れ等の現實無視の無責任なる批評に嚴重に抗議したのであつた。その時山川氏は『二十年來の社會主義運動は失敗であつた。』と、三ヶ月後の『前衛』に發表された「方向轉換論」の內容をその時既に私等に話されたのであつた。

前記山川氏の論文が發表されるや激烈なる論爭が行はれた。勞働總同盟第十一年度大會は、その宣言の中で『空漠なる形式的論議を避けて、現實政策に心を用ふべき』ことを主張した。此の傾向は、十二年六月の所謂日本共産黨事件と、同年九月の關東大震災とのために一層促進され、十三年三月の總同盟大會では、勞働運動上劃時代的な、方向轉換の宣言を決議し。この現實化の傾向を理論的には完成したのであつた。

この宣言の內容は、第一に、過去の小數派的運動の過失を認め、第二には改良政策に對する從來の消極的態度を積極的に之れを利用することに改め。最後に、現實の必要のためには改良政策を利用するとも根本精神に於ては少しも變りなきこと。を聲明したものであつた。

然しながら此の宣言は、方向轉換てふ一ッの理論であつた。理論的潔癖を捨てようとする觀念上の方向轉換であつた。此の觀念上の現實化に於て一致した總同盟は、現實化の實行に移るに及んで蹉跌を來たした、即ち十四年三月の大會を機として評議會と總同盟とに分裂した。評議會は總同盟を改良主義に墮落せりとなし。總同盟は評議會を現實政策を理解することの出來ない左翼小兒病者だと言ひ爭つた。

この二大勢力の抗爭の最中に、無謀にも日本農民組合は單一無産政黨組織を提議し、人も知る如く、極めて複雜なる經路を辿つて、兎も角も十五年三月に勞働農民黨が成立したのであつたが、日本農民組合が、それ自身は本質上最右翼の團體でありながら、觀念的理論に幻惑せられて、最左翼の評議會一派と策應するところあつたゝめ、同年十月二十四日の第四回中央委員會に於て遂に分裂し、社會民衆黨は十二月五日に創立されるに到つた。

斯くて、無産政黨は、先進國の何れもがそふであるように、左翼黨と右翼黨とに分れて順調なる發達を遂げるであらふと一般に期待されてゐた。然るに、突如として、總同盟の一部の者と、農民組合の一部の者とによつて日本勞農黨組織の計畫が發表され、ために總同盟は再び小分裂をなし。農民組合もまた將に分裂の危機に瀕してゐる。

何故に派生、三宅氏等は、多年同志と共に築きあげて來た、經濟團體を分裂せしめてまで中間政黨を組織したのであらふか。彼れ等が、共產黨一派と共に協力して政黨を組織出來ない理由は、私にも了解出來るのであるが、社會民衆黨の中に於て協力出來ない理由は理解出來ないのである。只何んとはなく、右翼と言われるのが氣持ちが惡いのではないか。或は、勞働者階級が未だ觀念的な殼を脫し得ずして右翼と言はれる事を氣にしてゐる狀態を觀取し、此の一時的傾向を利用せんとしたのではあるまいか。その何れにもせよ。吾が國の勞働運動が未だ觀念的、非現實的な衣を脫し切れないことの、これも有力なる一證左であろふ。

私は、大正十二年以後を現實化の時代と思ふものである。然して此の觀念より現實へ』の傾向はなほ今後も續くであらふが、此の重苦しくも惱ましき內面鬪爭も一部少數の理論家や智識階級のものによつてではなく虐げられてゐる勞働者階級の伸びあがらんとする、現實鬪爭の經驗によつて漸次解決さるべきものである。と思ふ。

之れを要するに、大正時代の勞働運動は、準備時代の後、急激な理想主義的飛躍時代が來り、それが勞働者の經驗によつて、漸く實際化しつゝ大正の幕を閉ぢたのである。

昭和時代の無產階級運動は、大正時代に殘された『觀念的より現實的へ』の事業を完成し、これに伴つて、無產階級の統一運動が漸次行はれるであらふと私は深く期待してゐるのである。

美術の社會に對へる一面

鏑木清方

世紀だの元號だのといふのは、悠久な時の流れを便宜上劃つたのに過ぎないのだが、世紀が變り、元號が改まるとそこに何か違つた世相が現れて、桃山とか元祿とか、近くは明治時代といつたやうに、後から見ると鮮やかな時代の色が見える。

我々が新時代と呼んでゐた大正も、今は過去となり、かうやつて回顧すると、舊文化から新文化への過渡期として、かなり特殊な世相が展開された。私はこの時代に世間から隆盛を極めたと云はれてゐる美術が社會とどんな交渉をもつて來たか、旣に第一步を印した昭和の代にこの交渉がいかに進められるか、そんなことを一わたり考へて見よう。

美術と云つてもここには造形美術の、繪畫彫刻、工藝を指すのだが、主として繪畫について多くを語ることゝならう。大正の社會史に

著しいもの丶一つは無產階級の擡頭で、文藝にはいはゆるプロレタリヤ文藝の既成文壇に對して一の勢力とならうとしてゐるが、美術の方は三科の運動があるばかりで他に反旗を擧ぐるものは未だ起つてゐない、却つて洋畫家の間に東洋主義が勢を得て一の新らしい傾向となり、日本畫には古典主義が盛んになつて來てゐる、美術が時代に後れてゐるのか、本來の性質が斯くあるべきであるのか、社會の美術に求むるところが那邊にあるのか、社會の求むるところに從つて將來の美術の趨勢も變化あることは否まれまい。美術が社會の背景なしに獨り生存し得るものとは思はれないから。

明治から大正に入る時美術はどんな狀態にあつたかを顧ると、勢ひ話は明治、それ以前に溯らなくてはならない。

明治の維新は我國に於て稀に見る大變革であつたので、美術も一時多少の影響を受けずにはゐなかつた、しかし人間の美を求むる心は政體が變つたり、主權者が違つたりしても火が水になるやうな變化はあり得ない、思想が違つて來て美の標準が變るといふのは云へないことではないが、それは今までに認めなかつたものにも美を認める＝美の標準のひろくなる＝と云つた方が適切であらう。鐵砲玉が飛ばなくなると一時休止された美を求むる心は復活する、幕政が朝政に變つても、地方人が澤山都會へ入り込んで來ても、都會人はそのまゝなのだから前時代の美術の進み方は、やはりそのまゝに繼承され相當に鑑賞する人もあり、名人と呼ばれる人も居た。しかし維新の改革は名のみ傳はつて藝術的價値のそれに伴はなかつた官學派の狩野家だの、土佐、四條、などゝいふ流派の惰力に依つて殘存してゐたものを悉く滅して了つた。これらは武士の家祿奉還と同樣の窮地に立つべく餘儀なくされた。

明治十五年全國繪畫共進會が東京に開かれる時まで、美術界は人として個々には生計を營むものはあつても、對社會に何にも働らきかくる、仕事はしてゐなかつた。この共進會が近因となつて間もなく日本美術協會は設立され、繪畫、彫刻、工藝の繼續的の展覽會が開かれるやうになり、今は世間に忘れられてゐるこの會もその當時には、美術家の社會と交渉をもつ唯一の機關であつた。

展覽會は博覽會と同樣に、西洋の文化移植であつたが、江戸時代にも、美術の効用は宗教の手段としての存在が一つ、武家、富裕な町人の鑑賞としての存在、一般階級の慶弔に缺くべからざるものとしての存在た、とへば雛祭とか端午とか、婚禮の必需品として、次に民衆の爲めの錦繪、神社佛閣に奉納する繪馬扁額、祭事その他夏の夜の辻々に立てた燈籠繪（これは名ある人に賴んで絹地に畫をかいてもらひ、中にあかりをつけたものだ。）錦繪をかゝぐる繪草紙店と社寺の額堂、繪燈籠點る夏の夜の巷とはとりも直さず今日の展覽會に當るもので、いづれも無料でいくらでも鑑賞出來ることに於て、一層民衆的であつたと云へる。藝術の內容から見ても尋常の展覽會よりすぐれたものが尠くなかつた、明治の中期までこの民衆的展覽會は續いてゐたが、日淸戰爭後、社寺の繪馬は陸海連勝や、原田重吉玄武門を破るの圖などが多く揭げられるやうになつて、名匠の筆蹟は漸く跡を潛め、繪草紙店

も繪はがきの流行を名殘として凋落し、辻の燈籠は夜店の繁榮策として今も見かけるけれども、知名な人の筆を見る機會はなくなつて了つた。

明治四十二年文部省が進んで全日本的の展覽會を開いたのは、美術界にも社會にも大きな衝動を與へ、これが大正期の美術の隆盛を來した直接の因を爲したことは爭へぬ。

この展覽會は幾多の波瀾を經て大正八年帝國美術院の創立と共に、從來世間で略稱して文展と呼んでゐたのを帝展と呼ぶことになつたが、政府主催の根本方針には何等の變化もなく、毎年秋季、繪畫と彫刻の展覽會を開いて今日に及んでゐることは絮說するまでもなく世間周知のことである。工藝部は大正期には未だ實現するに至らなかつたが、今秋第四部として設置さるゝ筈である。

思想上一致點を缺くの故を以つて（今日ではそれは取り立てゝ違つたものはないと思ふが）帝展を分離した日本美術院、二科會、春陽會、國畫創作協會と合せて五つの展覽會が美術界の主流となつて、これが各々の部に屬する美術家たちの作品發表の機關となつて、美術家はこれに依つて、社會にものを云ひかけるのである。美術を政治に譬ふれば、團體は乃ち政黨に比較することが出來るが、元より團體として分立すればそこに自分の團體を尊重する意志の動くのは當然ながら、政黨のやうに反對の爲めの反對や、泥仕合などはやらない、他の會にでも良いものが出ればいくらでも賞める。

美術と社會と の接觸は展覽會だけではないが、先づ現在に於て恐らくは將來に於ても展覽會が藝術の本質に多くの弊害を示してゐることを悅ばぬ私も、社會的に見て美術館の建設と共に（上野の美術館は現在では美術展覽會場として使用されてゐるので、悲しいかな日本は未だ一つの美術館をもつてゐないのだ）展覽會の正しい開き方を何よりも必要な美術の社會事業だと思つてゐる。

人はよく美術の民衆化と云ふ。

私は考へる。美術のあゆみは高く〳〵向上してゆく途と、低く、汎く、曠野に水の擴がるやうにゆく途と、この二つの途があつてこれはどちらも捨てゝ置けぬ途だと思ふ。

美術は民衆化ばかりが目的ではない、たゞ一筋に美術至上主義を說くのではないが、深く高く究めてゆく途を失へば、それは美術の墮落である、いかに美術思想が普及されようとも、向上を缺く普及では何にもならない。

一體社會民衆の理解はさう深かるべき筈がない、音樂や劇、またよく賣れる雜誌の內容に見てもポピユラーなものは良いものだと極めることは出來ない、却つてその反對なことが多い、勿論そこが民衆藝術の特別な境地で、始めの民衆が高級な理解に進んでゆくとまた跡から敎養されない民衆が代つて出る、かうして常に民衆藝術は解り易くして滋味あるものが必要になつて來る、理解の進んだ人に對しては美術のたゞ優れたものをあてがへばよいのだが、低く汎く、水の擴がるやうにと云つた方面の美術趣味を迎へるにはたゞ漫然と良いものを見せたつて解らない。さうかといつて民衆の悅ぶまゝにそれに阿つてゐた

ら永劫浮ぶ瀬はなくなつて了ふ、演劇や映畫などの骨の折れるところもそこにある。願はくば日常生活に美術の光がさしこんで暗い生活をも明るくし、息つまるやうな生活に換氣窓ともなり、人の心に柔らぎ寛ろぎを與へる親しい友となり得たいといふことは我々の希望だが、これを達するにはやはり展覽會によることゝ、創作版畫及びよき複製のラヂオの如く社會一般に行き亘るやうな方法を講じたい。江戸の中期以後に目覺ましい發達を遂げた浮世繪は名實共に完全な民衆藝術であつたが、明治に入つて徴々となり、大正になつてなくなつて了つたが、大正時代美術の興隆に伴なひ、肉筆の鑑賞は盛んになつて來て名家の半折の二本や三本持つてゐなくては話も出來ないといふやうなことから、藝術的價値のない宜い加減な幅物や、僞物や背負ひ込んでゐる人はあつても、版畫や複製はさう顧みようとしない。よき藝術は絶對に多作とは兩立し得ざるものであるから、よき作品があらゆる家庭を飾ることは不可能なことである以上、つまらぬ半折や僞物に投じるだけの金をもつてすれば複製でも、版畫でも、小工藝でも、役に立たぬ紙屑の代りに數個の價値あるものが買へる。私は版畫がその創作たると複製たるとを問はず、當代に榮えるべき使命をもつてゐることを信じてゐるが、社會がこれを認めるまでには多數の出版を續行しなければならない、それには莫大ではないが連續しての資本が要る、作家がそれを負擔することは出來ないことだが、あまり算盤に拘はらない出版業者でやつて見る氣の人はないか。

　小川町や銀座をあるくと、繪はがきだの、外國製の低級な複製だのを並べてある店を見る、然してその店には相當の人だかりがしてゐる、あれを見ると清長や歌麿の錦繪を、やはりあのやうにして常に見てゐた同じ都會の昔の市民の幸福を思はずにはゐられない。

　前に美術館のことを云つたが、上野に美術館を寄附した九州の佐藤といふ人は、別に鑑賞家でも、美術のパトロンでもなかつたのだが、美術が社會人心に與へる機微を察して美術館必要を痛感したのだといふ、奬勵の爲めといつて百萬圓を寄附したのでは普通だが美術館建築費の內と指定したことに大に意義があつた、實を云へば佐藤氏の考へついたことは、誰でも考へつく筈のことなのだ。百萬圓程かけなくても、日本全國都市のあるところに數ヶ所の美術館が欲しい、耐火耐震でさへあればそんなに大きな必要はない、金澤、廣島、岡山、福岡、熊本、仙臺あたりにその舊藩主の襲藏する名品を基礎として、縣出身の名家の藏品を加へて陳列する、新らしい美術も公私の展覽會へ出て、よきものと輿論の定まつたものは國家がこれを買ひ取つて、作家の郷里の美術館へ收めるやうにしたい。中央集權の弊を撓め、地方文化の向上の爲めにもどの位有益だか測り知れない。

　美術と社會との交渉は說けば限りがない、今はたゞ去れる大正期の現狀と、私の貧しい所感の一面を示すにとゞめる。（完）

岐路に立てる我國の經濟

堀江歸一

世界經濟概觀

世界の經濟が今日著しき沈衰期に居つて、遽に之を脱するを得ざることは、明白の事實であつて、其源を尋ねれば、遠く歐洲戰爭に存するのである。戰時數年間、何れの交戰國も多數の勞働者をして生産業界から去つて、戰爭に從はしめ、從來富の生産並に生活の維持に寄與する所の大であつた勞働者は生産の見地からすれば、全然遊惰無爲の民と爲つたのみならず、彼等の脱退した生産業界に於ては、彼等に比較して、遙に能率の劣つた婦人小兒老人をも正規以外に長時間に亘る勞働に就かしめて、平時と異ならざる程度の生産を行はしめる其上に、戰場に於て費消される武器糧食をも生産しなければならない狀態と爲つた。斯る事實にして一年續いたとしても、國民生活を攪亂することは免かれ難き所であるのに、戰時四年數個月を通じて、依然として行はれた。唯戰時に際して、諸國の政府が財政を維持する手段として、政府紙幣並に公債の濫發を以つてし、銀行亦斯く增發された紙幣を基礎として、信用を膨脹したことは、相俟つて、(一)官民兩者の消費力を大にして、物價の騰貴を招き、(二)物價の騰貴するに隨つて、總て生産業に從事する者の利益を增加し、(三)勤勞を提供する者亦之に對して豐富なる報酬を收めるが如き、異常の出來事を生じた爲め、戰爭に伴つて經濟社會に現はれる可き不利の影響を掩蔽し、戰爭行はれて却つて高き價格の下に物資を、高き賃銀を以つて、勤勞を需要し、多額の通貨、世間に撒布されて、經濟社會を賑はすの結果と爲つた。北米合衆國、日本、瑞西の如き、交戰諸國の巨額の物資を供給した諸國が經濟上に有利なる影響を受けたのは、當然であるとしても、尙ほ戰亂の渦中に在つて、巨額の財貨と勞務とを濫費した歐洲交戰諸國が戰爭中經濟上に有利なる地位に居つたのは、一に戰時財政に伴ふ通貨並に信用の膨脹を齎した所であつて、一個の幻影であり、泡沫であるに過ぎない。若しも交戰諸國が戰爭の結末を告げるに當り、戰捷國が戰敗國に課するに巨額の賠償金を以つてし、後者亦正貨の形態に於て、之を支拂ふ餘裕を持ち、國際間に巨額なる正貨が流動したならば、之を領收する戰捷國は戰時に膨脹した經濟を維持するを得たかも知れず、聯合諸國亦此事に望みを繋いで居つたが。獨逸の國情は到底其行はれるを許さなかつた。左ればと云つて、諸國は戰後に於て、戰時同樣の放漫なる狀態に、經濟を放任するが如きも、亦許されざる所であつて、戰後經濟の復興を謀り、戰前と同樣の趣きに至らしめるに就ては、通貨は之を收縮して、金貨の基礎に移す可く、經費は之を縮少して、國民に對する財政上の負擔を輕くしなければならない。而して是等兩樣の事情から、一般物價が低落したならば、其間一國の經濟社會をして

假令ひ一時にもせよ、不景氣の狀態に沈淪せしめるのは、免かれざる所であつて、此不景氣たる、戰時に攪亂された經濟社會の恢復する道程に於ける受難の一種とす可きである。

諸國の實例を見る

右の如き道程の下に、經濟社會の推移した事實は英國の經濟財政に於て、吾人の最も明瞭に看取する所である。即ち戰時膨脹に膨脹を重ねて、千九百十九年度に於て、二十九億七千二百萬磅と云ふ空前の金額に達した經費は翌二十年を以つて、十六億四千二百萬磅に削減されたのを手始めとして、其後相次いで削減を受け、一方に千九百二十年二百九十五を數へた物價指數（千九百十三年の指數を百とす）は千九百二十一年を以って百八十二に低落し、爾來續いて同一の步調を辿つたのである。英國の經濟社會が此收縮時代に際會して、半恐慌の狀態と爲り、不景氣の勢の深刻と爲つたのも、亦敢て怪むに足らない。然も當時尙ほ磅貨の價値の低落して居つたことは、聊か英國の經濟社會を弛緩せしめる所以であつたが、其後政府は此點に關して確乎たる方針を定め、倫敦の國際金融中心點たる地位を急速に恢復することを必要とする見地から、徐々に磅貨の價値を引上げ、千九百二十五年末を以つて、金輸解禁を爲すや、其前から物價低落の勢を甚だしくして、再度の不景氣を招くに至つた。彼の千九百二十六年中の世界的重大事件として、世間を驚かした英國の炭坑爭議の如きも、磅貨の價値騰貴に依つて、對內的に炭價の低落を來し、對外的に石炭輸出を阻害されるに至つたことを以つて、一の原因であるとする說の行はれる所以である。即ち經濟社會の整理と不景氣の襲來若しくは其繼續とは相離る可からざる關係を有し、然も後者を恐れて、之を回避するに於ては、前者は到底之を實現するを得ない。英國の經濟社會が戰後多くの時を通じて、不景氣の狀態に彷徨したのも、誠に事情の已むを得ざるに出でたのである。佛蘭西伊太利の如きに至つては、通貨の整理尙ほ行はれず、其價値は低落して居るのであるが、戰時と違つて、大なる程度の消費の行はれることは、其跡を絕つた結果、通貨價値低落して、一方に經濟社會の不景氣を免かれざる他の一方に、政府が收縮政策を通貨に、財政に試みやうとすることは、常に經濟社會に對する脅威と爲り、政府をして正常の政策を施すことに躊躇せしめるのである。

彼の北米合衆國の如き、歐洲戰爭に臨んで、異常の繁榮を告げたのは、國內に產出された物資其ものが高き價格を以つて、大なる數量の下に、外國に賣却された結果であつて、決して信用や、通貨に於ける膨脹の齎したものではない、信用なり、通貨なりに膨脹を來したものありとしても、其れは外國から吸收された正貨を基礎としたのであつて、決して架空的に築かれたものでない。此點に重大なる相違の存する以上は、歐洲諸國の沈衰期を傍らに眺めて、北米合衆國は繁榮期の存續を期待し得るやに考へられたが、國際經濟上の關係の密接なる今日に於ては、此事も亦實現されず、第一、合衆國の物資に對する歐洲諸國の需要は戰時に比較して、戰後に於て減退して、已まざること（千九百十九年の對歐輸出四十八億六千三百萬弗に對して、千九百二十四年に於て、二十六億六千萬弗に減少して居る）第二、輸出の減少に應じて、戰時合衆國に於て、擴張された諸種の製造工業は勢其規模を縮少し、又事業經營の方法に緊縮を加へざる可からざる狀況に迫られて居ること、第三、合衆國の戰時聯合諸國に行つた貸付金の內、今日尙ほ元利金支拂未濟の儘に爲つて居るもの〻少なからざることの諸點は戰後に於ける合衆國經濟社會の發展する勢に妨害を加へる所以と爲つて居

るのである。合衆國が歐洲戰爭に伴ふ變動を利用して、從來の債務國から、債權國に躍進した事實から云へば、輸出超過國たらずして、輸入超過國たるやに考へられる、少なくも從來維持するを得た輸出超過額に減少を來すことを以つて、當然とするやに考へられるかも知れないが、合衆國現在の經濟的狀勢から判斷すれば、此國は資本輸出國としてよりも、物資輸出國として、遙に大なる意義を有するのであつて、遠き將來は知らず、今後幾年かは債權國であつて、同時に輸出超過國たる地位を兼ね備へて、以つて經濟的繁榮の獲得に資するものと認めなければならず、隨つて輸出超過の數量如何と云ふことは、同國繁榮のバロメーターと爲る。一時三十億弗を超へた出超額が近年十億弗以下と爲り、千九百二十六年上半期中の或る時期に於ては、輸入超過にすら接したと云ふからには、其事が合衆國に於ける經濟的氣勢を壓迫することは、論を俟たないのである。

支那や、印度も假令ひ程度に於て、大小の相違はあるとしても、歐洲戰時輸出貿易の增進に依つて、有利なる地位に立つたが、固より一時的事相であつて、戰後自ら終熄の已むを得ざるに至つたし、加ふるに近年銀價の相次いで下落することは、兩國民の購買的能力を減ずるもの甚だしく、更に支那に至つては、諸外國から借欵の成立せざる結果、內國經濟社會の不景氣を極めるもの、亦已むを得ざる所と稱されるのである。

日本經濟の沈衰する原因

右は極めて概括的に國際經濟の狀況を述べたものに過ぎないが、斯る狀況裡に立つて、我國が經濟を營むものとすれば、諸外國との關係から云つても、我國が永く從來の沈衰期を脫するを得ざる道理が理解されるであらう。殊に對內的にも此沈衰期を永からしめる事情が存するのである。

國民經濟が時に繁榮を告げ、時に沈衰の狀と爲ることは、有機體の行動として、當然の事であつて、繁榮必ずしも喜ぶに値せず、沈衰亦敢て憂ふるに足らず、要は經濟政策をして正しき道に就かしめて、繁榮期に於ける利益を確實に收めると共に、沈衰期に於ける損失を出來得るだけ、緩和することを要する。而して其利益と云ひ、損失と云ふのは、國民生活を對照としたものであつて、繁榮期に於て、如何にして國民生活を豐富ならしめるか、沈衰期に於て、如何にして國民生活に從前の趣きを保たしめる可きかは、經濟政策の要訣であつて、此一事が閑却されたならば、一國には經濟上の意義から見て、無政治であると云ふを憚らないのである。我國の如き歐洲戰爭當時から多くの場合を通じて、此經濟的無政治が行はれて居つたのであつて、第一、戰時の好景氣時代に適當の緊縮を加へるを怠り、投機熱をして其勃興するに任さしめたことの如き、第二、戰後の不景氣時代に臨んでも、更に財政の規模を縮少せず、人心を緊張せしめるを怠つたことの如き、內國經濟の見地から云つて、我國今日の難局を招致するに至つた所以であると解される。

斯の如く觀察すると、我國經濟社會の沈衰は對外的と對內的と二様の方面に分たれる。對內的のものは即ち（一）國家財政の整理と（二）民間經濟の緊張とを必要とし、對外的のものは諸外國の經濟的狀勢の漸次改善されることを急務とする。今、前者に就て考へるに、國家の財政は遂に整理されるに至らない。經費は一時或る些細なる程度に於て、緊縮されたもの丶、其後次第に舊態に復し、政府亦財政上に積極政策を加味し、其國民經濟に對する壓迫を大ならしめんとして已まない。故に對內的に云へば、我國が何時に爲つて、經濟社會に復興の曙光を仰ぎ得るか、想像すら下

すを得ないのである。

一方に對外的に考へれば、歐洲諸國の經濟社會が復興し、其斯く復興したことが合衆國に有利なる影響を及ぼし、歐米諸國を通じて、恢復の機運に向ひ、銀の價値も或は生産の調節に依り、或は需要の增加に依つて、次第に騰貴して、印度や、支那の經濟社會を立直るに至らしめるに於ては、其時を以つて、我國は始めて經濟上、有利なる環境に惠まれるものと云へる。蓋し最近數年間我國が經濟上最も大なる苦痛とする所は一方に貿易が逆調と爲つて、大なる輸入超過を生ずる他の一方に、之を決濟するに足りる貿易外の收入の存在せざる事實に外ならない。即ち如何にして輸入を抑制し、又輸出を奬勵して、貿易の均衡を維持するか、又如何にして貿易外の收入を增加するかと云ふことが當面の問題に上れる所以である。然も對外的關係の推移に依つて、右の如き惠まれた環境に接したとすれば、生絲絹織物は合衆國に向つて、綿絲綿布は支那印度に向つて、販路を擴張し、求めずして輸出貿易の增進を期するを得るし、世界經濟の恢復に據る物資移動の增加は我國の海運業者をして自ら多額の物資を運搬して、海運業の利益を增進せしめることを誤まらない。斯る時に至つて、貿易は從來の如き逆調を免かれるし、多少の逆調の殘るものありとしても、貿易外の收入に依つて、之を決濟するを得て、我國の對外支拂は始めて安全と爲り、內國の金融は毫も對外支拂の壓迫を受けずして安定するを得るであらう。而して斯く對外收支が安全なる狀態と爲れば、爲替相場の如きは、求めずして恢復し、年來の問題たる金輸出解禁も何等の障害なく、直に行はれるを得るであらうし、從來爲替相場の恢復と共に、低落した內國の物價は軈て新なる生産費の標準と爲り、金融の安定するに隨つて、金利步合に多少の低落を告げ、金融の緩和を見るに至つたならば、其處に始めて我國經濟社會をして聊か年來の苦痛を脫せしめ得ることゝ爲るのである。然も此事を期するには、英米兩國の緊縮政策に於て、行はれた如く、財政の規模を縮小し、財政の國民生活なり、金融なりに加へる壓迫を緩和することを必要とする。此事にして閑却されたならば、折角恢復の道程に就いた經濟社會も恢復の機運を促進されるを得ず、何時までも今日の如き狀態に彷徨するの外なきに至るであらう。

我國貿易の根本的調節

更に一步を進めて、吾人の考へなければならないことは、斯る經濟的循環期の法則に依つて、晩かれ早かれ、我國の經濟社會に一道の光明の認められるに至ることは、事實であるとしても、其れが果して經濟上の見地から云つて、眞に興國的機運を導くに足るものであるかどうかの一事である。經濟生活上、吾人の望む所は一國に定住する國民が各自最善の程度に於て、勤勞を致し、之に相當する報酬を獲得し、時勢の進步の要求するだけの生活を營み、精神的に物質的に滿足して、遺漏するものなきの一事である。我國に於て第一、國民の生活程度が全體から云つて、頗る低く、然も此低き生活程度の下に、安んじて人口の增殖すること、第二斯く增殖した人口は富源の豐富なる外國に向つて、其捌け口を求めるに難く、國內の狹隘なる天地に蹰躇する爲め、或は求職難に、或は生活難に苦しめられざるを得ざること、第三農業其他原始的產業の供給する物資には我國々土の性質上、自ら限りあつて、國民の多數を給養するに足らざる一方に、是等の產業に代つて、國民を給養するものに充分なるを得ざることの如き、我國民經濟に於ける缺陷の最も大なるものであつて、是等の缺陷の存する現狀に於て、國民經濟の振興を謀つて、幾何の成果を收める

を得るであらうかと云ふ疑問は何人の腦裡にも生ずるであらう。私は曩に我國の經濟狀態を安全ならしめるには、輸出入貿易の均衡を期するか、貿易外の收入を增加して、貿易の逆勢に當るか、孰れか一の方法に出でなければならないと云ふことを論じたが、此事は我國の現狀に於て、幾何の可能性を有するであらうか。

若しも或る國が貿易上有利なる地位に立たうとするには第一其國は諸外國に向つて、諸國民の需要の恒久であり、確實であり、又對手國にて代用品の產出の容易ならざる必要品を輸出すること、第二之を輸出する對手國の數は相當に多く、一の國に變動があつて、需要が減退しても、他に幾多の國の不變の需要を致すものゝあること、第三自國が諸外國から輸入する物資は必要品に屬せず、寧ろ奢侈品であり、有用品であり、時に應じて、其輸入額に節減を加へても、國民生活上に大なる支障を生ぜざることを必要とする。一國の貿易に是等の條件が備はつて居れば、其國は好む所に依つて、輸出超過國たることを難しとせざる次第であるが、我國現下の狀態は總て是等の條件に遠ざかれる憾なきを得ない。即ち我國が重要輸出品とする所のものは、生絲、絹織物、綿絲、綿布等であつて、前の二者を北米合衆國に、後の二者を支那印度に輸出する次第であるが、生絲並に絹織物の奢侈品であり、奢侈品製造の原料品であることは、爭ふ可からざる事實であつて、此特色あればこそ、合衆國の市場に於て、價格に亂高下あり、輸出數量に增減あることを免かれない。支那や印度を販路とする綿絲綿布は需要者に取つて、必要品たることを失はないが、兩國共に永く日本の需要を受けて、安んずるものではなく、印度の如き將來外國產の綿布を排斥して、其國產を盛ならしめやうとし、支那亦綿絲紡績殊に太絲紡績の工業として、最も簡易なるものであることに着目し、潤澤低廉なる勞働力を利用して、斯業を國內に興起することを期して已まない。斯くて此目的を遂する爲めに、支那人の講ずる政策は其合法なるものとしては、關稅自主權の下に、外國の物資に高率なる輸入稅を賦課する計畫であり、更に其違法なるものとしては、支那人勞働者を使嗾して、英國人の管理する紡績工場に於て、勞働爭議を惹發せしめることであり、論者は關係諸國の意圖一致せずして、今尙ほ實現するに至らないが、後者は上海其他に於て、常に行はれ、英國其他の資本家をして困惑せしめるもの少なしとしない。斯の如くして支那が工業發達の點に於て、幾何の効果を收めるを得るかは、一の疑問であつて、其解決は將來に之を待たなければならないが、我國重要輸出品に對して、外國に代用品たり、競爭品たるものゝ生產の行はれるのは、我國輸出貿易に對する大なる脅威とせざるを得ない。

一方に我國は輸入貿易に於て制限を加へる餘地があるであらうか。輸入の制限とか、減縮とか云ふことは、幾多の機會に於て、計畫された所であつたが、其効果の現はれたものに至つては、殆ど之を知るを得ない。何故に輸入が制限されないかと云へば、輸入される物資が主として原料品であり、原料用製造品であり、又時に食料品であるからであつて、是等の物資に對して、有効なる輸入の制限が行はれたならば、忽にして我國の製造工業は從來の規模に於て行はれざるに至るし、國民生活も亦以前と同樣の程度に於て、豐滿なる食料の供給を收め難きに至る。輸入の制限を敢てして、大なる支障を生ぜざるものありとすれば、其れは既製品の一部分たる奢侈品の輸入に關するのであるが、其數量は固より小なるものであつて、此種の輸入が皆無を爲つ

たとした所で、貿易の均衡を維持するに就て、大に資するものありとするを得ないのである。

即ち我國は一方に奢侈品を輸出して、他方に必要品を輸入すると云ふ點に於て、貿易上第一の缺陥を示すのであり、更に必要品を輸出する場合に、其れに對する競爭品が外國市場に於て、續々産出される勢に居ることに於て、貿易上第二の缺陥を生ずるのであり、續いて外國から多量の原料品が輸入されながら、之に對するだけの既製品の輸出行はれず、既製品が空しく內地市場に堆積する場合のあることに於て、貿易上第三の缺陥を現はすのである。貿易關係に於て、一國が國際經濟の局面に對して、優秀なる地位を占めるには、自國に於て、外國市場に依つて必需される工藝品の大量生産を行つて、之を輸出に供し、品質に於て、生産費に於て、遽に外國の競爭を許さざることを期しなければならない。此要訣に缺けて居る我國が貿易上に於て、歐洲戰時に於けるが如き稀有の場合を除き、常に入超國であり、所謂先天的入超國であるのも、亦已むを得ざる所と解される。如何にして重要物資殊に外國市場に於て必需される物資をして大量生産の下に就かしめるか、如何にして是等物資の海外に於ける販路を擴張し、世界到る所を市場として開拓するか、又如何にして我國の産出する物資の品質を改善して、他の競爭を許さしめざるかと云ふことは、我國貿易に於ける根本問題であつて、此事の解決されざる限り、貿易上の方面から、我國の經濟社會をして安からしめる道はないのである。

國際收支の安定策

假に輸入超過は幾何か存在して居つても、之を決濟して、餘りある貿易外の收入の吸收されるものゝある以上は、一國の經濟狀態を安全ならしめるに、必ずしも支障を惹起さない。吾國民經濟成立して、年を經ることの久しきに及べば、多くの國は入超國と爲るの常であり、唯問題は斯く生じた入超額を決濟するに足る貿易外の收入があるか、貿易外收入を以つて、入超額を決濟して、尙ほ餘るものゝ幾何と爲るかと云ふ一事に繫がるのである。私は從來多くの機會に於て、我國貿易外收入を增加するの必要、其增加を企てずして、之を凌駕する輸入超過の行はれるの危險に就て、幾度びか國民に警告し、我國經濟社會の危機の此所に伏在するものとする旨を論じたことがある。歐洲戰時數年間、我國の貿易外收入は異常の金額に膨脹し、爲めに我國の經濟社會を順境に導くを得たのであるが、斯の如きは固より偶然に生じた所であつて、何等根柢とす可きものなく、爾後經濟社會の平靜に復し、續いて不振と爲るに隨つて、貿易外收入の萎縮するもの甚だしきやに考へられる。現に大正十五年に於ける貿易外收支豫想に徵しても、受取勘定四億六千萬圓に對して、支拂勘定は三億四千萬圓であつて、受取超過は一億二千萬圓に過ぎない。唯同年中公私團體並に民間會社に依つて、外國に於て發行された公債社債の收入は一億一千萬圓に上り、之を右の受取超過に加算した二億三千萬圓を以つて、三億數千萬乃至四億圓を數ふる入超額に當らざる可からざることゝ爲る。斯くては如何に我國の國際經濟に於ける地位は安全であるとか、金融は近き將來に於て、緩漫と爲り、金利步合亦低廉に爲るとか、爲替相場は恢復して、近く確實に金輸解禁が行はれるとか云ふことが政府に依つて、聲言された所で、其聲言は毫も實際に副はず、我國經濟社會の窮地に陷るもの、亦偶然ではないのである。吾斯の如きは、事の小なる問題である。本年の貿易外收支に於て、純收入額一億二千萬圓に、更に公私團體の外資輸入高一億一千

萬圓を加へて、二億三千萬圓の貿易外收入を收め、之を以つて輸入超過——其れも全部でなく、一部分——を決濟すると云ふ狀況が續き、後年度に於て、更に借入れた資金の利子を支拂ひ、元金を償還する義務を負はされたならば、結局我國は入超國たり、債務國たる兩様の負擔に壓迫されざるを得ない。此負擔を輕くする方法としては、貿易外收入の增加を謀るの外に然る可き道はなく、其之を謀るには、海運業の收入を獲得することゝ、對外放資、對外經營事業を盛にして、利子利潤を回收することを以つて、捷徑とするのである。然も我國の海運業は今日世界的不振の影響を受けて、一頓挫を來して居る上に、將來世界の競爭者に對抗して、活躍する用意の存するかどうかに就て、疑はしきものがあり、更に對外放資や、對外企業に至つては、國民の斯る方面に危險を冒す精神の旺盛なることゝ、內國に於ける金利歩合の低廉であることゝを必要とするのであるが、今日に於ては、兩者の條件共に缺けて居るの嘆なきを得ない。

斯の如く諸種の事情を綜合して考へると、我國經濟社會の將來に何の光明の認められるを得るとするであらうか。外國經濟社會の復興に依つて、我國が間接に、又迂回的に利益を收めるを得るとすれば、其れは勿怪の幸である、諸外國の復興は同時に我國に對する經濟的競爭を劇烈ならしめる所以とも爲り、初め利益とする所、必ずしも終局まで利益とするを得ないかも知れない、斯くて我國としては對內的に自國の經濟を復興する道に就て、三思する所なければならない。

經濟的國策の樹立

若しも我國にして一個の農業國を以つて、安んずるか、又は農業國に傾くの方針を以つて、終始したならば、此狹隘なる國土に數千萬の人口を今日の生活程度に於て、給養することは不可能であるとしても、一方に貿易が不均衡であるとか、國際收支が逆勢であるとか、斯くて金融爲替に不利なる影響を及ぼずとか云ふが如き、デリケートの問題に接觸せざるを得たであらう。然るに我國が明治初年來經濟上に施した政策は斯の如きものではなかつた。十八世紀末から、十九世紀初めにかけて、彼の西歐諸國に行はれた產業革命と比較しては、到底同日を以つて、語るを得ないとしても、更に所明治初年から二十餘年の歲月を通じて、我國は孜々として產業組織を革新し、從來地方的であつたものを國民的とし、國民的と爲つたものを更に世界的とすることに就て、努力を費したのであつて、大規模の產業が起つたり、勞働者の集中する都市が發生したり、大資本の集中が實現したりしたのは、何れも此努力の結果であると云へる。然らば工業國としての、殊に輸出工業國としての基礎は頗る鞏固であつて、世界經濟の局面に向つて、發展するを得るかと云へば、必ずしも然るを得ない。歐洲戰時數年を通じて、交戰諸國が經濟的に疲弊しつゝあつた間こそ、我國の物資は盛に諸外國に販路を求め、是等の物資を製造する諸種の事業亦繁昌し、海運業の如きは、啻に我國產物を運搬するのみに止まらず、諸外國の爲めに、運送の用を果し、貿易外收入の大なる、遂に英佛露支諸國の爲めに、資金融通の任に當る次第と爲つた。斯る有利なる狀態にして、引續いたならば、或は我國をして經濟上の意味に於て、所謂世界的強國の一たらしめるを得るであらうと云ふことは、當時世人の一部に依つて、懷抱された所であつたが、其れも束の間であつて、今日に於ける我國の經濟的地位が固より一個の農業國に非ざると共に、工業國でもなく、混沌たる狀態に彷徨しつゝ居るのである。

我國が農業國を以つて、居る能はず、又居

る可からざることは、（一）我國の地勢に於て、（二）近年耕作の割合に、收穫物の增加せざる點に於て、（三）農業地方に於ける農民の生活程度劣等であり、他の方面に職業を求める青年男女の少なからざること、（四）啻に青年男女に止まらず、農民離村の著しき現象たることの諸事相に依つて、明に之を知るを得るのである。故に我國が經濟的國策の一として、工業の興起を計畫し、此方面に官民の力を集中しつゝあるは、私の認めて可なりとする所であるが、此國策が如何なる程度まで、國民に依つて理解され、又如何なる程度の眞摯を以つて、實行の道程に上つて居るであらうか。工業を盛大ならしめるには、原料品供給の饒多確實、食料品の廉價なる供給、勞働者能率の上進、低廉なる利子を以つてずる資本の利用と云ふが如き、諸種の條件を必要とする。而して是等の諸條件を具體化するだけの用意や、工風が果して我國に於て講ぜられて居るであらうか。我國の一部には、極めて偏狹なる意見の下に、食料品原料品の國內自給を必要とし、此見地から內國農業の命脈を維持しやうとし、之を維持する方法として、米麥は勿論、農家の副産物たる鷄卵の類にまで、重率の輸入税を賦課する論者があり、時流に投じて、着々實行されて居る。斯くて我國に於ける原料品食料品の價格にして騰貴したならば、爲めに工業の發達に妨碍を加へるのは當然の數であり、勞働者に就ては、工場法の規定、漸く嚴重と爲つて、勞働時間短縮されるに至つたとしても、一方に勞働者教育を完備して、彼等の能率を大ならしめる工風に就ては、頗る缺けて居るものがあり、資本の利用に至つては、前述の如き國際貸借上の關係から、內地の金融の壓迫されるのは勿論、軍事費の尨大である一方に、積極政策に累されて頗る規模の廣大なる財政の維持されて居ることは、常に民間市場に對する資本の供給を乏しからしめて已まないのである。然らば我國は今國家全體の利害から云ひ、又一般の狀勢に顧みて、輸出工業國として、國際經濟上に於ける地歩を築かなければならない地位に居ると云ふことが一部の國民に依つて、主張されて居るとしても、部分的言論に止まり、之を實現するに就て、妨碍もあれば抵抗もあり、遂に我國をして不可解裡に困迷せしめるに終る。一時の經濟不景氣に伴ふ變動は必ずしも深く憂ふるに足らない。我國をして今、如何なる所に赴かしめるか、何時までも國策の徹底せず、方針の決定せず、空しく國民をして岐路に立たしめることこそ、我國に取つて、大なる悩みであるとせざるを得ない。此問題に對して、如何なる具體的解決を要するかは、更に稿を更めて、論述することゝして、茲に筆を擱く。

官學に於ける特殊教室の虐待

清野謙次

一

人類學と考古學とは人類の體質と人類の文化との發達を研究の對象とする人類自然史である。世界戰爭の終結後此兩學科は不思議にも世人の注目を索く樣になつた。之れは社會主義の勃興の結果原始時代の社會狀態を最高文明の設備の下に創設したいと云ふ希望の下に研究をする人もある爲めらしいし、又戰爭で荒んだ心を古代文化の回顧によつて幾分たりとも癒やそうとする傾向もあるらしいし、又文明の破壞後反動的に文化の勃興し來つた由來を觀じて慰安を求めやうとする慾求もあるらしい。

其動機の何であるかを問はず、兎に角世界全般に亘つて人類學と考古學との書籍は續々刊行せられるし、人類學考古學の研究は月々隆盛に赴むきつつある。我邦でも實利的で無いと云ふ淺薄な理由の下に閑却せられつつあつた斯學を研究し度いと云ふ學生が漸次多くなつて來た。これ誠に人類學と考古學との發達に向つては結構な趨勢ではあるが、此學生の希望を達せしむるに第一に必要なのは修學の設備である。第二に必要なのは成業した專門學者に如何にして生活の安定を得せしめるかと云ふ問題である。

茲には第一の修學設備に就て私見を記し、第二の人類學者と考古學者の生活安定問題は之を他日の論題に附する。

二

我邦に於て專門學者になるにはやはり正式に大學を卒業するのが良い樣である。勿論大學を卒業せずとも優秀な專門學者になり得た人物は少なく無い。然し余が永年本職たる醫學部に居つて多數の研究生を指導して其研究の仕振りを觀察して居つた經驗から云ふと、專門學校卒業の優秀なる者は大學卒業の平凡なる者よりも確かに創見に富んで、新事實を捕捉する、然し之れに對する論斷はややもすれば一方に偏して獨斷に陷り易い。それであるから事實から學說を誘導するには常に監視を必要とする。之に反して大學卒業生中の平凡なる者は着意と創見とに於て到底前者に及ば無いが、結末に於て略正鵠と思はれる論點に到著する。之れは勿論例外もあるが、屢余の今日迄遭遇し來つた事實である。

茲に於て平凡にして無用なるが如く見へる所の高等學校三年間の修業は高等な學術を修業する者に取つては學術的常識を與ふるに必要なるものであつて、事實から結論を歸納する際周到に諸事實を參照して、類例を推知するのには一見無關係なる如き觀ある高等學校の諸學科を修得するのが利益となる事と思はしめる。

其れで人類學者考古學の專門家も將來は成る可く大學を卒業する樣に仕度いものである從がつて專門學者を造る大學の設備は出來るだけ完全を期さなければならぬ無い。

さればとて余は今日實行不可能なる空想を徒らに述べやうとする閑日月を有せない、例へば大學の附屬陳列室として大英博物館や、ケンシントン博物館の如き雄大なるものがあ

れば、之れに越した事は無いが、目下の我國情に於て到底之れが實現は不可能である。今日述べんとする所は最小限度の實行可能性ある方策で無ければならぬ。

三

余は希望を述べる前に目下の現狀に就きて一寸觀察し度い。我邦に於て綜合大學は官立のもの丈けで五個ある（朝鮮及臺灣を除く）其中で人類學教室は東京大學に一個ある丈けであつて、考古學教室は京都大學に一個ある丈けで講座數は、各一個宛である。勿論東京大學にも考古學教室は準備せられつつあるが、未だ正式講座の設けも無くて、設立の中途にある。

東京帝大の人類學教室には初代の教室主任坪井博士以來歴代の教室員諸氏が乏しい研究費に屈せずに奮闘せられたお蔭げで驚くほど多數の研究材料が集まつて居る。集める時機も早くて集め易かつた爲でもあらうが日本古代の遺物には稀世の珍品も少なく無い。然るに建物は教室と云はんよりは少さく且粗末で殆んど納屋に等しい。可惜稀世の珍品も展觀する場所が無く、之れを材料として研究を續行することが困難なる狀態に在る。研究に必要なる器械器具の如きも甚だ不足して居る。

京都帝國大學の考古學教室も濱田博士を初めとして教室員の大努力によつてよくも短日月中に集められたものと感心するほど多數の研究材料が整然として整理せられて居る。創立以來日尚淺き爲に日本發見の遺物には東大人類學教室ほど多數の材料は集まつて居らぬが、支那遺物の蒐集は此教室が卓絶して居る。然し教室は狹隘であつて後述する如き余の希望の研究を行ひ得る設備は到底不可能だと云ふ外は無い。其上此兩教室の經常費は茲に金額を明記するのをさけるが、ほんの僅かなものである。

余は今日の帝大の醫學部やら工學部諸教室の設備は未だ非常に不完全で教室費も甚だ少ないものであると思ふ。然しながら一度歩を轉じて醫學部諸教室から上記兩教室に入る時に兩教室の狹隘なると設備の不完全なるに悵然として嘆息せざるを得無い。

學問の領域が異なる爲めに學問に輕重を附す可き道理は無い。眞理を探求する者の前には學問は等しく重大である、學科によりて輕重を附す可き道理はない。總ての學科が同一の歩調を以て相進歩し、各學科の間に聯絡が保たれる爲めに綜合大學設置の必要があるし又之れが行はれ無い以上は一國の學問は片輪である。人類學教室と考古學教室とは正に醫學部工學部等の諸教室と同一の設備と同一の經常費を要求するの權利がある。

從て日本の五綜合大學には各一個の人類學室と各一個の考古學教室とが置かれねばならぬ。そして其研究設備は不滿足ながら目下の醫學部各教室と略同等にせられねばならぬ。此際學生數の多寡は問題にならぬ。

四

目下我邦に於ては人類學は理學部に屬して居る。然し體質の研究を主眼とした時には人類學教室を醫學部に置いた方が研究材料の蒐集上にも便利である。考古學教室は文學部に屬して居るが、研究方法に於て文書を主とせずして實物に立脚して、立論する點から云ふと理學に近い。

其れのみで無い、兩學科は異なつた研究目的を有して居るが其研究材料の一部分は共通であつて、研究材料の整理には兩教室共に陳列室又は博物館を必要とする、そして此博物館は同時に大學に取ては好個の裝飾品である。

之れ故に人類學教室と考古學教室とは合し

て一個の建物の中に合宿し、且文學部醫學部及理學部より分離して總長直屬のものとなり特殊研究所の資格を得るのを便利とする。醫學部の病院や、傳染病研究所や、理工學部の特別化學研究所の如きものが其類に近い。

　人類學教室には少くとも三講座を必要とする。人類體質を研究する一講座と、土俗學一講座及人類過去文化殊に先史考古學の一講座は無くてかなわぬものである。從て教授三名、助教授三名、助手六名、講師若干名が之れに必要となる。建物の面積は醫學部基礎科の割合から考へると延坪千八百坪、此建築費三十五萬圓之れに設立當座の器械、器具圖書購入費二十萬圓を要する。經常費は一年一萬二千圓宛である（此經常費中には俸給、燃料費、水道及電氣使用料等を含ま無い）。

　此際考古學教室は、歷史考古學の研究に重きを置く可きである。そして此教室に講座を幾個設置す可きやは、考究す可き問題であるが、少くとも極東（日本、朝鮮及支那）の考古學一講座と西洋の考古學（埃及　メソポタミア印度、希臘、羅馬）一講座とを以て當分我慢する外あるまい。然らば教授二名、助教授二名、助手四名、講師若干名を之れに必要とする。建築物は千二百坪、此建築費二十五万圓之れに設立當初の器械器具圖書標本等の購入費十五万圓を要し、經常費は一年九千圓である。

　從て人類學教室と考古學教室とが合して一體となる時には五講座で臨時費としてはざつと百万圓即ち三千坪の建築費六十萬圓と三十五萬圓の設備費とを要し、且毎年二萬一千圓宛の經常費を必要とする。そして役員としては教授五名、助教授五名、助手十名、講師若干名で、小使或は雇員は七八名であらう。若し之れに大學博物館として特殊の建築物設立費及之れに對する人件費を要求するならば更らに幾分の增額を必要とする。

　以上の金額は必要と思はれる設備を初づ考て後に割出したので無い。現在帝大醫學部の諸教室の費用と同一の割合である所の最小限度の要求をした丈けであつて、之れで決して完全な設備が出來るとは思はれ無いが、今日に於て實行可能の費用である。其れでも今日の我邦に於ける人類學教室及考古學教室よりも非常に大きなものとなる事が明かである。

五

　或時余は東大理學部と緣故の深い東大農學部の某教授と偶然汽車で同行した事がある。余が我人類學教室の不遇を嘆じたのに對して同教授は人類學と云ふ學科は餘り深い知識を要せざる所の風俗調べ位のものであつて獨立學科として設置するには低級の學科であるらしい口吻を漏らされて居た。此考へはどうかすると我邦理學部及其他の學部教授の多數が抱いて居る意見であるかも知れ無い。

　一般大衆の斯學に對する解釋は兎に角、學內教授の多數が斯かる意見であつては、學內の輿論を動かして、前揭の規模の人類學及考古學教室を大學の希望として政府に主張する事は不可能である。

　醫科にあれ工科にあれ、いやしくも專門學雜誌と名の付く程のものを閉いて閱讀しても該專門學の素養のない素人には興味も無く、且了解出來無い論文が大部分を占めて居る。つまり今日の專門學科は專門家が特に素人に分る樣にと特別に調子を下して書か無い限り其論文は素人に分ら無いほど進步して居るのである。

　所が我邦の人類學と考古學雜誌を讀んで見ると、其論文の大多數は誰れにでも分るし、特別に高等なる豫備素養あるを要し無い。之れは他の專門學科に稀れなる事である。之れでは前記某教授の如く考へる人が多いのも滿更ら無理で無い。

此際誤解を避ける爲めに云つて置くが、余は容易な事を難解に書けと云ふので無い。むづかしい事を書けば自然にむづかしくなると云ふ丈けの事である。我邦で發表せられて居る斯學の論文には故意に難解に書かない限り素人にも分り易い報告が多いのは確かである。然し之れは人類學と考古學との研究が容易である爲めで無い、專門學者が少なくて進歩した方法の使用せられた研究報告の發表が乏しい爲である。若し我邦に於ても專門學者の學識あるものを多數教育して、各方面の研究に從事させたならば兩學科の面目を全然一變して、他學科に劣らざる報告が現はれるに相違無い。

例へば今日理化學は日進月歩の勢を以て進歩しつつある。此高等智識の全部が悉く人類學と考古學の研究に應用せらる可きに拘らず、新知識の應用せられた論文を見るのは稀れである。土器や古畫の色彩の研究には光學の知識の全部を應用して差し支へ無いし、繪具としては有機無機の色素化學やら、色素のX放射線による鑑別の如き又生理學上、心理學上に於ける光の認識につきての智識の應用等爲す可き事が非常に多い。古紙や古布に對して化學分析やら、顯微鏡的の形態學的檢査やら色色試みて差し支へ無い筈である。

六

若し今日の如く人類學と考古學の研究の大部分が遺物遺跡に對する單純なる叙述に留まるならば、余が主張するが如き大仕掛けの教室は建設する必要無い。極く特殊な研究を除くの外、理化學的研究の一通りの事は教室内で研究し得る樣にする爲めに、大なる建物と大なる設備を要するのである。化學分析室も要るし、X放射線室も入用だし、土器の研究には窯室も入用だし、顯微鏡及其れに必要なる檢査裝置やら、又人類學教室には骨骼の曝場及解剖室も入用である。圖書室及其閲覽室、食堂、役員室、製圖室、寫眞室、石膏細工及標本製作室、光學及電機器械室、天秤室等數へ來れば上記の建築物の主要部は研究室であつて陳列室としては上記建物の坪數では廣大なる面積を望め無い事が明らかである。

病理解剖學者としての余の立場から我國に於ける人類學及考古學の現狀を觀察すると、ウキルヒヨウ出でて病理解剖學を唱導して、病理學者は死體解剖丈けを以て我事了れりと爲せる時代を觀るの感がある、其後コーンハイム出でて動物に人工的に疾病を生ぜしめて實驗病理學を確立し、死體解剖の研究の足らざる所を生活動物を以て補足した。

上記の研究設備が完成し、理化學の最高智識が遺物遺跡の研究に應用せられて、古物の觀察が理化學的實驗に訴へらるるに到らは病理解剖學に實驗病理學が追加せられた時期に相當する。此意味に於て古物研究者は僞物を實驗的に製造する上にも注意を向ける必要がある。

七

若し上記設備の兩教室を設置し得無ないならば最小限度の讓歩として余は五個の綜合大學に各一個宛の人類學教室と各一個宛の考古學教室を設置し各教室に一名宛の教授及助教授を置く事を考へて見度い。此場合には日本の官立大學には合計人類學の教授五名、助教授五名と考古學の教授五名、助教授五名を得る事となる。一講座教室では建物も狹く、從つて設備も充分に出來ないから、余の希望する如き研究が行ひ兼ねる。從つて止むを得ざる結果として各教室は各特意な研究方面を擔當するのである。例へば東北大學人類學教室は主として土俗學を考究し、東京大學人類學教室は體質人類學を主として研究し、京都大

學の同教出は日本先史考古學方面、福岡大學の同教室は滿鮮先史考古學と云ふ風に研究上の區分を略決めれば日本全體としては幾分完全に近いものとなる。

然しながら此方法は最後に止むを得ざる場合にのみ行ふ可き拙策である。五箇所に五個の不全完な教室があるよりは、二箇所に二個の比較的完全な教室のある方が遙かに周到なる研究が遂げられる。教室數を徒らに多くするよりも少數なる比較的完全なる教室を造つた方が宜しい。そして比較的完全なる教室として私出し得る最小限は余が上述した建物と講座數とを有するものである。

勞働者保護法規と健康保險法の欺瞞

布施辰治

回

爭議、又爭議の保險爭議が全國所在の工場及び鑛山に頻發して、今や、我國勞働運動の全線に大ショックを與へた。健康保險法を主題として論議すべき、無產階級解放運動途上の問題は甚だ多い。

回

健康保險法愈々の實施は、大正十五年六月三十日勅令第二百四十三號健康保險法施行令と同年七月一日內務省令第三十六號健康保險法施行規則の發布せらるゝのを待つた、大正十五年三月二十七日法律第三十四號で、同法附則に『本法施行の期日は勅令を以て之を定む』とあつたのを『本法は大正十五年七月一日より之を施行す、但し保險給付及び費用の負擔に關する規定は大正十六年一月一日より之を施行す』と改正せられた、昨年七月一日からであり、然かも、同法本來の使命を任ずる保險給付及費用負擔に關する規定の實施は、本年一月一日からであるが、其の成法として公布せられたのは、大正十一年四月二十七日法律第七十號であるから、相當に古い健康保險法だと云ふて良い。

更らに、同法成立の沿革を概觀すると、日露戰爭後世界文明國の一として、遽かに擧がつた極東日本の面目を飾る申譯の爲に制定公布した。明治四十四年三月二十八日法律第四十六號工場法の實施を、大正六年迄延期せしめた貪婪不逞な資本家の意を迎へて、工場法の實施後間もなく之れに代はる勞働法規として、大正八年の秋、時の農商務省は、今度の健康保險法即ち勞働保險法の立法準備に着手し、同十年末には早くその成案を得、之を勞働保險調査會の議に附して、其の贊成を得、順次成規の手續を經て、前述大正十一年中に其の公布を見るに至つたのが、問題の健康保險法なのであるから、今日迄、健康保險乃至勞働保險を主題とした隨分多くの論議が發表せられて居る。けれども、私共無產階級解放運動者の立場から、反資本主義思想を基調として、無產階級解放運動途上の論議を要すべきものは少しも論議せられて居らない

健康保險法を主題とした、今日迄の論議は、

多く官憲當局として、同法の調査立案に關係した者が其の使命と機能とを誇張した宣傳である、偶々、同法の調査立案に關係なき者の反對的批評論議があつても、現代人心の骨の髓迄浸透して居るらしい黄金萬能思想に魅惑せられて居るので、其の反對的批評も、甚だ徹底して居なかつた事を遺憾とする。

眞に恐るべきものは黄金萬能思想の魅惑である、と同時に、黄金萬能思想を基調とする保險思想の魅惑である、現に、健康保險法實施の非を鳴らして起つ勞働運動者が、其の正體を解剖批判する爲に、同法の調査立案關係者の宣傳的解説書を讀んで居ると不知不識の間に黄金萬能思想即ち保險思想に魅惑せられて一寸も解らなく爲る者さへもある事を悲まずには居られない。

回

私が、今茲に、健康保險法の徹底的解剖批評を思ひ立つたのは、實に左樣した今日迄の健康保險法を主題とした一切の論議を不滿とするからである、故に、私の無産階級解放運動途上から、健康保險法を主題として論議して見たいと思ふ問題は實に多い、試みに、今私の頭腦を去來する題目だけを、大雜把に擧示してみても、

(1)保險思想と資本主義との關係より觀たる健康保險法
(2)社會政策を好餌とした資本主義の攻勢と健康保險法
(3)勞働者保護法規と健康保險法の欺瞞
(4)所謂社會保險と保險原則より觀たる健康保險法の正體

等々がある。

又、更らに、私は、如何に健康保險法は、本質的に反對しなければならないものである事を信念しても、現に、國家の成法として二百萬勞働者の前に、其の被保險者たる事を强制する今日、彼の惡法も、亦、國法なりと云ふ成法の權威に、しばらくの服從を餘儀無くせらるゝであらう實際問題として、出來るだけ國家の成法健康保險法の解釋を勞働者の福祉增進に導く精神的解釋を强調してみたいとも思ふ、實際、私は以上大雜把ながらに列擧した問題の總てに亘りて私見の有りたけを論議し盡したい。

が、而し乍ら、私が此の一小論文を纒める爲めに許された紙數の制限は至つて狹い、如何に私見の要點のみを緊約しても、以上列擧した問題の總てに亘る論議は到底之を盡し得ない。

依つて、私は、私の健康保險法を主題に無産階級解放運動途上から論議してみたいと思ふ考察の序論として、第一に保險思想と資本主義との關係より觀たる健康保險法に就て書きたいのだが、夫れでは、現に我國勞働運動の全線に一大ショックを與へて居る健康保險法實施現前の問題と少しく隔りがあり過ぎるように思ふので、此の一小論文には、勞働者保護法規と、健康保險法の欺瞞に就て、私見の大體を述べよう。

回

世間には、社會立法と、社會政策的立法とを混同一視して居るものがあるらしいが、兩者の間には截然たる峻別がある、尙ほ更らに一般的の社會政策的立法と勞働者保護法規を全然同一視して居るものもあるが、兩者の間にも、亦、截然たる立法原則の峻別がある、故に、私は、先づ第一に、斷じて、彼此の混同一視すべからざる注意を喚起して、問題の勞働者保護法規とは何んぞやと云ふ事から本論を進めて行く。

理論的説明を一切省略した結論丈けを云ふと、勞働者保護法規とは、社會のどん底に押し落とされた勞働者を社會生活の水平線に引き上ぐる爲めの保護施設を徹底するに必要な一

切の法律である、と同時に、社會のどん底に押し落として居る、勞働者を社會生活の水平線まで引上げる爲に、之を保護しなければ爲らないと云ふ勞働者保護法規の立法精神は、所謂、社會政策に立脚して居るのである、更らに、左樣した社會生活の水平線を公正ならしむる所に、人類共生、社會共存を指標とする社會立法があるのである、從つて、勞働者保護法規の徹底的考察は、尠くとも、所謂社會政策とは何んぞやの所迄進んで往かなければならない、けれども、私には、今玆で、左樣した論議を試みて居る餘裕が許されて居ないから、官憲當局と、資本家事業主（以下は勞働者保護法規の用例に依り單に事業主と書く）の口を極めて誇張宣傳する、社會政策的勞働者保護法規としての健康保險法は、如何に其の欺瞞的なものであるかを曝露する爲めに必要な程度に於て、勞働者保護法規とは何んぞやを略述しよう。

四

我國の勞働者保護法規として、其の先鞭を爲せるものは、誰れでも知つて居る不十分乍らの工場法である。

工場法の勞働者保護は、甚だ不十分であつても、其の立法精神は、產業危險の原則に依る勞働者の補償に立脚したものである、其處にこそ微か乍らも、社會政策的な勞働者保護法規としての生命が認められて居るのである。

如何に、その名を社會政策的勞働者保護法規と僭稱しても、その實に於て、產業危險の原則に依る勞働者の補償を徹底して居らない立法は、斷じて謂ふ處の勞働者保護法規では無い。

故に、如何なる立法が、果して勞働者保護法規なりやを檢討する唯一の基準は、產業危險の原則に依る勞働者の補償をどのやうに取扱つて居るかにあるのである、と同時に、社會政策的勞働者保護法規とは何んぞや、と云ふ事も亦、產業危險の原則に依る勞働者の補償制度を說明する事に依りて、自ら之を明白にする事が出來る。

產業危險の原則に依る勞働者の補償と云ふのは、之を我國民法の補償即賠償原則とする有意、有過失損害賠償主義の例外として、勞働者に對する事業主の無意、無過失損害賠償主義を確立する事である。

民法の賠償原則は、其の加害者の事業主たると其の被害者の勞働者たるとを問はず、總て其の第七百九條に「故意又は過失に因りて他人の權利を侵害したる者は之に因りて生じたる損害を賠償する責に任ず」と規定して、事業主が從業勞働者死傷率の極めて高い危險事業を計畫して、從業勞働者の生命と健康とを目の邊りの如實に被害しても、事業主直接の故意、又は過失に依りて從業勞働者の生命や、健康やを侵害した場合でなければ、法律上一切其の責に任じない、と同時に、事實上危險事業を計畫した事業主は、決して從業勞働者の作業を指圖監督して居らないので、如何に可憐な從業勞働者が、事業主の計畫經營する危險事業の犧牲に被害しても、損害の賠償を請求する事が許されない、又、假りに、事實上危險事業を計畫經營する事業主の責に歸すべき危險防止設備（不十分の過失に因りて從業勞働者の被害した場合でも、被害者たる從業勞働者は、被害事故發生前後の事實說明者たる事の不可能な死亡者である事が多い、幸ひ、生命だけは取り止め得ても、多くは、被害事故發生即時の、人事不省者であつたりするので、到底、從業勞働者の被害に對する事業主の損害を賠償せしむべき事故發生前後の事情を證明し得ない、而已ならず、人間の不善と、虛僞とを前提とする我國訴訟手續法は、從業勞働者自身の被害を、自身で證明す

る證明方法を許さない、況んや、左樣した事實證明の方法が許されたとしても、損害賠償の結果を得る迄に要する費用と手數とは、結局其の日の生活に追はるゝ勞働者の堪ふる所では無い。

然かも、一方産業機械の發明が未だ危險防止等の發明修整時代に到らずして、産業能率本位の發明に成る新機械をドシ〳〵採用する事業の計畫は、從業勞働者の死傷率を增加して、所謂産業危險の原則に被害するもの﹅簇出を看過し得ない。

回

玆に、社會立法の一基調を爲す所の『富は債務を生ず』の原則に依りて、危險性を有する文明利機採用の富有階級は、富有階級たる立場夫れ自體に、文明利機採用に因る事故發生一切の損害を賠償する責任がある、と云ふ論據と、同じ論據に立脚して確立せられたものが、所謂産業危險の原則に依る勞働者補償制度である、そして之を事業主に强制するものが、國に依り時代に依る事業主責任法雇主責任法の差異變遷を經て、我國にも實施せられた勞働者保護法規としての工場法である。即ち、死傷率の高い危險事業を計畫經營する事業主は、從業勞働者の、該事業に因りて被害した事故一切の損害を賠償する責任に就て事業主に、故意ありや、過失ありやを問はず只だ、夫れ、相樣した、危險を惹起する事あるべき産業危險の原則に依りて、事故發生の損害を賠償せしむる事にしたのである。

斯くして、立案せられた勞働者保護法規としての工場法は其の第二十二條に「工業主又は第十九條――工業主營業に關し成年者と同一の能力を有せざる未成年者若くは禁治產者、法人なる場合に於ける業務執行の責任者は、自己の指圖に出でざるの故を以て其の處罰を免るゝ事を得ず」と規定し、其の處罰規定中には不正に勞働者保護の扶助を免れたものを處罰する旨をも明かにして從業勞働者に對する事業主の無意、無過失損害賠償原則を確定した、所謂、勞働者補償制度である、故に、左樣した産業危險の原則に依る勞働者補償制度の徹底は、從業勞働者の事故發生に被害した一切の損害を、事業主に賠償せしむるものであらねばならない。

只だ、ここに、私共の最も注意すべきものは、所謂、社會政策のカラクリである、夫れは、産業危險の原則に依る勞働者補償の表看板だけは大きいが、其の實に實る工場法の補償扶助額は至つて尠ない、大いに改正せられたと云ふ工場法さへも、從業勞働者の生命被害に對する補償は同施行令第八條「職工死亡したる時は工業主は、遺族又は職工死亡當時其の收入に依り生計を維持したる者（多くの場合内緣の妻）に賃金三百六十日分以上の遺族扶助料を支給すべし」と云ふに過ぎない、故に社會政策的勞働者保護法規としての工場法を完璧にする輿論の趨勢は、産業危險の原則を徹底した勞働者の保護を十分にした補償制度の充實を要求して止まない、彼の癈疾保險提唱の如きは確かにその一端である、然かも、癈疾保險と、工場法との規定には、あまりに距離があり過ぎるので、先づ工場法の改正に依る勞働者補償制度充實の叫びは、國内的にも起れば、國際勞働會議にも起つたので全然知らざるもの﹅如くに抛つて置く事が出來ない、之れ、蓋し、我が工場法不十分乍らの、改正を決行して社會政策的勞働者保護法規としての完璧に一歩を進めた所以であらう。

回

以上、簡單乍らも、勞働者保護法規としての工場法に對する説明に依りて、所謂勞働者保護法規の如何なるものであるかを大體説明し得たと信ずる。

其處で、更らに問題となるのは、左樣した

改正工場法と、健康保險法との關係を明にする法規對照である、が、その問題は、別に、社會政策を好餌とした資本主義の攻勢といふ題で論ずる事とし、ここは、社會政策的勞働者保護法規としての工場法が改正せられた結果を、骨拔にした健康保險法の欺瞞に就て、專ら論述しよう。

改正せられた工場法の規定と云へども、決して勞働者補償の原側を徹底したものでは無いが、舊工場法よりは勞働者の保護が倍加して居るので、其の改正のままを直ちに實施せらるゝ事に爲れば、事業主の負擔も亦直ちに倍加する、斯ふした、工場法の改正に依る勞働者保護補償の倍加を、勞働者自身に負擔させようと云ふ所に健康保險法の欺瞞があるのである。

回

私は、前にも、世間には、社會立法と社會政策的立法乃至勞働者保護法規とを彼此混同一視して居るものゝある事を擧げて、其の不可なる所以を注意して置いたが、世間の或者は、社會の名を冠した立法の總ては、必然的に、其の何ものをも强制する事を以て特色とするものゝ如くに思つて居る、如何にも社會立法の特色は、人類共生社會共存の連帶觀念に依りて、其の之れに相反するものを服從せしむると同時に、其の之れに順應するものを助長する爲に、必要な行爲不行爲を强制する點にある、從つて、今度の、健康保險法が二百萬被保險勞働者の意思に相反して之を强制しても、可なるものゝ如くに考へて居る論者がある。

が、然しながら、夫れは、明かに、社會立法と、社會政策的立法乃至勞働者保護法規とを全然混同一視して居る謬論である。

何故なら、社會立法は、人類共生社會共存の社會人を平等の立場に置いた、一般的の强制法規であるが、社會政策的立法は、一共生共存の社會人たる立場に置かれて居ない不平等者の爲に、弱少者の被保護と優越者の保護とを强制するものである。更らに純然たる勞働者保護法規に至つては何んらの强制を要せずして被保護勞働者は、無條件に之を歡迎し單り保護責任者たる事業主への强制を目的とするものだからである、モツト明白に、之を勞働者保護法規に就て、言ひ換ふれば、其の被保護者たる勞働者には何ものをも强制せずして之れを保護責任者たる事業主にのみ其の保護を强制するものであらねばならない、玆に、所謂社會立法と、社會政策的主法の截然たる峻別があり、更らに所謂勞働者保護法規の特色があるのである。

斯ふした、私の所論に、誤りが無いとしたら、何人と雖も福祉の增進を强制せらるゝ爲に必要なりとする規定を要しない筈である。殊に、福祉の增進に飢へて居る勞働者は、當然必然の福祉增進を喜んで迎ふるであらう事から考へても、絕對に其の强制的規定の必要がない筈である。況んや、人類共生社會共存の正義に於て、道德に於て、更らに、產業危險の原則に依る從業勞働者の事故損害を、事業主に補償せしむる經濟理論に於て、一般的に要求期待する勞働者保護法規の實施を勞働者に强制しなければ爲らないと云ふ事は、全然理窟にならない。

果然、勞働者保護法規として、勞働者の福祉を增進する爲めに、改正せられた工場法は不完全なりと雖も、產業危險の原則に依る勞働者補償の規定中之を勞働者に對して强制すべき不利益の負擔も、不自由の服從も絕對に無い、だから、如何に不完全な工場法でも、工場法實施の時には勞働者の改善運動があつても、反對運動は起らなかつた、夫れは工場法の實施を不利益の負擔と、不自由の服從とに强制せらるゝものは事業主のみだからであ

る、事業主には、如何に不利益の負擔でも、又如何に不自由の服從でも、之れを強制しなければ社會のどん底に押し落とされて居る勞働者の社會生活を、水平線迄引き上ぐる爲の保護を完ふする事が出來ない、茲にこそ眞に、勞働者保護法規の特色があるのである。

そして、勞働者と事業主とを人類共生社會共存の平等的立場に置かない、勞働者保護法規の強制は、從業勞働者に産業危險の原則を冒さしめて不當に利益に過ぎて居る事業主が、同じ産業危險の原則に冒さるゝ從業勞働者の悲慘な犠牲を救濟する爲に其の利益の吐き出しと、冒險壓制の阻止とにあるのである。にも拘らず、其の名を勞働者保護法規に僭稱して其の實を勞働者に對する不利益負擔の強制に置くものであつたら、夫れは眞の勞働者保護法規に非ずして勞働者暴壓法規である。

故に、事業主の不利益負擔と冒險壓制の阻止とを強制する半面に勞働者の利益と自由とが幾分でも回復せらるゝもので無ければ、斷じて眞の勞働者保護法規で無いと云ふ事は、何人と雖も之を諒解して吳れるだらう。

回

然るに、今や、我國勞働運動の全線に一大ショックを與へた、爭議、又、爭議の勞働爭議を頻出して居る健康保險法の正體如何――

同法構成の解剖に關する批判は、別に之を詳論する機會を待つ事として、ここには、以上說明した勞働者保護法規の根本精神から觀た健康保險法は第十三條「工場法の適用を受くる工場又は鑛業法の適用を受くる事業場若は工場に使用せらるる者は健康保險の被保險者とす」と規定して、當初より勞働者に對する強制方針を以て立案せられて居る事が、最も、雄辯に之を實證する所以を說述しよう。

規定內容の解剖批判はしないが、眞に勞働者を保護する規定に滿ちて居るものなら、何も勞働者に其の實施を強制する必要がない筈である事は前に之を述べた、にも拘らず、健康保險法全體の構成が、殆んど、全部勞働者に對する實施強制である事は、左の諸點を擧示しただけでも之を首肯し得よう。

第一。同法實施費用國庫負擔の程度に關する規定（第七十條）

第二。同法實施機關に關する規定第二十二條、第三十一條、第二十四條、第四十條、第三十八條、

第三。同法の實施に就て勞働者の威力を強調したる場合の取締りに關する規定第二十九條、第三十六條、第三十八條、第三十九條、

第四。保險給付の保險者認定專制に關する規定、第四十三條、第四十四條、第六十條第六十一條、第六十三條、第六十四條

第五。勞働者の費用負擔に關する規定、第十一條　第七十一條　第七十五條第七十八條

及び之を實施する爲めの補助規定と云ふよりは、寧ろ、同法の內容を成す所の健康保險法施行、及同法施行を比較對照批判すると、一層明瞭に爲るのであるが、最早紙數の制限を超過したそうだから、以上擧示の五點に簡單な說明を加へて順次勞働者保護法規たる事を僭稱する健康保險法の欺瞞を暴露する。

回

第一、同法實施費用の國庫負擔に關する同法第七十條は「國庫は勅令の定むる所に依り各健康保險組合の保險給付に要する費用の十分の一を負擔す、前項の規定に依る國庫負擔金の總額が被保險者一人に付一年平均二圓の割合を超ゆる場合に於ては各健康保險組合に對する國庫負擔金は勅令の定むる所に依り其の限度に至る迄之を減額するものとす」と規定して居るが、之を當局の『國庫は――其の一

割を負擔して大體保險の事務に當てる豫定であります」の説明に對照し、且つ之を保險署の官制及其の分布設置に關する規定と、其の豫算から考察すると同法實施の爲に支出する國庫の補助は、勞働者の保護を目的として居るのでは無い、同法の實施が全勞働者の反對を受けて被保險者たらしむべき勞働者は、全然保險組合の組織に參加せず、如何に內務大臣が事業主に保險組合の設立を命じても手が下せない場合、斯ふした工場法改正の同意に其の條件を交換した、改正工場法背拔の健康保險法を官憲の力で實施强制する爲めの用意であつた事が判かる、と云ふのは社會立法究竟の理想が一種の人格立法である、夫れ迄の社會政策的立法は一種の人頭立法である、現に健康保險法の保險料は健康人頭稅である、之れ實に同法實施費用國庫負擔の程度が保險者一人に付金二圓を限度とする人頭實施費を標準とした所以である事を首肯し得よう。

健康保險は、勞働者の共助自治觀念を養成する爲に保險料を徵收するのだと稱して居りながら、勞働者の自由を伸張して其の自治理想を指導すると云ふ健康保險法を、斯くの如く當初の立案から既に勞働者に其の實施を强制しなければ爲らないものとせられて居た事は、何よりも雄辯に同法の勞働者暴壓法たる事を實證するものである。

第二、同法實施機關に關する規定を見ると、更らに其の意圖の腹黑さに驚かざるを得ない、表面勞働者の自治指導を僭稱する勞働者保護法規の體面上、之を官憲で直營すると云ふ譯にも往かず、其の第二十二條に「健康保險の保險者は政府及健康保險組合とす」と規定し、保險組合の組織に關する勞働者の參與權を、第二十九條――第一項に「事業主が、健康保險組合を設立せんとする時は、組合員たる資格を有する被保險者二分一以上の同意を得る規約を作り主務大臣の認可を受くべし」と規定し、更らに、左樣した組合の設立を事業主に第三十一條の「主務大臣は一事業に付第十三條の規定に依る被保險者當時五百人以上を使用する事業主に對し健康保險組合の設立を命ずることを得」と下命し、同法の實施機關は一見勞働者の參與に依る自治的健康保險組合を主とするものゝ如くにして居るが、その實は其の實施に反對乃至忌避した勞働者が、保險組合の組織に參與しない場合に、官憲自ら之を直營する覺悟で、第二十四條には「政府は健康保險組合の組合員に非ざる被保險の保險者を管掌す」と規定し、尙其の第四十條には折角出來た健康保險組合が、解散する樣な事があれば、官憲自ら之れを引受けるつもりで「解散に因りて消滅したる健康保險組合の權利義務は政府之を承繼す」と規定して居るのである。此の一點だけでも同法の實施は決して勞働者の歡迎するものでない事がよく判つて居て、其反對乃至忌避に備ふる官憲對資本家の諒解に依る强制實施を意圖した勞働者强制法たる事を實證する。

第三、同法實施と勞働者の威力强調を取締る規定を見ると、幸ひ勞働者を胡開化した保險組合の組織を完成しても、その組合規定が勞働者の自治參與權行使に依りて、眞に自治過ぎると思へば之を認可せず、認可規約があまりに非自治過ぎるとして勞働者側が之を忌避した爲に役員も何にもなくなつた場合にも、亦、官憲自ら保險事務を直營するつもで、第三十八條に「健康保險組合の役員に欠缺者は故障あるとき又は組合の役員保險給付其の他其の執行すべき職務を執行せざるときは主務大臣は官吏又は其の他の者を指定して其の職務を執行せしむることを得」と規定して居る、而已ならず認可規約が非自治的でも勞働者の保險組合自治參與權の行使が廃んな場合には、之れを取り締る爲めに、第三十

九條は「主務大臣は健康保險組合の決議若は役員の行爲か法令主務大臣の處分若は規約に違反し組合員の利益を害し若は害するの虞ありと認むるとき又は組合の事業若は財産の狀況に依り其の事業の繼續を困難なりと認むるときは決議を取消し、役員を解職し又は組合の解散を命ずることを得」と、規定して居るのをみたら、健康保險法の實施は、斷じて勞働者保護の爲めに非ず、寧ろ、産業保險原則に依る勞働者補償制度改正工場法の事業主負擔を勞働者負擔に轉嫁する勞働者搾取法たる事を實證する。

第四、保險給付の保險者認定專制に關する規定中從業勞働者の最も危急悲惨な事故負傷に手當する入院手術に就て、第四十三條二項は「――療養上必要なりと認むる時は、保險者は被保險者を病院に收容する事を得」と規定して被害者や親近者の要求などは、全然顧みて居ない。

次ぎに所定保險署に不滿な勞働者が他に新治療を試みたい場合の療養費給付に關する第四十四條の規定も亦保險者の專制認定である、更らに驚くべきものは、第六十條に「被保險者又は被保險者たりし者自己の故意の犯罪行爲に因り又は故意に事故を生ぜしめたるときは保險給付を爲さず」と規定して、從業勞働者が如何なる負傷疾病を泣いて居ても保險者の頑強無情な專制認定で其の療養が拒まれる事に爲る「現代法令の極弊は、實に認定專制の頑強無情である、然かも見よ、第六十一條は「被保險者鬪爭又は泥醉に因り又は故意に危害豫防に關する業務上の監督者の指揮に從はざるに因り事故を生ぜしめたるときは傷病手當金の全部又は一部を支給せざることを得」第六十四條は「保險者は詐欺其の他不正の行爲に依り保險給付を受け又は受けむとしたる者に對し勅令の定むる所に依り期間を定め保險給付の全部又は一部を爲さゞることを得」と保險者の專制認定を逞ふせしめてゐる、擧げれば際限もない認定專制の健康保險法はマサニ勞働者虐待法である事を實證する。

最後に第五の勞働者保險料負擔に關する規定の驚くべきものは、第十一條第一項に「保險料の徴收金を滯納する者ある場合に於て保險者の請求あるときは市町村税の例に依り之を處分す此の場合に於て保險者は徴收金額の百分の四を市町村に交付すべし」と規定して從來、國家の委託事務執行に就て、市町村に特別歩合手數料を支給した例は無いのに、此の保險料徴收に對してのみ、ブローカ的徴收事務の奨勵をしてゐるのは一體何んの意圖であらう。勞働者の保險料徴收に就て、第七十八條「事業主は勅令の定むる所に依り前條の規定に依り納付すべき保險料を被保險者に支拂ふべき報酬より控除することを得」と規定し、斷じて、其の取り外しの無いようにしてゐる事を考ると、第十一條の規定に事業主が賃銀から保險料を天引きする以上の慘酷を敢てする事例を想像する事が出來よう。

上來、私の所論は書いて盡きない、けれども、紙數が超過してゐるので、現に、保險爭議解決の一案に事業主保險料全部負擔と云ふ事が唱へられてゐるが、夫れを、不可能とする爲に、健康保險法第七十五條に「健康保險組合は第七十二條若は前條の規定又は第七十三條に基きて發する勅令の規定に拘らず其の規約を以て事業主の負擔すべき保險料額の負擔の割合を增加することを得」と規定して、事業主と勞働者の保險料負擔に關する二分の一宛の割合は、之を變更する事が出來ても、全然其の割合を沒却する事業主全部負擔を強いられないようにしてある陰險な立法詐術が隨所に伏兵せられてゐる事は、健康保險法の驚くべき勞働者欺瞞法たる事を實證するものである(一九二七、一、七記)

全國勞働組合と各無産政黨との關係及びその實勢

日本農民黨の本質

北澤新次郎

表面的には農は國の礎であると崇められながらも、其の實際に於ては、我國の農民は過去數千年に亘つて暴虐なる抑壓と悲慘なる生活に忍從して來た。そして四民平等を標榜した明治の改革も、農民の生活の陰慘なる日常生活を改善する事なしに、世は資本主義文明の發達を辿つた。資本主義に必然的に隨伴する社會的弊害は、工場勞働者の集團的組織を促し、勞働組合運動は確實なる基礎の上に展開するに至つた。

大地に依存して、困苦缺乏に耐へ忍んで來た農民も亦、社會的進化の時の力に目醒めて、農民組合運動は燎原の火の如く、全國至る處の寒村に迄波及した。團結的實力の効果を感得した農民は、普通選擧實施を機會として、政治的に今や一大革新の機運を作興せんとするの努力を始めた。

惟ふに政治の要諦は國民生活の安定にある。然るに國民の大多數を占むる農民が、經濟的にも亦精神的にも安定を缺き、農村に於ける貧富の懸隔愈々甚だしく、年を逐ふて農村は荒廢を増しつゝある現狀は一日も其の改革を猶豫すべきものでは無い。そして此の慘憺たる農村の改善を現時の特權階級の利害を代表せる既成政黨に委ねる事は、何等の効果の無い事は過去並びに現在の事實に照して明かである。其處で普通選擧實施を機會として、政治的參與權を獲得した數百萬の農村に於ける新興階級は其の共通の利害を有する農民が自ら奮起して、政治上に於ける彼等の共同の利益を增進せんとして組織されたものが日本農民黨である。

理論より押せば、都會に於ける勞働者、並びに農村に於ける小作人が共に打つて一丸となり、無産階級を代表する政黨を組織し、以て既成政黨を相手取つて政治上に一大決戰を爲す事が、最も適當なる事である。そして終局に於ては、そうならなければならないものではあるが、我國の實際にこれを見ると、此の理想を今日有効に敷衍する事が出來ないとするならば、其に到達する階梯として、先づ利害關係の共通なる無産集團が、政治上に結成して相互に連絡を維持し、以て特權階級者と戰を交ふる事が現實的に有効なる方法である。農民は農民黨

へと云ふ標語は、農民黨が工場勞働者の無產階級としての利害關係を無視したものでは無い。否、寧ろ此等工場勞働者の政黨と提携して無產階級の政治的勢力を增進せんと、心掛けるものである。只、現實的に密接なる利害關係を有する農民が、日本農民黨の傘下に相集つて、以て農民の奴隸的社會的生活の解放を期せんとするにある。過去三千年默々として培ひ來りし日本を甦生、伸展せしむべく、小異を捨てゝ大同に着き、總ゆる障害を排して行き詰まれる我國の政局を打開し、社會的正義の支配する新社會の建設の爲めに全力を傾注して猛進せんとするのが日本農民黨の意志である。

綱領

我等は人類の平和幸福を目標とし、天地の公道に則り世界の大勢に順應して合理的新社會の建設を期し、以て次の諸項を遂行す。

1.社會正義の實現

我等は不公正なる政治の弊害を打破し、全勤勞階級共同の理想たる社會的正義の實現を期す。

2.日本國本の振起

我等は智識を世界に求めて純眞なる我が國本を振起し、日本民族の繁榮と日本文化の發達を計り、以て世界文化の向上に貢獻せんことを期す。

3.議會政治の改革

我等は議會政策に即して、一切の不合理、不自然なる制度組織、習慣を排し、合理的新日本の建設を期す。

4.產業國策の確立

我等は特異なる日本國情の現實に立脚して、產業の振興、分配の公平を計り、以て國民生活の安定並に向上に力む。

5.農村文化の樹立

我等は都會中心の不健全なる文化を否定し、健實なる地方的新文化の完成を期す。

政策

一、政治

一、普通選擧の徹底
二、貴族院の改革
三、無產階級運動取締に關する諸法令の改廢
四、國防軍備の整理、
五、兵役義務者の給與增額及待遇改善
六、一般並に地方行政費、行政事務、行政區劃の整理と自治制度の改革
七、國民外交の確立
八、移民政策の確立
九、財產税の高率累進賦課と關税及び消費税の改廢等の税制の根本的改革
十、恩給制度の改正

二、經濟

一、耕作權の確立
二、土地制度の改革
三、產業振興策の確立並に我が天然資源開發と生產力增進の爲めの

證券的國立調査研究機關の設立
四、重要農産物專賣制實施
五、農村金融機關の改善及擴張
六、肥料の國營
七、農業保護施設の國家的經營
八、團結權、罷業權、團體契約權の確立
九、少年婦人勞働の保護制限
十、工場法の改善及最低賃銀制度の實施
十一、水力電氣の國營
十二、交通機關の整理、並びに地方普及

三、社會

一、教育制度の改善
二、義務教育費國庫負擔
三、國民保健の徹底
四、病院、醫薬の國營
五、生命、養老、災害、失業、疾病保險の國營
六、女子人身賣買の禁止
七、農村文化施設の普及

總選擧に對する政綱

一、公正なる小作法の制定
二、肥料の國營
三、農村金融及び税制を耕作者本位に整理改善
四、義務教育費國庫負擔
五、兵役義務者の給與增額及び待遇改善
六、國民保健の徹底
七、政治の地方分權主義の實現

社會民衆黨の主張並に黨勢

鈴木文治

社會民衆黨の綱領及び政策は左の如くである。

綱領

一、吾等は勤勞階級本位の政治經濟制度を建設することを以て健全なる國民生活を樹立する所以と確信し之が實現を期す
一、吾等は資本主義の生産並に分配方法に健全なる國民生活を阻害するものありと認め合法的手段に依て之が改革を期す
一、吾等は特權階級を代表する既成政黨並に社會進化の過程を無視する急進主義の政黨を排す

政策

一、普通選擧の徹底
二、議院制度の改革
三、言論集會結社の自由を抑壓する諸法令の改廢
(イ)、治安維持法廢止
(ロ)、治安警察法改正
(ハ)、新聞紙法出版法その他の改正
四、軍政の改革
五、國民外交の確立
六、財政及び税制の根本改革
(イ)、財産税、所得税、相續税の累進的高率賦課、生活必需品の消費税の撤廢
(ロ)、金融機關の民衆化
七、行政機關の改革
(イ)、地方行政機關の改革
(ロ)、衞政行政機關の改革
八、教育の根本的改革
(イ)、普通教育公費制の徹底
(ロ)、高等教育機關の民衆化
(ハ)、劃一的教育の打破
九、重要産業の社會化
十、土地制度の改革
十一、勞働立法の完成
(イ)、團結權、罷業權の確立
(ロ)、最低賃銀法の制定
(ハ)、工場法、鑛業法、海員法の改正
(ニ)、土工建築工保護法の制定
(ホ)、國際勞働條約の實施
十二、小作立法の完成
(イ)、耕作權の確立
(ロ)、小作料の合理化
十三、俸給生活者保護法の制定
十四、女子に對する法律的經濟的差別の撤廢
十五、社會的施設の徹底
(イ)、失業、疾病、養老、災害の各社會保險制度の完成
(ロ)、醫藥救療機關の民衆化
(ハ)、住宅その他生活設備の完成

昨年の十二月五日、我黨の結黨式を擧げて以來、全國各地から共鳴者が續々と現はれて、支部設立の要求をなしつゝある有樣であるが、昨年は皇室の御不祥事があつたため、活潑なる活動を遠慮することになつた結果、漸く神奈川縣第二支部の設立を見ただけであつた。しかし此の一支部にても、一擧にして五千人の黨員を得ることが出來た。昭和の新春を迎へると共に、全國各地に支部設立を見ることと思はれるが、差當って支部の設立される地方は、千葉縣、東京府、大阪府、長野縣等である。本年中に於て、約二十萬人の黨員を獲得することは難くないと信ずる。わが黨に共鳴する大衆の中で、勞働者及貧農の外

に、進歩主義的なる青年團の少くないことは頗る注目すべき事實である。官製青年團にも拘らず、さりとて共產黨的青年運動にも信服出來ない青年大衆が、二千名三千名とかたまつて我が黨に加盟を申込みつゝあることは、我等の主義主張が健實なる地方青年大衆の共感を呼び起したことを物語つて居る。更に事務員、小學教員等の間にも、わが黨の反響の大なりしことが示されつゝある。吾人は社會民衆黨が、國民の九割を占むる勤勞無產大衆の利害休戚を代表する公衆なることを名實共に社會に宣明する日のあまり遠くないことを確信して居る。

本年の政局が波瀾を生じて、遂に議會解散を見るやうなことになれば、我黨も當然候補者を立てゝ選擧場裡に臨むことになる。我黨の候補者並に選擧地盤は、目下審議中であるが、私一個の觀測を以てすれば、現在の處、我黨の選擧地盤は左の通りである。

東京府第二區、第四區、第五區、第六區、第一區、
千葉縣第一區、
神奈川縣第三區、
大阪府第一區、第三區、第四區、
兵庫縣第二區、

日本勞農黨

麻生久

一、何故に生れたか

日本農民黨の事はしばらく別として、今日では無產政黨で全國的組織を有する代表的なものは三つある。即ち其一は勞働農民黨であり其二は日本勞農黨であり其三は社會民衆黨である。昨年十月廿五日、勞働農民黨が分裂して後、社會民衆黨と日本勞農黨とが殆んど同時に生れた。一般世間は、社會民衆黨の生れた事に對しては、豫め之れを豫想してゐたのであるからして、當然の事と思つたのであるが、日本勞農黨の出現に對しては、餘程日本現在の社會運動の實情に通じてゐない限り之れを理解するに困難を感じた事と思はれる。併しながら、日本現在の社會運動の實情に通ぜる者は、勞働農民黨の分裂は、やがて他の二つの政黨の出現の必然性を豫知してゐたのである。

大正十四年春勞働總同盟が第一回の分裂を遂げて、評議會が生れ、日本の社會運動が左右兩派に分れ極端な抗爭をなしつゝある間に、左右の指導精神は急速度を以て背反し、右は左を目するに共產黨を以てし、左は右を目するに反動派を以てするに至つた。而して此左右兩派

の極端な抗爭は、十四年夏以來企てられた單一無産政黨組織の上に反映して、此企てを絶えざる紛爭の上に置き、遂に農民勞働黨の禁止、勞働農民黨の分裂を招かしむるに至つた。

由來、無産大衆の單一無産政黨要望と云ふ事と、それを事實の上に分裂に導く如き極端なる左右兩派の抗爭と云ふ事とは兩立しない事である。日本の社會運動の上に共同戰線を張るべき單一無産政黨が眞に必要であるならばそこに指導精神の正統的統一がなければならない。然かるに左右兩翼は其行動の上に單一政黨を破壞に導く如き分裂的行動に終始したのである。

玆に於て、勞働農民黨の中には三つの指導精神が動いてゐたと云ふ事が出來る。其一は極端な左を主張して事實上に單一無産政黨を分裂に導いた極左派の精神、其二は極端な右を主張して事實上に單一無産政黨を分裂に導いた極右派の精神、而して其三は、單一無産政黨を守つて行かうとする統一的正統派の指導精神之れである。日本勞農黨の指導精神はまさに此第三を代表するものである。從つて事實の上に日本勞農黨に集まり來つたものは勞働總同盟中の左翼(單一政黨支持派)農民組合中の堅實派(事實上の單一政黨支持派)及び終始單一政黨を支持し來つた中堅諸團體である。今や社會民衆黨が、單一政黨組織に參加した勞働團體中僅かに勞働總同盟の右翼一部に依つて支持され、勞働農民黨が僅かに農民組合中の左翼(但し行きがゝり上の)に支持されつゝあるに反して、日本勞農黨が事實上以上の如き多くの諸團體に支持されつゝあるに見るも、それが單一政黨の指導精神に立脚せるを證明するものである。

二、日本勞農黨は中間派か正統派か

日本勞農黨を目して中間派となすものがある。若しも今日の左右兩派が今少しく其小兒病的極端性を有せずして、大衆を包含し得る自然なる左右兩派であるならば、日本勞農黨は生れなかつたであらうし、無理に生れたならばそれは中間派に相違ない。併しながら今日の左右兩派が、彼等自身双互に云ふ如く、一方が共産黨的性質を帶び他方が反動的性質を帶ぶるところに、其不自然さがあり、小兒病性があつて共に大衆黨たる能はざるところが存在するのである。日本勞農黨が此二個の間に在つて、正統派たる事の必然性を有するのは、要するに今日の左右兩翼が、自然的な左右兩派に非ずして極端な小兒病的な性質を有するがために外ならぬ。

たゞ日本勞農黨の將來如何に就て考ふるならば、多量に自然的な大衆的左翼に發展する可能性を有してゐる。何となれば、社會民衆黨が將來右翼政黨として結成さるゝ可能性を多量に有するに對し、勞働農民黨は、將來極左翼となつて存在不可能となるか存在しても極めて少數の思想團體となるか、然らざれば、同黨に內在する二つ指導精神が分裂して其右翼が日本勞農黨と合同するに至るであらうからである。斯くの如き場合、社會民衆黨は自然なる大衆的右翼政黨となり、日本勞農黨は自然的な大衆的左翼となり、勞働農民黨は少數の思想團體的極左翼となるであらう。社會民衆黨が今日のまゝ大衆的右翼政黨となり得るか、將來既成政黨とのいきさつに依り右翼と極右翼とに分裂するに至るべきかは疑問の存するところであるが、分裂するに至るなら

ば其左翼は日本勞農黨と合同するに至る可能性を有してゐる。若し斯くの如き現象を生むに至るならば、日本勞農黨は眞に少數の極左右を殘して無產階級の大衆的單一政黨となり、その發達に從つて其中から再び自然なる左右兩派を生むに至るであらう。

三、日本勞農黨の指導精神

『階級的立場を嚴守して、日本の社會狀態に立脚せる現實政策を行ふ』これが日本勞農黨の指導精神である。云ふところの意味は理想に溺れず現實に墮せずと云ふに在る。從つて其構成分子も亦勞働者階級農民階級を主體とし、資本主義進行の必然に從つて無產階級化する下級俸給生活者及商業使用人をも包含せんとするものである。

勞働農民黨の精神と主張

細迫兼光

「單一無產政黨へ」——懷へば長きスツラグルであつた。大正十四年六月二十一日の日本農民組合の提議、既に此の精神に則り、十二月一日の農民勞働黨解散直後農民組合の再擧の意志を聲明したる時も亦云つた——「單一無產政黨へ」——是れ過去一年有半の無產階級精神の一致した叫びであつた總同盟ですら無產階級的なる事を裝はんが爲めには澁々之に曳きずられなければならなかつた。此れが實現の達成の爲めには自らの積極的熱意を犧牲にしたものもあつた。或は又爲すべからざりしかとも思はるゝ讓歩隱忍も敢て爲した。然し今や、總同盟其の他が脫退し、續いて日勞黨の出現した今、此の單一無產政黨への誠意と熱意の缺如せるもの——否、無產階級精神の缺如せるものが如何に此の單一無產政黨の結成を忌避せるものなるかが明になつた。彼等は事毎に之を破滅せしめんと畫策して、事終に成れり（？）單一無產政黨の夢は破れたりと手を打つて喜んでゐる。破れたるにや、破りたるにや。

事を例へて云ふならば、五人の者が山に登らん事を提議したるに內一人が「それは實現し難し」と主張したれども納れられず、已むを得ず提議には贊成し、山に登る事になりたるが、彼、それは實現し難しと主張したる者は獨り麓に止まり、他の四人の頂に登りたるを見て「それ實現せざりしに非ずや、我獨り尙ほ麓に在り」と、己が豫言の的中を喜べるに類す。げに笑ふに堪えたる事に非ずや。むしろ始めより「吾は山に登るを欲せず」と言明するの勇なかりし事を憫むべし。今にして、彼等が「基礎確立するまで」「時の至るまで」とて門戶の閉鎖を主

張したるは全く一のペテンに過ぎなかつた事が明白になつた。

彼等「山を登るを欲せざりし人々」ニセ無產政黨の幹部は、口を開けば「吾等は一意單一無產政黨を希望して來りたれども、勞働農民黨が之を破壞したり」といふ。借問す。「何時勞働農民黨は君等を排除すと言ひたる事ありや」と。破れたるにや、破りたるにや。

以上に於て大體勞働農民黨の根本精神の奈邊に存するか、如何に他のニセ無產政黨と其の精神を異にするやを明に觀取する事を得る積りである。此れを端的に云ふならば、明確なる無產階級意識の上に立つ事と、單一無產政黨主義を執る事と是れである。之れ日勞黨が合同を拒否せるに拘らず尙ほ我は合同を提議せる所以である。尙之れは單一無產政黨主義から來る當然の結果であるが特に注意すべき事は、日勞黨の如きは「氣の合つた者同志で」といふ事が主潮である樣であるが我が勞働農民黨は黨內に於ても激烈な討論を豫想してゐる事である、決して朋黨的でない。種々樣々な異見の間から激烈な理論鬪爭によつて無產階級の正に執るべき方策を見出して行かうとしてゐる。我々は和氣アイ〱たる團欒的な集團により、スツキリした平穩な氣持を以て階級鬪爭に臨むなどといふ事を考へる事が出來ないのである。

左に我が黨の綱領、政策を揭げる。

綱　領

一、我等は、我國の國情に即し、無產階級の政治的、經濟的、社會的解放の實現を期す。

二、我等は、合法的手段に依り、不公正なる土地、生產、分配に關する制度の改革を期す。

三、我等は、特權階級のみの利害を代表する既成政黨を打破し議會の徹底的改造を期す。

政　策

△政　治

一、普通選擧の徹底

二、選擧費用の國庫、道府縣、市町村負擔

三、無產階級運動抑壓諸法令の改廢

四、植民地に於ける差別の徹廢

五、軍備の縮少と兵卒待遇の改善

六、戰死、廢兵、徵兵に依る本人並に家族の窮乏に對する國家扶養の實施

七、稅制の根本的改革、特に日用品の消費稅及關稅の撤廢と財產稅の高率累進賦課

八、國民外交の確立

九、交通事故特別裁判制度の設定

△經　濟

十、團結權、罷業權、團體契約權の確立

一一、耕作權の確立

一二、最低賃銀法の制定

一三、少年及婦人の夜間勞働、坑內勞働及危險作業の禁止

一四、八時間勞働制の確立

一五、工場法、鑛業法、海員法等の改正

一六、官公吏、雇員、傭人及び下級俸給生活者の最低賃銀の制定失業

の防止團結權罷業權の確立を基調とする服務規定の制定改廢

△社　會

一七、封建的賤視觀念に對する糺彈の達成

一八、女子の公法上及私法上に於ける差別の撤廢

一九、女子人身賣買の禁止

二〇、女子教育及職業に關する一切の制限の撤廢

二一、失業、疾病、災害保險、並に無產者養老年金制の制定

二二、冤罪並に不當拘束に對する國家の賠償

二三、義務教育及職業教育期間に於ける一切の費用の國庫支辨

二四、居住權の確立

（元・一二・二九）

全國勞働組合と各無產政黨との關係及びその實勢

全國の勞働組合と無產政黨の關係及びその實勢を明らかにしたいと思ひまして、全國勞働組合に對し、左記三ヶ條の問を發し、その回答を得ました。中には回答のなかつた組合もありますし、又組合員數も回答のまゝですから本社に責任はありません。

一、貴組合の員數

二、貴組合の首腦幹部の氏名

三、貴組合の支持する無產政黨（日本農民黨、社會民衆黨、日本勞農黨、勞働農民黨のうち）及び支持する簡單なる理由

日本勞働總同盟

一、二六・一二六人

二、會長　鈴木文治、（主事）松岡駒吉（中央委員）西尾末弘　三木二郎　原虎一　中川忠吉、小岩井相助　齋藤健一　部長　片山哲、赤松克麿

三、社會民衆黨、理由、勞働者、農民、下級俸給生活者等を包含する無產大衆政黨なるが故に。

關東地方評議會

一、五四・〇〇〇人（全國）、一三・〇〇〇（關東）

二、藤沼榮一

三、無產者階級の政黨として支持すべきもの、勞農黨を措いてなし。

海員勞働組合聯盟

一、四四・八〇〇人

二、（中央委員常務）久能寅夫、川島不二郎、古賀德一、島田良藏、木下志津雄、（主事）山本龍二、（常務代理）森光方祐

三、支持する政黨なし、（理由）左右兩翼は致し方なしとするも、現狀の渦中に投じて或は組合運動を阻害することなきやを恐る。但し近く態度を鮮明する筈

神戸司厨同盟

一、一〇・一五〇人

二、（理事長）井上淺次郎、（主事）森脇、（理事）村松信太郎、野田喜一、栗田喜一郎、入船愼五、宮本宮治

三、日本勞農黨（理由）、大衆運動に左右兩翼があるのは當然であるが、我國の兩翼

は階級協同を忘れ、內部の鬪爭にのみ耽つてゐる、我々は、從來この間にあつて兩翼の調和協同に努めたが、それが兩翼の態度に依つて出來ぬから、斷然たる態度に出で眞に階級協同するもの丶み、及我國現狀に適した階級的思想を有する團體のみによつて政黨及び總聯合を作り、その實力によつて兩翼を反省協同せしめんが爲めである。

▲海員協會

一、九・七〇〇人

二、(常務理事)　藤村重道、(理事)楢崎猪太郎、鈴木六二、小泉秀吉、田中弘衞、尾崎鱗太郎、(主事)都竹要次郎

三、社會民衆黨(但し未だ正式に入黨の手續を終了せず)(理由、勤勞階級本位の社會改造、社會進化の過程を無視する過激派排除の政綱が本會の趣旨綱領と略々一致し最も妥當公正なるものと信ずるが故に

▲中部日本農民組合

一、一二・〇〇〇人

二、(組合長)、中澤辨次郎、(顧問)大野金吾(書記長)、吉川文助

三、現在何れの既成無產政黨をも支持せず但し社會民衆黨に對しては、或る程度の好意を持つ。當組合は極右と極左を避く從つて勞働農民黨や、日本農民黨は問題とせず、意識的左翼である日本勞農黨にも關係しない

▲大阪木材勞働組合(評議會系)

一、一・六二七人

二、(組合長)飯田豐市(執行委員長)壁民之助

三、勞働農民黨。(理由)、無產階級的單一政黨であるからだ

▲日本縫工組合(總同盟系)

一、男子組合員二三〇、女子組合員二三〇、計四六〇人

二、(組合長)小原源一

三、社會民衆黨、(理由)、右翼と世間にて稱するも、毫も改造の目的を失はず其の綱領政策に於て最も現代日本の狀勢に適合し大を成すべき可能性ありと堅く信ずるが故に

▲駄知製陶勞働組合

一、七五〇人

二、(同盟中央委員)　山本誠一　(組合長)大野兼一

三、中部地方にて勞農民衆黨を創立準備中なれど組合員中には日本勞農黨に合體希望者多し、されど東濃聯合會の統制故に、組合としては、勞農民衆黨を支持することになつてゐる確定的なことは未定

▲日本鑛夫組合阿仁鑛山支部

一、一六〇人

二、(幹部)　魚住直三郎

三、未決定　保留　(理由)、現下資本攻勢の狀態は勞働階級をして良く共同の戰線によらざればその效果を上げ得ない。これが反映として當然單一政黨によらなければならない然し現今の狀勢では之れが却つて共同戰線を破るの憂ある故に

▲大阪電氣勞働組合(評議會系)

一、一・四七六人

二、(組合長)　木村孝次郎、(執行委員長)濱田又三郎

三、勞働農民黨、階級的單一無產政黨たる故、

▲大阪印刷勞働組合(評議會系)

一、一・二三〇人

二、(執行委員長)中川哲秋

三、勞働農民黨、全無產階級的立場から單一無產政黨たる同黨を支持する。專制的政治と相抱合した資本家階級の全線的攻勢に對抗して眞に被壓迫階級の利益を擁護し無產階級の解放をはかるには眞の大衆

的政黨たる全國的單一無產政黨であらればならない

▲尼崎聯合會（總同盟系）
一、二・八五〇人
二、（會長）山內鐵吉、（主事）田中勳
三、社會民衆黨

▲尼崎合同勞働組合（尼崎聯合會）
一、七〇〇人
二、（組合長）稻見常
三、社會民衆黨

▲郊外電鐵勞働組合（尼崎聯合會）
一、一〇〇人
二、（組合長） 西尾末廣
三、社會民衆黨

▲尼崎化學勞働組合（尼崎聯合會）
一、一五〇人
二、（組合長） 宮崎健七郎
三、社會民衆黨

▲尼崎硝子勞働組合（尼崎聯合會）
一、五〇〇人
二、（組合長）戸出佐一郎
三、社會民衆黨

▲尼崎金屬勞働組合
一、一・五〇〇人
二、（組合長）根崎貞義
三、社會民衆黨

▲勞働組合九州聯合會（評議會系）、
一、一・七八〇人
二、上田滿、大塚了一、森下敏夫
三、勞働農民黨。（理由）日本農民黨、社會民衆黨は何れも無產階級の地盤をはなれ小ブルの陣營に移行せるもの日本勞農黨は大衆の進出を阻みこれを組合運動の埒內に止め大衆の信賴を裏切るもの。勞農黨のみが眞に無產者の階級的政黨なるを信ず

▲九州合同勞働組合（評議會系）
一、六三〇人
二、井上健、藤井碩次、日高國夫
三、勞働農民黨

▲九州鐵工組合（評議會系）
一、七〇〇人
二、荒牧仙右衞門、塚原松次、
三、勞働農民黨

▲勞働組合共同研究會
一、七・三〇〇人
二、（會長）小屋總三郎（副會長）脇田重次郎（委員長）木村鉦太郎
三、何れをも支持しない。（理由）吾等と綱領政策を等しくする堅實なる大衆的單一政黨の樹立を見るまでは、暫く吾等と經濟運動に於て直接利害關係を等しくする製鐵所從業員を以て地方政黨を樹立して居ることが有効と信ずるが故に

▲郵船海員協會神戸部（日本海員組合）
一、五・〇四四人
二、（神戸本部專任常務）高橋繁治、安樂彌三吉、（橫濱支部專任常務）齋藤庄五郎、塚崎綱太郎、
三、本協會は日本海員組合の一部にして郵船所屬海員の救濟團體なれば、政黨云々の儀は海員組合に御照會下さい

▲關東勞働同盟會（總同盟系）
一、一三・三六一人
二、（會長）松岡駒吉、（副會長）小岩井相助、（主事）齋藤健一（執行委員）土井直作、原虎一小泉七造、德永正報、三木二郎、鈴木啓岡、福岡金次郎、
三、社會民衆黨。勞働者農民俸給生活者等一般無產者の眞の大衆的政黨なるが故に

▲關東釀造勞働組合（總同盟系）
一、三・二五〇人
二、岡野賓、小泉七三、山口六市、堀越梅男、
三、社會民衆黨

▲勞働組合誠和會本部

一、六・四六六人
二、（會長）石橋茂、（副會長）小林主雄、綾部實彌
三、未だ判然としてゐないが、免に角誠和會の首腦分子が勞農黨東幹支部を結成してゐる以上勞農黨支持の氣分が濃厚です

▲官業勞働組合佐世保勞愛會（海軍勞働聯盟）
一、七・八〇〇人
二、（會長）古賀德一、（副會長）野副勝一郎、小笠原勘一
三、無産政黨問題に對し、海軍勞働組合聯盟の態度決せず、本月下旬開催さるゝ第四回聯盟大會に於て大體決するならん

▲機械技工組合本部
一、九五〇人
二、萬事合議制自發自動的に活動するを以て所謂幹部なるものなし
三、無産政黨なるものは、如何なる名目にしろ有害無益なるを信じ絶對に無提携無關係たり

▲東京鐵工組合（總同盟系）
一、二・五五〇人
二、（組合長）內田藤七、（主事）原虎一、（執行委員）田中小二郎
三、社會民衆黨、普選による新有權者一千百萬日本の賃銀勞働者約四百萬、組織勞働者僅に廿七（八萬）（此中に無政府系の諸君もゐる）廿七・八萬と僅の農民を四つの無産政黨に爭はせんか、喜ぶ者はブルと官權丈だ、組織勞働農民組合黨でない、全容的無産階級黨でなければならぬ

▲革正會（官業勞働總同盟系）
一、一九八人
二、（主事）大平嘉三郎、（會長）松永龍一
三、無産政黨支持に對しては確然たる回答する事能はず

▲日本勞技會本部
一、一・二五〇人
二、（常任執行委員）宇野信次郁
三、本會としては大會の決議に依り政黨運動は絶對反對です。但個人の政黨加入迄禁じてはありませんが、ほとんど政黨に加入して居る會員は絶無です。併し勞農總聯合に參加してゐる關係上日本勞農黨に好意を持つて居ます。

▲九州合同勞働組合福岡支部
一、四〇四人
二、藤井碩次、日高國夫、永元光雄、西田ハル、田平稻實、河野繁、瀨井順次郎
三、勞働農民黨、（理由）、階級的黨たるの名に恥ぢざる故に

▲近江八幡製瓦工組合
一、一五〇人
二、組合長、川端與惣治郎
三、支持せず

▲千葉印刷工組合
一、三〇人
二、（理事）秋元淸一郎、宍倉仙之助
三、支持せず。（理由）勞働組合へ政治的意見を取容れるのは有害無益なることを確信するため。

▲出版印刷勞働組合（日本勞働總同盟系）
一、四八五人
二、（主事）田中小二郎、（執行委員）佐藤信健
三、社會民衆黨（理由）勞働組合黨若は農民組合黨であつてはならない事、無産階級黨でなければならない事

▲橫濱市電共和會
一、八七〇人
二、（執行委員長）坂本佳治
三、勞働農民黨（理由）綱領政策宣言等共通點あり）

▲因島勞働組合（日本勞働總同盟系）
一、八五〇人
二、（組合長）小川近一（執行委員長）村上幸一
三、社會民衆黨を支持すべく進むことゝ思は

れるが目下討議中

▲中國勞働組合自由聯合會
一、八一七人
二、不答
三、無産政黨に對し積極的ブチコハシ運動をなしつゝあります。『政治は支配である』政治運動に依つて吾々勞働者の眞の解放は出來得まいと信ずるから。

▲吳官業勞働組合海工會（海軍勞働組合聯盟）
一、二〇・〇〇〇人
二、（會長）久能寅夫、（副會長）大澤勝治、屋代一雄、岩佐六郎、（議長）宮崎紫市（副議長）山本龍二
三、有志に依つて獨立民衆黨と云ふ地方政黨あり、黨員貳千餘名、吳市を中心に廣海田市各勞働團體と聯絡あり。

▲岡山純勞働者組合
一、二九二人
一、不答
三、勞働者自身の直接的純經濟運動のみやつて居ますから無産政黨の支持はせず。

▲京濱勞働技友會本部
一、一・〇〇〇人
二、（常任委員）原野富之助（常任委員）八城竹太
三、組合として支持する政黨なく、個人加盟は一定せず。

▲大牟田合同勞働組合
一、一五〇人
二、（幹部）高木卯一郎、福山正利、彌永重人平山三七生、森吉光
三、勞働農民黨（理由）同黨が眞に階級的單一政黨なるが故

▲自動車勞働組合
一、二二五人
二、（組合長）土井直作、（會計）軍地審三
三、社會民衆黨（理由）政黨運動は國民全體の支持をうけなければならない。然らば今日の日本の現狀では勞働組合を單位にして政黨を作ることは大衆の信賴を得ることは出來ない。それは勞働組合の運動が未だ普遍化されて居ないからである。即ち勞働組合を未だ不良團體か無賴の徒の集團であるかの如く考へて居る人々が多いからである。我々は政治上に於ても勞働運動の上に於ても一般國民の理解され正しく承認される運動をしたいと思つてゐるからである。

▲郡山勞働組合
一、三一〇人
二、田中利勝
三、日本勞農黨（理由、無産大衆の要望が單一政黨にある、然るに多種多樣の政黨簇出の奇現象は大衆をして困惑せしめるものである。この混然として描き出された現象を仔細に調べるならば日本勞農黨は眞に生る可き原因があつた。それは過去一年有半に亘つての無産政黨組織運動の過程と經驗の必然的結果である。無産階級全體の要望と利益を無視し左右兩翼の觀念的利己的抗爭が大衆的結合を破壞しその害毒に對して眞に日本の社會的狀勢の正確なる認識即ち階級的立場を嚴守し無産大衆の要望を行動の上に大膽に率直に表現する日本勞農黨を支持するものである。

▲日本船舶司廚同志會
一、五・二三八人
二、入船愼吾、鵜飼務、伊月叶、野田喜一、
三、日本勞働黨、

▲交通勞働總同盟
一、二一・〇〇人
二、（中央委員）缺員、（常任委員）吉田廉（東京）塚本信格（橫濱）菅忠正（大阪）
三、組合としては支持する政黨なし、組合員各自任意の選擇にまかす

▲市電自治會（交通勞働總聯盟）

一、一五・〇〇〇人

二、（中央執行委員長）吉田廉、（中央執行委員）安藤祐二、石毛留吉、元島健太郎、馬場五四三、小林章治、井上保彦、高野弘、小林德三、榎本幸次郎、松原榮治郎、岡正巳、篠田八十八、松丸爲吉、（中央會計）鈴木晴治　坂本雄三

三、支持する政黨なし、組合員各自の自由にまかす

▲關西勞働同盟會（總同盟系）

一、一二・〇〇〇人

二、（會長）塚本重藏（主事）西尾末廣

三、社會民主黨

無産階級政黨の今日の重要なる任務は、組織勞働者は勿論未組織勞働者を抱擁し得ると既成政黨に取り込まれる恐れのある中間階級の投票を可及的多く獲得することである。そして明日の任務は、無産階級の政治的社會的、經濟的覺醒の基礎の上に立つて、政權を無産階級の手に奪取することである。此の任務を遂行し得る可能性を十分に持つてゐるものとして、社會民衆黨を支持するものである。

▲關西勞働同盟會（總同盟系）

一、一二・〇〇〇人

二、（會長）塚本重藏（主事）西尾末弘

三、社會民衆黨

▲日本通信總聽盟本部

一、五・〇〇〇人

二、（顧問）海軍豫備少佐金子忠吉、醫學士福田雷助、（委員長）岡崎竹次郎、（會計係）堂前孫三郎、（書記）岡崎生

三、政黨加入は現在考慮中、

▲横廠工友會（海軍勞働組合聯盟）

一、一〇・〇五一人（昭和元年十二月卅一日現在）

二、（會長）川島不二郎、（副會長　增田潞衞、（會計主任）田中傳吉（監事）若林軍吉、安田加年彥石渡友吉（以上本部側（支部長）加藤勝莊、（副支部長）山田利一、（支部會計主任）石渡友吉、（監事）上坂保、中村利平

三、孰れの黨をも支持せず（現下の狀勢に於て）

▲神戸地方評議會（評議會系）

一、一・二〇〇人

二、（地方常任委員長）奥田宗太郎、（地方常任委員、坂野勝次、荒本從繩、輪田武一、西崎友次郎、海野宗行、藤田源六

三、勞働農民黨。吾が國唯一の階級的大衆的な共同戰線黨であり、同黨をおいて眞實の無産政黨はあり得ないから

▲名古屋向上會本部

一、一・五四八人

二、（會長）西浦宇吉、（主事　長瀨繁太郎

三、勞農民衆黨。（愛知、岐阜、三重、三縣に亘つた地方政黨一月八日結黨式執行。參加組合名古屋向上會、濃南同盟、市電互助會、東部借家人組合、中部農民組合等黨員一五・〇五〇人）

（理由）日本農民黨は素より他の三無産政黨とも、頭ばかりの猿芝居だ。吾々は、全國的の無産政黨の出現するまでは先づ自分の住んでゐる市、郡、縣を基礎として自治政に、縣政に更に國政へ……この標語で進みたい。

▲南海同志會

一、二・三〇〇人

二、（會長）翔原豐一（副會長）中前熊雄、宮田慶助、幹事長）岡本淸太郎（書記長）若林幸一郎、書記）末廣十城（會計主任）山下近市

三、無産政黨に關して立場を明確にしてゐないが感ずる所率直に言へば現代大山氏の統制の下にある勞働農民黨は吾國無産階級、卽ち勞働者農民小商人、サラリーマン、小商人等の利害を代表するものだと考へる。

從つて無産階級者が勞農黨を支持するのが當然でなければならぬ。

吾等は勞農黨結成當初より厚意を表するのみならず、その後擡頭せる無産政黨は何にを苦んで斯くまで小黨分立を企てるのであるかと疑ふ者である。

先づ現代無産政黨としては勞働農民黨をのぞいては他に選ぶものがなさそうであると信ずるものである。

目下の處吾組合としては個人的にもせよ勞農黨發達の爲め努力を惜むものでない

時評

支那最近の形勢を望見して

米田實

一

隣國支那が今や重大な變化の機に遭會してゐることは、何人にも異議が無からう、それは久しく南方の廣東に雌伏してゐた國民黨政府が中部支那然かも揚子江畔の宜昌に本部を移すの盛運に逢着したのでも分るのである。

宜昌は人口五十萬の小市、その近き漢口にも及ば無い、廣東に比すれば勿論問題になりやうが無い、併し乍らそれは十五年半前、明治四十四年、宣統三年十月十日、國民黨系の先達が「革命滅滿興漢」の旗を擧けた地であり此日は今日支那の國慶日となれる位ゐであり一昨年死んだ孫逸仙などは、成功の曉に此處に都せんと夢みて居たのであつた。又た國民黨政府にして天下統一の志あるならば、南方に僻在せずに、せめて揚子江まで押し出さねばならぬとは、誰も考へた所であつた、依つて政府本部北遷そのものは、毫も不思議とするに足らぬ。唯た此擧をして可能ならしめた南方軍隊の最近の成功に至つては、さう輕々看過することが出來ぬのである。

思へは蔣介石を總司令とした北伐軍若くは國民革命軍の昨年後半期の大勝利は疾風迅雷、耳を掩ふに遑あらしめざるものであつた、その北進計畫は三月頃からあつたとしても、廣東軍兵の北進は五月頃からしか始められ無かつた。それも未た問題たり得る程では無かつた。ところが其後張作霖吳佩孚が天津會行の會見で眞面目に國民黨征伐を誓約し、その策を進むるに至つて、七月九日蔣介石は馮玉祥の國民軍と相應して北伐を斷行することとし、革命國民軍總司令部を造り、自ら總司令となつた、而してその準備完了、廣東を發したのは實に七月二十五日であつた、ところが八月には衡州靑後、湖南省を從へ次て江西に侵入する筈の處、機先を制し、虚を衝くを可として九月湖北省に入つて九月一日武昌を包圍し九月七日漢陽を陷れ、一轉江西省に於て再ひ敵の機先を制するの策を取りて、九月十七日南昌を占領し同時に湖北に於ても十月九日には攻圍四十日の後武昌を陷れたのであつた。世人は宜しく之れが二箇月有半の短時日に於ける收獲であつたとを記憶せねばならない、又たそれが南軍の驚く可き長距離の突進を意味するを忘れてはならない、而して此等は先づ吳佩孚系統を敵として戰はれた、ところが遲蒔ながら南軍活躍に驚いた孫傳芳系が中立の衣を脫いて參加したので之を敵として戰は進められ、然かも浙江、江蘇に於ける彼の地盤も搖き出したので、孫は多年の仇敵張作霖に憐を乞ひ今や安國軍の出現となつてゐる。

併し予は今更ら半年の戰史を記述しやうと言ふのでは無い、唯た問はねはならぬのは國民黨軍最近の成功が示す意義その者であらねばならぬ。

二

國民黨の革命軍は如何にして大成績を擧げたか、之にはそうに簡單に片附け得られぬ程、種々な原因がある、たとへば北京駐箚米國公使の償權一億圓許りが未拂であるのに、北京政府が關稅及鹽收入剩餘を擔保として內債を募集するの不當なるを說いて抗議した件並びに、日英等政府もその後之に倣つた件なども、一原因だ、何となれは之が爲め內債に依つて軍費を得んとする吳佩孚等の計畫は面白

く行か無くなり、長江の軍人連を失望せしめたからである、揚子江方面の吳系將軍連の忠實さは吳佩孚が與へ得る黄白の額に正比例するものであつた、兵士に給料を仕拂はずに、どうして戰はしむることが出來やうとは、彼等の心事であつたのである、故に右の列强の外交は、その豫期せざる南方援助の結果をもたらしたものであつた。次ぎに今度の北伐軍の規律整然、掠奪等の非行が少かつたのは、之と爭ふた舊軍の比では無かつた、之も人氣を南方に靡からしめたもの丶一つで即ち成功の一因である。

然かも予が重きを置くのは此等の原因ではない、之よりも一層重大なる他の二原因にある。それは(一)南軍即ち北伐軍にはこれ迄の普通の支那軍隊にない熱があり、主張の爲めに戰ふてふ自覺があつたこと丶、(二)國民黨の靑年の各地に於ける宣傳の爲めでもあつたが中部支那でも、其他でも各種の階級、各種の地域に於て多數の共鳴者を生し、それ丈け南軍を人氣ものたらしめてゐたと是れである。

先づ第一の點から言ふと、從來の支那の軍兵は俸給を貰つて鬪ふ機械であつた、何の爲めに戰はねばならぬかと言ふことも知らず、その屬する將軍に忠誠を抱く譯でも無かつた、俸給が貰へねば他に附隨するなどは茶飯事であつた、故に生命を惜み、戰爭らしき戰爭をせず、發砲はしても死傷者の如きも、戰ふ本人等よりも、見物人の流彈に中るもの丶方が多い位ゐであつた。故に戰の勝敗は、戰鬪そのものよりも、黄白に依る敵の一部分の買收、之に基いて起る裏切り、若くは空景氣の示威運動で決するのであつた。此度革命軍と對抗した軍隊も矢張り此流のものであつた。ところが革命黨軍は之と異り、善く戰爭の目的を理解し之に熱烈に共鳴する靑年學生が中堅をなしてゐた。ソコデその戰鬪は本眞の戰鬪であつたのである。如何してコウなつた乎と言ふと、蔣介石(浙江省出身、浙江陸軍武備學堂、保定軍官學校に學ひ、後日本に學ぶ、年齡四十三)は孫逸仙を代表してロシアに遊ひ、歸國後、大正十二年(民國十二年)黄浦に軍官學校を起し、之が長となつてゐた。今日迄のところで卒業生一萬三千、在學生七千と數へらる丶が、此等は軍事を解する以外に、支那革命の理想を解し、孫文の三民主義(民族主義、民權主義民生主義)を奉じ又た對外的には國權回復熱に動かされつ丶あるものである。ソコデ蔣介石はその養つた子弟を士官其他として各軍に配置したのである、從つて彼等を中堅とする南方軍隊は、最早や北軍のやうな戰ふ機械ではなかつた、「行軍はいやだ鐵道で行き度い、雨降れば傘を用ゐ、夜は成る可く戰はず、」と言ふやうな連中とは違つて居た、俸給の支拂具合で敵味方孰れにも變るやうな面々では無かつた、彼等は生きて居た、彼等には熱があつた、ソコデ生命を鴻毛に比するの勇氣もあつた。此軍隊を提げ來つて、主張も熱も無く、金丈けで動く、舊軍隊に對抗する、それが勝利に次ぐに勝利を以てしたのも、亦た何の怪む可きところがあらう。

而して我々が今日考へねばならぬことは、コウ言ふ魂あり、理解あり、熱ある軍兵を南方が得たと言ふ事實が獨り昨年の丈けでは無く、今後支那の軍事的局面否な延ひて政府的局面に影響無しには終るまいと言ふ點であらねばならぬ、何となれば、之で成功を經驗した國民黨政府は必らず今後此種の軍隊養成策を擴張す可きこと、明々瞭々たるところであるからである、のみならず張作霖、吳佩孚其他軍閥の面々は個人中心で集まる團體をこそ一時的に備ふるを得れ、別段に人心を惹くに足る確乎たる政綱を掲げてゐるのでも無く、自ら之を了解する能力も無いのだから、コウ言ふ種類の靑年の養成には不適當である、これに

そ實に明確で且つ相應なる弘さを有するプログラムを持つ國民黨の獨特の壇場だからである、故に予はドウしても今後の支那で殊に老人去り青年の勢力伸ぶ支那で此種の分子が益々有力となることを想像せぬ譯にはいかぬ。

若しそれ第二の點たる中部支那其他に於ける宣傳の効果とは何かと言ふと、大正八年巴里講和會議頃から支那では學生運動が勃興し、隨分優勢なものとなつてゐる、ところが此等學生は直截明瞭で且つ理想的な政綱を持つ國民黨の共鳴者である、又た歐洲戰後支那で勞働運動が起つたのだが、之も國民黨の根據廣東を發祥の地とし、諸工人會（勞働組合）は國民黨系との聯絡を持つてゐる、此兩者を基礎とし、又た機關として支那各地に行はれた國民黨の宣傳は陰に陽に隨分盛んであり、シンプソンも言つて居るやうに非常に暗示に動き易き支那人社會の人氣を國民黨に向けてゐることを拒むことが出來無い。かくて湖北以下各地で周圍の壓迫が北方軍人の開城若くは降服を促した例も起つた。否な北方軍人自身の間に於ける國民黨の宣傳も相應の果實を結んでゐたのであつた。是れも確かに今回の南方勝利の一重因たるに違い無いのである。然かも予は思ふ、「今度の戰勝そのものよりも、寧ろコウ言ふ人氣を造り出したこと自身こそ、將來國民黨の勢力増進をトす可きものとして、一層大切であり、一層重視す可き要點ではあるまい乎」と。

三

之を要するに、國民黨軍昨年後半期の戰勝は偉大なものであつた。けれどもそれよりも大切なのは、戰勝を齎らした二大原因――それは今後も繼續するものだが――が示す意義其者であらねばならぬ、此二大原因が存續する以上、國民黨の勢力は、益増大するものと言はねばならぬのである。

かく言ふと、問題が生ずる、國民黨は支那統一に成功するだらう乎是れである

大勢から言ふと、支那の將來は現在の軍閥の手にあらずして、大體此系統の手にあらねばならぬと、予は考へる。此系統の名義と形ちはドウ變るとしても。だがそれが急速に現はるゝかと言ふと、予はなか〳〵そう思へ無い、言ひ換ふれば、國民黨の發展が昨年後半期のやうな調子で飛躍的に進むとは信ずることは出來無い。

何故ぞ、支那人獨特の内訌が國民黨をも禍ひする可能性が十分に存在するからである。

支那人位ゐ内訌に耽るものは少い、舊軍閥の例を見よ、大正六年（民國六年）以後段祺瑞系の安徽派が優勢であると、徐樹錚、張作霖の爭ひとなつて、大正九年安直戰爭で安徽系沒落の原因を造つたでは無い乎、又た大正十一年奉直戰で直隷派の天下となると、吳佩孚、馮玉祥の疎隔から、大正十三年の直隷派破滅を喚び起したでは無い乎、之は二三の例で、其他陰謀、詐略、小爭を持し且つ之を樂む實例枚擧に遑か無い、近頃は特に烈しくなつた。而して程度の差異があつても、國民黨側も同じ通弊に惱んでゐることは、ドウしても否認することが出來ぬのである。孫逸仙時代の廣東の内訌小爭は、今更ら繰返す迄も無い、孫氏沒後の一ヶ年餘丈けを見て、昨年三月蔣介石氏のクーデター（自由黨員四十名を逮捕し多數のロシヤ人を放逐したる件）、國民黨内右黨の一昨年十二月北京西山に於ける會合の決議を始めとして引續き現狀變化を求めつゝある事件、昨年後半蔣介石北伐留守中、廣東に行はれた之が排斥密謀等、數へ切れぬ程である、かゝる同黨の内訌には二つの原因がある一は黨内に共産系と非共産系の爭ひがあること、一は軍閥側に見るやうな個人間の野心に基く爭があることである。蓋し大正十二年

上海に於ける孫逸仙とヨッフエとの會見後、孫氏は共産主義そのものを受け入れたのでは無かつたが、支那時局に處する武力準備策等に以て、ロシアに學ぶ可き所あるを見、方便として之を利用し始めた、即ちボロヂンを政治顧問として招き、ロシア軍人若干を軍官學校教師として招き、玆に共産派の流れが廣東に入つたのである、之と同時に共産派、非共産派の內爭が同黨內に發生するのは、自然であらねばならぬ、現に孫氏の子孫科氏の如き非共産派の驍將である。此爭は止むを得ぬものだらうが、國民黨政府の弱點には違ひ無いのである、だが之丈けで無く、今の支那人には個人本位の爭ひが烈しい、最近七八年の廣東政爭は、寧ろ此意味のもの丶方が甚しかつた、但し予は玆に詳述する餘裕が無い、唯だ多年浸潤せる惡風は、軍閥と非軍閥を通じて、今猶存在しつ丶あるを悲まねばならぬのである。

だから予は國民黨政府の勢力北進は大勢であるとしても、その進捗は思はる丶程早からず、幾度びか蹉跌頓挫顚覆の悲しむ可き徑路をとらねばならぬことを想像せねばならぬのである。

四

以上は支那時局の最近發展に對する予の所見を述べたものだ。

說いて玆に及んで、一言を加へねばならぬのは、此時局の展開に關する列强の態度である、說くものは曰く、英國は北伐軍の戰勝を見て、從來の外交方針を一變し、國民黨政府承認に突進せんとすると、或は曰く米國も局面を考慮してゐると、曰く日本も又た苦心中だと、此等の說は昨年十一月上旬外務卿チエンバレーン氏と東洋問題を凝議し、次で支那に來た新英國公使ラムソン氏の昨年末漢口訪問等に關聯して惹起したものである、而して之は香港プレス、上海北支日報等の所論にも、英本國の新聞にも反映したのであつた。

が、予は國民黨政府承認問題が急に實際問題化しやうとは考へぬのである、何故か、外でも無い、北伐軍にしても進んでは見たが、それは步一步地盤を堅めて進んだのでも無く、單に千里長驅したのだから、當分勢力區域を內容的に安全にしなければならぬ、又た前に指摘したやうに內爭の問題もある、だからそれが急に揚子江を擩ぎつて北進するのは困難である、此一事は北京政府が少くとも此處しばらく北半の支配を持ち續くるを意味する、故に列國の廣東政府承認は、支那てふ一國の中で二つの政府を承認することであらねばならぬからである、尤も一國でも英帝國が本國の大公使以外にカナダ、アイルランド等から公使を出すを許した例はある、現にカナダの如き昨年末公使を米國に駐剳せしめた、しかし米國側は之を別立のもとは見ず、英本國大使の補助者位ゐに考へてゐるので、クリッヂ大統領も自分の方ではカナダに新公使を任命せぬ方針だと傳へられてゐる、殊に國民黨政府の求むる承認と言ふのは「支那全體の政府として」の承認であつて、一聯邦政治機關としての承認で無いから猶ほ更ら厄介だ、同政府が支那統一を完成する迄は實現困難だと言はねばならない。

然かもかく言ふ予も最近英國外交に現れんとする變調そのもの丶決して輕視す可からざることを知るものである。蓋し之迄英國の外交は國民黨政府を敵視したこと、恰かも國民黨が英國を敵視した如きものがあつた、之は英國の香港領有をつゞけ、又た九龍の租借を續けつ丶ある有樣を眼前に見る廣東政府の反英氣分の旺盛なる爲めでもあつた。又た英國を敵視するソウヰエット・ロシアの勢力、廣東に入れる爲めでもあつた、併し英人は世界人類の中でも最も賢明で且つ周到なる打算家

である、若し將來國民黨系が支那の支配者となるものならば、大局上、速かに和睦協同する方有利なことを熟知してゐる、殊に一昨年五月三十日上海の學生射殺事件後翌六月より昨年十月迄十六箇月間香港は國民黨系のボイコットを受け、その貿易は五割に減じ、悲慘な經驗を嘗めたが、更らに此派の權勢が英國の經濟的勢力圏たる揚子江にも伸ふとなると、算盤上から、何とか國民黨系との協和策を講ずることを便宜且つ必要とするのである。

否な〻〻、之ばかりでは無い、廣東政府にして將來支那の支配者たる可しとすれば、今日同政府內に或る程度迄喰ひ込めるロシアの勢力を放逐することは、亞細亞大陸全部に亘つてロシアの敵たる英國として、最大の急務であらねばならぬ、此點から見て英國と國民黨との敵視は益々弱き支那をして止むを得ずロシアの腕に據らしめロシアの對支勢力增進を導くものであり、之に反してその妥協はロシア勢力減退の機會を造るものたること、三尺の童子にも分らう、之も英國の對國民黨策變更を促す所以なることを否認することが出來無い。

だが是れ獨り英國のみでは無いのである、局外的立場、絕對不干涉を呼號しつ〻唯だ貿易をのみ占めんとする米國にしても、又た滿洲の關係から北方支那に重大なる關係あるが故に、新進支那人に同情しつ〻猶軍閥系を輕視し得ぬ日本にしても、究極に於ける立脚點は共通なものがあらうと思ふ、孰れ年月と共に勢力增加し、中華民國の支配者の地位に到着するのが、軍閥に在らず、國民黨系（名目と姿とは變化することあつても）に在るとするならば、その外交が漸次後者を相手とせねばならぬに違ひ無いのである。

五

但し外交は生きものである、大勢は動かぬにしても、一時的には如何樣にも變化する、國民黨政府が今後如何にその統一策を進め行くか、如何に今後の政府に於て常識と健在さとを發揮するか、條約改正、其他國權回復諸問題、國際債務問題につきての主張の穩健化如何、その主張のプラクチカビリテイ如何等は、諸外國の所謂承認問題若くは之に到らざる程度のその親善策を左右すること、疑ひを容れぬ所である、故に列國も注意を怠つてならぬが、國民黨政府も自省自重が大切だらう。

六

所見を述べて玆に至ると、突如、漢口方面からの飛報に驚かされた、それは一月三日漢口英國租界稅關附近で正月休みの支那人勞働者數千に對する宣傳者の排英演說があり、之を危險と見た英國官憲の退去要求から、大衝突を起し、群集の租界侵入、支那兵の出動並びに英租界警備となり、續いて英租界は漢口國民政府會議に任命した外交、交通、財政各部代表者各一名づ〻と衞戍司令部漢口所長、及び陳友仁（外交部長）等より成る支那側の臨時管理委員に管理せらる〻に至つたことである。

之は一應驚く可き事件だ、併し顧みると、別段不思儀では無い本來暗示に動き易い支那民衆である上に、久しき國權束縛の悲む可き狀態に呻吟してゐる現在の境遇に置かれては、コウ言ふ騷動も起り易からう、その起つた騷動を利用して、租界回復と言ふやうな單獨直接行動を策することも、亦た國民黨系の政府、就中亞米利加のキユーバ島を振り出しに世界を放浪した狂熱的な理想派陳友仁氏などが有力になつてゐる漢口政府としては、あり得可きところである、否な蔣介石等も夙に北

伐軍前進の途十月、十一月頃國權回復の自力的實行と稱して民衆を煽してゐたのではなかつた乎、尤も之には外國側にも罪があつた、即ち一九二一年ワシントン會議の條約及び決議の行懸りで支那の諸稅國權回復を國際協議の問題たらしむるやうにし乍ら、愈々會議が開かれると、相互の小論爭の裡に責任を曖昧にし、巧みに支那の希望實現を遷延し去り、結局支那をして列國會議不信用の念を高めしめたが如きもその一である、又た性質は違ふが、列國が近年支那に於ける條約尊重を矢釜しく言はなくなり、それが支那人の心理に反映しつゝあつたことも忘れてはならぬ點である、例を擧ぐれば一九〇一年北清事件議定書に依つて列國が許され居る北京と海上の交通自由規定が戰爭中の支那軍隊（一年前の例を見よ）に蹂躙せられたる如き、中央支那に於ける鹽收入が軍閥に沒收せられたる如き、廣東官憲が實際企てたる香港のボイコットの如き、東支鐵道のロシア側吏員を追放したる實例の如き、列國が從前の如く條約權を主張する嚴密さが減し若くは支那が條約を尊重する程度が減じたことを示すものである、コウ言ふ事實も、支那側の列國輕視を促かし、直接行動を促進したことを疑はぬ、又た彼の支那人と同じくアジア人であり、同じく多年悲慘な關稅上の拘束を受け、又た治外法權に惱んだトルコが、戰後（大正九年八月セーヴル講和條約成立後）、ムスタフア、ケマル、パーシアの暴力的反抗に依つて形勢一變し、大正十二年七月ローザンヌ條約によりて遂にトルコに對する關稅上の拘束をも法權上の制限をも撤廢するに成功した實例も、すべてに失望せる支那人を刺戟したことを疑ふを得ぬのである。

併し予は考ふる「支那側のコウ言ふ行動に出づるが、一片列國を刺戟せん一時的策動として丈けならば兎に角、之に依つて國權回復その者を圖らんとするものならば、それは決して眞に成功を來す所以ではない、中華民國の新進分子は此際矢張り陰忍と健全さを示して世界を安心せしむることが急務であらう」と同時に斯く考ふる予は列强殊に英國に對しても一言し度い、外でも無い『容易に暗示に動き易き上に、餘りに久しく國權拘束に惱んだ支那人が失望狀態となつてゐる今日、列强は矢張り會議其他の方法で彼等の希望を回復せしむることこそ、最大急務であらう、就中ロシアとアジア大陸一帶に於て現に烈しく爭つて居り今後も爭はねばならなくなつて居る英國としては、此際絕望に近づき、自然半ばロシアの腕に奔らんとしつゝある人口四億の老大國を敵手より救ふ道としても、大に考慮す可きではあるまい乎」と。

アインスタイン氏の其後

桑木彧雄

アインスタイン氏が來朝したのは震災の前の年の十一月中旬で、其年の暮に迫つて十二月二十九日、門司から日本郵船榛名丸で歸國の途に就かれた。山本氏、石原氏、九大の三宅氏、當時ア氏の宿をされた門司三井倶樂部の長井氏等と共に私も船まで見送つた。同じ船で九大の鈴木氏も渡歐されたが、同氏歸朝後の話に、船中ではアインスタイン氏は常に靜かに何か仕事をしてゐたやうであつたが、又一夜、船中で音樂會が催されたとき、同船の東京音樂學校の某氏と共に提琴を彈じたこともあつたさうである。其後アインスタイン氏は西班牙で講演し、又南米へも赴かれたやうであり、又エルサレムの大學の創設に與か

り、又英國皇立學會からコプレー賞牌を受領されたことなど雜誌に見え、併し又折々は人種的か何ぞの偏執から襲はれたやうのことも新聞で見たが、先年其爲めに氏は伯林を去られやうとし、ネルンスト、ラウエ等諸教授の聲明書で夫を思止まらしめられたやうの騷ぎは其後に起らず、氏は伯林に永住のやうである。氏の著述は單行本としては、改造社のアインスタイン全集にも收められてゐる「相對論四講」以後に新たに著はされたものはないが、其後にプロイセン學士院ジッツングス、ベリヒテ其他物理學の專門雜誌等に發表された論文の數は少しとしない。次に是等の論文の大要について述べる

最近二三十年間に於て物理學の理論は殆ど全く新たにせられた。それは相對論と量子論とが此間に發見せられ、發展せしめられたのに依るのであり、其中、相對論とアインスタイン氏との關係は今更云ふまでもないが、量子論も亦、もとプランクの創意に出でたのであるが、ア氏が之をプランクの論じた以外の領域に應用したことが、かやうに急速に此理論を發展せしめた有力な原因ともなつた。元來、ア氏の研究は皆、現今の物理學の最も基礎的な部分に關係してゐるから、今日諸種の雜誌等に表はれる理論物理學上の何れの論文も殆ど皆、何等かの點でアインスタインの名に觸れずして書かれたものがないと云へるのである。

アインスタイン氏が四年前日本を去つてから後書かれた論文には、先づ一九二三年二月附けのベルリーナー、ベリヒテに、「一九二三年一月はるな丸に於て」と記された「一般相對論に就て」といふのがある。日本より歸國の船中で書かれたものであらう。特殊相對論に於ては、ミンコウスキーの四次元に依りて電磁力は一のテンソルとして極めて巧妙に簡單に表はされたが、重力はさうは行かなかつた。一般相對論に於てはリイマン幾何學を用ひて、重力、萬有引力といふニュートン以來の難問であつた自然力は極めて自然的に空間の曲率といふ幾何學的性質の中に織込まれ、自然科學的にはもはや此上に重力とは何ぞやと問ふことを要しないやうになつた。然るに他の、電磁力なる、普遍的一意義を有する自然力は、マクスウエル以來空間を充たす媒質の機械的作用の如きものに歸せしめられやうと試みられてゐたのであるが、ア氏の一般相對論に於ては、電磁力は、重力と同樣に自然幾何學の體系中に織込まれないで、恰もその寄留者であるかのやうな感となつた。ここに物理學的統一性に於てなほ不滿足があつたのである。之に關して五次元のリーマン幾何學に於て重力と電磁力とを統一しやうとの試みもあつたが、之れより先、ワイルはリーマン幾何學を擴張し、本來の一般相對論では、線分が平行變位した場合に其長不變と假定してゐるのを、この不變といふ假定を除去して、も少しひろい意味の假定を置いた。併しこのワイルの研究は數學的には美しいが、物理的には用ひ得られないとして、エディントンが線分不變の假定を保存して、併し本來の相對論の十個の重力關係、四個の電磁關係、總計十四個の量の代りに、四十個の量を導いて、重力、電磁力を一の世界幾何學の中に收めやうとした。併しその四十個の量を定める式は數學的に非常に複雜である。ア氏の前記の論文は、このエディントンの研究にハミルトン原則を用ひて之を數學的に簡單にしたのである。之に關して同一九二三年五月に又「アッフイーネ、フエルドテオリーについて」といふ論文を發表し、又二年の後一九二五年の論文に於て、自ら之を以て重力、電氣力統一の最後の眞の解と云つてゐるものを發表し、マクスウエルの理論を其理論の近似の結果として

含んでゐることを示してゐる。同年又他の論文で重力と電氣力との本質上に差別のあることを述べてゐる。併し又これらの論文に拘らずワイルの說を保持する論者もあり、又陰陽二種の電氣原子の原々子を考へて統一を企うしやうといふ論者もある。これらに關し尙ほ實驗的證左を缺いてゐるのである。又一般相對論は最後に宇宙論の問題に於て經驗的事實を缺き、問題は不定となり、直觀を缺く嫌がある。二五年にシュレーディンガー氏が一般相對論の一論據たるマッハの認識論的相對論を滿足するが、恒星間に座標軸を置くクラシカルの力學の方法に依り、唯だ、絕對空間を否定する故に運動エネルギーの式を變更する等に依りて、水星移動を論ずるなど其方法巧妙であつたが、遠隔作用類似の項を加ふる等、なほ試みに止まつてゐる。尤も、遠隔作用、近接作用の議論はマッハの「記載」の所說からは問題でないであらうが。

相對論に對者の通俗的著述は今もなほ獨逸に於て往々新刊せらるるが多くは時空計量の概念の誤解に止り、又近時一般に相對論に關する論文の減少したのは前記のやうな難澁な問題が殘されたのみとなつたからであり、相對論自身が時のモーデであつたわけでなく、夫はもはや嚴然として科學の殿堂に納まつたといふべきである。又近頃ミラー氏の實驗が理論の確實性を疑はしめたやうであつたが、之に關し相對論に有利な解釋出で、又實驗の精密度に疑もあるといふが、ミラー氏の結果を否定するやうな實驗の報告もあり、ともかく相對論の論理的建築は容易に崩るべく見えないのである。

相對論の現出は近世科學に於ける一の驚異であつたが、革命的なことに於て一層深刻なものがあるとせられるのは量子論の發見である。之に從へば相對論さへもクラシカルの中に數へなければならないのである。量子論の假定には、相對論をも引きくるめた從來の凡ての物理學理論の假定と水と油との如く相融和せざるものがあるが、然かもそれが自然現象間に從來知られなかつた一の一般的な關係を見出したとせられるのは、普ねく經驗的事實が夫れを立證しつゝあるからである。假りに例を引けば、ニュートンが萬有引力を發見したとき、他の自然力の凡てが近接作用であるのに、重力だけが遠隔作用であるから、當時の學者は或は之をオッカルト、フォースの復活であるとして非難した。併しそれが天體運行の理をよく說明し得ることは固より、形式的には一部分、電磁のクーロンの法則も之に相似があり、分子力の假定も之に基いて出たのであるから、十九世紀に入りハミルトンが力學原理の論文を書いたときなどにも、中心力の假想は自然の根本事實を示すものと云つて出立してはゐるが、遠隔作用であることは依然他と融和しない謎とせられてアインスタインに至つたのである。この遠隔、近接兩作用の對立に似て然かも尙一層根本概念に關してゐるとすべきは、プランクの量子の不連續性と、從來の理論に於ける時間空間の連續性との對立である。然しながら今は、ニュートンの時代と異り、量子の不連續性の謎も後の世紀を待たずして、急速にその本質が捕捉せられやうとしつゝある。

一九二三年のベルリーナー、ベリヒテにアインスタイン氏は「場の理論は量子問題の解に可能性あるか」といふ論文で、ボールの原子模型に於ては電子の運動軌道に於て量子條件を滿足しなければならないとしてゐるのを、場の理論から如何に解すべきかを示した。ア氏は、場の理論を偏微分方程式を與ふるが、其解としては通常所謂イニシャル條件は任意に定められることゝなるが、この場合にはイニシャル條件が量子條件を滿足しなけ

ればならない。それを論じたのである。ア氏がボールの原子模型とプランクの熱輻射の公式とを結びつけた一九一七年の論文は有名な有力な論文であるが、併しそれを未だ不徹底であるとして、ア氏の創意の光量子に統計力學の方法をあてはめて簡單にプランク公式を導いたのは印度のボーズ氏（エス、エヌ、）で、其論文をア氏は獨譯して一九二三年の雜誌に揭載してゐる。而して又ア氏は之を利用して單原子理想氣體の量子論を論じたものを二四年と二五年とのベルリーナー、ベリヒテに出してゐる。ア氏の光量子の假說は所謂コンプトン現象の說明に於て有力となり、パウリが之を擴張して熱平衡論に用ひ、ア氏がエーレンフエスト氏と共著で之を細論したが、光量子論が光の干涉を如何に說明するかゞ難問である。二六年のベリヒテにア氏はカナル線を利用して干涉の起らない場合を實證し得るかと試みたが、それはやはり干涉現象を示したことを報告してゐる。量子論は今ルイ、ド、ブローリー、ハイゼンベルク、シユレーデインガー等の名に依りて一轉期に會しつゝあるが、ド、ブローリー氏の新說に關してはア氏は既記單原子氣體論の中で論及してゐる。又前記の二六年のア氏の論文に依れば、極端なる光量子個體說よりは所謂波動力學の發展に有利であるやうである。

アインスタイン氏には上記の外、ステルン、ゲルラッハの實驗に關するもの等尚數種の研究があるが、上述に依りて略ぼ、ア氏の從來の研究が現時の物理學の中心をなしてゐるばかりでなく、ア氏自身も亦現在常に中心となつて物理學の進步を導いてゐることを知り得るであらう。（終）

無產階級文學の社會進出批判

進出の社會的根據

林　房　雄

　現在の社會では、文學の問題は一般に作者と讀者と出版業者の問題である。文學上の諸流派の榮枯盛衰も、この三つの因子の相互關係の變轉更新の現れだと見ることが出來る。最近、「第二期の發展期」を迎へたと稱せられ、文壇的話題(トピック)の重要な一つを成してゐる無產派文學の問題も、この視角から考察さるべきである。

　と、こうした物の言ひ方は、なべて世の「藝術家」諸氏、サロンの臆人、傳統の堂の午睡者諸君の眉の間に嫌惡の皺を寄らすかも知れない。が、眞理への道は人を甘やかさない。儀禮的な美辭麗句は、科學の門では破產した銀行の小切手ほどの價値もない。

　だから、

(1)「第二の勃興期」を代表する社會主義作家達は、如何にして生れたか？

(2)讀者は何故に社會主義的作品を歡迎し始めたか？

(3)この二つが說明されゝば、第三の出版業者の問題は容易に解決される。何故なら、出版業者と言ふものは、算盤玉の形をした聰明な風見なのだから。

＊

　先づ第二期の社會主義作家達は如何にして生れたか：

　吾國の無產派文學もすでに五年近い歷史をもつてゐる。大正十年直後の所謂第一期の勃興期から震災直後の沈衰期を經て最近に到る紆餘曲折の歷史がそれである。

　嘗つて第一期の勃興を評して、「吾國のプロレタリア文學は文壇の浮浪者達によつて先驅された」と斷じた批評家があつた。――惡意の針を含んだ罵言ではあるが、吾々はそのかげに匿れてゐる大きい眞理の姿を見落してはならない。

　明治大正の文學は――一般に資本主義下の文學は――小ブルジョアの文學である。知識階級中の特殊な一群である職業的作家によつて創作され、小ブルジョアをその主な構成要素とする「文書階級」によつて鑑賞され享受され批評されて來たものである。文壇とは比較的高度の教養を有する讀書階級を對象とする文學を日本の文化史の上に花咲かせて來た。ジャーナリズムによつて公認された職業的作家の集團である。

ところが、この小ブルジョアジー――特に知識階級と言ふ社會群は、社會が平衡狀態にある間は、支配階級たる大ブルジョアジーとの共同戰線上に安住して、平和な握手を樂しんでゐるが、時代が急迫し、社會の轉換期が來ると、自らの立場を失つて、種々な方向に分裂する性質のものである。デモクラシーの說教者、自由主義の旗持ち、黑シャツを着た國粹主義者、銀座の飾窓を壞す無政府主義者、それから新興の無產階級を代表する社會主義者、等々――に彼等の世界觀は分裂する。

文學の作者の場合も同樣である。世界大戰中に完全に帝國主義的社會機構を完成し、同時に世界經濟の落潮に乘り始めた吾國の資本主義は、文壇人の思想をあらゆる方向に分裂させた。現在もさせつゝある。

プロレタリア文學が文壇の浮浪者によつて先驅されたか否かは、こゝでは問はぬ。が何れにしろ、かの「第一期の勃興」なるものがこの帝國主義下に於ける知識階級の一部の反資本主義的傾向の文學的表現であつたことは爭へない。彼等は急激に革命化された。一夜の間に資本主義が嫌ひになつて社會主義が好きになつた。猫も杓子もプロ文士だと言ふことになつた。當時の「プロレタリア文學」なるものが、如何に小ブルジョア的夾雜物で一ぱいであつたか、極めて低度の、殆んど社會主義の名に値ひしないほどの「反抗」と「自棄糞」の滅茶苦茶的表現であつたか――これを說明するものは上記の理由を外にしてない。

果して、第一期「プロ文士」の小ブルジョア性は、一九二〇年前後の世界的勞働攻勢の退潮について、國際的資本攻勢の反動期が來、無產階級運動の一般的沈滯が支配し始めると、いたましくも醜態な尻つぽを出し始めた。

あるものは社會主義よりの逃避を宣言して藝術超階級論の樂園に眠りこみ、あるものは虛無主義とダダイズムの看板を掲げて世紀末の戲作者となり、あるものは舊作家と何等選ぶところのない退窟な作家に化し去り、あるものは都會と機械と一切の近代文明を呪つて牧歌的な農民生活の讚美歌手となり、またあるものは一躍日蓮主義者となり國粹主義者となつて、反動の太鼓を叩くに到つた。醜態の限りではないか！　特に最近には、自ら「アナーキズム藝術家と稱する「プロ文士」の一團は、「勞働階級は俺達知識階級より收入が多いではないか。慘めなのは俺達だ。俺達をどうしてくれる！」などと悲鳴をあげ始めた。あまりにあざやかな屑(ルンペン)インテリゲンチャの尻つぽではないか！

然し、ブルジョア的知識階級の世界觀の分裂は、かように一方に手のつけようのない混亂をひき起しはするが、他方彼等の中の健康で優秀な要素は、眞の社會主義にまで必然的に到達する。

「社會主義の教理は、有產者階級の教養ある代表者、知識階級によつて取扱はれて來た哲學歷史經濟の理論から成長したものである。近世の科學的社會主義の建設者たるマルクス及びエンゲルスも亦、その社會的地位から言へばブルジョア的知識階級に屬してゐた。ロシアに於ても、社會民主主義の理論的教理は革命的社會主義的知識階級の思想の發展の自然的な不可避的な結果として成立したものである。」

これは社會主義理論の發生に就いて述べたレーニンの言葉であるが、文學に於てもこれと全く同樣なことが言へる。社會主義的世界觀及び藝術觀を基調とする文學もまた、文學者の世界觀の分裂の必然的不可避的な結果として成立する。かの所謂第一期の「プロ作家」のうちでも、健康と聰明と勇氣とを有する要

素は、あらゆる不利な社會的地位にも拘らず、よくその節を持し、無產階級運動の一般的發達と步調を合せ、眞に無產階級を代表する世界觀――マルクス主義を把握するに到り、他の種々なる方面から生れた新しい社會主義作家を合せて、あらゆるブルジョア的混亂を排除した新潮流を形成するに到つた。

筆者自身、その同人の末席の一つを汚してゐるにも拘らず、何等のうしろめたさなしに、それらの優秀な要素が雜誌「文藝戰線」を中心とする社會主義作家の一群に外ならぬことを公言出來る。最近の所謂「進出」なるものの殆んど全部が、「文藝戰線」及びこれと傾向を等しくする流派の作家によつてなされた事實は、この公言が單なる手前味噌でないことを證するものであらう。

世界觀としてのマルクス主義は、現在に於ける最も客觀的な最も、、、世界觀である。この世界觀が文學の作者によつて把握される時、その作品が他の流儀のそれを淩駕することは論を待たぬ。況や現在のやうに、後者のそれが、氣の拔けたビールの如く、厚化粧した年增女の如く、讀者一般、文壇人自身にさへそうそう愛憎をつかされようとしつゝある時に於ておや――である。

＊

が然し、如何に自惚れて見たところで、現在の社會主義的作品がその內容に於ては兎も角、その手法、技巧、形式に於て、從來の文壇的作品より一般に優れてゐるとは見ることが出來ぬ。否、僅かに社會主義的認識への第一步を踏み出したばかりで、內容的に尙幾多の缺陷を藏するのみか、形式に於ては、少數の例外を除いて、現文壇の最高水準を距ること甚だ遠いと言つた方が、より正しきに近からう。――吾々は正直にそれを認める。

が、そうした明かな不完全さにも拘らず、それが新しい進出をなし、技巧的に完成した他の流派の作品と肩を並べるに至つた理由は如何？

讀者は何故に社會主義的作品を歡迎し始めたか？

私はその理由を知識階級、讀者階級の世界觀の分裂過程の深化に求める。現在の――帝國主義下の――讀者階級はすでに昔日の讀書階級ではない。その一部は國粹主義とファッシズムの支持者であり、他の一部は、、、、の支持者であり、大部分はその中間にあつて、反資本主義的傾向の波に右し左し去就に迷つてゐるところの讀書階級である新潮社の「社會問題講座」に三萬の讀者が集り、「資本論」が數版を重ねたことによつてもうかゞはれるやうに、可成の多數の讀書人は社會主義的世界觀を要求し、社會主義的文學を要求してゐるのである。加ふるに、無產階級運動の發展、組合及び黨の運動を通じての勞働者と農民の自己敎育は、多くの社會主義的讀書人を新しく生み出した。

文學の社會的存在權の現實的根據は讀者の要求の中にある。社會主義的文學は、帝國主義日本が生み出した客觀的狀勢の中に、その存在權の現實的根據を見出し得るに到つた。反資本主義的な讀書人は、時にあばたをえくぼ化して、新しい社會主義的作品を歡迎しようとしつゝある。

＊

だから若し、吾々社會主義作家が、この新しき進出を空騷ぎに終らせず、讀者の期待を裏切らず、吾國の文學史の上に眞に記念碑的な作品を殘さうとするならば、そのために先づなされねばならぬのは小ブルジョア的夾雜物の徹底的排除である。社會主義的世界觀（特殊的には社會主義藝術觀）の把握であり確立である。量的質的に舊文學を淩駕する作品の提供である。それなくしては、今次の

新進出するものの要するに二三新作家の出現、乃至文壇的潮流の部分的變改に終り、何等文化史的意義を有することなき、蝸牛角上の爭ひに終るであらう。

（最後に、こゝでは社會主義文學に對する檢閲官の、、出版資本の意識的攻勢等の條件を、しばらく考への外に置いて論を進めた。筆者はそれを無視したわけではない。然し、ある種の論者の如く、これらの條件が社會主義文學に對する致命的障害だとは考へてゐない。無產階級の進路に横はる一切、、、、と同樣、これらもまた、、、、、、、によつて緩和され、、、、得べきものだと信じてゐるから。）

——二七・一・四——

無產者文藝運動と文壇及び社會

青野季吉

自然主義の運動をはじめ、これまで日本の文學界には、いろんなイズムの運動があつた。それらの新らしいイズムの運動が一度び起ると、そこに何等かの程度で、鬪爭や壓迫が行はれたことは、事實の示す通りである。これは至極自然なことで、新らしい運動とは、實はその鬪爭や壓迫の起る條件に向つて戰ひ、新らしい雰圍氣を創つて、そこから新らしい藝術を生み出して來るの謂ひに外ならないが、在來の文學界での新しい運動が、どんなに鬪爭や壓迫を呼び出したにしても、プロレタリヤ文學運動ほど、長きに亘つて鬪爭をつゞけ、壓迫を呼び出してゐるものはないであらう。この事實は、決して見のがしてはならないものである。

今日、プロレタリヤ文學の理論と作品とはたしかに、文壇的にも認められ出してゐる。また社會的にもその存在權を確立したと言つてよいであらう。これは決して私の皮相な當事者的幻想ではない。事實、最近の文藝批評や感想文のどの一つをとつて見ても、何等かの關係において、我々の運動について述べてゐないものはないと言つてよい位である。そしてその内容も初期のそれのやうに、盲目滅法に我々の運動の意義を否定し去ると言つたものでなく、幾分かでも我々の理論と、我々の運動のなかから生れてきた作品に、解剖の眼を向けるといふ具合になつて來てゐる。社會的反響の或部分を反映してゐる謂ゆる綜合的大雜誌が、近來、漸く我々の理論と作品に注意を分つて來たことも、事實の示す通りである。が、こゝに留意すべきことは、我々の運動のこの新しい段階が、また新らしい鬪爭と壓迫とを呼起すものであるといふことである。これが、在來の文壇のイズムの運動と對角的に異つてゐる點である。在來のイズムの運動の場合であると、その理論にたいして一應の檢討が行はれれば——新感覺派の場合のやうに、その一應の檢討さへ行はれなかつたこともあるが——そのあとは、傍觀して「よき作品」の出るのを待つといふのが常態であつた。ところが我々の運動の場合では、いつまで行つても理論の鬪爭であり、種種の形態の

壓迫である。

これは何故であるか。それを、我々の理論の不徹底、不完備、我々の作品の未完成、未熟の罪に歸して、それ以上立入つて考へやうともせず、考へる熱意も示さない人をかなり數多く見受けるが、それは、この頃流行語の認識不足である。實は、そこに我々の運動の特質が反映してゐるのである。

我々の文學運動は、言ふまでもなくそれが文學上の運動であると共に、階級的の運動である。その意味において、我々の理論と作品とは、文壇人及び社會人の、藝術上の見解に向つて挑戰すると共に、階級的の本能にまで肉薄するものである。もしそれが單に文學上の運動であるならば、その理論を認めさせることは比較的容易であると言つてよい。また文壇人及び社會人の間にも、一應の檢討によつてそれを受納れる下地が出來てゐる。がそれが階級的の見地に立ち、階級的の世界觀を基礎とし、階級の本能にまで肉薄するものである以上、闘爭の絶えることは決してあり得ないであらう。今日のやうになつたロシアの場合を見ても、本國のプロレタリア藝術理論と、謂ゆる移民文學者派のブルジョア藝術理論との闘爭が行はれてゐるのを見る。

それはそれとして、曩にも言つたやうに、我々の運動は今日たしかに社會的に存在權を確立した。ヂャーナリスチックに言へば、社會的進出をしたと言つてよい。が、それならば果してどれだけの有力な作家や作品が我々の運動のなかから現はれ、どれだけ說服的な批評家や批評が現はれ、どれだけ動かし難い基礎のある發展機關を、我々の運動は持つてゐるか。世に認められてゐる作家で言へば、舊くからの前田河、宮島、金子の諸君、新らしくは林、葉山の兩君ぐらゐのものである。批評家ではほとんど人材らしい人材はないと言つてよい。發表機關にしても、嚴密に言つて『文藝戰線』一つしか我々の運動はもつてゐない。また、我々の運動の『社會的進出』を思はせる劇運動の方面にしても、前衛座が第一回の公演をしたにすぎないのである。勿論この背後には、多くの將來ある作家や批評家、劇運動者が、育成されつゝあることは、私は誰にもまさつて知つてゐる。しかし世に認められたといふ範圍で言へばそんなものである。それは決して我々から觀て、豐富であるとは言へず、多産であるとは言へない。正直に言つてかなり貧しくさへある。

そうした我々の運動が、全文壇に強い刺戟と、根深い脅威と、激しい動搖を與へつゝあるのは何故であらうか。ヂャーナリストのセンスに『社會的進出』と感ぜしめるに到つたのは何故であらうか。こゝにもまた興味ある問題がある。單に我々の勉強が然らしめたとか、文壇に問題がなくなつたとかいふ說明ではすまされないところの、我々の運動の本質を反映した理由がそこに在るのである。

それはやはり我々の運動が、文學上に現はれて來た運動ではあるが、意識的に階級的の基礎に立つた運動だといふ本質の然らしめることである。しかもその階級が、新らしい生活と、新らしい文化を約束してゐる唯一の階級であり、その意味に於て、唯一の戰鬪的階級であるといふ、文壇人及び社會人側の直覺的な認識と、階級本能的な恐怖とに基くものである。彼等は意識的には、その直覺的認識と本能的恐怖とを否認する。しかしそれなしには彼等の心理の激しい動きは說明されないのである。これについて聯想されるのは、かの農民勞働黨が始めて生れ出た時の、支配階級の權力とその諸政黨の激しい動搖である。その無産政黨派はまだ生れたばかりで、臍の緒も落ちてゐなかつた。それにも拘らず支配階級の一致した努力は、この政黨嬰兒を一晝

夜を待たずして締め殺してしまつたのである。もし文藝運動も、政治運動の場合のやうに、ゲワルトで左右出來るものであつたならば、第一期の我々の運動の發生時に、既に締め殺されてしまつてゐたであらうことを想像するのも、決して無理ではない。事實その當時の我々の運動にたいする攻撃の大部分が、撲殺的なものであつたのは、まだ記憶に新らしいことであるし、今日でも公然と、我々に筱口狀をつきつけたり、文壇脱退を說法したりするやうな攻撃が、かなり數多く見受けられるのである。いまふと思ひ出したから書きつけておくが、我々の運動の發生時に、久米正雄氏はいかにも奮激的な口調で、あれはモツプの運動だと言ひすてて、あんなものは何處をどうしても窒息させて仕舞はねばならぬといふすさまじい勢ひを示してゐた。その久米氏の謂ゆる『モツプの運動』は、今日、氏の親友菊池寛氏によると、實に『適時的な主張』だつたのである。久米氏に甚だお氣の毒であるが、これもあの農民勞働黨の誕生の時に、俗物の某政黨が藝術家久米氏の用ひたと同じ言葉で、それを貶してゐたのを、私は覺えてゐる。階級的直覺、階級的本能といふ點から見れば、俗物と藝術家に大した差はない。よいも惡いもない、それが事實である。その事實を認めてさへ貰へばよい。

我々の運動の謂ゆる『第二の鬪爭期』は、ジャーナリストのセンスに『社會的進出』と映つてゐる。これは同じものの內と外との觀方の異ひでしかない。我々の運動は、外部的には貧しいものであるが、內部的には今や一つの大きな飛躍へと準備されつゝある。これがその實體である。我々の階級の力、我々の運動の意識的努力は、この第二の戰ひをも戰ひとるであらう。一・六

新文學理論の確立

――共産主義的主張――

藤森成吉

一、小序（問題はどこにあるか？）

日本のプロレタリア文學運動にはすでに歴史がある。他のプロレタリア運動にそれがあるやうに。

無論、その歴史はまだ長くはない。が、その運動の潑溂たる、その精神の清新强固なる、その業績の目ざましき、外國のプロレタリア文學運動に比して決して遜色を見ない。これは我等の、否、日本の誇とするに足る。

勿論、時代はなほ反動のうちにあり、多艱な將來は終始意識されてゐる。がそれにも係はらず我等には明るい希望がある。何となれば、我等はあまりにもプロレタリア文學についての確信に滿ち、その必然的勝利を想望してゐるからだ。

すでに歴史は第二期に入つてゐると稱せられる。多くのプロレタリア文學作品が、一般世間の、否、所謂文壇さへもの承認を獲得し、その名篇佳作は、所謂藝術價値すらも從來の

文壇の如何なる物にも負けない事が、否立、派に凌駕してゐる事が認識されつゝある。

が、作品に對する理論の點はどうか？　無、論最初からプロレタリア文學派の議論は、その精神と情熱に於いて、學術的造詣に於いて既成文壇を壓してゐる。反對派は常に受身に過ぎない。プロレタリア文學は、まづ議論を以て勝つたとさへ云はれる。試みに論客の名を擧げただけでも、此の派には他派と比較にならない優秀明徹な、又豐富な多數を數へられる。

が、それらの議論乃至研究は、當面の反對派を論破するには餘りあつても、なほ根本的、體系的理論に缺ける憾みがあつた事は爭へない。これは日本にとどまらず、たとへばロシアの代表的論客の議論をよんでも、最も遺憾な一つだ。實は、世界にプロレタリア文學の叫びが擧げられてから、その生命はまだそれほど若いのだ。その若さに伴ふ混沌――無論、作品はその中からでも充分生れ得る。が、より明確不拔な地盤に彼を置く爲めに、否、更に一般的の斷乎たる意識轉換の爲めに、これは非常な重要性を持つ。「プロタリア文學はいいものだとは思ふが、まだよくブルヂョア文學との區別がわからない」と云つた、知識階級の間ですら此の懷疑は、ただ此の理論的確立によつてのみ消散させられるから。

その代表的要望として、最近白柳秀湖氏から贈られたエッセイ集「聲なきに聽く」の數節を拔いて見やう。「若しプローレタリアがブローレタリアの文學を打ち建てやうとするならば、今のブルジョアの（中略）文學論を打破らなければならぬ。今の文學論を打破るには、その根柢を爲して居るブルジョア美學を覆さなければならぬ。然るに今のプローレタリア作家と稱せられる人々は、ブルジョア美學をそのままにし、甚しきはブルジョア文學論をそのままにして、唯作風だけでブルジョア作家に反抗しやうとする。（中略）僕は信ずる。今の美學、今の文藝論は奴隷文明の產物であつて、プローレタリアの立場とは絕對に相容れぬものである。若しプローレタリア作家と稱せられる人々が、眞にブルジョア作家に反抗しやうとするならば、モツト捨身になつて、ブルジョア文藝の基礎を爲して居るブルジョア美學を根こそぎ粉碎しようとする大勇猛心を發揮しなければならぬ（下略）」

氏の、此の言葉は、やや現在の事實にそぐはない。何故なら、プロレタリア作家や論客は決して從來の文藝論や美學をそのままに放置してゐないからだ。どころか、猛烈な反抗を敢てしてゐるからだ。「階級文學論」と云ふ名辭一つでさへ、充分それを證明してゐる。が、氏の言葉を、「新美學、新文學論の體系的理論的確立」の要望と取る時、これは適切な發言だ。その企てすら、然しながら決してプロレタリア文學派のあいだに等閑に附せられてはゐない。無言で研究してゐる人達は幾らもある。すでに發表した分でも、平林君青野君片上氏、又私の「無產階級文藝論」（社會問題講座所載等）がある。

白柳氏自身、私の前述の論をよんで頗る認められてゐる。前途は甚だ明るい。恐らくは遠からぬ將來に、多くの同志の手で從來の美學乃至文藝論は全く革命されるだらう。

その確信の爲めに、實はもう所謂ブルジョア文學派との論戰には餘り興味がない。第二期或は三期に入つてゐると云はれるだけ、問題の中心は更に進展してゐる。それは、プロレタリア文學論內部に於けるコムミユニズムとアナアキズムの論爭だ。恐らくこれこそ、今年の文學論の最大題目だらう。生きた論題の持つ力は大きい。一方に最喫緊のトピックでありつつ、その究明こそ、プロレタリア文學理論確立の最後の要素となるだらう。

、すでにその根本乃至礎石は、私にはハッキりわかつてゐる。それをこそ今論じたい。別言すれば、「プロレタリア文學理論は如何に成り立つか？」こそ、我等の興味の全部だ。「プロレタリア文學理論は成り立つか？」の如き命題は、すでに過去であり過ぎる。さう云つても、なほ未だその邊に疑惑してゐる人も尠くないらしいから、最初一言だけ舊來の文學論に對する批評を書かう。それは又、次に論ずべきコム、アナ兩派の論爭、乃至確乎たる新理論建設の爲めに、決して不要ではない。否、密接な關係に立つ。兩者に通ずる物は、等しく「個人主義」「超個人主義」の問題だから。

二、所謂ブルジョア文學とは何か？

近代文學の本質は何か？　その思想的基調は？——さう問はれれば、私は一言に「個人主義」と答へる。近代文學の新味と特徴は、實に個人主義的解釋に在つた。これは、全歐洲乃至日本に勃興した近代文學に對して冷靜公平な批判を持つ者の、必ず承認するところだらう。單に作品にとどまらない。近代に初めて大きな發展をした美學や文藝理論も、亦個人主義思想の上に立つ。或は純粹な、或は前代からの遺物の封建思想の殘滓を混へて。

此の個人主義思想が、文學に如何に大きな影響と功績を殘したか、如何に單に文學にとどまらず、あらゆる人類生活の方面、即ち社會、經濟、政治、哲學、道德の各部門に亘つて根本的基を調爲したかは、すでにたびたび論じたから（又枚數が足りないから）略く。ただ。その原因を一言に要約すれば、これは唯物史觀の指し示す如く、資本主義時代の經濟的基礎に立つ必然的現象だつたのだ。

此の故に、從來の文學乃至文學理論を革命するには、まづ個人主義の對蹠的立場に立たなければならない。これを、我等は超個人主義思想と呼ぶ。社會、經濟、政治等に現れる場合は社會主義だ。社會主義のイデオロギイ的根柢は實に超個人主義だ。

これこそ、現代及び將來の萬般の根本的基調でなければならない。プロレタリア意識とは何ぞや？　超個人主義的意識だ。プロレタリア文學とは？　又美學とは？　超個人主義的文學、又美學の謂ひだ。此の一言によつて、近代文學と美學は全部革命される運命にある。以上で、「プロレタリア文學乃至文藝理論は成り立つか？」の答へには充分だ。細論は、枚數がないから一切略く。

三、新理論はコムミユニズムに於いてのみ徹底する

去年の夏あたりから、私はたびたび超個人主義文學（此の名稱が決して私の造語でない事はすでに書いた）を論じて來た。そして、小牧君の示唆をキッカケに諸方から論議された。就中アナアキスチックな文學者、新居格、加藤一夫その他の諸氏）からの抗議を蒙つた。一方、文藝戰線やプロレタリア、藝術聯盟の敢然たる共產主義的「進出」があり、プロレタリア文學は、兩派の主張によつて火花を散らさうとしてゐる。

これは非常にいい。かうした問題は、眞摯な論爭によつて初めて研究され、又進展される種類の物だからだ。が、私はプロレタリア文學理論はコムミユニズムの立場に於いてのみ徹底され、又確立する事が出來ると信じる者だ。何故なら、その立場のみが眞に超個人主義的であり、個人主義の對蹠點に立ち得るからだ。

此の斷定に對して、アナアキスト諸君はこんなふうに抗議する。「タワリシチーの意識は何も共產主義者の專賣ではない。アナアキストは社會を無視する個人主義者ではない。」

「個人の自由に重きを置く事は、社會の無視を意味しはしない。」「個人主義の文字に囚はれてはならない。個人主義的無政府主義者と雖、十分に超個人主義的思策の背影を持つてゐる。」「マルクス主義的文藝論でないから超個人主義的でない、とは云へない。資本主義的個人主義にたいする攻擊をそのまま無政府主義に振り向けるなら、どうかしてゐる。」「プロレ文藝論は、マルクス主義の尺度に據らなければならない理由はない。」（新居格君の「超個人主義文學」新潮去年十二月號。）

更に反駁を豫期して同君は、「さうした場合、君等はまた必ずやレーニンが無政府主義者をプチブルジョアの個人主義と罵り、アナアキズムはブルジョア理論だと云つたやうな、有振れた字句を用ゐることも知つてゐる。しかしさう見るのは諸君の勝手……」（「共產主義黨派文藝を許す」新潮一月號。）と云ふ。

如何にも、レーニン直傳でさう論駁するコムミユニスト諸君もゐるだらう。が、私はモ少し親切なアナアキズムの立場を考へる。その私の考へによれば、如何にも、資本主義的個人主義はそのまま無政府主義的個人主義ではない。無政府主義のそれは、資本主義的個人主義と共產主義的超個人主義との中間にある。それは、前に引用した新居君の言葉自身が證明する。云はば徹底個人主義だ。然り、麻生義君の云ふやうに、「プロレタリア文學は新個人主義でなければならない」（毎々新聞、年末所載）のは、アナアキストの立場としては當然極まる結論だ。その徹底の所に超個人主義の面影が生じて來るだけだ。そして、新居君の所謂「超個人主義的個人主義」の苦しい造語が必要になるのだ。

由來、アナアキズムの本質は「個人の自由」だ。「强權」に對する「個人の自由」——すべての理論はそこから出發する。アナアキズムの文學並びに文學論が、どこまで行つても「個人」を離れる事が出來ないのはその爲めだ。然も、「個人の自由」は、果してブルジョア自由主義乃至資本主義の別名であり得ないか？　自由主義と云ふ言葉からが、すでに「個人の自由」と同義語でないか？

が、內容は幾分異つてゐる。然り、ただ幾分のみ。故に、從來のブルジョア自由論と甚だまぎらはしく、ブルジョア自由主義的文學論者の進步に依つて、或はアナアキスチック文學者の幾何の後退によつて、兩者は容易に結びつき、同一になり得る。從つて、アナアキズム文學論は從來の文學及び理論に對抗する何の全き力もない。

更に甚しい弱點は、そのモツトオ「個人の自由」自身の中にある。そもそも個人とは何ぞ？　又自由とは何ぞ？　アナアキズムの文學論者は、果して此の事を徹底的に考へた事があるだらうか。ロビンソンクルーソーならば知らず、人間が所謂社會を形づくり、又その中に住む以上「個人の自由」なぞと云つた事は「社會」の前提なしに考へられるだらうか。社會こそ第一前提だ。それによつて規定され制約された自由のみが、あり得る唯一の「個人の自由」だ。マルキシズムは實に此の明確な認識に立脚してゐる。從つて、その目ざすところは單なる「個人の自由」では決してない。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

そしてその「組織」は、無論社會それ自體の必然的自發的制約だ。所謂「、、」、「、、」を決して本質的に必要、又前提としない。アナアキストの諸君が、共產主義乃至共產主義的文藝を以て、ひたすら强權と支配の思想乃至文學と思ひ込むのは、笑ふべき單純と迷蒙だ。常にロシアを引用しつつ、諸君は、過渡期的形態と理想との區別がまるきりわか

らないのだ。認識不足と思索力薄弱とは云へないか？

以上に依つて、超個人主義文學が如何にコムミユニズムに於てのみ徹底され、又確立されるかを簡單に説明した。なほ「個人の自由」と「强權」との對立、その現實形態としての社會乃至社會運動、文藝運動、――それらについては別に多くの言葉を必要とする。が、與へられた紙數を全く超過したから措く。此の理論に興味を持たれる諸君は、更に新潮、毎夕新聞等の新居君麻生君達の論や、「文藝戰線」の諸文章や都新聞の去年九月と今年一月、東京朝日の去年八月と一月、新潮二月號に載つた拙文を併讀されたい。

1927、1

無産派文藝の深化と分化

新居格

無産派文藝は最近に至つて急速なテンポを持つて社會的進出をした。そのことは較著である。それは無産諸政黨の擡頭と對照してみて面白い。しかし、文藝の方が、より多く躍進してゐると云へる。その理由は無産階級の現に持つ政治的分野では明らかには、、主義を標榜することが出來ないのに反し、無産文藝の局面ではそれがなし得られるからである。稍具體的に云へば、勞働農民黨の如き內面的には共産主義的志向を胙んでゐないでもなからうが、表面的には明白な態度のコンミユニストを排擊してゐるかのやうである。卽ちそうしなければ現在の、この國では解黨を餘儀なくされるであらうからである。だが、文藝の局面では、、、、を標榜して文藝運動がなしえられるのである。文藝戰線一派の如き卽ちそれだ。「文藝戰線」は最近まで漫然たるプロ文藝の共同陣營であつた。該誌の內容が多量に共産主義的であつたにせよ、表面的には兎にも角にも包括的な無産文藝雜誌であつたのである。然かるに極く最近その陣容を新にし、異質的分子を控除して、同質的（共産主義的）分子のみの結成を敢てした。加之彼等は明確なる、、主義的認識を把持して政治鬪爭への進出を打成し來つたのである。そうした狀勢を促進した勳績は靑野君に歸せなければならない。彼が目的意識の論議を以つて文藝戰線一派の進路を明示した。それは往年方向轉換論を社會主義運動の陣營內に提唱した山川均君と同じやうな地位に立つもので、山川君のそれよりもより一層ハツキリしてゐる。彼の文藝論に指導されて來た、文藝戰線一派は我國唯一の共産主義紙「無産者新聞」主催の「無産者の夕」を應援し、更に演劇部では前衞座を組織して公演した。その程度で彼等は着々と進出しつゝあるのである。謂ふ所の第三戰線を漸くにして具體化したと云へるのである。換言すれば、僕の所謂黨派文藝的結成を成し遂げたのである。この國に於ける無産派文藝の社會的進出は（共産主義に就いて云へば）そうした階層を取つたのである。

しかし、アナキストの立場から云へば、コンミユニストが社會主義的認識乃至社會主義、的世界觀による無産階級文藝を思惟しうると

同じ意味で、アナキストも無政府主義的認識乃至無政府主義的世界觀の把持による無産階級文藝が打出しうると思つて居る。少くとも、無政府主義者はその社會思想の上に於いて兩極に居ると云へる所の社會主義的認識に仍る文藝論乃至文藝行動には理の當然として同意し得られるものではない。そこでその方面の立場を立場とするものは、勢ひコンミユニストの文藝論乃至文藝運動にたいする別箇の對峙を明白にしやうとしてゐるのである。

　この無産文藝内の潮流は、今や二つの無産文藝論に區分したのである。更に詳細に云へば、從來漫然とプロレ文藝と總括的に云つてゐた領域が共産主義、無政府主義、社會主義の三分野に分かれたと云へるのである。

　僕は超個人主義文學に就いて、藤森成吉君と論議し合つてゐるが、その問題の如きはコンミユニユストに取つても、又アナキストに取つても、十分研究考察に値する問題であると思つてゐる。また「新潮」一月號に書いた拙論「共産主義黨派文藝を評す」の一文に就いても、藤森君は本誌に反駁する以上に、彼はコンミユニズムに即した文學論の樹立を論ずる相だが、かくの如きは往年社會思想の範圍であつたアナ・ボルの論爭が無産文藝論の領域で繰返されるのかも知れない。かも知れないぢやない、旣に各方面に於いて論議が交されつゝあるかの如くである。無産派文藝が深化したと同時に分化したと云ふのはそうした點が指摘し得られるからである。

　社會思想内のアナ・ボルの論爭以上に、コンミユニズム文藝とアナキズム文藝とは文藝的考察が加味される丈複雜になるであらう。而してコンミユニズム文藝論にたいしてアナキズム文藝論を對立させて論爭しつゝあるのは、ひとりこの國の特殊な文學上の現象で、世界の外の國の現在には或はないのかも知れない現象だと僕には思はれる。

　右の二派の對立に於いて、コンミユニズム藝術論はヘルツフエルデ、フランツ・ユング、ル・メルメンその他等、々、々特に、勞農ロシアの文藝評論壇にはその方面に論者が多く、從つて參考資料も豐富であるが、アナキズム文藝論の資料は殆どない。西班牙の無政府主義作家ウナムノの如き、又ピオ・バローハの如き、獨逸のエーリツヒ・ミユザームの如き、或はピエール・ラムス、ダントン、シヤン・グラーブその他の無政府主義者の物した創作、乃至評論等を參考し、アナキズム思想の核心と、文藝の本質とを檢討して新たな確立を敢てしなければならぬ面倒がある。だが、コンミユニズム文藝論の如くに今の所資料が豐富でないと云ふことは、何もアナキズム文藝論の確立の不可能にはならないのである。

　この國の共産主義文藝家はコンミユニズム文學のみが唯一の無産階級文藝であると揚言する。而してロシヤや、獨逸共産主義文學者の所論を引用して立言を裏付け、更にアナキズムをブルジョア理論の變容であると極論する。その極論をアナキズム文藝の徒が斷じて容認しないのは當然である。再言するが、そこで二つの無産派文藝論が成立つ。更に究極すると、どちらかゞより多く妥當であると云ふことになるかも知れないが、或は二つの社會思想が永久に相容れない並行線の二線であるが如くにあるかも知れない。

　だが、無産派文藝論の分化は上述の範圍に止まらない。更に細分化する。その一つは等しくコンミユニズムの文藝論の領域での分化である。所謂文藝戰線派の黨派文藝即ち政策的コンミユニズム文藝論とマルクス主義の本質により多く即いた所のコンミユニズム文藝論である。現在ロシアの文藝論爭の多々ある中に、右の分派は重要な一つであらう。マル

クス主義の解釋の相異がコンミユニズム文藝論上の異差をも結果するのである。

青野君にたいする平林初之輔君なぞは右に述べた意味での對時を幼芽ながら示してゐるのではないかと思ふが、この國の共産主義文學中に於ける論爭はこれよりいよいよ細分化して行くでもあらうし、さうなつて行かなければ嘘である。それは同様に、特にまだ搖籃期にゐるアナキズム文藝の內部では更に激しく分かれるであらう。と云ふのはアナキズムはコンミユニズムよりも思想的に多様性を持つてゐる。即ち個人主義的無政府主義者の見解と無政府共産主義者とのそれとの間にも分化しやうし、社會思想內に於ける無政府主義的解釋乃至受容の程度で、アナキズム文藝論も非常な異差を見るのが當然であるからだ。コンミユニズム黨派文藝の進出にたいして、アナキストの文藝家が對時的に進出するとすれば、そこにはアナキズム文藝の社會的進出があると云つてもいゝのである。

かくの如くにして最近の無産派文藝はいろんな意味で社會的進出をした。深化は立體的意味での進出であり、分化は平面的意味に於いての進出である。

無産階級文藝內のあらゆる角度が尖鋭にされそれが相克する所に生々潑溂の氣が漲るのである。かくて相互の鬪爭に執意を含み、向學の風が助長され、考察研究の度に深きを加へるならば、全體的に云つて、無産階級文藝はとても大きな社會的進出を結果するより外はないのである。

里見弴著

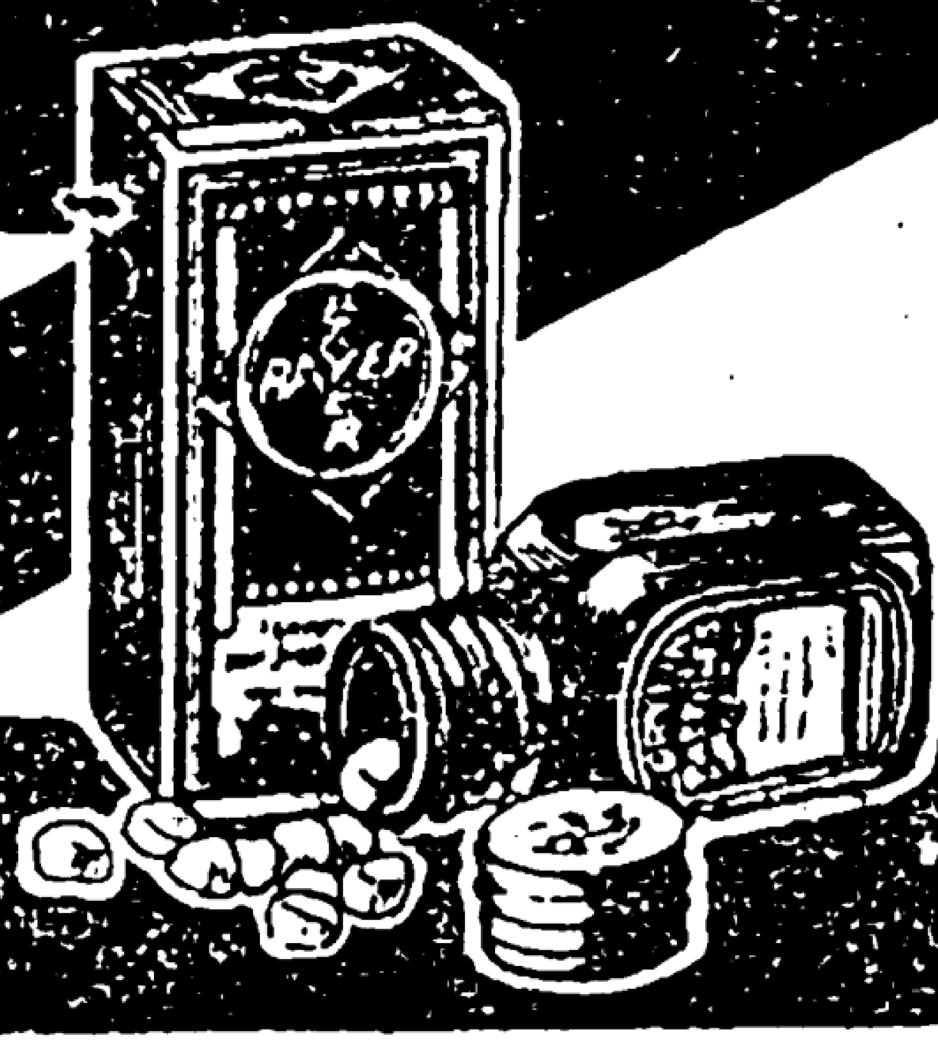
大道無門

定價金貳圓
送料金二十錢

最新刊

豊かなる美感と、深刻なる描寫、自由なる構想と、妖艶の美女。吾々は氏の神品に接するごとに、唯々その豊潤なる美の香氣と奇嬌なる人生の綾に醉はされきつてしまふのだ。今や、氏の熱誠の總てを傾倒せる驗品大道無門は遂に完成した。一點一劃の技巧をもゆるがせにせぬ氏が、此の長篇こそ、實に我が文壇と讀書界に大渦紋を呼び起さずには置かぬものである。凡そ文藝を口にするものの必讀玩味すべき書だ。

發行所
東京市麴町區内幸町
幸ビルデング一階
振替東京八四〇二
改造社



咽喉疾患
調声清涼口錠

本品は世界的著名なる獨逸バイエル社の創製品にして口腔咽喉粘膜に對し鎭靜、消炎、消毒の特效あるが故に

咽喉カタル、劇甚なる咳嗽、嗄聲、喘息、氣管枝炎、感冐等の場合に應用して著效を奏し、又口腔の惡臭を除去し、發音を輕快增强せしむるの作用を有す。

コリフィンボンボンは佳味、爽快にして危險性藥劑を配せず、絶對安全なり。

（一瓶　七十粒入　金壹圓拾五錢）

コリフィンボンボン

（說明書　右記より進呈）　フリードリツヒ、バイエル合名會社　神戸市仲町三七　電
振替大阪六大三六五番

出張所　東京市京橋區北槇町一八日米信託ビル二階



樋口一葉

露伴道人

明治文學に於て獨自の一境地を有して居る一葉女史の上に就いて何かと感想を記して異れとの改造社の依頼を受けたが、大抵の事は自分も既に記し盡して居り、他の人々もいろ〳〵さま〴〵の點から論談してゐるから、餘り新しい事實や觀察を提供することの出來ないのは自然の勢である。

自分が女史に就いて言はんと欲したことは、一葉全集の序文に於て之を盡してゐるつもりである。それに對して異見を懷く人が有らうとも、それは人々の意の相違である、莊惠觀魚、言各々異る有るもので兎角をいふほどに自分はこだはりたく無い。然し自分は一葉に對して出來るだけの同情と觀察と、それから其の周圍の人々から得た材料と作品から得た感じとによつて彼の文を草したことだけをことはつて置きたい。また自分は豫て成心を有してゐて、そして彼の文を草したのでは無い、すなほに自然的に彼の文を草したのであるといふことをことはつて置きたい。それで可い。

一體一葉といふ人は氣の毒な人であつた。たゞ其の短い生涯が運命の波浪に揉まれて終つて了つたばかりで無く、死後に至つても兎角の誹謗を蒙つてゐるのみならず、生前から既にいろ〳〵の詰らぬ噂を得た人であつた。運命の波浪に揉まれたらうと云つても、世に多い例の家庭の衰へに際したといふのに過ぎないのであつたから、たいした事でも無いのであるが、上に老母を頂き、下に幼妹を擁し累を爲すとも頼みにはならなかつた漂浪性を有した兄を有つてゐて、そして孱弱な女子の腕でもつて生活を支へようとしたのであるから、隨分それは妙齡の柔らかい心と纖い腕とには重い惱みと堪へ難い負擔とであつたに疑ひ無い。それはそれとして、年若で死んで了つたのであるから、死人に口無しで、人々に色々の事を云はれても、言ふ者は多勢で、知つた人も知らぬ人も有り、勝手なことを言ふ、言はれる者は一人で彼岸へ逝つて了つて居り、口も利けねば筆も持てぬ者となつてゐるのである。しかも生前から文名が少し發すると同時に、いろ〳〵とあらぬ噂や尾鰭の附いた與太談の種になつた。それは疑ひも無く妙齡婦女で有つたことゝ、且つは其の文筆の中にひらめく一種の氣象が世人の眼を射、好奇心を惹き起した爲とでも有つたらう。

女史の前に「藪鶯」の作者花圃女史が世に出た。これは幸福な家庭のお孃さんで、云はゞ立派な後楯も有り後援者も有つた人だつたらうが、それでも當時の風評製造者とも云ふべき者等が何か詰らぬ小揶揄を傳へたことは有つた

やうだ。曙女史といふ人も一葉より前に世に出た婦人で、これも不幸早世したのであるが、美人で冴々した快い人であつたから、やはり何か戀物語めいた噂や其當時では突飛に聞えた洋行したがつてゐる噂なぞが傳へられた。そんな譯の事情で、色街近くや、岡場所くさいところに住んだ（淺草、小石川）若い一婦人が一枚の彫管で世を立たうといふ氣合を示した段に、いろ〳〵の噂を「人の噂を能無しの能」としてゐる者共の口から立てられるに至らうといふのは、自然極まつた事であつたのである。それで一葉の「濁り江」を讀んで、斯樣いふ名の人が斯樣いふ作をしたといふことを自分が初めて知つた後に、自分の耳を撲つた噂は、其の婦人は冷酒を大コップでグイと引つ掛けるといふ肌合の人だといふことであつた。作中の人物を作者に擬することは讀者の自然に惹起し勝の感である。一葉大酒呑の噂は無論「濁り江」中の人物にさも有りさうなところを一葉に被せた噂で、よしんば一葉が酒を好んだとしても、一葉はグイ飲に堪へるやうな體質の人でも無く、又斯樣いふ方の趣味を愛する性質の人でも無いらしい。まして其後に聞くところに據れば事實無根の談であるといふに於てをやで、市に三虎を物ずきの鼓唇弄舌が生じたまでゞあつた。これのみでは無い、在世の當時から今日に至るまで、多くの人々が一葉に就いて談じてゐるところは、「濁り江」中の女主人公に一葉其人を當嵌めてゐるやうなのが多いことは爭へない。これは當時の作者の用意と今日の作者の用意との異を解せぬところからも起ることであるが、當時は今とは餘程樣子が違つてゐて、作者其者が篇中に顏を出さぬやうなのを高級作品としてゐたものであり、作者の個性が見え、作者自身が言動するやうなものは、非高級作品と見做されたのである。それは當時の文壇評論の傾向の大勢であつて、作者は明鏡止水の如く些の偏倚無く世相を如實に描寫するのを妙品雅品としたこと、當時の評論を檢査したなら今でも立證することが出來よう。是の如き趨勢の中に居た一葉が、習作期的作品の殼から出て、初めて世相描寫に成功したのは濁り江であつたのである。それは近隣に偶然其の題材たるものが存したところから、朝夕の耳聞目視心觀意察の結果に産み出したもので、全く一葉が在る有つて而して後に假構し想設したのでは無く、其の題材となつた實景眞情が在る有つて而して後に一葉が其の才筆靈腕をもつて描き出したのであつた。勿論一葉の耳目を經、一葉の心意を過ぎりて出來た濁り江であるから、無論其の篇章文字の中に一葉其人の香氣も混入してゐぬことは有るまいが、寧ろ一葉自らは力めて客觀的態度を取らうとしてゐたのであり、又然樣したのである。けれども習作時代の筆くせから、純客觀にのみ爲り得無かつたことも思遣られる。が、濁り江は然樣した作品であるから、濁り江中の人物を直ちに一葉に押被せられることは一葉に取つては隨分迷惑で有つたらう。然し濁り江から丁度一葉の名は噪いで、そして世間のいたづら者から幾度も幾度も其の家の標札を剝ぎ取り去られたといふ程であつたから、自然濁り江中の人物を一葉に擬する傾きが當時に起つて、そして種々の噂を生んだことも有り得る事情であつたのである。世の中には誤解する人もある、又誤解するほど不聰明では無いが人の誤解を訂正したがらない人もある、世の中には出鱈目をいふ人もある、又出鱈目をいふほど不眞面目では無いが出鱈目を檢査せずに受取つて之を運搬する人もあ

る。誤解と知りながら誤解を默認する人や、うそつきの出鱈目を正直者が正直に運搬するによつて、世間の眞僞は紛糾するのである。

一葉には自分はたゞ一度面會したきりである。初對面にしては遠慮無しに長座して可なり談話を交へたが、これは一つは西鶴文反古のやうに書簡體を以て其の往復によりて小説を成立させて見たら何樣なものが出來るか知らんといふ鷗外等と自分との企てに女史を一枚入れようといふ鷗外の弟の竹二の言に因つて竹二に同行を求められて訪問したところ、一葉も、役割は定めて貰ふが其他は各人隨意に事をも情をも景をも境をも發展させて宜い、決して筋書を定めて拘束はせぬといふのに興味を感じたらしく、それからそれと談緒がつながつて斷れなかつたゝめであつた。初對面だから勿論然樣でも有つたらうが、どちらかと云へば口數の少い、辯才流るゝが如しなどといふ側では無い十分思つたことも五分か六分言つて默つて了ふといふやうな人に見えた。然しあれだけの文才がある人であるから、手解けて語り交すといふ段になつたら隨分機鋒も鋭利に面白く話すことも有らうが、大體のところは寧ろ思ふことを外に發するよりは自分の肚内に書きつけて置くといふ質の方の人と見えた。後年に至つて交際を生じた女史の妹君は氣も能くつけば辯才も廻る人であつたが、自分の觀たところでは姉の一葉女史の方は、妹君と同樣に氣もつき心も廻る人であつても、それを盡く外に打出して終ふやうな人では無く半分からは自己腹中に藏してしまふやうな人と思はれた。そして其等が日記や雜筆やに現はされたことも有らうし、小説の端々などに打つて出されたことも有らうといふもので、斯樣いふ人が時あつて發する短い言葉には警句や諷刺の面白いものが有るものである。齋藤綠雨も神經は鋭く動く人であつたが、言葉少なの、外發すること乏しい代りに內藏することの多い人で、かつて自分が多人數寄合の席で綠雨の例の如く默りこくつてゐるのを見て、君は又色々の事を腹腸へ書きつけてゐるネと戲れたことがあつたが、一葉とは一度會つたきりだから、深くは何とも云へないが、兎に角に陽發性の人では無く、中間性よりも少し內端の方の人であると看て取れた。音聲の調子と力と拍子とから、それと身じろぎのけはひとからして、盲人は他の人の如何なる人であるかの直覺を得るものであるが、音聲の工合から云つても、一葉姉妹は互に表裏を爲して居て、姉は妹より外發する傾きの少い人であつた。然しそれでゐて內には負けぬ氣峻峙の氣が有り、外に對しては透徹性の働きを有してゐたから、それが發して、あゝいふ文を成したのであり、それから又あゝいふ文の爲に兎角の嘲を招いたのである。

然し又一葉の日記などに就ては言ひ洩らしたくないことが一つある。それはほかでも無い、早い頃の彼女の日記には文章の習作に力めるといふやうな氣分の多いといふことである。これは誰でも若い人の免れ難いことで、兎角若い人は筆を執ると自らに然樣いふ氣分の生ずるもので、その爲に書かでもの事を書いたり、然程でも無いことを面白づくに書いたり、其筆を持つまでは然樣思つても居なかつたことを書いたり、事實を筆拍子に乘つて誇張したり或は省略したり、又或時は感想を幻夢的に鋪張したりして書く傾向のあるものである。で、一葉の日記中に妙に書かれた人があつたとしても、又一葉自身の事を妙に書いたところがあつたとしても、それは必ずしも眞實相ばかりでは

無いと看破らねば眞に能く文を看得て徹せぬものである。といふことを自分は提説して置く。これは何も一葉日記の價値を低めようといふ意味で言ふのでは無い、却つて一葉日記によつて一葉及び他の人が誤解さるゝのを解きほごしたく思ふからである。

人々にそれ〳〵の意見は有ることだらうが、何といつても自分は「たけくらべ」を一葉作品中の最大珠だとおもふ。これは最初文學界だか何だつたかに執つたものであつたが、當初よりして人の意を惹いた。完結したのを通讀した時には、女で無くては、出來ない、或る特殊の境地に居た人で無くては出來ない、此の作者の眼と、此の作者の心と此の作者の手とで無くては出來ない、と感心した。正直を云へば自分も其頃はまだ年も若いし、たかゞアクの強いので自分の身體を保たせてゐる位の者であつたから、大抵のものを見ても感服などしたことは無かつたが、たけくらべを讀んだ時だけは、思はず知らずニコリとさせられた。今日は大分其時分とは異つてゐるし、寫眞の世界だけはドギツイのよりピントを少し的確にしないで、味のあるのを賞美するが、其他の世界はすべてキチ〳〵したやうなのを喜ぶ時代だから、今の人達には何と受取られるか知らないが、自分は今でもたけくらべを愛しそして今日たけくらべを讀んで別に面白くもないと云ふ人があつても、明日になり明後日になつては其人が、あゝ面白い、といふ時の有らうことを信じて疑はないものである。

一葉の作は、西鶴を彼女が讀んで、西鶴の自由大膽さの影響を受け彼女の平安朝文學以來の文學の殼から釋放された時から其光りを放ち出したのである。其の以前、即ち學校教育、和歌和文の先生の教育の桎梏の內に在つた間のものは、それ等教養が矢張り一葉の爲に大なる力になつたには疑ひ無いが、所謂習作時代に屬して、觀る可きものは乏しい。惜しい哉、一葉が卵殼を出て一葉になつてから、即ち一葉が一葉になつてから生存した歲月は餘りに短かつた。其の難治の病を得て、死に臨んだ時、今死んでは口惜しい、と云つたといふ彼女の言葉は眞に彼女の胸中の情を語つたものであつたらう。何といふ悲痛の叫びであらう、其の一語を傳聞した當時の默然たる自分の思ひは今も猶其人を思ふごとに自分の胸に湧上る。



北村透谷君と私

戸川秋骨

私と北村君とはまるきり性格が違ふ、何處と云つて同じやうな處は一つもない。北村君が眞劍で、緊張して、眞面目で、神經質で、終始イラ〳〵して居るに反し、私はその當時から、ぼんやりで、氣樂で、ぐづであつた。併し不思議に私はその性質の反對な北村君が好きであつた。私の一番好い慰安の場所は北村君と對坐する時であつた。北村君はその神經質から、そのイラ〳〵する氣分からであらう、たえずその住居をかへた。大抵二三ヶ月もすれば引移つてしまつたと思ふ。當時「文學界」の同人もそれを一々覺えては居ない、島崎君は最も透谷君と近い人であつたが、その當時の半は旅に居たので、これも北村君の住居を一々知つては居まいと思ふ。然るに私は透谷君に逢ふのが一つの樂みであつたから、その引き移つた處へは必らず尋ねたものであつた。

對坐して何を話したのか、殆んど記憶はない。私は大抵の人と對談したその話題をすぐに忘れてしまふ。恐らく取るに足らぬ事ばかり話して居るからであらう。そんなわけで、さう幾度も北村君と對坐しながら、話題は少しも覺えて居ない。たゞ圓い光つた眼をキヨロ〳〵させ、肩を張り、少し身體を曲げて、いつも敵手を見て居ると云つたやうな態度だけは、三十四五年を隔た今日でもなほ明瞭に覺えて居る。二人對坐の時も、同人の集つた時にも、北村君は、私の事をラスキンと呼んだ——少し馬鹿にした樣な氣分からであつたかも知れないが。これは私に、當時同人のもつて居た詩人的の性質がなくて、考が多少理智の方に傾いて居た爲めでもあらうか。素より私にラスキンの熱もなければ、緊張味もありはしなかつた、今日と同樣に。併し私が北村君を好きであつたと同じやうに、北村君も私をきらひはしなかつた。私をラスキンと呼んだのが、多小輕侮の意をもつて居たとしても同時にそれはなつかし味親味をも示したものではあつた。あのイライラした氣分を休めるほどの効が私にあつたのかも知れない。

透谷君は私達より遙かに先輩であつた、私よりも三つ四つの年長者

であつた。二十歳を超したばかりの當時にあつての三つ四つは隨分の年長であるが、それよりも閲歴に於て、世間を知つて居た事に於て、北村君は遙かに私達よりも先輩であつた。私共にはその頃まだ生活の苦勞なるものは先づないと云つて然るべきであつた。只私一個の上にはそれが可なり强かつた、併し何と云つても、それは書生一人の生活苦であつたが、ひとり北村君には、それが普通の意味に於て迫つて居たのであつた。一家を支へて行かなければならないといふ事は、當時どれほどの苦悶であつたらう。いやそんな事は誰の上にもある事で、北村君に限り特筆するに足らぬ事だと人は言ふかも知れない。が併しこゝに考へなければならない事がある。その生活といふ重荷を一方に負はされ、一方では私共比較的身輕なものゝ考と同一な考をもち、否、むしろ自分が青年新進の思想の先頭に立つて、戰旗を振りかざして居たのはどんなに骨の折れた事であらう。重荷を負つて戰つたのであるが、その重荷はやがて戰をやめさせなければやまない重荷なのであるから始末が悪い。生活のためには、どうしても或る一角で世と妥協しなければならないが、妥協は北村君の性格には到底考へ得られないものである。こゝに於てか非常な苦悶が起る。島崎君の編した透谷集の劈頭第一の「厭世詩家と女性」はこの邊の消息をよく語るものである。詮じつめれば、北村君の死は、この苦悶から來て居るのであらう。世間と妥協する事は素より出來ず。膝を屈して兩親の下に行く事は猶更ら出來なかつた、否それが則ち世に屈從するのであつたから。醇にして一本氣なる北村君としては、どうしても死より他に道はないではないか。

その頃のやゝ進歩した考をもつて居た青年の頭は、多少に拘はらずキリスト教から養はれて居た。私共の頭もさうであつた。「文學界」が則ちキリスト教系統をひいて居るのでも知れる。が特に北村君に於ては、思想に於ても、物質的の關係に於ても、それが濃厚であつた。そんなわけから北村君の生活は主として、キリスト教會の方から得られて居たらしいキリスト教會では、その孰れの教派でも、いろ〳〵な小册子や小雜誌を發行して、その宣教の用に供して居た。從つて其處に世間とは全く隔離した生活費の出所があつたわけである。それで北村君も主としてさういふ方面から生活の資を得て居たのであらうと察しられる。當時筆を以て立つといふ事は、殆んど不可能の事であつた。それも小說を書くとか、又は新聞に關係するといふのなら、それは又別の事であるが、それにしても北村君のやうな一本調子で、世間を敵として居るものゝ筆を以て生活するなどは思ひもよらぬ事であつた。幸に今いふキリスト教會内の仕事は、自家の本領と甚しく衝突する事もなく、大した妥協も要せずして、爲し得たのであるから、これは透谷君の如き人に取つて好都合であつたのである。併しそれとても全然自家の本領を煙滅さす事なくして出來るといふわけのものではなかつた。考がヘテロドックスに、異端的に、平らたく言へば詩人的に、文學的になつて行くと共に、教會とも思想を同じくして行く事は出來なくなる。其處にも妥協の必要が起つて來る。北村君の考にもそれがだん〳〵强くなつて行つたらしい。透谷君はよく私に、教會或は教會に出資する外國人をだまくらかして、といふ言葉を用ひて話をした。だまくらかして、金をまき上げるのだといふのである。こ

れは素より戯談ではあるが、それでも北村君にはつまり、教會の仕事が、彼等をだまくらかすのであると感じられたのである。こゝに於ては最早教會との關係も絶つより外はないのである。かくて北村君は高踏派として笑はれたその本領を完ふし得たのである。蓋し新時代へ入る開路者であり、その犧牲となつたものと云つて然るべきであらうが。

私はたゞに北村君と話すのが樂しかつたのみならず、その書かれたものに一種の魅力を感じたのであつた。それが私に靈感を與へたとでも言つて宜からうか、透谷君の書いたものを讀むと、自分もむらむらと何か書いて見たくなるのであつた。それを以て見ると、性格は全く相ひ反して居るに拘らず、どこか私にも透谷君のに似た性質が幾分かあるのかも知れない。さうだと賴母敷いがと自分ながら密かに希望して居る次第である。が、それは兎に角として、北村君の許へ私を引つ張つて行つてくれた人は、例に依つて島崎君である。例に依つてと云ふとおかしいが、文壇に於ける私の經歷には、必らず島崎君が先達をしてくれて居る、私の島崎君に負ふ處は至大である。然るにその島崎君の書いたものを讀んで、私が感動された事は殆んどないのに、性格の全く異つた北村君のものが、前記のやうにいつも私を鼓舞するのは、全く不思議である。恐らく北村君に一種の魅力があつたのであらう。從つて透谷君に就いて言ひたい事も多々あるが、どうも毎時、私に言ひ得ないのを遺憾とする。



『椎がもと』

—クロ・ド・キャアニュの—

武林無想庵

Villa Max Lolotte, Cros de Cagnes, A.M., France.

一千九百二十六年七月十四日。

——そろ〳〵起きたらどうだね？　いま牛乳屋が來たやうだから。

と、隣室から妻に起された。

眼はさめたが、けふから飜譯の時間を割いて朝の間だけ日本語でなければ、どうしても書けない、また書ける筈もない、自分自身の創作に沒頭する事にきめたので、それについて、いろ〳〵考をめぐらしてゐたものだから、つひ返事をしなかつた。

——まだ寢てゐるのかね？　けふから早く起きて書きはじめるッて云つてたじやないか？　妻は悠々と臥そべりながら、疊みかけて云つた。

——起きたくなりや起るよ。俺は女中ぢやない。また俺の頭はメリヤス機械ぢやない。

すこし神經に觸つたのでさう云ひ返した。

——起きたくなけりや臥てゐるサ。十時までも臥てゐるサ。人が親切に起してやつたのに、それが氣に入らなけりやいつまでゞも臥ておいでなさいだ。

お互に人の事は責めるに急な人間同志だ。こんなくだらない問題にも知らず〳〵それが出る。

起きて火を起す。珈琲を挽く。朝飯の用意をする。妻子と一緒に生活する間は、いつもこれがわたしの役目だ。さうして用意のいよ〳〵出來あがつたところで、妻と子供とは起きて來る。時には子供が中々起きないで妻ばかり起きて來る事もある。イヴオンヌは珍しい寢坊の子供だ。尤もわたし自身も幼ない時はさうだつたと、よく養母に云はれた。札幌の南三條西一丁目の家にゐた時、朝九時になると、カンカチ團子といふものが向ふのかどで、カンカチ〳〵と杵で臼をたゝいてはきまつて人よせをしたものだが、わたしは毎朝その音をきかないうちは、決して目をさまさなかつたといふ。かぞへどし五歳のころの話だ。何となれば五歳の年の十一月ごろは、わたしは養父母に伴はれて、四谷荒木町の東浦といふ人の家に、上京するとすぐ一時寢泊りしてゐた記憶があるからだ。

午前中は部屋に鍵など卸して、子供の侵入を防ぎつゝ、書きはじめようと思ふ原稿について、さま〳〵に肝膽を碎いて見たが、とう〳〵机に向ふまでもないうちに晝飯時になつて了つた。

人間の頭はメリヤス機械よりもつと精巧に出來てる筈だけれど、生產能率は個人〳〵の頭の出來かたによつて大變な相違があるものだが

ら、その勞働の結果はどうしてもメリヤス機械のやうに單純には生じて來ない。

——七月十五日。

きのふは午後からすこし飜譯をした。

去年以來、妻がファスケル氏と約束してゐる、フランスで出版すべき妻の小說の飜譯だ。わたしの佛文はもちろん到底フランスの文壇へづうづうしく持ち出し得られるほど自信のあるものでないにきまつてゐるけれども、どうかしてそれを佛人にわからせる程度には、どうにか漕ぎつけられるやうな氣がしたので、この四月の中旬ごろから着手してゐるわけだ。

妻は每週その出來たゞけを持つて、ニースへ出掛け、Surla Riviera といふ文藝雜誌の主筆で、同時に今年あらたに出來た、カイヨー黨に屬する La France do Nice etdu Sud-est といふ新聞の文藝主任をしてゐる Monsiende Richtes に見せて、充分に添削してもらつてゐる。その結果どうやらものになりさうにも思へるので、失望せずにつゞけてゐるわけだ。

飜譯といふものは結局椽の下の力持ちにすぎぬ仕事であるにきまつてゐる。併し椽の下の力持ちをする人がなければ、この拔くべからざるバベルの障害を蒙りつゝある現代地上の人類に到底眞の Fraternite を望むことは不可能だと思ふ。さういふ意味に於て、わたしは飜譯の事業を尊重する。

飜譯にかぎらず、一體世の中には、甚だ割のわるい職業に、この貴重な一生をばどうしても獻げつくして了はなければならぬやうな運命の下に、生息してゐる人間の數が多い、多いどころやぢない。それが大部分の人類の運命だ。

かりにマルクスの硏究がよほど科學の眞理に近いものと假定して、人生にはおのづから互に反相目すべきて階級が生ぜざるを得ざるものとすれば、なるほど人間の大多數がプロレタリアであることがよくわかる。

職業としての飜譯は、その職業の性質上、小作人と同樣に、石炭坑夫と同樣に、文壇ではプロレタリアに屬する職業だと思ふ。それが證據には巴里に出てゐる新聞のうちで、どの新聞に一番多く飜譯文藝が出てゐるかといふと——それが第三インターナショナルの佛國に於ける唯一の機關紙 I Humarite であることだ。

ユーマニテの文藝欄には、最近小泉八雲のチイタが譯されて出てゐた。わたしはたゞそれがために、每日ユーマニテを買ひに行つた。ユーマニテの文藝記者は、小泉八雲氏のことをば、二十世紀のヴイクトルユーゴーだと云つて、讀者に紹介してゐた。わたしは淚のこぼれるほど嬉しかつた。

小泉八雲氏はわたしの大學時代、たゞその人だけを本當の意味の大學教授だと思つて、その人の講義だけは熱心にきく氣になつた人だ。語學が不充分で、徹底してわかるところまでにはゆかなかつたけれど、その英文學評論とテニズン講義とはいまだにハッキリその印象が殘つてゐる。

チイタの佛譯をよみながら、その雄大なメキシコ灣描寫に胸をとゞ

ろかしながら、わたしはしきりにテニズンのThe Brookを思つた。さうして小泉八雲氏がテニズンより一層偉大なる詩人であつた事を考へた。

――七月十六日

一磅が二百法を越したといふ五六年遅れて、フランスもまた獨逸の轍を踏むのぢやないかと氣づかはれる。アルサス・ローレンのやりとりがどうやら鷸蚌の爭にをはりさうな形勢となつた。自給自足の物資に惠まれてゐる佛國は出來たらこの邊で鎖國がしたからう。が、あいにく人類の世界はもう十八世紀ではなくなつてゐる。二十世紀に生きなければならぬ人類は、否でも應でも二十世紀に受けなければならぬ人類の運命に强ひられる。さうして來るべきわれ〳〵の運命は？ 誰が知らう？ われ〳〵の前途には、永遠にたゞ大きな謎が横はつてゐるばかりだ。

――七月十七日

――七月十八日

いろ〳〵に考へて見た。さうして考へぬいた結果が、要するに考へなかつた昔とまつたく同樣に、どうにも手のつけて見やうのない事ばかりであつた。しかもそれにも拘はらず、どうしてもそのまゝにしては置けない事ばかりであつた。どうにかせずには生きも死にも出來ない事ばかりであつた。それが生命だ。生命をもつたものゝ生命そのものに對する永遠の爭鬪だ。

――殆而已。

それはたしかに養生の秘訣ではあらうけれど、人間は、人間の大部分は殊にわたしのやうな人間は、それだけではどうも氣がすまない。さうして氣のすまないところに、人間の愚かさがある。

わたしの一生はFolieだ。さうしてたゞ愚の一字につきる。

――七月十九日

去年改造へ送つた「Ocean のなげき」について、正宗白鳥君が何か「女性」の紙上で云つてくれてるときいて、近所のヴイラ・ミラマルに住む青山畫伯から、ゆふべそれを借りて來て讀んだ。

正宗君はさすがに目が高い。わたし自身があれを改造へ送る時さう思つたことをば的確に云ひあてゝゐる。もちろんその内容についてゞはない。その小説としての價値についてだ。

正宗君のいふとほり、あれは藝術品ではない。さうしてそれが果して藝術品をなすについての素材であり得るかどうかすら、その當時わたしには全く見當がつかなかつた位である。それを認めてくれたことに對して、わたしは今日はなはだ意を强くすることが出來た。わたしは正宗君に感謝せざるを得ないやうな心持がする。

何の作にかぎらず、わたしは今日まで、不幸にしていまだかつて藝術品らしい藝術品を創作したことがない。さうして藝術品の創作が、過去三十年間のこの世に於けるわたしの唯一の希望だつたのだ。なんといふかけはなれた希望と實際との距離の大いさであらう？

かへり見ると、わたしの過去は云ひやうもなくミゼラブルであつ

た。

その點については、わたしは今日までいくたび失望したかしれない。いくたび文筆を擲つてしまはうと思つたかしれない。さうしてそれにも拘らず飯をくふことゝ同様にそれだけはどうしても思ひきることができずに今日までに及んだものである。

わたしの書いたものはことごとく感想ばかりだ。その次の瞬間にはもう自分でも責任のもてぬ程度の甚だ淺薄な隨感隨錄ばかりだ。時には書かれる內容によつて、偶然小說めいた形ちになることもあるけれども、どだいが藝術の根本義に發足してゐないのだから、藝術品としては全く無意味だ。

わたしはつねにそれを愧ぢてゐる。

もちろん感想も創作には相違ない。しかしすべての創作はかならずしも藝術をなすものではない。一切の人類、一切の生物、一切の宇宙現象は、それ自身、ことごとくみな創造物だ。しかし彼等は決してすべて藝術家ではない。藝術家はたゞ藝術品を創作してそれを人類に提供する人間だけにかぎる。

わたしはさうした意味の藝術家になりたかつたのだ。さうしていまもつてそれにちかづくことさへできずにもがきとほしてゐるわけだ。

* * *

磅が二百三十法を越えたといふ。いよ〳〵獨逸の二の舞ひだ。何千法、何萬法とさがる日も遠くなからうと思はれる。さうして物價が急速に高くなるであらう。困るのはフランス人だ。さうしてチエンジの高い國のエトランジエが、おそろく當年の獨逸に於けると同樣、きつとまたいゝ氣になつて、傍若無人の振舞をば、この國の弱味につけ込んで、はゞからず敢てする事であらう。

――骨を折つてフランスで本を出したつて、生活のたしにならないやうな原稿料しきやもらへないかも知れないから、飜譯はまア二の次にして、あんたは日本へ送る原稿のはうにセイをお出しなさいよ。かうなると、わづかの日本金で生活ができるやうになるでせうから、そのはうが餘程ラクだわ。さうなさいよ。と、妻が云つた。

わたしは今日から午後も日本文を書けるやうになつた。

* * *

――七月二十一日

二日考へたが、緒がみつからないので、心ならず空しく日を暮した、やすく〳〵と物の書けないわたしは、書くべき緒のみつかるまで何日でも根氣よく考へるつもりだが、しかしかうフランにどし〳〵下がられると、五十フランやそこらの兵糧がいつ盡きてしまふか、はなはだ安心ならないので、いゝ加減のところで、思ひきつて書きはじめなければなるまいと思ふ。

――七月二十二日。

さて、いよ〳〵落ちついて今度こそはと意氣込んで机へ向ふと、あるひは机に向ふ前に、臥床へころがつて、まじ〳〵と考へ込むと、きまつて一生の見聞が斷片的に紛々と眼前に髣髴して來る。さうして

どの斷片もそれ〴〵に一つの苦い、決して二つとない、辛い人生の體驗であつた事に異りはない。が、苦い體驗はそのまゝで決して藝術をなさぬ筈であることにも同樣に異りはしない。さうしてそのうちのどれをとり出して書かうかと迷つてゐるうちに日は遠慮なく經過して了ふのである。結局、藝術の世界へ一歩も足を踏み入れぬことに終つて了ふ。それがわたしの致命傷だ。さう思ふと、きまつて絶望が首を出す。人生がたゞ暗くなる。藝術のない世界——たとへそれがいかなる黄金の社會でも、わたしには要するに暗黑の世界だ。絶望の國だ。そんなことにわたしはかうしていつまでも低徊してゐるつもりはないのであらう？

＊＊＊

こんなことばかり考へても仕樣がない。あしたから是非とりかゝらう。

——七月二十三日

二三枚反古をこしらへたきりで、けふも暮れた。

——七月二十四日

一體わたしは人並はづれて物事に捉らはれてばかり暮してゐる人間だ。自分自身ですら、ひよつとすると、このわたしといふ人間には、他の誰にでもあるやうな、チヤンとした一個の獨立した性格が生れながらにして無かつたのぢやないか知らんとさへ思ふ。それほどわたしは脆弱な性格の持主だ。

一册の本を讀めば、すぐその書物に捉らはれる。一人の女に接すれば、ずぐその女に捉らはれる。さうして讀書と女とが、とう〳〵わたしをしてかうして捉らはれた一生を築きあげさしてしまつたものなのだ。

もちろん決して書物がわるかつたわけではない。女がわるかつたわけでもない。要するに Faute はこの到底拔くべからざるわたし自身のあまりに脆弱な性格中にある。

——七月二十五日。

スツカリ氣おくれがして了つた。頭の中では、毎日毎夜、まるで走馬燈を見るやうにわたし自身の身邊に生じた一生の出來事が、めまぐるしくクル〳〵クル〳〵と駈めぐりつゞけてゐる。で、どうかしてその一角をぎゆツと取ツつかまへて、否應なく紙の上へ移し植ゑようと企てるのだけれど、持つた筆先を支配するわたし自身の頑くなゝ意志が、どうしてもウンと云つて納得してくれないのだ。

＊＊＊

——七月二十六日。

——しばらく書かなかつたから、それで書けないのでせう。書けない時は、無理に書かうとせずに、日記でもつけながら書ける時まで待つた方がいゝわよ。と、妻はやさしく慰めてくれた。

——ウン、そりや無論さうだが、それにしても、わたしの頭は實際

想像力が乏しいんだから、まつたく首でもくゝりたくなるよ。

——正宗さんの批評したあなたの缺點がよく當つてるんでせう。

——ウン、よく當つてる。あのとほりだ。『頭と肉慾とはよく働くが一向眼の働かない作者』だよ。それでもまだ作者にして置いてくれてゐるところがせめてもだ。わたし自身ぢやそれさへ覺束ないと悲觀しきつてゐるんだが……

——悲觀したつて仕樣がない。まア、やれるだけやつて見ることだわよ、やれるだけやつて、それで死ねば人間は本望ぢやないの。

——それやさうサ。

* * *

ポアンカレーが内閣をつくつたので、磅が百九十法代まで戻つたといふ。フランス人にとつては喜ばしい事だが熱病患者の體溫表はその高低の度の大きい時がもつとも病勢の進んでゐる事を示してゐるわけだから。決して油斷はならぬ。

——七月二十九日

——七月三十日。

來々月から、すぐ近所の Villa les Pins へ引越すことになつた。アパルトマン・ヴイドで、年三千五百フラン、大してやすくはないが、出來たばかりの新しい家だ。

——八月四日。

きのふから、漸く小説の糸口を見つけ出して、とにかくポツリポツリと書きはじめてゐる。今度は今迄のやうな感想錄まがひのイツヒ・ローマンではない。小說と感想との間を行く、甚だ曖昧な態度は、このごろつくぐ自分ながら厭氣がさして了つたのだ。藝術はやはり藝術のための藝術であるべき筈であつたわけだ。が、それだからと云つて、藝術以外に創作はあるべきものでないといふ思想に全然降伏して了つたわけではない。尤もそれは藝術といふ文字の内容次第でどうにでも議論は、立てられるであらうけれど、この頃わたしの考へてゐる藝術は、極めて狹い意味に限つて來たそれに外ならぬ。すべての文藝は創作だが、すべての創作は必ずしも藝術でないといふ考へだ。さうして藝術であるが爲に必ずしも藝術でない他の文藝より價値があるといふ間違つた先入生から同時に出來るだけ脫却したいといふ考へだ。要するに藝術である文藝と藝術でないそれの間には、種類の差はあつても決して價値のそれは生じないといふ考へなのだ。たとへそれが小說であらうと、戲曲であらうと、また隨筆であらうと、日記であらうと、文藝である以上、さうして文藝即ち生活である以上、價値はその内に潑溂たる生命があるかないかによつて定まる。さういふ風にわたしは考へたいのだ。藝術は一つの Métier だ。しかしそれだけでは生命の表現をなさぬ。さうして一切の生命の表現がそれ自身價値をつくる。世の中には生命のない Métier が澤山ある。若しそこに潑溂たる生命のない藝術があるとすれば、それは悉く死滅した藝術だ。藝術は死滅してもやはり Métier としての藝術には相違ない。さうして大抵世の中にはさうした死滅した Métiers としての藝術の方が數多く産

出される。今度のわたしのそれも恐らくその一つではないかと書きはじめたばかりでさう懸念してゐる。

＊＊

メッキリ白髪がふえた。からだは二三年來よりは近頃大へん丈夫になつたやうな氣がするが、鏡を見ると、しきりに容貌の衰へを感ずる。さうして自分もまた諸行無常の肉體の持主であつたことをハッキリ意識する。人はどし〳〵生れ、どし〳〵死ぬ。そのどし〳〵死んでゆくうちの、わたしもまた一人なのだ。死はいやだ。いやだが死なねばならぬ。さうしてどうあつても死なゝければならぬものならば、それほどいやがる必要もないやうな心持もする。一切は推移だ。わたしもかうして刻々推移しつゝある。さうして行きつくところは死だ。生きるだけ生きて、さうして死ぬ——人間は結局それだけのものなのだ。あせつても、もがいても、幸福がつても、絶望しても、怒つても、泣いても、要するに、死が來る。死の前には一切が無い。人生も藝術も何もかも生きてゐればこそだ。さうして生に執着すればこそだ。トルストイは偉大だが、執着が偉大だつたのだ。死んでも死にきれぬほどの執着をばこの世に殘してゐたものだ。それは永遠の生を信じようと死物狂ひになりつゝ死んだのを見てもわかる。強い人間は諦めがわるい。諦めのいゝ弱い人間から見ると、諦めのわるい強い人間は見苦しい諦めのわるい人間から諦めのいゝ人間を見るとたわいがない。人間は死と對すると見苦しいか、たわいがないのかどちらかだ。わたしなんぞはもちろんたわいがない方の組だ。今死んでも仕方がないと思ふ。併しいざ死ぬとなれば、或は妻子に別れるのがつらいと云つて、どんなに嘆き悲しむだらう。それも因縁なりや仕方があるまい。

ふと、自分の白髪に氣がついて、下らぬことを考へたものだ。

＊＊

——八月五日

アンリ・バルビエスの文藝批評が毎週の水曜日、必ずユーマニテのフォイユトンをかざる。わたしは心からの尊敬をもつて常にそれを愛讀してゐる。けふは丁度その新聞が到着した。Litterature Bourgeoise, Faire aux Venux. といふ題下に、バルビエスはアンリ・デュヴエルノアの新作を評してゐた。まじめに文藝を考へる者にとつて、バルビエスの意見ぐらゐ、一々肺腑をつかれる思ひをさせられるものはない。

——Mais il advient qu'à force d'é;inglor des notations sur des fautômes d'étnes, à force d'observer et d'aligner des monstres qvui manquent de structure, l'artiste arrive à en manquer lui-même. A force de choisir des carnotères superficiels, il fait superficiel. Il semble que seshéro sel héro ines Vengam nev de lui, et qu'il se perd parfuis dans le vide outil va les chercher. Céat fatal. On ne se dèp être pas taut de néant.

——生の幻影の上に記號をとゞめようとする努力に驅られて、構造を欠く怪物どもを觀察し排列することに驅られて、藝術家は往々自分自身をとり失ふことが生ずる。うすッぺらな性格を選ぶことに努める

と藝術家がうすつぺらになる。恐らくその主人公や女主人公たちがその藝術家に報復するのであらう。恐らく藝術家自身それ等の性格を求むる空虛のうちに往々自己を沒却するのであらう。是非もないことだ。さうした無間地獄からは中々這ひ出せないものだ。

デユヴエルノアはモオパッサン以來の小說家だと云はれてゐる。モオパッサンは結局氣が狂つた。氣が狂ふほどに眞面目であつた。デユヴエルノアはうすッぺらのブルジョア生活のうちに樂しんでゐる。恐らく小說を書く技巧がモオパッサンに拮抗しても、その魂がまだそこまで到達しきれないからであらう。

終りに臨んで、バルビユスはかう結んでゐる。

―Duvernois, mon viel ami, tu a du talent, et de l'esprit, mais tu manques de foi

―デユヴエルノア、わが古き友よ、君には腕がある。頭がある。併し君には信念がない。

、、、、、ばかりが、果して『信念』の絕對々象として、たゞそれ一つのみ成り立ち得るものであるかどうか、わたしは知らない。併し、、、、、を除いては、現代人類の運命をば、果して將來のその、、に向つて、まッ正直に指導し得べき他のいかなる信念が、今日この地球上に求め得らるべきかどうか、それもわたしは知らないのである。

とにかくこの一文だけに徵しても、ル・フウの作者であり、レ・ザンシエーヌマンの思索家であるアンリ・バルビユスが、現代世界文壇の、最も新しいさうして最も高い思潮の上に、確實に地步を占めてゐる一文士であることが頷かれる。

Villa Les Pins, Cros de Cugnes, A. M.,
France.

―八月十一日。

九月一日からわれ〳〵の移轉すべき家へ通つて、しきりに原稿を續けようとあせつてゐる。原稿は一向出來ない。さうして一日の大部分は、この建つたばかりなる、物を云へばガン〳〵聲の反響する、まがつて貼られた壁紙のまだなま〳〵しい、ペンキの匂の甚だ強烈な、さうして中はまつたくガランドウの別莊をば、いかなる道具をもつて充たさうかと、その相談のために費やされる。

何しろ七月になつて漸う手に入つた二人の原稿料だけでやる事だから、到底ろくな事のできさうな筈はない、さしづめ必要な寢臺とか椅子とか机とか臺所道具とか、そんなものを買ふだけでさへ、とても充分に買ひとゝのへるわけにはゆかない。この四五日は、さうしたものゝ安物をさがすべく、ほとんど毎日ニースへ出掛けた。出來るだけ儉約して買入れたが、それでも千五百フランでは足りなかつた。

―八月十二日。

もちろん、追々と、それをば所謂藝術的創作の上で、どうにかして十二分に表現してゆきたいものと切望してやまないが、かうしてふと氣がついてみたゞけでも、過去のわたし自身と現在の自分自身とは、

甚だ矛盾した、まるで辻褄のあはない人間であることを發見する。

かへりみると、一千九百十九年、十一月二十日、家へ出したらきりもなくわけが分らなくなるところの、いたづらに紛糾錯綜した、恐らく生みの親の胎内から刻々積層した千萬無量の原因やら動機やらが、結局、さうした簡單な一行爲にまで爆發したものだつたのであらう、盲滅法に一切を金に換へ、さうして身のまはりの物とては、たゞ古鞄一つきりの、形式だけの雲水姿になり、フワ〳〵と麹町九丁目の借家を出でゝ、漠然と放浪の旅に上つて以來、今日で丁度まる六ヶ年と九ヶ月目になる。

で、その結果がこれだ。

――一家を出でゝ、一家に入る。

要するにそれだけぢやないか？　やッパリ「家」ぢやないか？　さうするとなんのための放浪だつたのだ？

二十代には、ロマンチックに文藝と自分自身の生活とをピッタリ一致させたい一心で、一切の過去に挑戰して、自分一人きりの新生活に突進すべく踠搔いた。

三十代には、いつのまにか過去と妥協して、鼻糞ほどの親の小遺產の上に、尤も醜惡な小ブルヨジア生活を安住させて、ひそかに酒と女色とに耽つて、それが恰も藝術的生活であるかの如き顔をしてすぎた。

それが行詰つての四十代だ。さうしてその四十代は行きあたりバッタリに今の妻と結婚したこれから始まつた。すぐ子供が出來た。

子供？…子供とは來るべき次の時代の事だ。われ〳〵夫婦はとうとう次の時代に小氣味よく支配されることに終つた。

大人等の考ふるコンミュニズムには、『家庭』は絶對に禁物だが、二十世紀に生れ出た子供は、まだその生みの父と母とを同棲させて、その上に飽くまでも自分自身の生活の安定を確かめようとする原始以來の本能を改めない。

――八月十五日

――八月十七日。

――八月十八日。

――聖ジャン・ジヤク、愛の宗教の殉教者？　なぜさう云つてはいけない？…國約議員フイリップ・ル・バの未亡人は、つねに十字を切つては、聖マキシミリアン・ロブスピエールの名を口にした。彼女がその弟子を尊崇した如く、われ〳〵をしてその師を尊崇せしめよ。

おゝ。生來のジュネーヴ人よ、選抜のフランス人よ、狂愚の青年として、模範の老年として、苦しみ踠搔ける巡禮者よ、君にとつては、道德は僞善者の假面にあらずして、充實せるエネルギーの眞面目であつたところの、君よ、…『無上生』を說いては、『精神主義』を鼓舞せしめたるところの、しかも自ら知らざる豫言者としては、君の思想の自然の生兒等なる、、、、、、と、、、、の人格のうちに新しき人的神を創造せしところの、おゝ、君よ…おゝ、、、主義の父よ、、、主義の祖父よ、『土地は一切人に』さうして『勞働至上律』を夢想したる託宣者よ――(人間的弱點の重荷なる、君の失策、君の惡德に拘らず、)君のやさしき天才の善き意志を通して、かつて君がそ

れであつた如く、またそれであるであらうやうに、『人類』の聖者暦に登載せらるべく、果していかなる人間が君以上によりよく價打したか？

* *
*

『プロスチチユエ』の作者、『ファンム・アン・シュマン』の作者、ヴィクトル・マルゲリットが、その新著、『ジャンジャクと戀』のうちで、かうした沈痛なる感激の聲をば、心ゆくかぎりに放つてゐた。わたしは打たれた。

——自然にかへれ！

ものごゝろついて以來、果していくたび目にし耳にした言葉であつたらう。しかもまだ不遇にして、わたしはこの年になるまで、本當に落ちついて、かの『コントラ・ソシアル』を、かの『エミール』を、かの『メーヴエル・エロイーズ』を、『コンフエッション』を、熟讀玩味する眞機緣に接し得なかつたものだ。

——自然は自然に非ず。これを自然と名づく。

金剛經中にかく取扱はれたる『自然そのもの』は、果してルッソオの讃嘆渇仰したる『自然そのもの』であつたらうか？

——古往今來、自然主義者でない小說家は決して世の中にあり得る筈はない。

かつて日本に自然主義運動が發生した時代、森鷗外漁史は冷然とさ喝破した。

數年前、ヴイクトル・マルゲリットは、その委曲をつくしたる『プロスチチユエ』のうちに、わたしに『自然そのもの』のいかに恐るべきものであるかを敎へた。この同一の偉大なるフランスの小說家は、今日またその考究の下に展開したるジャン・ジャク・ルッソオの全生活を通じて、わたしに『自然そのもの』のいかに禮讃すべきものであるかを說いてきかせた。

古代印度人はその民族の創造せる梵天のうちに、現象としての『自然そのもの』を見た。又つゞいて創造せる佛陀のうちに、悟りにしての煩惱即菩提にしての、同じ『自然そのもの』を見た。

その『自然そのもの』に對する深き考察に關して、わたしはそれを敎へたる古代印度人に感謝しつゝあるも同樣に、ヴイクトル・マルゲリットに結晶したるフランスの文藝に感謝せざるを得ない。

* *
*

——八月十九日。

一メートルほどの高さを有する。灰色の新築土塀の上にそうて取りつけられた目のあらい金網垣の、外に一ト株、内に三株、充分に豐かなる大枝を擴げた、二タ抱へはある老松が、たそがれ時にたま〱見ると、恰も巨大なる一箇の衣笠のやうに、建つたばかりなるこの別莊の前面に、互ひに寄りそひつゝ蟠かまる。

別莊の名をLes Pins ——松軒——といふ。また別莊のあるところをば、この土地の人には Sous des Pins ——松蔭——と呼んでゐる。

金網垣の外は數百坪の草原だ。六月ごろ、この草原には澤山の螢がゐて、ピカリ〱と夢のやうに明滅してゐた。イヴオンヌは每夕そ

れを見ることを喜んだ。

草原の外には Boule Verd de la Plage と名づけられたる人通りの疎らな一條の海岸道路が横ぎつてゐる。道路はところ〳〵に漁船の曳きあげられた眞白な砂利濱に接してゐる。さうしてそのだら〳〵とさがつたところまで濃藍色の地中海がのんびりと訪づれて來てゐる。海はミストラールとシロッコの吹く日を除いては、いつでも湖水のやうに靜寂だ。それでも海である證據には、白波はたえず人しれずかすかな音をたてゝ、礒の眞砂を崩しては打ちよせてくる。

アンチーヴの突角は美しい。殊にその燈臺の火が美しい。

表のテラッスの前も草原だ。が、そこには葉の廣い無花果の樹や小さなオランジの樹に介在して、幾株かの橄欖樹が縹渺と彳んでゐる。實のたわゝなる葡萄畠もある。錆びたポンプの据ゑつけられた灌漑用の大きな井戸も見える。さうして月のある宵などは、その奥のしげみに蔽はれた二三の小別莊の燈光がしつとりとして、何とも云ひやうのない情趣をそゝる。

草原は裏のテラッスの脚下にもひろがつてゐる圍に接してこのテラッスには、朝は一面に日があたる。さうしてそこから見える草原には、黄ろい細かな花をつけたキンボウゲが、ラファエル・コランの裸體女の臥そべりに來るのが待ちがほに到るところで咲きほこつてゐる。例の縹渺とした感じの橄欖が、そこにも同樣にチラリホラリと立つ。もちろん無花果の樹もいくつかある。村の子供等が時々來ては、長い棹をさしのばして、あだかも熟したその實をつゝき落してゐることもある。

われ〳〵はとりあへず、爰で向ふ滿一ケ年居住する約束して、この家を建てた人に半ケ年の前金を渡した。

* * *

——I love not Man the less, but Nature more.

いくたび口ずさんでも、つひに飽くことを知らないバイロンの一句だ。

——八月二十日。

二タ月ぶりで、床屋へ一ト月ぶりで、風呂へ這入りに、ニースへ出かける。

——八月二十一日。

『落ちつくところ』——さういふ題下に、わたしは十七八年前、小石川宮下町の家を出でゝ、佐渡から熊野へ、五十日ほど、落ちつかぬ心の向くまゝに、その時々の感想をば堀江松華氏の經營しつゝあつた京都新聞へ送りながら、『落ちつくところ』を求むべく彷徨した時代があつた。

常寂光土——Nirvana——『落ちつくところ』とは果してさうした佛敎的意義であつたものかどうか、その當時もまた今日も、わたし自身にはよく分らない。が、一貫して、落ちつかぬわたしの心の底には、

昔も今も、つねにわたし自身の全生活をぐいぐいと曳ッぱつてゆく『女』の力があることを感ずる。女それが妹であつたこともある、それが単なる性慾であつたこともある。それが歡樂の巷であつたこともある。さうしてそれが今日では『妻子』といふ形式である、恐らく變化して來た自然の推移なのであらう。

人間の社會的生活は、必ず男性と女性との交渉の上にのみ築かれる。『女』のない生活は、たとへそれが常寂光土であつたにしても、そこにはもう人間の社會がない。さうしてそれが人間の社會であるかぎり、そこは永遠に落ちつき得るところではない。

文藝がある。科學がある。政治がある。經濟がある。戰爭がある。革命がある。決して一刻もおちつき得ざるところにのみ人間の社會がある。

『妻子』を基點としてゐるわたしの今日の生活は、よしそれが所謂『家庭』の意味を廢棄したそれであるにも拘らず、それがわたしの社會生活の第一歩をなしたものだ。即ちソビエットだ。

たゞに政治經濟の上にのみとどまらず、わたしの科學もまた文藝もいふまでもなく、、、、、、、、、、、のためにのみ存在する。

さうしてその社會の Metier としてわしは藝術的文藝を擇ぶ。

＊＊

──八月二十二日。

古き歐羅巴は、急轉直下、今まさに崩壞の途中にある。さうして歐羅巴はそのまゝに死滅して了ふのであらうか？

──國亡びて山河あり。城春にして草木深し。

わたしはこの杜甫のうちに、正しい詩人の的礫たる洞鑑を見る。

盡くることを知らざる大自然の創造のうちに、恆に甦る可能を具へたる山河大地がある。春來たるごとに、いよいよ繁茂の加速度を示す草木がある。新たに生くべき人類は山河大地と等しい。累々たる死屍の下から鮮紅のコクリコが咲く。アンブリイドを裝飾せる無數の過去の、、、、、、、、、、、、、、もう一世紀は過ぎた。歐羅巴は必ず近き將來に於いて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

カルル・マルクスの豫言したる、、、、、、、、、、、、。

古き歐羅巴に對してそこに新しい亞米利加がある。古きものに對しては、新しいものは恆に新しい。亞米利加は歐羅巴に對して恆に新しい。さうしてそれは必ず古き歐羅巴に對した時にのみかぎる。さうして古き歐羅巴は死滅する。さうして死滅しきつた時に、そこに新しい歐羅巴は生れる。、、、、、の山河大地と共に甦る。、、、、、、、、、、、、甦る。

甦る歐羅巴に對しては、新しい亞米利加はもう新しくない。亞米利加も古くなる。亞米利加も、、、、。埃及は昔人類の幸福にとつて甚だ有害無益であるところのピラミットを造つて滅びた。バビロンの支配者は昔同樣の意味に於いてバベル塔を造つた。ニューヨークの摩天樓は果して何を意味するか？

楚人の一炬にたゞ焦土となつた阿房宮は、到るところの亞米利加に

發見できないであらうか？　大ブルジョアのトラストは到るところにファスチシズムの長城を築きつゝあるではないか？　さうした長城は次のそれと共に、果して人類の幸福にとつて、人間生生の健康にとつて、結局、大手術を要すべき痛腫ではなからうか？

、、、、、、、、。、、、、、、得ぬ。

＊＊＊

——八月二十三日。

一キロ、一フラン五十サンチームで、百姓が商人の手に賣りわたした梅の實は、それがその次の商人の手から手へと、轉賣され又轉賣された末に、漸くにして消費者の口へ這入る時、一キロ、三十六フランになつてゐるといふ。なぜか？

生產者と消費者との間にはあまりに有害無益なる商業的手續が跳梁跋扈を極めてゐる。ブルヂョア的社會組織は、かうした現象を示しつゝ、刻々その終末に近づいて行く。

ブルジョアジイの前には、たゞ崩壞のみがある。さうしてそれに代るべきプロレタリアの前には、たゞ建設のみがある。二十世紀の人類は、、、、、、、、、、手傳ふべきか、、、、、、、、、、手傳ふべきか、たゞその一問題の前にのみ立つてゐる。

禪學は昔さうした問題に對して、『掃蕩、建立』といふ答案を與へてゐた。人間生活の深き徹見に關して、野狐にあらざる眞禪學の一隻眼はあかるい。

——八月二十四日。

毎朝、例のテラッスでキャフエをすましたあと、わたしは例によつて判子で捺したやうに、きまつてキャビネのセルの上へ腰かけにゆく。さうして腰かけてゐる間、讀んでも讀まないでも必ず何かしらん書物を開いてゐる。

先日、青山畫伯から借りて來た、アーネスト・ライスが序文を書いた、ホイットマンの“Leaves of grass”選集と、去年舟橋君と巴里のケー・ヴォルテールを散步した際、とあるブキニストから九十文で買入たプルードンの“Quest ce que le Propriété?”をば、リヨンが摘錄した三册のパンフレットが、このごろのさうした時間中、いつもわたしの手のうちにある。

プルードンも、ホイットマンも、ともに十九世紀に生まれて十九世紀に死んだ哲人であり詩人であつたけれど、彼等は決して十九世紀の人類のみのために生きなかつた。

——吾人は須らく現代を超越せざるべからず。

たとへその內容に甚だ空虛な響があつたにしても樗牛のこの着眼點は、それが哲人でありで詩人あるかぎり、恒に推移する人類生活に對して決して正鵠をあやまらぬ。

超越は回避の意味ではない。正反對に透得の意味である。嚴正批判の意味である。カントの所謂フラン・フエルタンフトの立場から忌憚なく物をいふ意味である。

プルードンも、ホイットマンも、ともに十九世紀に卽して、十九世紀を超越した眞人達であつた。われ〳〵二十世紀に棲息する人間等に

とつて彼等ぐらゐわれ／＼に教ふるところの多きをもてる先達はすくない。

私有財産に對するプルードンの假借なき批判、人類愛に對するホイトマンの底知れざる憧憬ともに將來に必ず完成せらるべき人類の、、、、、、、、、、、、、、、、、しての上である。

御所の中で、プルードンとホイットマンとを拾ひ讀みしながら、わたしはふとフローベルとモーパッサンとを思つた。

フローベルにもモーパッサンにも、さうした正當なる新社會組織の豫想がなかつた。恐らくそれを豫想すべく、彼等の箇人主義が、彼等の所謂科學的眞が、恐らくそれを拒絶したからであつたらう。結局、彼等はその終始した時代のブルジョア的社會現象から、遂にたゞ到底抜くべからざるペシミズムのみを見た。彼等の藝術はその上に築かれた。さうしてその藝術のうちにのみ、わづかな彼等のレーゾンデエトルを見出し得たものであつたらう。それゆゑに彼等の藝術に盛られたる人間の生活には、全く希望がない。希望のないところに人は棲めぬ。箇人主義は必ず絶望に終る。

――八月廿五日。

LIBERTE

EGALITE

FRATERNITE

どこへ行つても、この國には、かうした標語が、はなはだ嚴めしく刻みつけられてゐる。刻みつけられはじめてから、もう百五十年にもなるであらう。

自由――平等――人類愛。人間同志の社會生活にとつて、これ以上に立派な標語があらうか？

わたしは佛教の四諦を思ふ。

生滅の世界にも苦集滅道がある。無生の世界にも苦集滅道がある。無量の世界にも苦集滅道がある。無作の世界にも苦集滅道がある。佛教ではわたしにさうした四階級の苦集滅道があることを教へた。

わたしは必ずしも四教儀の信者で止ない。けれども、そこにたゞ單一なる苦集滅道があるばかりでは、すこしく多く物を考へる頭には、悟入の深さを決定すべき場合に、それだけでは聊か盡しかねる憾みのあることを認めざるを得ない。

こゝに天台を說くことはわたしの本意でない。

自由――平等――人類愛。この國のこの堂々たる三標語もたゞ單一にこれだけでは人類の幸福にとつて、はなはだ盡さぬ場合が多い、といふ事を云ひたかつた爲である。

ポアンカレーもそれを云つてゐる。エリオもそれを云つてゐる。ボンクールもそれを云つてゐる。レオン・ブランもそれを云つてゐる。さうしてマルセル・カシヤンもそれを云つてゐる。國家主義者も、民主々義者も、社會主義者も、共産主義も、その三標語を基點としない政治家も思想家もこの國には只の一人も見あたらぬ。なぜであらう？

云ふまでもなく、今日のフランスはブルジョアジイの支配する國だからである。さうしてしかく現代の世界を惱ましつゞけてゐるブルジ

ヨアジイは、まさしく昔その三標語を眞甲にふりかざすところから發足したからである。

——われに自由を與へよ、神よ、しからざれば死を！

さう絶叫して北米合衆國は自由を得た。さうしてその獲ち得たる自由の上に彼等の今日の大ブルジョアジイは、築きあげられたものではないか？　自由は忽ち横暴に代つた。平等は遺憾なく蹂躙された。人類愛はたゞ、、、、、、、、、、、、、、、出され得ることに終つた。

この期に及んで、自由、——平等——人類愛、を說くことはブルヂヨアジーにとつては徹頭徹尾僞善である。さうしてたゞプロレタリアを欺くだけの武器である。この期に及んで、將來の人類に、眞正に、自由——平等——人類愛の實現を望み得るは、たゞそれプロレタリア、、、、、、、、。

——八月二十六日。

子供は目ざましく成長した。終日、松や橄欖の林の下で、近所の子供達と一緒になつて活潑に草原の上を驅けづりまはつてゐる。彼女は日にやけて色が眞黒になつた。

——夏は暑くないし、冬は寒くないし、果物は澤山あるし、年中花が咲いてゐるし、空氣はいゝし、わるい流行病はないしこんないゝ國はわたし世界中に滅多になからうと思ふわ。と、妻は云つた。

——八月二十七日。

健康と滿足と感謝とが、妻の毎日の生活のうちに復活した。出來るだけ簡素な衣食住の上に出來るだけ意義ある精神勞働の能率を高めようとする努力が、妻の希望のうちに日にまし旺盛になりつゝある。

わたしの社會生活の基礎は、漸くにして爰にその端緒を見出した。この基礎の上に立つて、この基礎の上に踏みとゞまつて、しつかりと腰と心とを据ゑつけて、わたしは達摩の面壁を學びたいと思ふ。わたしは九十年の親鸞の紙子生活を學びたいと思ふ。わたしは歷代の眞面目なる文士達の百折不撓の藝術的良心を學びたいと思ふ。

＊＊＊

——まづたのむ椎がもとあり夏木立。

わたしは芭蕉の幻住庵を思ふ。



孔子の廟に賽す

田中貢太郎

一、曲阜車站

大正十三年三月七日の午後十時、濟南を出發した津浦鐵路の火車は、暗い齊魯の平野を走つた。その列車は、臨城事件に鑑みて機關銃を据ゑ、車頭にはサアーチライトを備へて、線路を徘徊ずる匪徒の姿を見おとすまいとしてゐた。サアチーライトの回轉光は、ぴかりぴかりと窓の外を照らしてものものしかつた。

私達は曲阜の孔子廟に詣でて、泰山に登るために三人伴れで大連から青島を經て來たところであつた。大連で關東新聞と云ふ週間新聞を經營してゐる友人の下元火耕君と、やはり大連で辯護士をやつてゐる小野君の三人伴れであつた。

翌日の午前二時に五分を剩して列車は曲阜の車站に着いた。私達は濟南の日本旅館で借りて來た毛布を一枚づつと三度分の辨當の折詰めを持つておりた。私達は車站の待合室で夜を明かして曲阜の城內に往くことになつてゐた。

私達の車からはおりる者はなかつたが、それでも他の車からおりた者があつたと見えて、二三の人影が列車の窓から射した燈光に映じ出されてゐたが、列車が發して構內が暗くなると共に影戯に映し出された物の影の消えるやうにちらちらと消えてしまつた。

暗い構內には槐であらう其所此所に裸樹が立つてゐて、その梢にはまばらに星が光つてゐた。私達は待合室のある所を探して歩いた。驛員とも乘客とも判らない一人の男が來たので、下元君が何か云つて訊いた。その男はすぐ構內から低まつた燈火の明るい家に指をさした。それは朱の高い門柱のある寺院のやうな家であつた。私達は其所から石磴をおりて往つた。

『待合かなあ、』

『待合にしちや立派すぎるぢやないか、』

それは津浦鐵路曲阜賓館とした扁額のかかつたステーションホテルであつた。私達は匪賊のおそれのある、それで寒い待合室にゐるよりは、高い金をとられないなら旅館で夜を明したいと思つた。門の左右には石の狛犬を置いてあつた。私達はそのまま入つて往つた。

門の內は暗かつた。庭も平坦でないと見えて足をとられさうになつた所があつた。門から左斜になつた所に火の微暗い軒があつた。私達が入つて往くと二人の茶房がそれぞれ四角なガラス戸の入つた燈籠の

やうな明りを持つて來た。茶房達はすぐ傍の室の扉を開けて私達を導いた。室の中はさすがに空氣がぬるんでゐた。私達はすぐ室代を定める必要があつた。私は雜記帖を出して鉛筆で、

『今天六點鐘、房値幾何、』

と書いた。すると茶房の一人が私の鉛筆を執つて、

『毎人六元、』

と書いた。六元は室代にしては多きにすぎると思つた。私はそこで、

『飯不要、』

と書いた。と、茶房は、

『規矩、連飯在間、』

と書いた。私達は三人一緒にゐるから室代を安くせよと云ふ意を示した。すると茶房は、

『三人書房間、十四元、』

と書き、また、

『倆驢車二輛洋四元房間要不不、』

と書いた。私は茶房の顏を見て、

『房外睡下、』

と書いて笑つた。茶房も笑つて、

『沒有、』

と書いた。私達はいよいよ最後の交渉をすることになつた。私は、

『毎人一元、』

と書いた。茶房はすまして、

『沒有、』

と書いた。僅に二三時間待つのに十四元出すのは如何にもばかばかしいので、最初の豫定どほり待合室を探して夜を明かすことにした。私達はまた寒い屋外にと出た。茶房の二人は角燈を手にして私達を送るやうにして從いて來たが、私達の體が門を出るや否、いきなり門の扉をぎいと締めてしまつた。

私達は外へ出て霜柱のたつた地べたをさくさくと踏んで、また暗い構内へあがつて往つたが、さて待合室が右の方にあるか左の方にあるか判らない。うつかり歩いてゐると匪徒の危險があるうへに、匪徒とまちがへられて巡警に狙撃せられるおそれもある。私達は構内へあがつたものの右へも左へも往くことができなかつた。ふと見ると右の方の柵の向ふに民家の牆らしいものがあつて、その中から焚火の光が見えた。と、また左の向ふの柵の外にも焚火らしい火があつて、二三本の裸樹の幹にその光がちらちらとからまつてゐた。耳をたてると柵の向ふに人の足音らしいものも聞える。私はもうこの附近の者が起きたものだと思つて、心ぢやうぶになつたが、見てゐるうちに兩方の火は小さくなつて何時の間にか消えてしまつた。

私達はその時構内の砂利の上に毛布を敷いて坐つてゐた。火の光がなくなると晨の陽氣が動きかけたやうな氣がして、ふくらみの出てゐた心がまた縮んでしまつて、急にひどい寒さを感じて來た。寒さは外氣の寒さよりも毛布を徹してくる大地の寒さがひどかつた。寒さはまた靴の先からものぼつて來た。それはもう脚も腰も氷のやうに凍つて寒いと云ふよりは痛いと云ふ方が當つてゐた。私達はもう金のことは

云つてゐられなくなつた。私達はとうとう旅館に入ることにして、起つて石磴をおりて旅館の門口へと往つた。

がつしりした彼の扉が私達を遮つてゐた。私達はとんとんとその扉を敲いたが、底の知れない沼の中にぬめりこむ音のやうで四邊へ響かなかつた。それでも私達は匪徒や巡警に眼をつけられるのが怖ろしいので、大きな聲を立てて一層強く敲くことはできなかつた。私達は敲く手を控へて立つてゐたが、立つてゐるのも氣味が惡いのでまた敲いてみた。内からは依然として返事もなければ開けに來る者もなかつた。私達は危險と寒さを怖れる一方に、とぼしい旅費を空費するのはばかばかしいと云ふ考へもかなり強く動いてゐたので、そんななかでも是が非でも旅館に入らうとは思はなかつた。私達はその軒下に秘んで夜を明かすことにした。そこで狛犬の前の石磴に腰をかけて毛布をかむつてゐたが、靴から來る寒さがひどいので、靴をぬいて脚もその毛布に包んだ。

『一緒にゐずに、ばらばらにゐやうぢやないか。』

下元君はひとりで門の横手の方へ姿を消して往つた。私と小野君はそのまま其所にゐた。

『寒いなあ。』

『寒いですね、え。』

大きな星のあつまつた天漢が左の方の空に流れてゐた。時は遲遲として進んだ。天漢はしだいに右の方に寄つて來た。その天漢の下に高い一本の裸樹があつて星の位置の目標となつた。

三時になつて鷄が啼いた。

『とりが啼いた、もう夜明けまでは間がないよ。』

『さうですね。』

四時に近くなつて暗くなつた。空を見ると星がなくなつてゐる。私は黎明が來たと思つた。

『夜が明けかけたね。』

しかし、それは雲のためであつた。空にはまた星が光りだした。私はがつかりした。がつかりすると共に氷のやうな寒さがひしひしと迫つて來た。暫くして、星の光がまたうすれて來た。

その時角笛の音が二回續けて響いた。と、地響がして右の方から火車が來た。火車が來たなら門を開けるだらうから此所にはゐられないと思つた。私は急いで靴を穿いた。しかし、その火車は荷物車で其所には停車しなかつた。私達はまた腰をおろした。

構内に人の氣配がして正面の石磴の上に銃を持つた巡警の一人が姿を見せた。私はびつくりした。日本からはるばる來て孔子の廟に寢しようとしてゐる私には、匡人に拘せられた孔子の『文王既に歿し、文、玆に在らずや、天の將に斯文を喪さんとするや、後者の者、斯文に與かるを得ず、天の未だ斯文を喪さざるや、匡人其れ予を如何せむ』と云つた孔子の意氣はなかつた。

『小野君、君の毛布をかしたまへ、撃たれたら困る。』

小野君は私の後にゐた。私はひつたくるやうに小野君の毛布を取つて小さく折り、それを楯のやうに顔にあてながら巡警の行動を見てゐた。巡警はちよと右の方へ往つたが、すぐ歸つて來て柵に倚つて立つた。私は默つてゐてけ却つて誤解せられると思つたので、強いて氣を

おちつけて咳をした。

と、巡警の體が動いてそれが石磴をおりて來た。私は毛布で顔と胸のあたりをかこひながら起つた。同時に巡警の聲がした、私は、

「ニイペン、ニイペン、」

と云つて、一足二足往つて巡警の方を見た。巡警も石磴をおりきらずに足を止めて此方を見てゐた。その巡警の銃の先には白く光るものがあつた。

そこへ下元君が出て來て何か云つた。すると巡警も何か云ひ云ひ寄つて來た。私はチーフ、クンツーミヨウなどの語を忘れたので云ふことができない。私は毛布を捨てて雜記帖を出した。下元君がマッチを擦つた。私は雜記帖のページをめくつて、曲阜、孔子廟、孔林などの文字を見せた。巡警はまた何か云ひだした。小野君が切符を出して見せた。下元君がまたマッチを擦つて明りをこしらへた。

何時の間にか他にも一人の巡警が來てゐた。私達はそこで名刺を出した。最初の巡警は私の名刺を同僚の巡警に見せながら何か面白さうに笑つた。當時の山東督軍田中玉の名と田中貢太郎の名との對照が面白かつたがためであらう。巡警は私達に對する疑問が晴れたと見えて旅館を起してくれやうとした。私達はそれを止めた。

「おい、兵隊を買收しよう、」

そこで小野君がサンドウヰッチの折を二つ持つて巡警の傍へ往つたが、取らないと云つて持つて歸つた。と、巡警が私達に何か云ひながら、構内の左の方へ指をさした。もう曙の光が漂うてゐた。私達は巡警が待合室へ往けと云つてるだらうと思つて、毛布と辨當を持つて從いて往つた。

構内にあがつて見ると非常に明るかつた。私達は巡警に從いて左の方へと往つた。線路の向ふ側に「曲阜」とした車站の建物があり、てまへに踏切があつた。私達はその踏切を斜に横切つて建物の下に往き、其所のベンチに腰をかけてかじかんだ手で辨當を喫つた。辨當の飯は氷つてばらばらになつてゐた。彼の巡警はさうした私達の容を物珍らしさうに見てゐた。飯の後で下元君が淡巴菰を喫みたいと云ひだした。下元君は淡巴菰を喫みつくしてゐた。私は衣兜から喫みさしの葉卷を取つてやつた。下元君は急いでそれに火を點けた。巡警の一人が卷淡巴菰を持つて火を借りに來た。下元君が手にしてゐたマッチを借すと巡警は禮にその一本を置いて往つた。夜はもう全く明け放れてゐた。踏切を往來する汚い士民の姿を見るやうになつた。何時の間にかその踏切の口へ物賣が來て甘酒のやうな物を賣りだした。其所には二三の者が集まつて來て口から白じろとほけを出しながら茶碗の物を啜つてゐた。

旅館の方になつたらうすぐもつた地平線から朱の色をした朝陽が出た。その朝陽の光は構内の欅樹にあかあかと射した。

二、泗　水

曲阜の車站から城内まで五マイルの里程であつた。小野君は馬車を雇ふために出て往つたが、間もなく二三人の苦力のやうな男を伴れて歸つて來た。それは皆馬車の馬丁であつた。小野君はその馬丁達と指を三本出したり四本出したりして交渉をはじめた。

その車は臺八車にかまぼこ形の低い圓い屋根をして、それに衣を張つたものであつた。それは一疋の騾馬が牽いてゐた。私達はその騾馬の敷いてゐたやうな汚い蒲團を敷いてかまぼこ屋根の下に胴をかがめて坐つてゐた。若い痩せた馬丁は踏切を越ゑると共に、左側の轅の元に横に腰をかけて鞭を揮つた。

鷄の聲、犬の聲、圃の麥の綠、高粱の刈株、遠くの林。それは廣びろとした魯の平野であつた。路は剝れて兩側の圃よりは餘程低かつた。私は周公旦の昔から通じてゐる路ではないかと思つた。私の考へは三千餘年の昔に往つた。

騾馬と牛とに曳かせた車が向ふから來て擦れ違つた。楡や柳の裸樹のある土壁に圍まれた村落にとりついたところで、路を修繕してゐて往けなくなつた。私達の車は後もどりして右の方の路から往つた。旅人らしいうす汚い辮髮の老人が路ぶちに佇んで、長い煙管で悠悠と淡巴菰を喫んでゐた。

路はしだいしだいに低まつて往つた。白楊の林に被はれた墓地があつた。そこから小さな河の流域が見えて來た。それは泗水の流れであつた。私は顏回や子路やたくさんの弟子を伴れて諸侯の間を遊歷した孔子が泗水を渡つて魯の故郷を出で、また泗水を渡つて故郷に歸つて來た當時の容を想像した。

『孔子も、こんなかまぼこ馬車に揺られて往つたのだよ』

と云つて私は若い友人達を笑はした。車は深い泥沙の崖をおりて河原に出た。水の枯れた冬川は底の沙を見せて前岸に近く流れてゐた。馬丁は轅の元に腰をかけたままで騾馬を流れの中に入れた。水は騾馬の股を沒するくらゐであつた。私は指をさして馬丁に泗水の名を訊いた。

『スースーイホウ、』

と彼は答へた。車はそのまま前岸に渡つた。馬丁は車からおりて一方の沙崖の上にのぼつて長い鞭をふりながら騾馬に氣勢をかけた。車は一氣に崖の平坦な路に出た。

右に一簇の民家が樹木に圍まれてをり、左に墓地があつてたけ高い石碑が累累として建つてゐた。其所には祠のやうなものもあつた。やはり白楊の樹が生えてゐた。其所から路が二つに岐れてゐた。

車は右に折れて往つた。民家の樹木の並びに高い大きな屋根が靄雲の間から浮き出てゐた。それが曲阜城內にある大成殿で、孔子の靈を祭つた孔子廟であつた。左の方には長い長い磚壁をめぐらした鬱蒼たる林があつた。その林は孔子一家の墳墓のある孔林であつた。陽はその林の上で靄雲に包まれてとろとろと燃えてゐた。

孔林はまた至聖林とも云はれてゐた。孔林の方へ電柱が連つてゐた。路はその電柱と終始してゐた。車はその電柱の下を往つた。孔林の一堆の丘のやうに見える磚壁が近くなつたが、大成殿は未だ靄雲の中に糢糊としてゐた。そこにも右の麥の綠の中に一簇の民家があつた。

車は孔林の磚壁の角にとりついて、そこから磚壁に沿うて往つた。孔林の樹木は檜と柏の老木であつた。曲阜の城壁が手にとるやうになつて、大成殿の黄な甍がお伽噺の魚の鱗のやうに光つて見えだした。孔林の內から出てゐる水のない溝川に石の欄干の除れた古い石橋がか

かつてゐた。それが洙水であつた。私はひどく失望しながらも、禮記の檀弓にある曾子が子夏の失明を弔ふた一章を思ひだした。

「吾れ女と夫子に洙泗の間に事へ、退いて西河の上に老し、西河の民をして女を夫子と疑はしむ、」

『洙泗の流れと云へば、孔子が洙水と泗水との間で弟子を教へたから、儒教と云ふことになるが、これぢや洙泗がかあいさうだよ、』

と私は先達顔をして云つた。もとの洙水は泗水に注いでゐたが、今は曲阜の南郊で沂水に入つてゐる。沂水は曾晳が、

「暮春には春服既に成る、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らん、」

と云つた流れである。曲阜の南門を出て孟子の故郷の鄒縣に往く者は、老柏の並木の果てにその舞雩臺も見るとのことである。

石橋を越えて孔林の磚壁を右にそれて往くと、また一簇の汚い土屋が來た。其所は孔子の徒が孔子の喪に服してゐた址だと云ふ孔里ではあるまいか。民家の先は孔林の入口から曲阜城の北門の方へ向けて續いた柏の並木であつた。車は並木に沿うて往つた。

三、孔子廟

柏の並木の絶えた所に牌樓になつた神道碑があつた。曲阜城の北門は其所からすぐであつた。城門外には汚い民家が軒を並べてゐた。私達はさびれたその城門を仰いだ。曲阜は古の少皥の墟で魯の都城であつた。魯は周公旦が武王から封を受け、成王の時になつてその子伯禽が初めて封に就いた姫姓の國であつた。隣國の齊に封ぜられた太公望呂尙が、五月にして政績を報じて、君臣の禮を簡にしてその俗に從ふと云つたのに對し、三年にして政績を報じ、その俗を變じ、その禮を革む、喪は三年にして後に之を除くと云つた君子國であつたが、淆亂に繼ぐに淆亂を以てして、太公の豫言したやうに後ち寖く弱く、頃公に至つて楚の考烈王のために滅ぼされた。孔子の春秋は、伯禽から十三世の隱公から、桓公、莊公、閔公、僖公、文公、宣公、成公、襄公、昭公、定公、哀公まで十一世間のことを書いた政記であつた。

城門は二重になつてゐて次の門に延恩門の扁額がかかつてゐた。左は内に老柏の茂つた磚壁で、路の右側には露店商人が店を並べて人が群れてゐた。左の磚壁の内は顏子廟の一端であつたが、その時はうつかりしてゐたので氣が注かなかつた。車はその磚壁と人群れの間を往つて、先づ左に折れ、それから右に曲り、そして再び右にぐるりと廻つて往くと、莊嚴な孔子廟の殿堂が參差として宮闕の觀を呈してゐた。廟の地位は曲阜城の南門に當つてゐた。

孔子廟のある所は古の闕里の地で、卽ち孔子の邸宅の趾であつた。孔子は魯の襄公の二十一年十一月、卽ち我が綏靖天皇の三十年に生れたもので、史記にはその生地を魯の昌平鄕陬邑としてあるが、今陬邑の位置は明でない。父は叔梁紇、顏氏の女と野合して孔子を生んだと史記の著者は云つてゐる。その孔子はうなじがくぼんで周圍が丘のやうに出てゐたので丘と云ふ名をつけた。また尼丘山の神に禱つて孔子を生んだので仲尼と云ふ字をつけたと云つてゐる。

兒たるとき、嬉戲するに俎豆を陳ね、禮容を設け、長じて季氏の吏

となり、道に達して諸侯に遊歷し、また定公に仕へて夾谷に齊の景公を懼れしめたと云ふ孔子は、如何なる風格の人であつたか。宋の桓魋の厄に、天、德を予に生ず、桓魋、其れ予を如何せむと云つて鄭に適き、弟子と相失して郭の東門に立つた時、東門に人あり、其顙は堯に似て、其項は皐陶に類し、其肩は子產に類す、而して腰より以下禹に及ばざること三寸、纍纍として喪家の狗の如しと云つた鄭人の言が孔子の人となりを語つてゐるものではないか。

車は鹹粹門とした櫻門の口に停まつた。門前には孔子の子孫の衍聖公の邸宅があつた。私達は辨當を馬丁に喫はれはしまいかと云ふ心配はあつたが、持つて入るわけにゆかないので車に置いて出た。もう十時頃であつた。

鹹粹門の口には兵士が立ち、他に二三人の男もゐた。その男の中の跛の男が先に立つて入つて往つた私に何か云つた。私は例によつて雜記帖と鉛筆を出して文字を書かさうとしたが、書かずにおや指と人さし指で二三寸の長さをこしらへて見せた。私は意味が判らないので考へた。と、兵士が鉛筆を取つて名刺と書いた。

『名刺か、名刺か。』

私達は名刺を渡して入つて往つた。廟域には孔子の德をたたへた唐宋以來各朝に建立した大きな見あぐるやうな碑が並び、その碑の貴重な物を入れた碑亭があり、それを巡つて古檜老柏の森森たるものがあつた。碑亭は二層樓の朱柱のものが多かつた。

私達は先づ明時代の建築になると云ふ奎文閣を観、それから彼の大成殿の廟門の前へと往つた。其所には東西に小門があつて、一つを金聲門、一つを玉振門と云つてゐた。私達はその金聲門から入つて往つた。と、一人の辨髪の男が鍵を持つて案内に來た。門の内に一株の柏があつて孔子手植の樹と云はれてゐた。其所に小さな龕があつて枯木の幹が入つてゐた。それが眞個の孔子手植の柏の火災に逢つて燒けて殘つたものであると云つたが、眉つばものである。

莊嚴を極めた大成殿はその向ふにあつた。廟庭の中央に黄瓦の堂があつた。それが孔子が弟子に道を說いたと云ふ杏壇であつた。私達は杏壇を観た後に直徑三尺にあまる大石柱の並んだ大成殿へと往つた。その石柱は蠟石に龍を浮彫したものであつた。靜な廟廷には鳩の聲がしてゐた。私達け東階からあがつて往つた。堂の正面には王冠を戴き、袞龍の御衣を著けて端坐した孔子の一大木像があつて、前の臺には蟠夔敦、亞尊、饕餮甑、木鼎、四足鬲など云ふ周代の禮器が置いてあつた。孔子像の右には復聖顏子、述聖子思子の位牌、左には宗聖曾子、亞聖孟子の位牌があり、やや後によつて、右に先賢閔子、冉子、端木子、仲子、卜子、有子の位牌があり、左に先賢冉子、宰子、冉子、言子、顓孫子、朱子の位牌があつた。楣間には生民未有をはじめ、淸朝諸天子の題した扁額がかかつてゐた。

私達はそれから、本殿の後の寢殿に往つて至聖先師夫人の位牌を観、さらにその後の聖蹟殿にと往つた。觀音開きになつた扉を開けさして入ると萬世師表の碑があり、數十枚の大理石に孔子一代の事蹟を彫つてガラス障子をはめたものがあつた。

私達はそれから大成殿の右になつた崇聖祠に往つた。その前に石垣をして石井戸があつて、孔宅故井とした碑が建ち、孔子の邸宅の井戸

と云ふことになつてゐるが、なんだか眞箇とは思へなかつた。井戸の後には赤い磚壁があつた。その傍に碧甍の詩禮堂と云ふのがあつた。そのあたりの磚壁は皆赤かつた。其所には枝の枯れた柏の樹が見えてゐた。

私達はそれから大成殿の左になつた啓聖祠と云ふのへ往つて、從祀の歴代の賢良の位牌を覩て引返した。そして金聲門の出口で案内料を與へ、瓦版のやうな汚い二部の書籍を買つて外へ出た。

四、孔林

靄雲が晴れて明るい陽が射してゐた。私達は空腹を感じてゐたが至聖林へ往つて食事をすることにして出發した。私達はその路で顏子廟に寄つた。顏子廟は復聖廟とも云つてゐた。孔子から「賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲・陋巷に在りて、人は其憂に堪へず、回や其樂を改めず」と云はれた彼の顏回の廟であつた。

入つて見ると陋巷故址の碑が建つて、その前の亭の中に井戸があり、それに陋巷井の碑があつた。論語や史記で讀んでから、汚い路次の奥の貧民窟で豆腐のおからでも喫つて水を飲んでゐる痩ぎすな色の蒼白い浪人書生を想像をしてゐた顏回が、その亭によつて脂ぎつた人のやうになつてしまつた。

『おい、つまらん、いかう』

私は二人を誘うて廟へ往かずにそのまま外へ出て車に乘つた。

車は北門を出て人家の前を過ぎ、彼の神道碑の左脇を往つた。左右の並木の老柏の多くは枯れかかつてゐた。車は最初に通つて來た路と合した所を横ぎつて右脇に出た。石の目金橋がかかり、そこに萬古長春とした碑門があつた。車はその先から並木の中に入つた。

並木の行詰は孔林の入口で、棹門があつて至聖林の扁額がかかつてゐた。門の口には左右に石の狛犬を置いてあつた。物賣る人もゐた。内にも老柏の並木が續いてゐた。並木の左右は赤い磚壁。その見つけが觀樓であつた。私達は兵士に教へられてその横から石磴を登つた。其所に洙水橋の牌樓があつて、朱文字の橋名が見えてゐた。

その次の棹門は享殿であつた。石人が二つ、石獸が四つ路を挾んでゐた。その享殿には雍正の上諭、乾隆の詩を刻してあつた。享殿の後には楷亭があつた。六年の喪に服した子貢が手植の楷木と云ふのが傍にあつたが、それも怪しいものであつた。

康煕帝及び宋の眞宗の駐蹕亭を過ぎて往くと、左の小高い所に沂國述聖公の墓があつた。それは孔子の孫で中庸を作つた子思の墓であつた。神道には二つの石人か立つてゐた。その北に擂鉢形の圓塚があつて、其處に頭に龍の彫刻のある大成至聖文宣王墓とした石碑があつた。それが孔子の墳域であつた。史記によると孔子の亡くなつたのは魯の哀公の十六年四月己丑の日で、年は七十三であつたが、普通には七十二と云ふことになつてゐる。孔子の死去前の事情は禮記の檀弓に見えてゐる。『孔子夙に作きて手を負ひて杖を曳き、門に逍遙し、歌うて曰く、泰山其れ頽れんか、梁木其れ壞れんか、哲人其れ萎んか、既に歌うて入り、戸に當つて坐す。子貢之を聞きて曰く、泰山其れ頽れば、則ち吾將た安んか仰がん、梁木其れ壞れ、哲人其れ萎まば、則ち吾將た安んか放はん、夫子殆んど將に病んとすと。遂に趨つて入る。夫

子曰く、賜、爾來る何ぞ遲き、夏后氏は東階の上に殯す。則ち猶ほ阼に在るなり。殷人は兩楹の間に殯す。則ち賓主と之を夾むなり。周人は西階の上に殯す。則ち猶之を賓とするなり。而して丘や殷人なり。予疇昔の夜、夢に兩楹の間に坐奠せらる。夫れ明王興らず、而して天下其れ孰か能く予を宗とせん。予殆んど將に死せんとす」。そして孔子は七日にして沒したとなつてゐる。

塚の左には鳳凰と云ふ古木があつた。前には枯れた柏。しんぱく。右、沂國述聖公の墓の後になつて泗水公の墓があつた。それは孔子の子の伯魚の墓であらう。左の横に子貢廬在處の碑があつた。文字は赤くしてあつた。子貢が六年間恩師の喪に服してゐた所であらう。その後に小舍があつて中に先賢端木の位牌を置いてあつた。

孔子の墓前に立つた時の私の氣持ちは緊張して、大成殿に往つた時とは違つてゐた。私は地べたに坐つて三拜の禮を取つた。芥子坊子の時から孔夫子を頭に刻みつけられてゐる私としては當然のことであらう。終つて私は墓側を彼方此方と歩いた。私は歩きながら『天を怨みず、人を咎めず、下學して上達す、我を知る者は其れ天か、』と云ふ論語の句を口にした。

氣が注いてみると二人の友人はもう遠くの方へ往つてゐた。私は儒教の夢をはらひおとして友人を追つて往つた。私達は潜り潜りしてそのつど墓陵附の兵士から錢をとられた墓門を出て、右の方に廻り、墓陵の横の樹木を薙いである丘の上へと往つた。私達はそこで食事をするためであつた。

もう十二時になつてゐた。思ひ思ひの場所に坐つて折詰を開いた。一緒に來てゐた馬丁が茶を兵士の所からもらつて來た。風は寒かつたが陽があかあかと射して氣持ちがよかつた。飯にもうるほひができてゐた。

『これはどうぞよ、』

同鄕の下元君は割箸を持つたなりに額に物を當てる眞似をして笑顔をした。それは曲阜驛の毛布のことであつた。

『ほんとうやられちよつたら、孔子廟も、墓も、かうして、この辨當を喫ふこともできなかつたからね、』

私もさう云つて笑つた。何時の間にか私達の傍へ八九人の支那人が寄つて來て、私達の物を喫ふのをさも珍らしさうにして見だした。それには小供も兵士も交つてゐた。

折詰の中には卵燒が入つてゐた。卵燒の嫌ひな私はそれを喫はずにゐると傍にゐた兵士の一人が手を出した。見ると小野君も小供の一人にお菜の一片をやつてゐた。私はなんだか侮辱するやうで氣がとがめたが、本人の望みであるからかまはないだらうと思つてはさんでやつた。すると兵士は私からちよつと離れてそれをむしやむしやと喫ひだした。私はあさましかつた。

『兵隊さんが、そんなことでどうする、』

私は小聲に云つて下元君の方を見た。下元君の所へも勞働者ふうの男が往つてゐた。

そのうちに私が一ばんに飯が終つたので、空のをりを前に置いた。平生であつたら箸を中に折こんで、をりを包んである紙でぐるぐる卷きにして、草の中へでも投げこむところであつたが、平氣でお茶をく

れと云ふ人達であるから、またどうするか判らないと思つたがためであつた。果して私の考へはあやまらなかつた。をりが私の手から離れるや否や、兵士の一人が來てそれを拾つた。と、小供が來てをりを包んであつたパラピン紙と、その上を包んであつた新聞紙を取つた。と、また一人の小供が來てをりを結はえてあつた紐を取つた。支那の到る所に一寸の紙片も繩片も落ちてゐないのは、物資がたつといからであつた。空のをりを拾つた兵士はと見ると傍の樹の幹に倚りかかつて飯粒を撮んで喫つてゐた。

續いて下元君が飯を終つてをりを捨てた。するとまた二三の頭がその周圍に集まつてゐた。續いて小野君が終つた。小野君のをりにもやはり集まつて來た。私達はその日の火車で泰安まで引返して、翌日は泰山に登ることになつてゐたので、ゆつくりすることができなかつた。私達はすぐ外へ出て車に乘つた。

車は民家の間を通つて最初の路へと出た。風がないで暖かかつた。陽炎が其所此所に燃えてゐだ。圃には一めんに人が出てゐた。牛や騾馬に鋤をひかせて耕す者。鍬を揮ふ者、その多くは高粱の刈株を除く者であつた。耕された圃に入つてその高粱の刈株を拾ふ小供もゐた。

車は洙水の石橋をとうに過ぎて泗水を望む所まで歸つた。右側の圃の中に二人の男が默々として鍬を揮つてゐた。と、私はそこに子路のまぼろしをうかめた。子路は二人の農夫を見つけ、孔子の車から離れて川の淺瀬を訊きに往つた。

『もし、もし、すこし伺ひます、』

すると一人の農夫が相手になつた。

『あの車に乘つてゐるのは、たれだね、』

『あれは魯の孔丘先生です、』

『孔丘なら、年中、彼方此方をうろついてるから、よく知つてるだらう』

きかぬ氣の子路がむつとしたところで、一方の農夫が云つた。

『おめへさんは、何人だね、』

子路はしかたなしに答へた。

『僕は仲由と云ふ者です、』

すると農夫が云つた。

『ぢや、おめへさんは孔丘の弟子だね、』

子路はまた返事をしないわけにゆかなかつた。

『さうです、』

『人が爭ふたり、泣いたり、笑つたりするのが世の中だ、それを何人と易へると云ふのだね、そんな良い人とか惡い人とか云つて、人をにげまはる男についてるより、世の中をにげてる私達についたらどうだね、』

二人の農夫はそんな事を云ひながらも鍬を揮ふ事は輟めなかつた。

子路は孔子の車におくれてそれを追つかけたが見つからなかつた。

そこへ蓧を擔つた草刈の老人が來た。子路はその老人に訊いた。

『君は孔丘先生を見なかつたね、』

すると老人が云つた。

『なにが先生だよ、體を動かずに、物を喫ひ、五穀は知らないしさ、』

車が泗水の泥岸をくだつたが爲に、私のまぼろしは消えてしまつた。

一時半頃になつて私達は曲阜の車站に歸り、一時四十分發の火車に乘つた。

武藏陵墓地ローマンス

松川二郎

眉引の多摩の横山

妹をこそ、相見に來しか眉引の
横山べろの、鹿なすおもへる。（卷一四）

赤駒を、山野に放し捕不得て
多摩の横山、徒歩ゆかやらむ。（卷二〇）

ともに萬葉集の歌である。後者は武藏國豐島郡上丁椋椅部荒虫が防人となつて筑紫へ往くのを、その妻の宇遲部黑女が見送るときの歌で、明かに「多摩の横山」とあるから疑ふの餘地はないが、前者は東歌のうち未勘國歌として掲げられてあるもので、橘千蔭の如きは「此横山は地名にはあらず」として居る。然し私は、眉引の横山とあるので、多摩の横山を指せるものに相違ないと斷言していゝと考へて此歌をこゝに援引したのである。八王子地方の人は、多摩の横山一名を眉引山とさへ呼んでゐる。が、同時にそれは又、或る特定の山に與へられた名稱ではなく、多摩川の右岸に沿ふて連亙せる、低山性の丘陵群に對する汎稱と、看るのが至當であらう。

試みに、府中町御殿址あたりの臺地、もしくは立川の普濟寺の後庭などに起つて、多摩川の對岸を眺めて見給へ。小佛峠から引つゞき左手へ、さながら潑墨畫のやうに美しく長くなびきつらなつて居る一脈の丘陵群。『いかにも、眉引の多摩の横山。簡にして巧みなる形容詞よ』と、感嘆せずには居られないであらう。その川に沈んだ崖上には、かの回國雜記に眺望の美を特筆せられた大石信濃守館址をはじめ瀧山城址、日野の傘松臺、百草の百草園など、反對に武藏野の原を見晴らすによい好展望臺が、ずらりと竝びつらなつてゐる。もし此「眉引の横山」が無かつたら、多摩川は極めて平凡無趣味な、川に終つたであらう。

「武藏陵墓地」と決定して、目下その工事を急ぎつゝある。府下南多摩郡横山村の内淺川寄りの俗稱「廿里山」は、實にこの古歌に名高い「眉引の多摩の横山」の一部を成せるもので、その山と平地との交錯起伏せる地形は、赤駒を山野に放しとりかにてと言へる歌意にも、そつくり適合せるのみならず、また實際其處は、延喜式に謂ゆる「由比の牧」のあつたところなのである。奈良平安朝にかけて武藏國内には立野、石川、由比と三箇所に帝室の牧場があつた。立野の牧が最も大規模で年々二十頭の馬を租として納め、他の二牧は十頭宛の制であつたらしい。石川の牧の位置はちよつと不明であるが、立野は都筑郡川和附近で、由比の牧は八王子附近にあつた。それは今八王子市の南、横山村の東に接續して由井村があり、なほ横山村の内に大谷（大牧）淺川村の内に駒木野（駒來野）などいふ地

名の遺つて居ることに由つて、明かに證據立てられるのみならず、後世武藏七黨の隨一として勢威をふるつた横山黨は、元この由比の牧別當だつたのである。

更めてこゝに、横山黨の起原などに就て語るの必要はないと思ふけれども、序に今少し説明を加へて置くならば、今を去る大凡八百年前平安朝の末つ頃、有名な小野參議篁の子孫に隆泰といふ者があつて、武藏守に任ぜられた、此の人は任官したのみで或ひは武藏國には來なかつたのではないのかと思はれるが、その子の小野義隆は武藏權介に任ぜられ、此人は確かに赴任して、當時の國府即ち今日の府中町に居つたのみならず、任期滿了後も京都には還らずして、現在の八王子市元横山町妙樂寺附近の地を選んで永住し、「多摩の横山」の地名を採つてその姓とし、自ら横山義隆と號した。そして隆義の子資高の時に至つて、由比の牧の別當に任ぜられた。その頃の牧といふものは單純な牧場ではない、面積は何千町歩乃至は何方里といふ廣きに亘り、その中に澤山の人を養つて、幾十箇村といふ多數の村落が出來てゐたもので、「由井は五十六鄕」と言ふ言葉が今日も遺つて居るくらゐ、實質は一國の領主にも匹敵する程の勢力を有つてゐた。或る時由比の牧の牧人が殺人の罪を犯し、武藏の國司が取調べようとしたが、容易に手がくだせないので隣國の五箇國の援助を借りて漸く横山黨の二十四人を捕縛したことが平安朝末期の文書に見えてゐる。

それ程、當時の牧の別當といふ者は勢力のあつた者であつた。その事件は多分資高の子の經兼、もしくは孫隆兼時代の事と思はれるが、經兼は從五位で横山二郎と稱し、康平五年源賴義に從つて安倍賴時を討つて功を樹て、隆兼の孫時廣は又文治五年賴朝に從つて奧州に藤原泰衡を追討して大功があつたがその妹が和田義盛に嫁して居つた爲、建暦三年五月義盛が北條泰時に背いて鎌倉に激戰した時、時廣の子時兼は和田氏に味方して終に横山氏は此一戰にほろんでしまつた。今八王子市元横山町妙樂寺内、俚俗「横山樣の碑」と呼んで居る一基の寶篋印塔は誰れの墓であるか確かにはわからぬが資高以下時廣時兼に至る歴代の人の墓であるには相違ないであらうかく、八王子市に元横山町があり、市の西南に續いて横山村があり、市の北方一里半許多摩川畔なる瀧山城址の南麓にも亦横山といふ小字がある。之に由つて察するに今日の八王子市を中心として、凡そ四平方里の間は即ち舊横山莊、由比の牧　古歌に所謂「眉路の多摩の横山」の地であつて、家隆の歌に、

雲さそふ嶺のこがらし吹きなびき
　多摩の横野にあられ降るなり。

とある横野や、宣化帝の御代武藏國「横渟」に屯倉を置くとあるもの、いづれも此附近のことである事が察せられる。

單だこれだけの事實でも、武藏陵墓地附近の地が歴史的に我々の興味を惹くには充分であるのに、何此の上幾多のローマンズを伴ふに至つては、寧ろ之を不思議とせざるを得ないのである。

廿里山の戰闘の話

廿里山附近は有名な古戰場で、關八州古戰錄卷八に、永祿十二年武田信玄が瀧山城を攻めた時、「戸坂の砦」が落ちたとあるのは、即ち此戰闘のことを言つて居るのである。當時の瀧山城主は北條氏照であつた。信玄

はその年九月下旬相州小田原城を攻撃する目的を以て甲府を進發し途上氏照の據れる瀧山城を一蹴して行くつもりで、此方面の地理に精通せる小山田信茂を先鋒に、加藤丹後をして己れを警護せしめ、手兵二百餘騎歩卒合せて九百餘を率ゐて十月一日未明小佛の嶮を越えて駒木野に進出した。氏照の方でも豫て信玄が小田原攻撃の諜報を得てゐたので、老臣横地監物、布施出羽等に三百餘騎、別に雜兵二千を附して八王子市南方高地に派して、その來襲に備へてゐたのである。蓋し甲州から小田原へ向ふには、與瀬附近の勝瀬から岐れて厚木へ出るのが順路で、從つて瀧山城へ來るにも川和、川尻、橋本、相原を經て今日の八王子市へ出るのが本來でもある、亦それが當時の甲州本街道でもあつたらしい。それで專ら會原口を固めてゐたのであるが敵は小佛口の間道から殺到したといふ急報に接して、横地布施の兩將は直ちに兵を率ゐて不動坂を走せくだり、戸取山に向つて急進した。

戸取山は甲州街道に臨んで立ち、その展望の開濶さと美しさとは新聞にも特筆されてゐた位で、この高地を占領する者は敵に對して絶對的瞰制の優勢に立つのである。無論そこには簡單なものではあつたが山砦が設けられて、瀧山から哨兵が配置されて居つた。

武田の前衛小山田隊は駒木野で二百騎を四十騎づゝ五組に分けて全く戰鬪隊形をとり、河原の宿（今の淺川驛前）迄押出してくると、瀧山勢の先陣が今七八丁で戸取山に到着するといふ報告に接したので、自ら手兵を提げて急遽戸取山に猛進し、哨兵を驅逐して之を占領すると共に、一隊を右方に迂廻せしめて、敵の進撃を側面より砲撃せしめ、尚ほ一隊を山際に付けて敵の後方に雁行し、三面一齊に打つてかかつた。横地布施の兩將は之を見て、『失策つた』と思つたらうが、仕方がない直に隊を二分して應戰した。兵力は殆んど二倍の優勢を有して居るのだが、何しろ敵の爲め完全に地の利を掌握されてしまつたので、交戰利あらず、部下の勇士金指平左衛門野村源兵衛外二百四十九の戰死體を棄てて潰走するの已むなきに至つた。實に小山田信茂が得意の一戰で、元八王子村の史蹟通守屋慶之翁などに就て聽くと、小山田信茂は彼の邊に旗本を置いて、此の邊に大づつを引揚げてどんどん撃ちまくつたのだ、と當時の戰況を宛ら觀てゐたやうに話して呉れる。

金指平左衛門、野村源兵衛兩士の墓廿里山麓に有りと傳へられてゐるが、今日は最うその所在が判らない。附近の山村峰と稱する所に關ヶ原の勇士鈴木某の碑、外十數基の石塔があつて、その中に永祿十六年と刻んだものがあるが金指野村等の墓とは見受けられぬ。

武田勢は北ぐる敵兵を追ふて、瀧山城を包圍した。瀧山城は多摩川の右岸に在つて、城壁の一面は直ちに川に臨み、頗る眺望の好いところである。大手は南口で、搦手は川添ひの方にあつて、今尚その城跡は歴然と殘つてゐるが、武藏野に特有の土城で、一塊の石も使つてない一寸おもしろい築城法である。瀧山城を圍んだ頃には本隊も追々到着して、勝頼の弟の孫六を始め山縣正景、内藤昌豐、眞田正綱などいふ歴々の諸將の顏揃ひとなり勝頼を以て攻圍軍の總帥に任じ、信玄は對岸なる拜島の森（大日堂附近）に本陣を置いて後見し、揉みに揉んで攻立てたが、城兵善く防戰して、一向にその驗が見えなかつた。緋絨の鎧着て、のッしのッしと川端まで出

て來た若武者一騎大音聲をあげて、『やあ、やあ、遠からん者は眼にも見よ、近くば寄つて音にもきけよ、我こそは……』

すると城の崖から『馬鹿野郞ッ、言ふとが違つてらい、それぢやアベコベぢやねへか。』

下から『うふッ、貴樣ア老ぼれで耳が遠通寺だらうと思つて、わざとさう云つたのよ。』

上から、『馬圖々々と文句は要らねへ、上つて來い。腦味噌をたゝき割つてやるべえ。』

下から、『そんな石垣もない崖は、ずるずるとすべつて、のぼれるかい。貴樣の方から降りて來い。』

上から、『折角だが、そいつあ斷るぜ。』

下から、『意氣地なし奴。石でもぶつつけてやるから、もつとどたまを出しやがれ。』

上から『手前の方でこそ、もつと崖下まで出張つて來いしよんべん引かけてやらあ。』

或る日の激戰、かくも有つらめ。短氣の勝賴は焦々して來た。「回向せうとてお姿を繪には描かせに爲なんだものを」など、八重垣姫が濃艶な戀の對象たる勝賴樣は、至つてきやしやな色男であるが、實物の勝賴は頗る剛勇慓悍の男、是しきの小城ひとつに何をぼやぼや致しよると、自ら手兵を提げて搦手から三度び二の曲輪迄侵入し、一度の如きは氏照と出會つて勝賴はお得意の鎌槍をひねつて一氣に勝負を決せんとし、氏照また大身の鎗をしごいて、追ひつ返しつ渡り合つたといふ（甲陽軍鑑）が、結局相方怪我をしない程度で分れたらしい。信玄は勝賴が焦り出したのを見て、怪我をさせてはならぬと圍みを解いて小田原へ向つた。

話が少しく岐路に入つて居るやうに思はれようが、これが後の話に重要な關係があるので、氏照は氏康の次男即ち氏政の舍弟だ、位の事は說明する迄もないとして、瀧山城は元來大石源左衛門定久の居城である。

大石氏は木曾義仲の後裔で、定久は十四代目に當る相だが、關東管領扇ケ谷上杉氏の重臣として、近郷五十六箇村を支配してゐた豪族で、曾祖父房重は享德四年正月分倍河原の戰鬪に上杉方先陣の將として討死してゐる。回國雜記に道興法親王が二度まで大石信濃守の館を訪問したことを記錄してゐるのは、房重の子で定久には祖父に當る顯重時代の事で、其頃は瀧の西北一基米高月に居城してゐた。定久の世になると同時に、高月は手狹とあつて瀧山城を築いて移つたのである。それは天文の初め頃、然るに天文十五年川越の夜戰に敗れて、定久は北條氏に降り、世嗣があつたに拘らず娘ひさの婿として氏照を迎へ、城を讓つて自分は西多摩の戶倉に隱居してしまつた。

詰り氏照は押かけ聟で、初めは由井源三と稱してゐたが、定久の沒後は大石氏を稱せず、所領をもつたまゝ北條氏に復歸した。まあ態のいゝ横領だが、戰國時代には是位の事は日常茶飯であつたらう。瀧山城の戰爭があつて間もなく、氏照は瀧には落つるの忌言葉があつていけないと言つて、八王子城（元八王子村）城山を築いて移つたのである。併し其樣のことは一場の話柄にすぎないので、八王子城は地勢も極めて險要であり、城廓の規模も瀧山城に較べれば、比較にならぬ程宏壯なものであつた、甲州口を確實に抑へる爲の用意に出でたものである事は、言ふ迄もあるまい。しかるに對手の武田は却つて早く亡んで、天正十八年六月二十三日「八王子城の悲劇」となつたのである。

六月二十三日の赤飯

淺川驛前から一直線に、甲州街道を横斷して丘上へ通ずる道をのぼつて行くと、帝室林野管理局横山出張所の洋館があつて、その丘阜と極めて小さな谷一つ隔てた向ふは即ち武藏陵墓地たる廿里山で、道はその陵墓地の西麓に沿ふて元八王子村慈根寺へと通じてゐる、御陵に若し裏參道ができるとすれば、地形上どうしても此の道路を擴築して充てられるに相違ないが、その細い道路は、すくなくも四百年前から開けてゐたところの歷史的な道路である。舊八王子城下から甲州街道に出るには、是非この道を通らねばならなかつたのみならず、戸取山の要害は依然として其の關門を成して居つた。氏照も屢この道を通過したであらうし、彼の八王子城攻撃の際には、淺川村上椚田初澤の高乘寺(停車場の西南約一基米)に本營を置いてゐた前田利家け、軍旅を率ゐて正にこの道を前進して行つたのであつた。

御陵の北裏は、城山から流れる小川一つを隔てて慈根寺部落に接し慈根寺の西につづいて中宿部落がある、倂せて民家七十戸ばかり、舊八王子城下中最も城に接近した部分で、中宿の西端にある宗關寺の前をすぐれば、其處はすでに桝形の跡や勘解由舘址などのある山下曲輪であるが、その慈根寺、中宿兩部落には、古來、而して今日に至る迄、

一、年末に餅を搗かず、一月二日に至つて搗く。

二、六月二十三日には各家必ず赤飯をたいて食べる。

といふ二つの奇習が行はれてゐる。蓋し其一は、往時北條家では年の暮に餅を搗かなかつた慣例に倣つたもの、其二は天正十八年六月二十三日八王寺城落城の際、鮮血河に流れこんで河水を染め、平常清冽な溪水を以て飲料水に充てて居た土民が、當日水をくんで飯を焚くと、眞赤に染まつた。その悲壯な歷史を記念するものだと言傳へられてゐる。

此八王寺城落城の物語は、極めてロマンチックなもので、且つ頗る劇的なシインに富んでゐる。——北條盛衰記に曰く、

前田筑前守利家八王子の城へ押寄る。城主は氏政舍弟陸奧守氏照也。氏照は小田原に在り、本城に横地監物、中の丸に中山勘解由、狩野一庵、山下曲輪に近藤出羽守籠りける。寄手の先陣一萬五千餘騎三十三日戌の刻より打立、丑の刻には早町を押破り押寄せけり。本城は殊外遠きまゝ此樣子も不知、兼て用心したれども朝霧に敵の寄るも見えず、敵近々と押上がる。されど豫て用意のことなれば石弓を切つて落とす、先陣數百騎只一捲りに打落さる云々。

と、大層景氣のいゝ記事になつて居るが近世日本國民史には此戰況を次の如く叙して居る

景勝、利家は上武二州の降人を嚮導とし、兵一萬五千を以て横山驛に至り、夜半進發し、二十三日未明街口を破り悉く番兵を殺し、大道寺の兵は山下曲輪に、上杉隊は城東追手に前田隊は城北搦手に逼つた。此日は大霧にて咫尺を辨ぜず、城兵は毫も寄手の近づくのを知らなかつたが、その銃聲を聞き、警備に就き、近藤助實衆を勵まし、奮闘して死し、山下の曲輪は遂に陷つた。午前八時頃前田隊の先鋒山崎長鏡、金子丸を打破

りて金子家重を殪し、長能龍與村永福の兵と共に中の丸に遁つた。中山家範は精兵三百を以て防戰最も力め、數々突出して寄手を撃退した。上杉隊の先鋒藤田信吉等は東方の溪間より進み、三の丸を攻撃した。狩野一庵よく防ぎ戰ふたが、上杉の部將甘粕淸長その背後に出でて、火を風上に放つた。城兵狼狽潰走し、一庵は戰死した。信吉、淸長等は本丸に肉薄した。橫地吉信は士卒二百許を率ゐ、門を開いて出撃し、一度び之を撃退したが、既に寄手の拔く所となつた。

と、實に孤軍奮鬪、沈痛悲壯を極めて午後四時頃全く陷落したのであつた。此戰に城方の死する者一千二百八十三人、就中渦巻く火焔の中に、その妻子を刺して後一庵と倶に悠々屠腹して果てた中山勘解由家範の戰死振は、もつとも劇的であつた。

それにまた面白いのは、利家は攻撃に先立つて、曩に降伏した鉢形城主北條安房守氏邦を使者として城中に派し、懇に開城の利なることを說かしめた。氏邦は城將等に取つては主筋の一族であつたけれども橫地中山狩野等の城將は大いに其の不甲斐無さを憤り、

『城を枕に一死あるのみでござる。氏照の郎黨には、此場に及んでおめ〳〵敵に降參致すやうな、臆病武士は一人も居りません。直接奧州の命なき以上、此城は斷じてお渡し致すことは罷り成りません。此旨宜しく御傳へを願ひたうござる。』

と、散々恥しめて追還したといふことだが、是などもなか〳〵劇的で、利家は其の復命を聞くと、『さすがに氏照は名將だ、善き家來をもたれた』と膝を打つて嘆賞した。此邦を前に置いてさう言つたのだから、老巧の利家にも相當皮肉なところがある。

まだある。宗關寺の西方約、千五百米突、勘解由舘址の北にそばだてる「小峰曲輪」の跡に、氏照と中山家範との墓が相竝んで建つてゐる。家範の法號は獅子院本室宗無居士といふので、是は確かに眞物らしく非常に古い自然石で、しかも本の字から上は缺けて斷碑となつて居る。氏照は小田原城で自刄した時、その侍臣が私かに首を盜んで來て此處に埋めて置いたのを、元祿年間（二年）に至りて墓標を建てたのだと言傳へられて居る。法號は靑霄院殿透岳宗關大居士で、これは文字も至極はつきりと讀める。氏照の首級は京都へ送られた筈で、且つ小田原から何うして多數の敵を眼をくらませて此處迄運んで來られるか、些か信用しがたい話ではあるが、氏照の侍童山角平太郎といふ者が首を盜まうとしたことは、關八州古戰錄にも見えて居るから、滿更影も形もない事では無かつたらしい。是等の事實及び傳說を綜合して、大衆文藝式に書綴るならば、可なりおもしろい讀物が出來上らうと思ふ。

新篇武藏風土記稿には、中山勘解由のと倶に狩野一庵の墓があると記載してあるが、今それらしいもの見當らない、宗關寺の住職にきいても、矢張りわからぬといふ。別に勘解由のに隣つて鐵心院淨肝道徹居士——丹治信正といふ人の墓がある、碑銘を讀んで行くと百人隊の隊長であつた事がわかつた、是は文政二年に其の裔孫たる昌邦と云ふ人が建てたものである。

兎に角その墓の在る所は、東南に面して非常に好い眺望を有し、松の老木が五六本高く茂つて、背面には八王寺址たる城山が高々と

傾ッ黒く聳えてゐる。城山には當時の士壘石垣等も殘つて居るし、燒殘りの炭化米や炭化大豆などの出る所、その他種々の舊蹟があつて、案内者雇つて行つて精細に探れば、或る程度迄は城廓の規模を彷彿することができる。頂上に八王子神社及び城趾碑などがある。

長田作左エ門の話

八王子城落城の後、前田利家はただちに舊城下に軍政を施いて、秩序の恢復と民心の安堵に力を注いでゐた。すると五六日を經て、その足輕大將たる川島左近の手に屬する五六の歩卒が、一人の未だ年若い屈強の男をからめ捕つて、引立て來たり、『廿里村を巡羅して居りますると、さる百姓家に怪しき態の男が潜伏致し居りまするに由り、身分姓名を問ひただしました處、答辯が至極曖昧なので、有無を言はさず引立てて參りました。右股に槍の突傷がございまする、北條の殘黨に相違ございませぬ』と告げた。當時利家は依然本營を御澤の高乘寺に置き、從つて左近の如きも、河原宿の民家に起居して、警備の事務をとつてゐたらしく、『直にこれへ引いて參れ』と命令したが、首をうなだれて悄然と裏庭へ引かれて來た若者を一目見ると驚きと悦びの色が同時に左近の面上で渦の如くに混亂した。

『やゝ、そちは作左衞門ではないか。』

呼かけられて若者は吃驚して面をあげ、ジッと左近の顏を見詰めたが、

『面目次第もございません。』

と言つて再び首を垂れてしまつた。

『いかに戰場とは言へども、さても不思議な對面ぢや喃』と、わざとらしくもない感慨の聲を洩らした左近は、歩卒を顧みて、

『この者が、かねて其方達に内意を含めて探してゐたわしが甥の長田作左衞門ぢやわ。』

と言ふと、自ら立つて其の縛めを解き、懷かし相に作左衞門の手を執つて屋内に請じ入れ、絶えて久しい對面これも日頃念ずる八幡大菩薩のお引會はせぢやと、酒肴を命じて厚くもてなすのであつた。作左門は北條氏照に事へ、近藤出羽の手に屬して山下曲輪に在つたが、拂曉しかも濃霧中の戰ひ、右股に突創を受けたので附近の森林に退いて、自ら手當を施し、暫らく休憩して居るうち城は陷つてしまつたので、今は詮方なしと日の暮れるを待つて山路づたひに遁れ出で、廿里村まで落延びたが、警戒嚴重にして蟻の這ひ出る隙間もない有樣なので、民家に潜伏して傷を養ふて居るところを捕へられたのであつた。

面目ない、面目ないと頻りに作左衞門が面目無がるのを、左近は慰めて、

『何の其樣に卑下することがあるものか、今度の城方の働きに就ては我が殿も殊の外感心遊ばされて、若し生殘つた者の中仕官の望みある者は、續々高祿にて召抱へ遣はせと、御内意が出て居る程ぢや。況して御身の如き北條譜代の臣といふ譯ではない。謂はば故主に對する義理は濟んだといふものぢや。兎に角殿樣が目見得仰付けると仰しやるのぢやから、來るがよいわ。』

と厭がる作左衞門を無理に延いて、利家の面前に連れて出た。利家は親しく當日の戰況などを問ふて、殊の外機嫌がよく、

『どうぢや予に隨身せぬか、伯父の左近も居る事であり、相當に取立ててやらうぞ。』

と言つたが作左衞門は城を落つる時、すでに生涯を町人で送る決心を致して御座りまする』と答へると、

『ははあ、忠臣二君に見えずか。町人になる？　それも宜からう。兎に角暫らくは左近方で靜養致すがよろしからうぞ』とあつて、その日は伯父の左近も作左衛門も、上々首尾で退出した。

それから五六日すると、作左衛門は更めて利家から呼出しを受けた。何ごとであらうかと左近同道で出ると、

『其方は先きに、弓矢を棄てて町人と相成る心底の由申したが、それに相違ないか。』

と念を押された。で、それに相違なき旨を述べると、然らば幸ひ其の方に命じたき仕事がある、どうぢや一つ骨を折つて見る氣はないか、とて示されたのは城下三宿の市勢恢復に關する膽煎であつた。作左衛門は、

『誠に身に餘る光榮、もし御命じ下さるならば隨分と粉骨碎身仕るで御座りませう。』

と喜んでお受をなし、即座に左の墨附が與へられた。

當時三宿之町人呼出　如前々本屋敷に有付　市以下商賣仕　樣に可　申觸者也。

天正十八年七月七日

長田作左衛門殿　　利家判

蓋し三宿といふのは横山、八日市、八幡の三宿で是は瀧山城時代からあつた城下街で、毎月四八の六齋に市が開かれて諸品の取引が行はれてゐた。瀧山城址の南麓にも今日横山、八日市等の地名が殘つて居り、元八王寺村の中にも八幡宿の名が殘つて居る。當地方は古來養蠶機織の盛んな處で、彼の手引草に武藏の國產として「瀧山横山紬縞」とあるのを見ても、八王子織物の起原の古い事はわかるであらう。西行法師には有名な、

あさ川を渡りて見れば富士の根の
桑の都に青嵐ぞ吹く

の詠がありて、八王子を桑都と稱するは氏照全盛の頃から始まつた事であると、元八王寺村誌に掲げられ、「尙八王子八景」の中に、

桑都晴嵐
郭外民家七八千。晴嵐吹送夕陽前。
東西南北桑田茂。唯有芙蓉挿九天。

とあるのを見れば、八王子城時代三宿の繁榮振大凡想像することができる。

利家から三宿復興の任務を授けられた作左衛門は、舊城下は交通幹線から引込んで居て、將來商業街として發展すべき地に非ずとなし、甲州街道と鎌倉街道との交叉點たる横山村の地を相して、三宿の町人に宿越をなさしめ、又四方に離散した町民や野武士等を招き集めて、先づ横山宿を作り、市場を開いて其の復活發展に努力した。そして德川の治世となるに及んで、更めて初代横山宿の名主に任ぜられた。これ即ち今日の八王子市の根元をなすもので、作左衛門の墓は市内大横町極樂寺に在り、開市の祖として尊崇されてゐる。

八王子と作左衛門との關係に就ては、尙幾多の興味ある插話があるけれども、本題たる武藏陵墓地との因緣は漸く淡いから、茲には省かねばならぬ。又武田氏の滅亡後、その幼き妹と姪とを伴ふて甲州からこの横山村にのがれ來て、侍女と倶に紡織に從つて佗しき煙を立てつゝ、幼孤をはぐくみ、十八歲の時剃髮して尼となり一生を處女で終つた信玄の第六女松姫の生活、それも寔に傳奇的な哀話であるが、遺憾ながら今は語るべき餘白をもたぬ。諸君はよろしく新御陵の參拜の歸途、八王子市臺町の信松院に、その墓とその遺愛の松とを訪ふて、みづから其のローマンスをさぐるがよい。（終）

獄中獨問答

堺利彦

『扨、今日の天氣はどうですな。
『そうですなア。大ぶん霧が深いようですなア。
『曇、後雨ですかね。
『イヤ存外これで晴れるかも知れないよ。君
『そうだと有りがたいんだが。君の樂觀主義は兎かく向ふからはづれるんだからなア。
『だつて君、昨日もあの怪しかつた朝の天氣が、午後は見んごと、あのとほり日なたぼつこが出來たぢやないか。そんなに悲觀するばかりが能ぢやないよ。
『ウン、そりやアそうだね。あの向ふの屋根の上に鳩の幾匹もとまつてる樣子なんか、如何にも晴の前兆とも考へられるね。
『ナンテ云つてる中に雲が跡から跡からと這ひだして來て、段々に青い空がふさがつてしまふんぢやないかね。そしてとう〳〵ショボ〳〵降りだすといふ心細い運命ぢや無いのかね。
『君にそう云はれると、そんな氣もするね。然しマア好いや、どうなると勝手にしろ。降らうが晴れようが日々是れ好日さ。
『フフン、例のお悟りか。
『いやに冷かすね。悟つちやアいけないかい。
『イヤ結構だよ。時に今日の晝は何だらう。
『サア。豆かな。
『豆だとすると、どの豆だらう。
『大豆か、そら豆か、ふぢ豆か。
『今日は多分ふぢ豆だらうよ。
『そうだと有りがたいね。僕はあの豆が一等好きさ。
「それとも今日は又例のジャガかな。
『ジャガは幾度でも惡くないね。
『それとも久しぶりで鮭とでもしやれて來るかな。
『などと勝手なことを云つてると、又例の菜ッ葉と來るぜ。
『いやア！　あいつにやア恐れる。
『だつて仕樣がありやしない。
『無論、仕樣はないさ。誰も仕樣があると云やしない。
『ぢや文句を云ふな。
『文句を云ふわけぢやないが、只ちよつと希望の意を表して見たまでの事さ。
『希望の意を表したつて、それが採用されるわけぢやあるまいし。
『だつて好いぢやないか、それだけでも多少の慰めになるんぢやないか。
『安價な慰めはよせよ、馬鹿々々しい。
『マアそんなにおこるなよ。君は兎かく六かしい顏をするからいけない。

『あゝそうか、よしく。ぢや菜ッ葉の來るまで鮭と豆とジヤガの夢を見て置くと仕よう。

× × × × ×

『今日は入浴があるかどうか。
『あつてもいゝ日取だね。
『何しろ冬は入浴が一等だ。湯あがりの喉かさッたら無いからね。
『全くさ。入浴があれば先づ午前中は助かると云ふもんだ。
『所が、そうは問屋がおろさない。
『イヤ、今日はありそうだよ。キットありそうだよ。
『どうぞお天道樣、今日入浴のあります樣に。
『馬鹿だなア君は。風呂が天から降りやしまいし。
『マアそんなに云ふなよ。謂ゆる是れ、苦しい時の神頼みなるものさ。
『それが馬鹿だと云ふんだよ。
『馬鹿だつて好いぢやないか。ソラ、ソラ見たまへ、擔當さんの聲が聞えだしたぢやないか。
『あれは違ふよ。
『イヤ違はない。今に「脱衣！」「入浴！」の號令が聞えて來るぜ。
『馬鹿だなア、ほんとに君は。君は何でも自分に都合のいゝ樣にばかり物事を觀察してる。
『その方が氣持が好いぢやないか。
『だつて物事が君の觀察どほりに實現しやしないから、跡で失望するぢやないか。
『跡で失望しなけりや好いだらう。
『だつて現に今、入浴が無かつたら失望するだらう。
『ウンそりやチョット失望するにや違ひないが、別にそれで煩悶するわけでもない。
『そりやア、高が入浴だから、幾ら弱い君でも眞逆に煩悶といふ程の事は無いだらうさ。然しモット重大な事だつたらどうだ。
『サア、それはチョット返答に困る。
『それ見ろ。
『君は又エライ權幕だね。ぢや君は悲觀ばかりしてゐれば失望する事がないから、それで少しも煩悶が無いと云ふのかね。
『サア、そう云はれると俺も實は少し困る。
『それ見ろ。
『ハハア、お互ひ樣で勝負なしとするか。

× × × × ×

『オイ君、今日はもう手紙を見せそうなもんぢやないか。
『そうだねえ、まだだらうよ。
『だつて今日はモウ廿一日だぜ。
『だつて先月は廿五日だつたぜ。
『だつて今月はこちらから出した手紙が早かつたから、あちらからのも早い筈だ。だから檢閲が早く運べば今日あたり見せて呉れる筈だよ。
『所が、その檢閲が決して早く運ばないよ。
『早く運ばないと限つてやしない。

『ソラ、ソラ、又足下の例の筆法がはじまつた。今から手紙を待ちこがれて、三日も五日もジレて暮すのだらう。

『ナニ僕だつてそんなにジレるほどぢやないさ。だけど君だつて手紙は一日も早く見たいんだらう。

『そりや當り前さ、だけど早く見たいと考へたからつて、それが爲に早く見られるわけぢや無いだらう。

『ウン、そりやそうさ。だけど實際モウ今日あたり見せたつて好いぢやないか。

『見せたつて好いにや違ひないが、見せなくたつて好いんだ、向ふから云へばね。

『成るほど、そりやそうだね。ぢや今日はまだ少し早いとしても、明日は大丈夫だらう。

『明日がナゼ大丈夫だ。あさつてかも知れない。四あさつてかも知れない。まだ其の翌日かも知れやしない。

『だつて、そりや餘んまりぢやないか、

『餘んまりだと云ふのはコッチの事だ。アッチぢや忙がしくもあるだらうし、なまけもするだらうし、忘れもするだらうし、謂ゆる事務の都合上、五日おくれたつて、一週間おくれたつて不思議はない。

『そう云はれりや仕方はないが、コッチはこんなに待つてるんだからなア。

『幾ら君が待つてるからつて、アッチで一々そんな事に頓着してゐられるもんか。

『君はいやにアッチの肩を持つね。然しそれも仕方がない。ぢや明後日の事として置くか。まさか明後日よりおくれる事はあるまい。

『よし〳〵、マアそうして置くさ。そして明後日になつたら又一日一日と延ばすさ。

『オイ馬鹿にするな。

『ナニちつとも馬鹿にするわけぢやない。マアそんな事を云つてるのも好いさ。そうする中に日が立つよ。

× × × × ×

『オイお前は、昔しの入獄と今度の入獄とを比較して、どんな感じがするね。大ぶん違ふかね。

『イヤ大して違はない。僕はモット違ふだらうと思つてゐたが、存外違はない。

『お前の初めて入獄したのは幾つの年だつたい。

『三十五の時だつた。

『その時の刑期は？。

『禁錮二個月さ。

『二度目は？。

『三十七の時で同じく禁錮一個月半。

『三度目は？。

『三十九の時で懲役二年と禁錮二個月。

『そして今度は？。

『刑は禁錮十個月、未決通算四個月だから、正味六個月さ。そして年は五十七歳だよ。

『恐ろしく年を取つたものだね。

『全くだ。我ながら驚くよ。

『實にお氣の毒だね。然しお前は自分で餘り老衰を感じてゐないぢやないか。

『そんな事は全く忘れてる時が多いよ。

『それは感心だとも云へるし、ウッカリだとも云へるね。

『全く自分のウッカリに驚く時があるよ。然しどうも仕方がない。

『老の將に至らんとするを知らずといふ言葉があるね。

『そう云ふと何だかエラそうだね。

『然し大抵の人は實際そうなんぢやないか。

『それは大抵の人が皆ウッカリしてると云ふ事を意味するのだらう。

『そうかも知れない。なさけないものだね。

『然し、それだから生きてゐられるのだらう。毎日くよ／＼してゐられるもんぢやない。よくしたものだね。

『バナード・ショウの劇に、三百年生きる人間の社會を想像したのがあるね。折々あの事を思ひだすよ。

『お前も三百年生きたいと云ふのかね。

『三百年生きたいと云ふわけでもないが、若い時から今日までの事を思ひ返して見ると、殆んど總て失策と怠惰の連續で、恥かしくもあれば馬鹿らしくもあり、惜しくもある。若しこれから先き、まだ相當永く生きられるものなら、何もかも新規まきなほしにして見たいような氣持がする。

『それは感心だね。然し年を取つた事を忘れてる時が多いとすれは、まだ相當永く生きる積りになつて、出來るだけマキナオシをやればいゝぢやないか。

『然し、忘れてる時が多いと云つたつて、思ひだす時もずいぶん多いんだから困る。それに氣持の上では忘れてゐる樣でも、理論上、餘命幾許もないに極まつてるんだから仕方がない。

『ぢやお前は、今度の入獄で、矢張いろ／＼昔と違ふ點があるんだらう。

『それは無いでもないね。

『今度は餘ほど苦痛が多いかね。

『それは大して違はない。八月の十三日から三日間、これは堪らんと思ふほど暑かつた。若しこれが一週間以上も續くなら參つてしまふだらうといふ氣がした。そんな事は昔し無かつた。そこらが年を取つたセイかとも考へたが、十二月の寒さのこたえ方には、昔しと違ふ樣な點は殆んど無かつた。

『食物の事はどうだね。

『千葉の二年の時、飯がうまく食へる樣になるまで二個月ばかりかゝつたと記憶するが、今度は四個月たつてもまだ少しづゝ飯を食ひ殘す時があつた。元來の胃弱が、今は一層弱くなつてるものと見える。それも年のセイには違ひないだらうが、然し大した變化でもない。

『本を讀む根氣に昔と今と違ひはないかね。

『それは大して感じない。數年前から晝寢をする（と云ふよりは寧ろ晝寢をせずにゐられない）習慣があつて、今度はいつてからも、夏の間はよくゐねむりをした。そして其のゐねむりが、六かしい本（殊にドイツ語の本）を讀む時に起つた。そこらが年につれて根氣の薄くな

つたのには相違ないが、然し千葉の時にも、資本論を讀めば――それは英譯だつたが――必ず眠くなつた覺えがあるから、大した相違でもない。

『君は今度ロシヤ語をかぢりかけたんぢやないか。幾らか物になつたかね。』

『イヤ、その點では全く降參した。尤も、かぢつたと云つても、豐多摩にゐた一個月あまりの事で、巣鴨に移されてからは、一切の私本を見る事を禁じられたから、自然ロシヤ語も中止になつたが、それで無くても自發的に降參して中止にしたかも知れない。千葉でドイツ語を始めた時には、兎にかくズン／＼進歩するのが嬉しくて、更に餘力を以てフランス語をもかぢつたが、今度のロシヤ語は迚も駄目だといふ氣がした。勿論、初めから物にするなどといふ野心でなく、ほんの少しかぢるといふだけの好奇心だつたが、その好奇心にすら滿足を與へる事が出來そうになかつた。これは確かに根氣の衰へに依る事でもあらうが、然し又ロシヤ語の性質が、イギリス語、ドイツ語などと、餘ほど緣が遠いといふ事實にも依るのだと思ふ。

『私本の看讀を禁じられたのには餘ほど困つたかね。

『困つたよ。それには實に困つたよ。泣きたいくらいだつたよ。一時は全く氣が挫けてしまふかと思ふ程だつた。然し何と云つても今度は短い刑期だ。せつかく樂しみにしてゐた豫定の讀物を讀み得ないのは殘念千萬に相違ないが、それが爲にジレたつて仕樣がない。官本の中の幾らか面白そうなのを借りて、單に時間つぶしの積りで色々讀んだ讀んで見れば、どんな本だつて相當に面白いものだよ。

『ぢや、私本禁止も結局大してこたえないわけだね。

『イヤ、そうぢやないよ。今度だけの事としてなら、そんなに重大な苦痛でもないわけだが、永い將來の事として考へると、これは非常な大問題だよ。若し刑の目的が、成るたけ多くの苦痛を囚人に與へるにあり、又成るたけ囚人を阿呆にするにあり、そして又、囚人の出獄後成るたけ世間の役に立たない廢物にするにあるとするならば、私本看讀禁止は實に適切有効の方策に相違ないが、それだけに、長期の囚人に取つては、實に致命的の打擊だよ。

『成るほどね。全く同情するよ。今後何とか成らないものだらうかね。

『サア、僕は必ず何とか道が開けるものと信じてゐる。これこそ實際餘んまりだからね。

『大臣が替るまでは駄目だと誰かが云つたね。

『そういふ捨鉢めいた言葉が刑務所の役人達の口から漏れる所を見ると、實務に當る人々の目には、この禁止が如何に無理なものと映じてゐるかゞわかるね。

『ぢや其の點は遠からず何とかなるだらうよ。

『そうでなくちややりきれないね。

× × × × ×

『ぢや、お前の、昔と今度との違ひは、大體その位のものかい。

『イヤ、まだ外に一つ重大な事がある。

『重大な事！。それは何だい。

『直接の苦痛としては、今話した通り大した事はないが、色々將來の

事など考へると實は少々煩悶せざるを得ない。

『お前は謂ゆる『樂天囚人』ぢやないか。

『所が、必ずしもそうでない場合がある。そこが矢張り年のセイだらうかな。

『ぢやお前は、これまでと全く違つた考へ事をしてると云ふのか。

『イヤ、そうでもない。今僕が煩悶してると云ふのは、皆な昔し考へた事ばかりなのだ。然し昔は其の方の事を餘り深く突きつめないで、樂天囚人で通してゐたが、今はそれを少し痛切に感じてるのだ。

『成るほど。然し『煩悶』なんて、お前の柄にないぢやないか。

『イヤ、必ずしもそうではない。僕だつて煩悶するよ。現に最初の入獄の時、滿期前三四日といふ事になつた時、その三四日が永くて、永くて、どうして暮し明かさうかと、悶え苦しんだ事がある。

『そんな事で、よく其次の二年以上が過されたものだね。

『そこは御方便なもので、二年と極れば二年の心持になる。二個月なら二個月が永い。二年だつて其の十數倍の永さとは感じないものだよ。

『では今度はどのくらい永く感じてるね。

『そうさね。今度は中途半端で、どうも妙な心持だ。最初から、ナニ六個月くらいワケはないといふ考へがあつたので、實はそれが悪かつた。六個月でも、ワケはないと思つて掛ると存外永いよ。

『そうかい。それは困つたね。

『現にモウ刑期は大部分經過してるぢやないか。跡はモウ幾らでもないぢやないか。然るにだ、跡の日數が幾ら短くなつても、それが短く感じられない。人間といふ奴は變なものだね。

『成るほど。然しその位のこと、大した煩悶でもないだらう。

『勿論、これはほんの小煩悶の一例だ。然しモット大きな煩悶がある。昔し僕はこんな歌を作つた事がある。かしこにて死なん身かなと思ひつゝ見れば懷かし病監の窓。

『ヘエ、ずいぶん感傷的だね。

『僕の柄にないだらう。

『全くだ。然し君にそうした方面もあるのだらう。

『そうだと見えるね。然し、そんな歌など作つてる時には、まだ痛切にそんな事を感じてはゐなかつたんだと僕は思ふね。

『成るほど。だから、そんな歌を作りながら矢張り「樂天囚人」だつたのだな。

『尤も、今だつて樂天囚人で無いわけでもないと思ふがね。

『ぢや何かい。今でも樂天囚人ではあるが、それと同時に、獄中で死ぬる運命と云つた樣な事も痛切に感ずると云ふのかい。

『マアそう云つたわけだ。よしんば獄中で死なないまでも、永い獄中生活で段々に老衰して、殊に私本の禁止が續きでもして智識の源泉を斷たれるとすれば、殆んど全くの阿呆となり、廢物となり、そして社會に吐きだされて、殘る僅かの月日を送るのに何の意義があるか。

『然し、今そんな風に考へるお前が、昔はナゼそれを痛切に考へなかつたのだらう。

『サア。昔だつて入獄は厭に極つてるし、殊に永い入獄は堪らないと思つてゐた。そして只、短い刑期なら、殊に拘禁を避ける事が出來で

もするなら、一ト休養、一ト學問と思つて、折々は悪くもないなどと考へてゐた。然るに今日としては、永い獄中で廢物となり、或は死骸となるのは、いたづらに苦痛を嘗める事を意味するといふ考へが、先に立つて來た。そこが矢張り年のセイだらうかな。

『成るほどなア。然し、二年の時に二年が大して苦にならなかつたと同じ様に、又その時にはその時の心持になるんぢやないだらうか。

『サア。果してそう行くかどうか。

『そう行かないとすれば、どうなるのだらう。

『死なない以上、どうにかなるには相違ないのだが、そのどうにか成り様が僕にはコワイんだ。

『コワイとは、どういふ意味かね。

『日々夜々際限なく苦痛を嘗めるのもコワイし、氣ちがひになるのもコワイし、若しか又、神佛にすがるような弱い心にでもなる事があつたら、それは又殊にコワクもあり、ナサケナクもある。

『まさかお前が神佛にすがるほどお目出たくもなるまいよ。又まさかお前が氣ちがひにもなるまいよ。

『イヤ、何とも云はれない。苦しまぎれには、ツイどんな事になるまいものでもない。氣ちがひになるのなら、自分に責任がないような氣がするから、まだいゝが、馬鹿々々しい氣安めに乗せられて、お目出たくなつたりするのは、自分の責任だといふ氣が抜けないから、それを今から考へるのが非常に苦しい。但しそれも一種の氣ちがひと考へられない事もないが。

『イヤ、その二つの點はお前には、大丈夫だらう。

『そうかしら。然しそうだとすると、殘る所は只、日々夜々際限なき苦痛を嘗めるのだが、そして結局、廢物になつて死ぬるのだが、一體何を張合にいつまでも其の苦痛を忍ぶのだらう。

『然し、ずいぶんそれを忍んでる人があるぢやないか。現にお前の友人、知人、同志の中にも、幾たりもあるぢやないか。

『だからさ、僕は今度、シヨツチユウその人達の事を思ひやつてるんだよ。

『それは殊勝な事だね。然し其の人達が必ずしも皆すぐれてエライ人物といふわけでもないだらうに、皆どうにかやつてゐる所を見れば、お前だつて、若しそうなつた場合、矢張りどうにかやるだらうぢやないか。

『其のどうにかがコワイのだよ。現に自殺に依つて苦痛を免れた人が少なからずあるぢやないか。

『お前も其の道を選ばうと云ふのかい。

『それが確かに選べるなら、一等らくな方法だと思ふね。然し周圍が出來るだけそれを防止するし、僕の性質がそれに適しない。

『お前は自分の事を、臆病な卑怯な勇氣のない男だと云ふのかい。

『ウンそうだ。僕は靑年の時、自分の血で懺悔の日記を書かうとしてナイフで小指の先を切りかけたが、どうしても切れなかつた。その後も幾度か、自殺の場合を想像した事があるが、首をくゝるにしても、舌をかむにしても、高い處から飛ぶにしても、水に入るにしても、皆な僕には出來そうにない。僕は士族の子だが、若し昔に生れてゐて、腹を切らねばならぬ運命に立至つたら、どうしたらうと考へて、非

常に苦しかつた覺えもある。

「食物を取らないで餓死するといふ方法もあるね。それなら消極的だからやりやすいかも知れない。

『イヤそうでない。禁煙すら容易な事ではない。間食を禁ずる事すら僕には出來ない。それでどうして一切の食物を拒否する事が出來よう。

『お前はそれほどの意久地なしか。

『實際そうだからどうも仕方がない。若し死にかけて仕損じたりしたら、それは又どんなに見苦しく、どんなに恥かしいだらう。だから僕は不意にやられるのが一番だと思つてる。不意でなくても、極刑に處せられるのは、自殺よりマシだらうと思つてる。

『お前はいつか人に刺されかけた事があるぢやないか。あの時はどうだつた。

『あの時は平氣だつた。あれは僕に取つて大變好い經驗だつた。あんな場合、恐怖など感ずるヒマもなし、又少しの苦痛も感ぜず、只だ力の限りを盡して抵抗し防衛するだけの事だつた。あれだと大きにらくだがなア。

『そうすると何かい。お前は。今度いよ〳〵入獄がコワクなつたといふわけだね。

『マアそうだ。

『ぢや今後は、再びはいる事を避けるに努めるといふ方針になるわけだね。

『マアそうだ。然し從來だつて、避けられるだけは避ける積りだつたし、又實際、避けて來た。そして遂に避けられなかつたんだ。

『ぢや、今後も矢張り從來と同じ事だと云ふのか。

『同じだか違ふのだか、どうも僕には分らない、

『それぢや一體お前はどうしようと云ふんだい。

『どうしようと云つて仕方がない。

『お前にはシツカリした覺悟が出來ないか。

『そんなものは出來ない

『そんなに臆病なら、いつそ何もかもやめてしまつたら可いぢやないか

『それも出來そうにない。

『ぢや、どうするんだ。

『覺悟の出來ないまゝ、煩悶しつゝ行くまでの事だらう。

『煩悶しつゝはナサケナイね。

『ナサケナクても仕方がない。それが現在の事實なら。

『そうすると、お前はつまり、入獄を避ける事その事が目的になりはしないか。

『そうなつては、さすがに恥かしいだらうと思ふ。

『幾ら恥かしくても、現在の事實なら仕方があるまい。

『だからさ、避けられるだけは避けて、跡は仕方がないとしておく。實は餘りこんな事を考へ過さない方が好いのかも知れない。

『然し、そんなウツカリした事でいゝのか、考へて考へぬく必要がありはしないか。

『幾ら考へたつて、それで平氣になれるもんぢやあるまい。

『ぢやモウ何も考へないと云ふのか。
『イヤ、さうでもない、豁然として大悟すると云つたやうな、そんな悟り方が開けるとは思はないが、今まで話したやうな事だけでも考へて置く事は、心の持方の習慣をつける爲に利益があると思ふ。
『然しお前のやうな、弱い心の持方の習慣をつけちや困るぢやないか。
『然し弱いのが事實なら、その弱いところを充分に見定めて置いて、その上で出來るだけの强さを持つ事にするより外ないだらう。昔しの有名な禪僧が死ぬる時に、死にたくないと云つたといふ話がある。
『そんな勝手な例ばかり引かないで、心頭を滅却すれば火も亦た冷なりと云つた禪僧の事も考へて見たらどうだ。
『禪なんて、どうせ一種の精神的曲藝なんだらうから、その場合次第多少とも効果のある遣口を取るまでの事さ。
『だからお前は弱い音を吐いて、それで可しなりと自ら慰めようと云ふのかい。
『病人が苦しい時にウナリ聲をあげると、それで幾らか病苦を忘れるウナリ聲は見苦しいに相違ないが、齒を食ひしばつてウナリ聲を押しとめたところで、それで病氣がよくなるわけでもない。
「だつて少しは人前といふ事もあるだらう。
『成るほど、それはさうだ。然し人前だけつくろつて置いて、内々卑怯な心を貯へてゐるのも感心出來ないだらう。
『だからお前は、卑怯の實相を白狀して滿足すると云ふのか。
『イヤ滿足するといふわけではない。實は自分の卑怯が恥かしいし、それを白狀するのも恥かしい。白狀したつて、自分の卑怯が減りも消えもしない。然し默つてゐるのは一層苦しい。だからマア取りとめもなく、しやべつて見るのさ。要するにこれが即ち一種の曲藝であり、曲藝の練習であるのさ。
『ハハ、要するにこれが矢張り獄中ひまつぶしの一策なのかな。

仙臺吉利支丹殉教史に關する一文書と其解説

村岡典嗣

昨年十月半ば、筆者が偶ま當仙臺市で獲た一文書がある。大形の仙臺美濃（一名からかさ紙ともいひ、昔から當地で用ゐた土産の紙とか）を、たてに二つ折にして、兩面に草書體で記したもので、その文句は次の如くである、

表

きりしたん御せんさく覺
伊藤次郎衞門百姓
大村ノ賀兵衞
和田主水百姓
　掃部
同　金七
同　三九郎
三廻のあん齋
右何もつよく申はらひ候ニ付而右の者共火あぶりニ仕候事

重而召捕候きりしたんの覺

高橋佐々衞門　お濱ノ者
野口二右衞門　豐前ノ者
若杉太郎衞門　但馬ノ者
安間孫兵衞　遠江ノ者

裏

小山正太夫　越前ノ者
佐藤今衞門　若松ノ者
長崎五郎衞門　なんばん人
六兵衞　死　相模ノ者
次右衞門　死　越中ノ者
右之者共色々いけん被申候得ともころび不申候ニ付大橋の下に水籠を仕入ころび申様ニと様々申付候へ共合點いたさず両人ハはて申候相殘七人もはてさうも見え申候へ共壹人もころび可申と申者無御座候以上
正月二日

我國の西教史に、一應の知識を有する人々にとつては、この文書が東北殉教史上否日本殉教史上有名な、元和九ー十年度の殉教（鮮血遺書第五版以後に附載せる、カルゲム師著日本殉教者一覽に、第百三十四次、第百三十六次及び第百三十八次として擧げたもの）に關する記錄であることは、一讀、明らかである。而して用紙、字體、又書式等から推して、まさしくその當時のものと考へられ、殊に正月二日の日付をそのまゝに信じうべき理由がある。何故といふに、後に述べらるゝ如く「重而召捕候」云々この事は、元和九年大晦日の事で、これを第一次として、引續き翌年一月四日に、第二次の水責があつて終了したのである。この文書が、一月四日以後のものなら、この第二次の結末を記さないことはない。而して、この文書は思ふに、當時吉利支丹吟味のことに關係した役目の人の、覺書のたぐひと推察せられる。

さて、この仙臺に於ける殉教のことについては、クラッセの日本西教史（英譯本 Vol II, P.365—P.371. A persecution by Massamune, and Father Caravil Taken Prisoner. 太政官邦譯本、下卷八六五頁—八八二頁）や、パゼスの日本基督教史（I, Chapitre IX, p.569—p.578）にいで、パゼスによつて鮮血遺書（舊版では「カルバリヨリダッショ聖師及ビ運レノ致命」新版では「福者ヂダショカルヷリヨ聖師及其侶の殉教」）も之を記した。クラッセもパゼスも、固より大體同一資料によつたものとて、大同少異であるが、記述は相應によくまとめられてゐる、また近くは、昨年十一月の改造誌上にいでた、姉崎氏の「東北奥羽の切支丹宗門」の中にも、仙臺領の殉教者として述べられた。即ち元和三年の頃に、九州から渡來し、先任の天使のジロラモ（Girolamo de Angelis）を助け、奥羽地方及び蝦夷にも布教し、寛永元年にはイエズ會の教長に任ぜられた、葡萄牙生れのカルヷリヨ（Diogo de Carvalho）が、かねて、水澤方面に居住した仙臺藩の有力な信者、後藤壽庵と相結んで、奥羽地方の布教に勉め、壽庵の逃亡後もなほ活動してゐたのを、仙臺藩の禁教政策の犠牲となり、奥羽境近くの山中で囚へられ、信者とともに仙臺に護送され、終に刑死せしめられた次第を主として、丁度その頃に仙臺にあつた一二の殉教の事實を交へたのがこれである。今、日次を追うて記すと左の如くである。

○元和九年十二月十三日（西暦一六二四年二月一日）以後數日。
　マルコ嘉兵衞、及び其妻、仙臺にて火刑さる。
　又アンデレヤス掃部、其子ポーロ三九郎同地にて火刑さる。
　ヨハネ安齋及び其妻、同地にて水責に遇つて死す。

○同年十二月十九、廿日（西暦二月七、八日）の交。カルヷリヨ師下嵐江にて縛につき、信者數十人とともに、三分の奉行所に引かれ、獄屋に夜を明かし、未明たちて水澤に護送さる。

○同年十二月廿一日（西暦二月九日）
　途中、一行中の二老人斬首さる。

○同年十二月廿二日（西暦二月十日）
　水澤に着す。

○同年十二月廿三日（西暦二月十一日）以後數日。水澤にて仙臺藩の二家老に取調べらる。
　一行中のマテオ孫兵衞、及び其妻、ポーロ金助、レオ權右衞門、マチヤス伊兵衞、いづれも苛責をうけたれど信仰をすてず。終に一行、仙臺

臺に護送さる。
途中、ジユリヤノ治右衞門、自ら名告りいでゝ一行に加はる。旅程數日を費して仙臺に着。

○同年十二月三十日（西曆二月十八日）
師及び一行を、仙臺の川に連れゆき、水責に附す。マチヤス伊兵衞及びジユリアノ治右衞門、の二人死す。

○元和十（寬文元）年一月四日（西曆二月廿二日）
師以下、同所にて再び水責にあひ、アントニヨ作左衞門、マチヤス忠彌、アンドレヤ仁右衞門、マテオ孫兵衞、マチヤス藤右衞門、而して最後にカルヴアリヨ師死す。

以上人名の宛字は、暫く、鮮血遺書新版によつて記した。

さてこの文書は、前段には、元和九年十二月十三日頃仙臺に行はれた刑死について記し、「重而召捕候」以下の後段には、十二月三十日のカリヴアリヨ及び一行の、第一次の水責を記したもので、やがて元和九年末に於ける、仙臺城下のきりしたんせんさくの記錄で、正月二日の日付が翌元和十（寬永元）年のそれであることは、已に一言した如くである。而して、前段に記された殉教と、カルヴアリヨ及び一行のとは、直接には事件の連絡はないものゝ、前段に召捕られた信徒は、いづれもカルヴアリヨの門下であり、殊にヨハネ安齋は老醫で、しばくカルヴアリヨを宿した人とされる。

今この文書の文字を、仔細に歐洲史家の記載に比較して見ると、その間に、多少の差異があり、また、互ひに確めあふことが出來るとともに、本文書によつて、多少の補正をさへなし得る。

先前段に於いて、

大村の賀兵衞

とあるのは、クラッセの Mark Onfroye 又パゼスの Marc Cafiuye で、鮮血遺書には嘉兵衞とあてた（但兵衞はすべてひようゑと訓む）奥州大村の人といふことは、パゼスに記すと同じい。次に、

掃部

は、クラッセの Andrew Camon パゼスの André Camon で、鮮血遺書の宛字の通りである。

三九郎

はクラッセの Paul Saniro パゼスの Paul Sancouro で、後者が正しいのは言ふを俟たぬ。鮮血遺書は舊版け佐五郎の字を宛て、日本殉教者一覽も之によつたが、新版は三九郎に改めた。この兩人の間にある、

金七

は、クラッセに P.tar Qnin:i とあるのが、それかと思はれるが、パゼスには之に當るべきものを求むれば Paul Chinzo がある。併し日本殉教者一覽には、第百三十六次殉教者の條に、仙臺で斬首に處せられた人をあげた中に（十二月十九日に當る日）ルドビコ金七の名がある。而して上記の四人いづれも「伊藤次郎衞門百姓」「和田主水百姓」等肩書してあるのは、その鄉貫を調べる便となる。賀兵衞の鄉里なる大村の所在についても、問題があるやうだが、この肩書は、之を決定する上に役に立たう。終に、

三廻のあん齋

といふのは、正しくクラッセの John Anzui パゼスの John Anzui である。鮮血遺書は舊版は姓と見て、淺井と宛て（日本殉教者一覽も同様）たが、新版は安齋とした。また、安西とあてたのもみるが、この文書によれば安齋の宛方が、最も正しいに近い。三廻といふのは、原文、或は三迫とも讀みうる。いづれにせよ、多分地名であらうが、未だ明かにし得ない。

さてこれらの五人について、この文書は單に「右之者共火あぶりニ仕候事」とあるが、歐洲側の歷史は、賀兵衛は火刑、安齋は水責、掃部、三九郎は火刑、而して金七は斬首と各別に記し、かつ賀兵衛と安齋とには、それ〴〵妻が伴ひ、いづれも刑死の前、裸體にて町中を引廻されたことが記してある。これらの異同については、この文書の記載が、簡略に從つたものと考ふべきか、或はまた歐洲側のそれに、多少の潤飾誇大を考ふべきものか。

一層參考になるのは、後段の「重而召捕候きりしたんの覺」の記載である。

カルヴリヨが、水澤方面から仙臺へ護送された時の同行の、仙臺についた時の數は、クラッセは記して九名となしてゐる（" They arrived at Xindai nine in Company, and were all Committed to the Common Jayls." p.368）而して、この人數は、まさしくこの文書の人數に當る。十二月三十日の水責は、クラッセは詳記して「此日囚徒ヲ牢獄ヨリ出シ、河邊ニ赴ケリ。其岸ニ獄卒ノ豫メ掘リシ一坑アリテ、其周圍ニ木柵ヲ設ケ、坑中ノ水ハ深サ二尺ニ餘リ、囚徒既ニ此場ニ到ル時、衣ヲ脱セシメテ裸體トナシ、而シテ一人ヅヽ木柱ニ繫着シ、凍氷中ニ座セシムル事三時間、師父等ハ非常ノ忍耐力ヲ以テ其苦責ニ堪エタリ」（以上太政官飜譯本による。英譯本には、やゝ略して"On the 18th of February, they dragg'd them from the Prison to the water-side, and threw them into water of two Foot deep. They liv'd three Hours in these frozen Pools and suffer'd the Torment with an invincible Patience. p. 370"とありまた後段件の水坑を the Ditch と記してゐる）パゼスまたほゞ同文であり、鮮血遺書は譯述して、「靈父及び信者を川岸へ連行しが、此所には深さ二尺にして徑[illegible]間あまりの池を掘り、其中に杭を打て、水責の用意せられたり。軈て一同を裸體にして、氷の如き水に漬け坐らせて、柱に縛付しが」とある。この文書は、單に「水籠を仕入」と簡單に記したが、その水籠の如何なるものかは、歐洲側の記載でわかり、而して、かういふものを水籠と稱したことは、又この文書でわかる所である。さてそのしつらはれた地位に至つては、歐洲側の歷史が、單に川とあるを（而してそれが廣瀨川であることは、言ふまでもないが）この文書は、やゝ精しい指向を與へてゐる。即ち「大橋の下」とある大橋は、青葉城の大手門に向つて架せられた、現在もある橋で、下とはしもと訓むべく、思ふに下流のことであらう。さて、大橋を下る數丁のところに、琵琶首といふ所がある。元祿八年頃の作と思はれる古地誌の、仙臺鹿の子を見るに、琵琶首といふ名の由來について、「北の方細く、南の方圓く太く、川廻り、琵琶の首に似たれば、びはくびといふ」と說明してをる。いかにも仙臺の古圖を見ると、「北の方細く南の方圓く」云々の說明が、今日よりも一層よく當つてゐるが、鹿の子の續きの文に、「御花壇あり。又、中

頃、此所にて外人を刑殺せらる。寬文六年の頃、米ヶ袋へ移す」とあり、さらに御評定所の存在が、並記してある。この御評定所は、上記の古圖、いづれも琵琶首のくびれの北上に掲げてあるし、金城秘韞の註にも、「切支丹所ハ仙臺ノ評定所(裁判所)ノ內ニアリテ、其宗門ノ事アルトキハ、臨時裁判所ノ如キモノ」とある。さうすれば、この水牢のしつらはれた位地も、まづこの琵琶首と考へて差支へあるまい。それにしても、徑二間の水坑を川岸に堀るといふには、相當に河原の廣いところであらう。古圖なり、實地なりについて、これ以上一層精確に遺跡をきめる事も、郷土史家の或は難しとせぬところであらう。なほ、琵琶首の少し下流米ヶ袋に、繩縛地藏といふものがあり、この地藏について、殉教者の墓所といふ言傳へもあつたといふことを、かつて、內政外教衝突史で讀んだが、その眞僞は無論、その言傳の存在についても、筆者は未だ確聞しないが、彼等の遺跡としては、ふさはしい場所柄である。

さて、この三十日の水責の時、堪へかねて死去した二人があつたとしてクラッセは Matthias Siñoie, Julian Fermen パゼスは Matthias Jiñoye, Julien Jiyemon を擧げたが、こはまさしくこの文書の

次兵衛死

次右衛門死

に當るので、クラッセよりパゼスの記載が正しく、鮮血遺書が舊版において、治兵衛、治右衛門を宛てたのは、治次の差はあるがほゞ當り、新版に於いて治兵衛を伴兵衛に改めたのは、カルヴァリョが下風江で捕はれた時、名乘りでた人名の Matthias Hioye とあるによつて正したものだらうが、この場合ではむしろ改惡である。(なほ、この二人のマチヤスは同一人らしく思はれるが、もしさうなら、前の伴兵衛を次兵衛に正すべきである)越えて寬文元年正月四日の日の再度の水責に、殘る七人も命をおとしたのであるが、その人名を見ると、クラッセは、第一に死したもの Leo を始めとして、Andrew Niyemon, Matthew Mangobioie, Matthias Tarayemon の三名をあげ、終にカルヴァリヨを記した。次にパゼスは、一層詳しく、まづ Leon Gonyemon を初めとして、Antonio Suzayemon, Mathias Choino, Andre Niyemon, Mathieu Mangobioye, Mathias Tonoyemon の五人、終りにカルヴァリヨ合計七人を擧げた。兩者中、パゼスの記事の方が精しく、初度の水責に生永へた七人の人數を盡してゐるが、さて鮮血遺書によつて宛字を見ると、レオ權右衛門、アントニヨ佐左衛門、マチヤス忠彌、アンドレヤ仁右衛門、マテオ孫兵衛、マチヤス藤右衛門とある六人について、この文書によつて、權右衛門は今衛門に、仁右衛門は二右衛門に、孫兵衛は孫兵衛に當ることは明らかであり、さらに藤右衛門は、クラッセの Tarayemon パゼスの Tonoyemon いづれもなまりで、まさしくTaroyemon と改むべく、この文書の太郎衛門によつて修正すべきである、次にマチヤス忠彌は、パセスの Choinuo に宛てたのであるが、或は征矢野とすべきかとの說もあり、殉教者一覽は征矢野三太と記したが、本文書に徵して、まさしく小山正太夫に當り、Choino は Choiama の訛と考へられる。而して最後に、

長崎五郎衛門　なんばん人

に至つては、明らかに Carvalho を語呂の上から日本名に呼びかへ

たので、本人自らの稱呼か、或は他人からのか、そはいづれにせよ、當時かくの如き稱呼が存したことが知られて、極めて興味がふかい。長崎から來たので、それを苗字にしたのも面白い。

更に又、この名簿には、お濱者、豐前者、以下、それ〴〵生國が書いてある。それらは、北陸、九州、山陰、東海等の遠隔の地のものである。これは、當時諸地方で迫害をうけた信徒が、奧羽方面に入込んでゐた事の爲であらう。又終りの三人は別として、前の六人は、それ〴〵苗字が擧げられてをり、その相應の身分出のものであることを示す。而して、初度の水責當時の狀況を記したものではあるが「右の者共色々いけん被申候得とも」云々の文字は、簡單ながら印象つよく、當時の殉教者の實況を髣髴させるに足りる。なほ序でながら、この殉教者名簿の中に、それより二年餘前の元和七年八月十四日付で、羅馬法王に答書をおくつた後藤壽庵につゞく十六人のうちの一人の氏名もなくまた羅馬に使して元和六年に歸朝した支倉の隨行員の多くの人名に、擬すべきものが一人もないことが注意される（この事は、この文書の精確な記名によつて、斷定しうるところであるが）カルヴリヨとともに殉教致命した當時の信徒の中には、仙臺藩士の信者は一人もなかつたと言へる。

元來、當時の宣教師等の報告を資料として綴られた、歐洲側の我國殉教徒に關する記載は、相應に詳細のものであるが、彼等の記載の信じうべき程度については、史家としては、相當愼重の注意を拂はねばならぬものがある。しかも如何にせん、この方面の我國の史料が缺亡せる爲に、その信用の程度を、どれほどにおくべきかの見當も付けにくいことが、一々の場合には少くない。而も、この奧州殉教史上の一事實の場合に於いて、この文書が、歐洲史家の記載と一致せるかくの如き程度は、大體において後者のその餘の詳細な記事の信じうべき事の保證ともなしうべく、加之些かなりとも新事實を提供して、それらを補正しうるものであることは、筆者の喜びとする所である。筆者は、吉利支丹殉教史の研究は、特に志すところでないので、この文書の果して他に所見なきものか否かも知らない。たゞ一般の學界には未だ知られてゐないやうであるから、紹介したに止る。なほこの種の文書は、たとひ未だ世には出ないとするも、諸侯や舊家の記錄類（例へばこの場合で言はゞ、金城秘韞附記に引用された伊達家史料の如き）には、存すべく、今日においてそれを聚錄することは、それ〴〵その便宜ある人には、困難でなからう。すでに專門家のさういふ事に着手されるきはもとよりあらうが、なほ廣く、一般の特志家の力にも俟ちたくかた〴〵この一文を、讀者の多いと聞く本誌によつて公にした次第である。（昭和二年一月四日仙臺にて記す）



めぐりあひ

近松秋江

ある一月の十日過ぎであつた。わたしは、雨晴れのあとの、冬にはめづらしい暖かな日の午後、散歩かたがた用事をかねて丸の内から銀座の方へ出て行く途中、省線電車に乘つてゐた。車室の中の溫かさと、その前晩少し遲くまで書き物をしてゐたのとで、すこしく頭が好い心地にぼんやりなつてゐるところへ、水道橋であつたか、飯田町であつたか、たしかに覺えぬ停車場から乘り込んだ婦人があつた。彼女は、わたしと反對の側に腰を掛けた。その時は、氣がつかなかつたが、わたしが薄眠い眼を開けて、何氣なく向うを見ると、何だか、じろ／＼と、その女は、此方を見てゐた。變な女だなと、わたしは思つて、こちらの視線を脇へそらしてまつた。と、彼女も他へ視線を轉じたが、暫くすると、彼女は復た、わたしの知らぬ間に一寸こちらを見てゐる。はて、向うではわたしを知つてゐる女であらうか、自分にはどうも、あんな婦人を知つてゐる覺えがないが……と思ひながら、こちらからも、時々盗むやうに見ながら、頭の中の記憶を探つてみた。

普通の束髮に結つて、年のころ三十三四にもならうか、少しも美い女ではないが、何處といつて格別見にくいところもない。中肉の顏である。

そんなことを思つて、わたしはじつと考へてゐると、向うでは、氣になるほど又しては一寸々々こちらを見てゐるのであつた。

すると、わたしは、ゆくりなくも、まるで夢のやうな古いふるい記憶が胸に浮んで來た。

……あ、あの女であつたらうか……と思つた。

と、思つて、今度は、それとなく注意して、もう一遍見直した。あの女にしては、肉が肥え過ぎてゐるやうだ。顏もあの女にしては、ずつと見好くなつてゐる。が、さう思つてみると、どうしても彼の女に違ひないやうだ。口元のちよつと優しみのあるところ、それから眼の、大きくはないが、やゝ長目に切れて、ある才發さの表はれてゐるところ、それよりも顏の全體の調子が、どうしてもあの女である。が、それにしても、あの頃に比べて、全く見ちがえてしまつた。向うから斯うじろ／＼と何度も盗むやうに見られなかつたならば、こちらからは無論氣が付かなかつたであらう。見たところあの頃に比べて肉附が、ずつと好くなつてゐるし、それにつれて顏もあの時分とは比べられぬほど見よくなつてゐる。

先刻から、いやに私の方ばかりに氣をとられて、こちらを向いて默つてゐるので、一人かと思つてゐたら、よく氣をつけてゐると、その隣に並んで腰を掛けてゐる四十四五ばかりのトンビを着た男がどうも、その連れらしい。男は、四つばかりに見える洋服を着た男の兒をクションの上に立たして、窓の方に向けながら、自分も一所にそつちを見て、何か話をしてゐるらしいので、一寸の間、その男が彼女の同伴

者であるか否かゝ分らなかつたが、女はわたしの方をじろ〳〵見てゐる間には、又一寸そつちを向いて何か口をきいた。

「あゝ、さうか。」と私は思つた、男の身體に隱れてゐるので、その子供の顏を見るよしもないが、きつと二人の仲に產まれた子であらう。しかし、あの女によく子供が出來たものだ。尤も、母親に似てゐるか、どうだかは分らないが、或は產まれたのかも知れぬ。

で見ると、彼女が、あの頃に比べて肉附きもよくなり、はじめて知つた時分から、かれ是れ七八年にもなるのにもかゝはらず、却つて今の方が若くなつて見えるのも、彼女もやつと三十を過ぎて落着くところに落着き、幸福になつてゐることは明かである。着てゐる物は、ラクダまがひの、黑いザグ〳〵したコートを上に着てゐるので、下の着物までは分らぬが、裾の方から少しのぞいてゐる縞柄を見ると、好い物でもなさゝうだが、一寸そこらに出るので着てゐるのであらう。

やがて彼女は、連れの男と、それから子供と何か二たこと三言いひ交はしながら、自分一人だけ立つて、入口の方に出て行き、そこに暫らく突立つてゐたが、電車が神田驛に來たところで自分だけそのまゝ降りていつて、プラットフオームを歩きながら、又窓の外から子供を愛やすやうなことをいつて、行つてしまつた。

電車が動き出してから、男は、子供を、今度は、こちらに向けて下に立たした。その顏を見ると、男兒にしては優しい顏容で、思ひなしばかしでもなく、たしかに母親に酷く肖てゐた。

「彼女も、あの自分の腹から子供を儲けたのだ。」と私は思つた。

「それにしても、あの時分に比べて、思つたより好い女になつてゐる。……男でも女でも時世時節で、失意の時分には随分窶れて見えたものが、後に幸福になると、五つ六つも若くなつたり、奇麗になつたりするものだ。彼女もさうなのだ。」と、私は又思つてみた。

「あれくらゐの女に見直すんだつたら、あの時、私によつて彼女を幸福にしてやればよかつた。」と、私は、勝手なことをも考へてみた。

ところが、その反對に、私は彼女を一層不幸なものにしてしまつたのであつた。

彼女は、私に依つて幸福にならうと欲して、いはゞ、遠くから私に救ひの手を差延べたのであつた。それを私は、幸福を與へるかの如く、救ひの手を差出して、あるところまで持ち上げて置きながら、ぷつりと糸を斷ち切つてしまつたのだ。

尤もその頃は、私自身でも甚い不幸のどん底に沈んでゐたのであつたから、決して人を幸福にしてやるほどの心の餘裕はなかつたのであつた。しかしながら、その時もし、彼女を幸福にしてやることが同時に、私自身をも幸福にすることであつたならば、二人の爲めに二重の意味の幸福になるのであつたが、それが、私の側で一致することが出來なかつたのだから爲方もない。

そのことについては、當時一度、短篇小説に書いたこともあつたが、それに書いてゐるほかにも話すことがあるので、搔摘んで話ると、かうである。

その時わたしは、私の「黑髮」その他に書いてゐる自分の京都の女

のこで、私は、京都に居て、失望と怨恨とのどん底に沈んでゐた。その時分私には、どの女を見ても、私の思つてゐた女ほどに好い女は何處にもなかつた。とゝもに又、私の方を振顧つてみてくれる女は一人もなかつた。そこへ彼女が東京から突然手紙を越したのであつた。無論こちらは知らない女であつたが、彼女の筆蹟は流るゝやうに美しいので、ほかの女に脇目も振ることを欲しなかつた場合であつたにもかゝはらず、可なり興味を惹いた。

……こゝで一寸云つて置くが、それは私の「黒髪」その他、あの系統の小説を見れば分るとほりに、私の思つてゐた京都の女とのことは、結局私が不幸に終つたのであるが、それにも係はらず、私はその女のことをいつまでも思つてゐた。わたしはその女を自分の物にすることが出來なかつたのみならず、勿論見ることさへも叶はなかつたから、彼女の隱れ住んでゐる家のまはりを始終うろついてゐた。そして、異性を思ふ心に渇してくると、みじめな私は、祇園町の奧まつた巷路の裏に、まるで迷宮のやうに、深く入込んでゐる、紅殼格子のはまつた家の中に入つていつて、そこで佗しい假寢の床に安價な歡樂を買つて、戻つてくるのであつた。どんな賣笑婦に出會つても、私は、心の内に、自身の思つてゐる女のイメージを想像して、それを彼女だと思つて、いとせめて果敢ない滿足を得るのであつた。その私の心を、わたしは自分で憐んでゐた。

それくらゐであつたから、勿論わたしは、東京の方から、不意に手紙をよこした未見の女に容易に心を動かさなかつたが、異性に渇してゐる場合だつたので、その女に簡單な葉書の返事を出してみた。すると、十日ばかりの間、それつきり、何ともいつて來なかつた。どうせ、知らぬ處へ手紙を越すやうな浮氣な女のことだから、そんなものゝすることを氣に留めてゐると、又もや性懲りもなく、飛んだ目に逢つてしまふと、思ひ棄てゝゐると、半月ばかり經つてから、今度は房州の方の繪葉書を送つて、少し病氣でこちらの方に來てゐましたがもう東京に歸つて來ましたといふのであつた。

わたしは、打つちやつて置かうかと思つたが、つい所在なさに、京都の彩色を施した繪葉書に何か書いてやつた。

そんなことを二三度互に交換してゐるうちに少しづゝ興味が乘つて來て、京都に遊びに來ませんかといつてやると、ぜひ行きたいですといつて來たりしてゐた。でも、いざとなると、なか／＼出て來られなさゝうな樣子であつた。私は、段々立入つて、手紙でいろんなことを訊ねてみた。

その返事によると、彼女は大抵神田邊に住んでゐるらしかつたが、一時柳橋から藝者に出てゐた。それは、長いことではなかつたらしいが、藝者になつたりする女にしては、めづらしい筆蹟が美ごとである。そしてなか／＼ハイカラである。新しい文學などにも趣味があるらしいし、筆に才氣の溢れてゐることはいふまでもない。

あなたは、柳橋で藝者をしてゐたといふが、失禮ながら、ざらにある藝者にしては、あまりに筆蹟などが巧みすぎる。一寸、どんな前生であるか分らない。いづれ束髮の似合ふ當世風の藝者であらうといつてやると、

「わたし當世風は大嫌ひなのよ。頭髮なども束髮に結つたことは、殆

どありはしない。いつも日本髮よ。」てなことをいつて來る。

「ぢや、きつと樣子が好いんでせう」と、いつてやると、「樣子は至つて好くないの。馬鹿に背が高くつて、わたし、それが氣になつて仕樣がないんです。」

「ほゝ、背が高い。……背の高い女は惡くないな。」と、私はいろんな想像を描いて樂んでゐた。「あなたが見たくなつた。寫眞を一枚送つて下さい。」といつてやつた。「わたし、寫眞は大きらひなんです。わたし寫眞うつりが惡くつて、いつも悲觀してゐるんです。寫眞だけは、ごめんなさい。」

「うつりが本物より惡いんなら、それだけ割増しをして、本物を想像して上げるから、送つたつて、いゝぢやありませんか。」

「でも、寫眞は、ほんとに厭なんですもの。」

「さうですか。ぢや無理に送つて下さいとは申しませんから、その代りに手紙の交換もこれつきりにしませう。」

「あら、ひどいことを仰有る。……そんなら送りますわよ。何でも、あなたの仰有ることをきゝますから、手紙の交換を止すなんて、そんなひどいことを、どうぞいはないでくださいな。隨分厭な寫眞よ。わたしどれも、氣に入らなくつて、みんな破いてしまつて今これきやないんです。」

さういつて送つて來た寫眞は、なるほど、そんなに好い女のやうでもなかつたが、いろんなことを差引したり、又綜合したりして考へてみるとまんざら棄てたものでもなささうであつた。

「とにかく一度京都に來ませんか。」

それから暫く文手紙が中絶してゐた。何でも二月の末のころ始めて手紙をよこしたのであつたが、そんなことをしてゐる間に二た月ばかり過ぎて、美しく賑かでなつた京都の春は、どこかしらに懷しい名ごりをとどめて去つてしまつた。櫻が散つてしまふと、鴨川ぞひの柳が日に／＼綠の色を增して來た。遠く比叡や愛宕の山々の薄紫に霞んで見えるすが／＼しい初夏の空を、燕が、さも／＼四條の大橋を往く京の女の髷を戲弄ぶやうに掠めて飛んだ。代赭色の繪日傘をさした女が通る。私はそれ等の、色めかしい京の女を見るごとに、どの女にも恨みがあるやうな氣がした。わたしは、どうあつても京の女から深い思ひを轉ずることが出來なかつた。

東京の女は、都おどりのある間に、今にも京都に來るやうにいつてゐたが、それつきり暫らく音沙汰が絶えてしまつた。さうなると妙なもので、今度はまたその女のことが、まるで引張られるやうに氣になるのであつた。都おどりがすんでしまふと、今度は、鴨涯の向岸に、鴨川おどりの眞紅な提灯の色が、さながら戀に焦れた者の惱みを唆るやうに、夜な／＼點つてゐた。

「あなたはもう京都に來ないんですか。」

するとその返事に、わたしにも、いろ／＼深い事情があつて今度いよ／＼神戸で藝者に出ることになつた。神戸にいつたら、早速京都にいつてお訪ねしますといふのであつた。

わたしはその手紙を見て、ひどく絶望を感じた。やつぽり女といふものは、どの女も同じものなのだと思つた。京都の女のいふことが、

一向眞實でなかつたが、今又この女も、ついこの間まで、明日にも京都に來るやうなことをいつて置きながら、假にそのいふことが變つて、神戸から藝者に出る。一旦藝者に出てしまつたら、まるで、今まで手水鉢の中に居つた金魚が廣い池に出たやうなもので、どんな安ものゝ藝者だつて、金を積まなければ、どうすることも出來ない。わづかに二た月の間でもこの女に興味を持つたのが、やつぱり自分の愚かであつた。一體自分は何處まで女のことにかけては愚かなのだらう。いや女のことばかりではない。大根の性根が愚かだから、こんなことになつてしまふのだ

よし、それでは、かういつてやらう。

「あなたが藝者になるなら、たとひ神戸に來たつて、わたしは會ひはせぬ。無論これかぎり手紙の交換も謝絶する。」

するとその返事に、私が今度、神戸から藝者になる決心をしたのも他ではありません。たゞあなたに逢ひたいばかりに神戸に行くのです。たゞ藝者になるなら、なにも東京を離れて遠くへ行く必要はありません。それと、も一つは、京都でもいゝわけですが、わたしのやうな女は京都で藝者には適しません。大阪でもいけません。神戸なら、わたしのやうな者に適當してゐるだらうと思つて、一昨日その仲介をする人のところへいつて相談をしたのです。そしたら明日からでもいゝといふことになつてゐるのです。なぜに私が又藝者になるとお思ひでせうが、わたしは長い間病氣をしたゝめに、少し持つてゐた金も使ひ果してしまひ、後には着物にまで手をつけて、今では、おはづかしいながら、まるで見るかげもない、ほんとの裸蟲です。日々のおこづかひにさへ不自由を感じてゐます。幾らわたしだつて、何で好んで藝者などになりませう。しかし、戀する男に初めて會ふのに、どう考へても、こんな不斷着のまゝでは、恥しくつて、とてもお會ひすることは出來ません。それは、つまらぬことのやうにお思ひになるかも知れませんが、あなたも小說をお書きになるお方ですから、女といふ者の心の中はよくお察し下さることゝぞんじます。

このまゝの身裝では、わたし、假ひ、死ぬほど戀しと思ふ人にも逢ひたくありません。それも、あなたとの戀を樂しいものにしたいからなのです。

そんな譯ゆゑ、神戸から藝者に出る決心をしたからとて、あなたに對するわたしの心に少しも變りはありません。すこしは女らしい着物を着てそのうへであなたにお目にかゝりたいのです。

私は、その手紙を見て、これは、なるほど、さういふ女にしてみれば一應尤もなことだと思つた。

戀する男に初めて會ふのに、襤褸を下げて會ふことの悲しさは十分に解つてゐる。自分が惚れた女に會ひに來る時にもさうであつた。その女の爲めに、すつてんてんの裸になるまで、着てゐたものをみんな脫いでしまつてゐながら、やつぽり東京三界からこの京都まで出掛けてくる時には、いつも工面濟面の無理をして、出來るだけ身裝を崩さぬやうに心がけてゐたことを考へてみると、彼女の心中の切なさは察することができる。

しかしながら、それだけ聞けば、もう澤山である。それほど眞實に思ひ入つてゐるものならば、たとひ襤褸を下げて來たつて錦を着けて

ゐるも同然である。そんな女を藝者にして、廣い池水の中へ放つのは惜しい。どうかして取り留めたいといふ一念から、私は、もう、手紙では手ぬるいとあつて、早速電報を打つて、

「ゲイシヤニナルコトハンタイゲイシヤニナルナラコウサイダンゼツフミニクワシ」

と書いた。

すると、その日の中に女からも返電が來た。

「オコトバニシタガイオモイトマル」

そのあとで私はすぐくわしい手紙を書いた。あなたが藝者になつてまで僕に會ひたいといふ氣持ちはよく分つた。もうそれで君の心中は十分であるから、たとひ襤褸を下げてゐても構はない。そんなことで私の君に對する心に變りはないからぜひ一遍京都に遊びに來たまへ。そして、甚だ失禮なことを申出るやうであるが、もし京都に來る旅費に不自由でもするやうなら、少し許りの金は送つてあげてもいゝ。といつてやつた。

女からは、その手紙を見てすぐ返事をよこした。

あなたの仰有るまゝに、藝者になることは、もう斷念いたしました。わたしは、あなたの仰有ることなら、何でも聽きます。わたしはもう、あなたの物です。わたしの身體は、あなたに捧げました。それでは、お言葉に甘へて旅費だけ送つて下さいまし。ほんとにお恥しい次第ですけれど、おねがひ申します。そのお金をいたゞき次第すぐにも立つてそちらにまゐります。といふのである。

私は、自分は、どこまで女に甘いんだらうと思ひながらも、必死の勢ひで熱心になり、京都の女で、すつかり裸になつてゐたものが、近頃又少しづゝそんな物を取り戻してゐたのであつたが、早速そいつを又小風呂敷に包んでそつと抱へて出で、三條東山を一寸上つたところに行きつけの質屋にいつて、三十圓の金をこしらへて戻り、その足ですぐさま、四條繩手の郵便局から電報爲替にして送金したものだ。

すると、その晩女から、金を受取つた。明後日立つといふ返電が來た。

しかし私は思つた。この女は、もう何もかも私はあなたのものです。わたしは、あなたの仰有ることなら、どんなことでも聽きますといつて來てゐる。實物に會つたうへで、私の氣に入るやうな女からそんなことをいつて來てゐるのだとすると、私は、今のこの不幸な、みじめな境地から忽ちにして天上界の幸福な人間に生れ變る次第なのだが、會つて見たら果してどんな女であるか分らない。三十圓の金は一時の興に使ひ果したとしても、それよりも女が案外な、女であつた時の失望は又どんなものであるかも知れぬ。まだ見ぬさきから、向うのいふやうに迂濶と乘り氣にはなれない。南無大明神少しは好い女であつてほしいものだ。

さうして私は、女が京都に來着する日と時とを手繰り寄せる思ひで待ちにまつてゐた。

翌々日の朝九時過ぎになつて、私が毎朝行きつけてゐる近いところの錢湯にいつて戻つてくると果して彼女は來てゐた。が、凡て豫想は惡い方に想像して置けば大抵間違ひのないもので、これは又あまりに無慘にも救からない、惡い方の想像通りであつた。

わたしは、一と眼彼女を見るや、あまりにも、戀を司るの神樣に見放されてしまつた私自身の不幸を喞たずには居られなかつた。……考へても見るがいゝ。さうなくてさへ、京都の女の爲に殆ど私の一生の幸福を棒に振つてしまひ、東京に引揚げて歸るにもかへられぬ、まつたく引込みの附かない窮境に陷つてゐる憫れな私ではないか。いかに私が女に渴し、戀に飢てゐればとて、こんな女を當てがふとは、あまりとや皮肉の沙汰である。私は、ふたゝびその女の方を見る心にもなれなかつたのであるが、まさか、さうもならなかつた。

その時のことは私の短篇小說に委しく書いてあるからこゝでは繰返さぬことにするが、とにかくその夜は私の泊つてゐる宿に泊めた。私は他の座敷に泊めようと思つたが、生憎客が滿員の場合でもあつたし、宿の主人は大抵察してゐるので、くわしい此方の心の中を知らぬから加茂川を見晴しながら、漫々として瀲み流れてゐる疏水の水を前にした四疊半の座敷に夜の物などを持ち運んで、寢床を設けた。

わたしは、その女の顏を見てゐるのさへ感じが惡かつたが、「ちと窮屈どすやろがどうぞこゝで辛抱しとくれやす。」といつて、そこへ寢床を設けたので、自分の身體の奧の方に潛んでゐた妙な本能が忽ち强い脈を搏つて來たやうに思はれた。私はおもはず口の粘ばるやうな唾を呑み込んだ。

そして狹い室の中で、二人差向ひになつて、話すともなく、いろんな話から、つい彼女の身の上ばなしを聞かされた。

深い藍を湛えた疏水の向うの堤の上をしづきりなしに京阪電車が疾走してゐる音が絕えず耳を襲擊して、うるさかつたが、その又土手の向うは加茂川の流れで、遠く向岸には先斗町の妓樓や茶屋などが軒を並べて、長い五月の日が、その家並の上に遠く霞んで見えてゐる愛宕山の肩の邊に沈んでしまふと、それ等の家々の二階には灯がともつて影繪のやうな女の姿が映るのが、何ともいへず古めかしい情趣を唆るのであつた。

しかし彼女の身の上ばなしは、私の同情を促すよりも、むしろ反感を起すやうなものであつた。

その話によると、彼女は柳橋から藝者に出たその日に附いた客に落籍されて、根岸の方に置かれた。……私は、彼女の容姿とその話とを、見比べて腹の中でお可笑しくなつた。といふのは、柳橋といふことによつて想像するやうな、とても、そんな粹な樣子の女ではなかつたからである。そして根岸あたりに圍はれるのにも、あんまりふさはしくない女であると思つたが、それが相當の姿なのだらう……

その旦那といふのは工學士で、茨城縣の多額納稅者の息子で、土木の請負師で、なか／＼派手な生活をしてゐた。彼女はそのお蔭で四五年不自由のない月日を遊んで過ごしてゐたが、旦那の方でもいくらか飽きたのかも知れぬが、彼女もあまりに氣樂で、單調な日を送ることに倦きてしまつた。彼女は骨牌を弄ぶのが、御飯を食べるよりも好きであつた。……私は、そんなことをするのが、何といふことなしに妙に大嫌ひで、女が連夜夜を徹してそんな遊戲に耽つてゐることを想像するだけでも、あんまり感じがよくなかつた。……そのうち彼女はあまりに無事な生活に倦怠したところから、旦那の知人であるところの、此前の工業學校出のある技師と出來てしまつた。その男には妻子

があつた。先の旦那には妻子はなかつたけれど、勿論正妻に直る資格はなかつた。旦那にその不埒が知れた時、一騒ぎ持ち上つたが、向うは身分のある人間でもあり、結局そのまゝに済んだが、彼女の方で逆に、向うの足許を見て、人を仲に立てゝ少からぬ手切れ金と、根岸の家とを貰つて奇麗になつた。彼女はさつぱりした自由な身體になり、それだけの財産を自分の所有にして、これから何をして遊ばうかと思つた。呼い玉を二人も抱へて藝者屋をしてみようかと思つてみたり、或は、小ぢんまりとした美味い物ばかり食べさす料理屋をはじめてみようかと、いろんなことを考へてゐるうちに、その新しい情人との關係はだん／＼深くなつていつた。その男は先の旦那ほど生活が豐かでなかつたところから、そして今は彼女自身に自由にすることの出來る財産が一萬圓ばかりあるところから、いつとはなしに、その金に手を着けた。そして一年も立たぬうちに五千圓ばかりの現金は大方使ひ果してしまつた。後には、旦那にもらつた根岸の家まで賣るやうになつた。

「それは、とても好い家でした。ほんとうに私の氣に入つてゐた。もうあんな家は二度と手に入らない。」

彼女は語りおはつて、撫然としてゐた。

「あんたも隨分馬鹿だなあ。……そんな榮耀榮華の果ての女が、この尾羽打枯らした私から、たつた三十圓の金を惠まれて京都に來るなんて。」

私は全く他人ごとながら、心から腹が立つやうな氣がした。

「今なら大分價のする家でせう。」

「さうですわ。もう五六年も前ですから。さうですねえ、今だつたら、一萬圓でも私買ふわ。」

「はゝゝゝ、買ふたつて、その一萬圓は口でいふほど容易く出來はしない。廣い家。」

「うゝ、そんなに廣くもなかつたけれど、かうつと、さうです、七間ばかりありました。廣いより何より、それは粋な家だつたの。」

「君は、そんな家に四五年も遊んで暮してゐた罰が當つたんだよ。女が貞操を賣るから、そんな住居でも、又金でも何でもころ／＼と轉がり込んで來るんだ。男子が自分の力でそれだけのことをするには、並大抵の苦勞ではない。苦勞しても出來ればいゝが、出來ることは、まあ覺束ない。」私は、彼女の放埒と愚かしさとが憎くなつて、汚く罵るやうにいつた。

「でも、わたし、もう諦めてゐるの。夢だつたとおもつて。」

「諦めなくたつて、爲方がないぢやないか。」

「でも、いゝわ。わたし、好きな男にそれを使つて無くしたんだから。」

彼女は、手紙の中にこそいろんなことを、互にいつてゐたが、初對面の男のところへ來て、そんな甘つたるい言葉づかひで行儀の惡い話を愼みもなくするのであつた。

「何だい、のろけを聞かしに來たのか。」

「だつて、あなたがお訊きになるからお話したんです。」

「しかし、その、後の男は少し働きがなさ過ぎるぢやないか。みんな君の物を食つてしまつたのかい。」

「ところが非常な才子なの。」彼女は力をこめていつた。

「才子が又、どうして女から貢いでもらつたんだ。そんな男はいくら様子が好くたつて、才人だつて、今時の女は、そんな男は嫌ふものだがなあ。」

「さうでもありませんわ。」

「しかし君の話の樣子では、先の旦那の方がよさゝうぢやないか。後には妻君を持つたか知らんが第一初めのうちは向うも獨身ぢやなかつたか。それに、後の男には妻子があるんだもの。」

「ところが、さうぢやないの。……奧さんの無い人と、奧さんのある人とは、こちらに對する氣持ちが、ずつとちがふわ。また、こちらの氣持ちもそれに伴れてちがつて來る。……奧さんがあつて、隱れて女を持つ場合は、それは、とても、いふにいへないわ。お互に苦勞もあるし、一層情が深くなるわ。人はよく、妻子のある人と深くなるもんぢやないといふけれど、わたしさうぢやないわ、戀をするなら妻子のある人の方が好いと思ひます。」

彼女は眞劍になつていつた。

私はなるほどゝ肯いた。

「うゝ、君の戀愛の經驗は可なり深いところまで昂進してゐる。男だつたら……女にしてもだ。餘程危險性を帶びてゐる。それは男子が……ど興味の緊張するものはないといふのと同じ戀愛心理だ。」

「えゝ、さうなのよ。奧さんが傍にゐて妬いてゐるのが、男の人に會ふとよく分るの。向うで妬いてゐれば、ゐるほど私の方でも一層好くなるんですもの、爲方のないものねえ。」

「うゝ、面白いおもしろい。」

そんな情話に私達は、つい、つり込まれて、鴨川べりの座敷の夜を更かしてしまつた。立つて障子を開いてみると、初夏の夜はいつしか靜まつて、宵のうちは頻りに笑ひさゞめてゐた、さしもの先斗町の妓樓の灯も一つゞつ影が、まばらになつてゐた。ちやうど、近松の文句にある、向うの二階は何屋ともおほつか情け最中とて、まだ寢ぬ火影聲高くといふ風情がからであらうと思はれた。

「さあ、もう私達も寢ようか。」と、私は、何だか、身體中が、……するやうな肉……………えながらいつた。

四疊半一ぱいに二つの寢床が、加茂川の淺瀬の音を枕にして敷きのべられた。

「……いゝわよ。あなたのお好きのとほりになさい。」

……………………………………。けれども私は彼女とそれを……氣にはなれなかつた。そんな女が好いにつけ、又惡いにつけ、やつぱし私の愛慾は、いくら頼りなくつても何でも京都の女の上にさまよふていつた。顏を見ることもならず、況んや身體を所有することは勿論達かぬ望みであつたにもかゝはらず、わたしは、たゞ、その女を思つてゐるだけに果敢ない滿足をしてゐなければならなかつた。でも、それでもまだいとせめてもの慰めがあつた。東京から遠く訪ねて來たその女に見代える氣にはどうしてもなれなかつた。

それで、その翌日は一日、祇園町から東山、圓山公園などを、ぶら

〳〵歩いてみたりして日を暮らし、諄よく因果を含めて、もう一晩泊めて、その翌朝早い汽車で東京に歸らした。彼女は歸つて行く時、まだ私の寢てゐる間に早起きして、朝飯もとらず、宿の者にも隱れるやうにして、こそ〳〵と出ていつた。その後姿を、私は寢てゐて見ながら一寸哀れであつた。が、後を追ふ心にはどうしてもなれなかつた。

歸り着いてから、彼女は一二度遣る瀨ない怨みと悲しみのこもつた手紙を越したが、それに對する私からの手紙はたゞ一とゝほりの挨拶にすぎなかつた。

それつきり彼女を見なかつた。

すると、それから五年過ぎた。……私も彼女とのことがあつてからあと尙ほ丁度一年京都にゐて、その翌年の初夏の頃久しぶりに東京に歸つて來て、それから三四年もして東中野に一家を構へ、他の女も出來てゐた時分であつた。震災の直後、家に近いところの東中野の停車場の附近を歩いてゐると、蝙蝠傘に暑い秋の日を避けながら向うから歩いて來る女が、ふとこちらに眼を留めた。わたしも、すぐそれと分つた。互に行き過ぎようとしながら、向うから口を出した。

「××さんでせう。」

「えゝ、さうです。」二人とも立ち止つた。

「隨分おめづらしい。」

「あれからどうしてゐました。でも地震には無事でお互に結構でした。」

「どうして〳〵無事どころぢやないんです。」

「でも、かうして生きてゐられゝば、まあ幸ひぢやないですか。」

「それはさうですけれど、みんなまる燒け。」

「やつぱり神田にゐたのですか。」

「えゝ、ですから、着のみ着のまゝ。やつと生命だけ救かつたくらゐのものです。」

それから私は自分の番地を敎へておいてすぐ分れた。

一週間ほどして、九月の十二日に私は、先の住處から、五六町離れたところに移轉した。それは地震の二三日前からの豫定であつたのが、地震の爲めに延びてゐたのであつた。そして、その翌日形付けをしてゐるところへ、玄關に誰か來た者があるといふので、自身に出ていつてみると、彼女であつた。私はちよつと、ぎつくりした。別に暗い尻もない譯だが、彼の女のやゝ厚皮しいやうなところに厭な氣がした。私は、そこに坐つて、一寸改まつた言葉になり、顏だけ笑顏になつて、

「やあ、おいでなさい。先日は失禮しました。その後どうしてゐます。」

彼女は玄關の土間に入りもせす、何か氣の退けてゐるやうに入口の外に突立つたまゝ、地震で全裸體になつて困つてゐる。やつと、ある知邊の許に弟と二人で身を寄せて厄介になつてゐるところであるが、弟が、この場合古本でも賣つたら、小使ひの足しくらゐにはなるだらうといつて、それを今やつてゐる。それでもし、あなたの方に讀み古しの不用の書物でもお有りになるなら一册でも二册でも頂きたいといふことであつた。

「それはお安い御用ですけれど、何分昨日やつと引越して來たばかり

のところで、まだ何が何處にあるやら、散亂つてゐますから、そのうち探して纏めておきませう。そして、今何處に住んでゐるんですか。あとでおたよりしませう。」

と、低聲にいつたが、まあお入んなさいとも、お上んなさいとも、いはなかつた。私は家の者に、何も氣を兼ねる必要も覺えなかつたが、昔關係のあつた女に、さうして訪ねて來られるのがあんまり好い氣持ちはしなかつた。

彼女は今牛込の柳町の何番地某氏の家にゐるといつて、敎へていつたがそれつきり再び訪ねて來なかつた。

そして今日偶然電車の中でめぐり會つたのであつた。……彼女の上に幸福あれ。（一月十五日）

著者としての穗積陳重

穗積重遠

一　穗積陳重の祖父と父母

大正十四年の四月父穗積陳重が歿して以來、改造社から頻りに父の事を誌上に載せる樣にとの勸誘を受けた。しかし子として父の事を書くのも異なものであり、殊に當座のことゝて氣も進まず、つい延び延びになつて居たが、今回父の遺著として「法律進化論」第三册を出す機會に、著者としての穗積陳重を說くのも、全然無意義なことではあるまい。而して父の其方面を說くには、どうしても父の祖父まで遡らねばならぬ。

父は安政二年　伊豫宇和島藩の鈴木家に生れた。穗積と云ふのは丁度源平藤橘に當る鈴木氏の姓で、即ち鈴木何兵衛穗積のなにがしと名乘るのであるが、維新の際穗積の方を苗字に選んだのである。宇和島藩は伊達家で、藩祖は伊達正宗の長子秀宗であるが、秀宗が宇和島に封ぜられた際、入國準備の命を受けて仙臺から宇和島に先着した所謂「前七騎」の中に、鈴木源兵衛と云ふ侍がある、それが宇和島鈴木家の先祖で、それ以來代々二百五十石の物頭であつた。物頭と云ふのは表役の軍職で、奥役の樣に政務の樞機にも與らず、又郡奉行町奉行の樣に民政にも關係せず、純然たる軍人の家だつたのだが、父の祖父重麿に至つて、初めて學者的傾向にはいつた。即ち重麿は二十五歲の時から本居大平の通信教授を受けて國學を研究し、著述も數種あつて宇和島藩に國學を起した人である。餘程の國學熱で、自分の名も「イカシマロ」とよみ、妻の敬子を「イヤマヒコ」とよませたと云ふ程であつた。

この重麿が子孫に遺した最大の遺產は、手寫の書物である。當時の宇和島には書物も少ないことだつたから、重麿は子孫のためにと云ふので諸方から忠臣義士孝子節婦に關する稗史物語類を借受け、それを片端から手寫して置いた。其數は數十種何百卷に上つたが、例へば「三楠實錄」「楠正行戰功記」「武勇忠士傳」「白石英勇傳」「赤穗精義內侍所」「仙臺萩」「秋田系圖」「忠婢さつ傳」の類である。何でも非常に筆まめだつたそうで、且老後に至るまで大勉強で書いたものらしく、夏中に蚊帳の中で裸で執筆したと云ふ。其手寫本は今でも保存されて居るが、製本も手製で、卷末に「重麿老眼忰けれども目がねの力をかりて何月何日筆を起し何月何日に寫し了んぬ」などと云ふ奥書がある、其日附で見ると驚くべき速力だ。そして漢字には一々振假名を附け、又假名

で書いてある言葉には漢字を添えるなど、誠に行届いたことである。この重麿の手寫本が父の少年時代の愛讀書で、文字通り日影を惜んで夕方椽側へ持出して讀み續けたと云う。これが、内容上の印象の外、如何に父の讀書力を發達させたかは想像に餘りある次第で、父が藩校に於て成績がよく貢進生に擧げられるに至つた遠因は、重麿の手寫本にあると云つてよかろう。

父の父重樹は文武兼備の士だつた樣である。文に於ては重麿の學風を承けて藩校の國學教授となり、武に於ては鎗と馬との免許取りで、兵學にも通じて居たとのことだ。父の幼名を邑次郎(むらじろう)と云つたが、これは「穗積の連(むらじ)」とよませようと云う重樹が親譲りの國學凝りの命名らしい。所でこの重樹の人物才學が父に大きな感化を與えたに相違ないが、維新前後には江戸詰京都詰の出張で留守勝だつたので、父及び其兄弟達の教育に直接當つたのは、父の母の綱子だつた。この綱子が中々聰明な婦人だつたらしく、當時の婦人の常として漢字の素養は一向なかつたが、文章の天分があつたと見え、假名文で萬般の用向を遺憾なく辨じたとのことである。其上重麿にも負けぬ筆まめで、夫の出張先への手紙の如き、月二回の飛脚便に細字で巻紙一本宛書いたと云う。明治になつてから「假名の會」なるものが起り漢字全廢を主張したので、若い人たちが綱子のことをあだなして「假名の會の會長さん」と云つたそうである。所で舊藩の男子の教育は漢學で、藩校の最初の素讀教科書は大學だつたが、父の兄の清一郎(重頴)が藩校に入學した後の綱子の苦心は、一通りでなかつたらしい。夫は江戸詰の留守中で自分が素讀の復習をして遣らねばならぬので、自身も大學を一冊買い、ソット親戚の家に行つて讀み方を教わり、本に振假名を附けて歸り、子が學校へ行つた留守に暗誦して置き、其夜の復習の準備をしたとのことである。そしてその假名附の大學は常に錠のかかる箪笥のひきだしに隱して置いた。それは子達が母の無學を知つて輕侮の念を起しては教育上宜しくないと云うのだが、後にそれを燒棄ててしまつたと云うのは、惜しいことをしたものだ。而して綱子は今日で云えば「早教育」の主義で、父を文武の稽古事に就かせるのが普通よりも早かつた樣だ。即ち手習場及び藩校の外、劍術柔術馬術水泳練兵小銃大砲等、當時宇和島藩の設置した文武の諸科を悉く修業させたが、どの稽古場でも父は常に最年少者の一人だつた樣だ。明治三年父が十六歲の時既に文武一通りの當時の普通教育を受けて居て、藩の貢進生に選抜されたことは、綱子の早教育の御蔭と云わねばならぬ。

二　ダーウイン及びスペンサーの影響

斯くして父は宇和島藩の貢進生として明治三年春に上京し、(其時宇和島から大阪まで帆船で行くのに風都合が悪くて五十日かかつたと云う)大學南校に入つて今日で云はば高等學校程度の教育を受け、明治七年校名が東京開成學校となり專門學科が設置されるに及んで、法學を專攻することとなり、明治九年に「法學修業ノ爲」英國に留學を命ぜられたのである。英國ではロンドンのミッドルテムプル法律學校で正式に英國流の法律學を學び、バリスター・アト・ローの學位を受けたのであるが、この純法律學の外に、特に父に影響を與えたのがダーウィン及びスペンサーの進化學説であつた。父が英國に滯在したのが明

治九年から十二年までで、西暦一八七六年乃至一八七九年だが、當時ダーウィンが六十七八歲、スペンサーが五十六七歲、前者の兩大著The Origin of Species(1859)及びThe Descent of Man(1871)並に後者の First Principles(1862) が正に問題になりつつあつた際であるから二十を越えたばかりの若い留學生に此新學說が深い印象感銘を與えたことは、極めて自然であろう。父は法學研究の抑もの始めから、法律と云うものをそれ自身獨立特別のものとは考えず、人類社會現象の一つと見たらしい。そこでもし自然界が進化するものであり、隨つて自然界の一部たる人類も進化するものであり、而して其人類の形成する社會も隨つて進化するものであるならば、法律も亦進化するものではあるまいか、斯う云うヒントを得たのである。元來法律に對する三つの觀方がある。第一は法律は自然に存在するものだと云う觀方である。第二は法律は主權者が作製するものだと云う觀方である。第三は法律は社會に發成するものだと云う觀方である。簡單に文字であらわすと、法律は「在」か「作」か「成」かと云うことになる。父は法律を「在」とし「作」とする觀方をも否認しなかつたのであつて、恰もヤヌス神に兩面あるが如し、其一面を拜して他面を知らぬは、群盲象を探るの類だ、と常に云つて居た。しかし父が自身の學問的硏究の對象として最初から興味をもつたのは、法律に於ける「成」の方面であつて、人類の社會生活に於て法律が發生し發達し變化する現象即ち法律進化の有樣の觀察硏究を以て自分の一生の仕事にしよう、斯う思ひ立つたのである。其計畫は一所に留學して居た櫻井錠二先生などに既に其當時具體的に話したとのことで、して見ると父の法律進化論なるものは、晩年になつてからの思い付ではなく、實に五十年來の企てなのであつた。

三　斷片的法律進化論

所で「法律進化論」と題する著書の第一册第二册が愈々出たのが大正十三年七月、一體それまで何をして居たのか、どうして左樣に遲れたのか、と云うことが早速問題になる。その遲れた理由の一端は後に述べるが、併し右の四十何年間に何等學問上の仕事をしなかつた譯ではなく、十何種の著書を出し、又多數の論文を書いた。その著書論文が殆ど皆法律進化に關するもので、即ち完成的法律進化論は中々出なかつたが、斷片的法律進化論は段々と出て居たのである。これは學者として許さるべき一癖であるが、硏究を進めて行く途中多少纏まつた問題にぶつかると、それに引つかかり段々と深入りして、それだけで著書論文が一つ出來ることになるが、其代り全體の仕事の進行は停滯する。父のが正にそれで、これ等の著書論文は法律進化論の道中に於ける「道草」の獲物と云つて宜かろう。道草を食い過ぎて全旅程を終らぬ中に日が暮れたと云う遺憾はあるが、路傍の一草をも其儘には見すごし得ない所に、又學者としての一面目があるであろう。法律進化論の出版に至るまでの父の著書は左の通りである。

（一）法典論（明治二十三年三月）　當時所謂「舊民法」を施行すべきか否かの大論戰があつた際の著述で、正面から其點の議論をしては居ぬが、前記「法律は成るべきもので作るべきものでない」と云う方の見地から、もし法典を作らんとならば極めて愼重で

なくてはならぬことを暗示して居る。

(二)隱居論（明治二十四年十二月） 隱居制度の起原沿革の研究。

(三)Ancestor-Worship and Japanese Law（明治三十四年六月） 大正六年四月に「祖先祭祀と日本法律」と題して穗積巖夫の邦譯が出た。宗教的規範道德的規範が法律的規範に進化する適例としての日本法律の研究。

(四)五人組制度（明治三十五年）

(五)佛蘭西民法の將來（明治三十八年二月佛蘭西民法百年記念講演集別刷） 法典と社會との離遠及び其調和を論じたもの。

(六)The New Japanese Civil Code, as Material for the Study of Comparative Jurisprudence.（大正元年九月）「比較法學の資料としての日本新民法」

(七)由井正雪事件と德川幕府の養子法（大正二年六月、帝國學士院第一部論文集邦文第一號）

(八)隱居論（大正四年三月） 前揭(二)の大增訂版。

(九)法窓夜話（大正五年一月） 通俗法律雜話集だが、法律進化に關する話が多い。

(十)「タブー」と法律（大正六年十月、土方教授在職二十五年記念私法論集別刷）

(十一)諱に關する疑（大正八年三月帝國學士院第一部論文集邦文第二號）

(十二)五人組制度論（大正十年九月） 前揭(四)の大增訂版。

(十三)五人組法規集（大正十年九月） 五人組制度研究の資料として蒐集した五人組帳を編輯したもの。

四 學者的態度

私は今父の著書論文の價値を云わぬ。父の學說の當否を評せぬ。ただ父が其學說を立て著書論文を草するに當つての學者的態度だけは買つて頂きたいと思う。

前揭著書中の(十一)「諱に關する疑」は、私の所謂「道草」的著述の代表的なものである。即ち法律進化論の一節たるべきタブーの習俗を研究して居る際に、「いみな」がタブーの一種だと云うことに氣附き、それから「いみな」の研究に深入りし、「いみな」が我國固有の習俗でないと云う從來の通說に疑を挿んで、ついに一篇の副產物が出來た譯である。所で其後これを「實名敬避俗研究」と改題して再版することとなり、其印刷中に父が歿して、圖らず此書が遺著の第一號となり、大正十五年六月に出版されたが、私は實は此改題には餘り贊成でなかつた。と云うのは、「諱に關する疑」と云うこの「疑」なる一字が其書の眞價値で、而して父の學問の根本義だからである。現に其書の書出しに、父は斯う云つて居る。

「題して疑と云ふ。先賢の教を奉ずる能はずして而も自家の提說の尙ほ未だ斷言を許さゞるものあるを知ればなり。他を疑ひ又自ら疑ふ。是れ玆に自他に對する疑を陳べて教を仰ぐ所以なり。庶幾くは高教を得て其疑を解決せん。若し能はずんば、其疑の價値を問ひて反省する所あらん。疑ふに勇にして斷ずるに怯、而も反省に吝ならざれとは、「ベーコン」が後學に貽したる訓言なり。我輩豈敢て妄に異を樹て、苟も斷言して罪を古哲人に得んとするものならんや。」

この「疑ふに勇にして斷ずるに怯」と云ふ言葉は、父が大好きで口癖の樣に云つて居た所だが、最近父の草稿類の中から「學者の眞勇は怯懦に似たり」と題する一文を見出した。いつ書いたものか、何のために書いたものか、私もまだ見なかつた文章で、其全文はいづれ何かの形で父の遺文集中に組み入れたいと思うが、丁度話の續き故、その前半だけをここに掲げる。

『學者の眼中眞理の他には一物もない。事物の眞理は容易く發見することの出來ぬものが多いから、輕信妄斷は學者の最も戒むべき惡德である。「ベーコン」が「疑ふには早かれ、斷ずるには遲かれ」と云ふたのは、學者の常に服膺すべき箴言である。然るに世間の學者は往々自己の名を成すに急なるが爲めに、動もすれば自己の研究の發表を急ぎ、不充分なる前提より一足飛に結論に達し、未熟の理論を公表して得々たる者がある。眞正の學者は、眞理の重んずべきことを知るが故に、大事の上にも大事を取つて容易に斷案を下さず、又妄りに人と爭はず、常に自己の研究の不充分ならんことを恐れて自ら反省するものなるが故に、俗人の目には往々絕世の大學者も臆病者と見えることがある。』

斯う云う書き出しで後半には、デカルトとホッブスとを論じ、この「二人程大膽な學者は稀である」のに俗人から「臆病者と呼ばれたのは、即ち彼等が大勇者である所以であると思ふ。眞勇の學者が怯者の如くなるは、大賢の大愚に似る如きものあるか。」と結んで居る。

五　別著の如き再版

著者としての父の態度にいつて、私が眞似したいと思いつつ中々眞似の出來ないのは、再版に對する用意である。私などは、著書の出るまでは隨分一生懸命にもなるが、扨てそれが出版されてしまうと、も一度それを讀み返すのが何となく恐ろしい樣な氣持がして、つい其儘「生み放し」にしてしまい、更に次の仕事に取りかかることになるが、父は著書が出來上つて來ると直ぐ其一部の表紙に「訂正再版用原稿」と書いて机邊に置き、新聞雜誌にあらわれた批評は勿論、學友からの批評や誤謬指摘の書面など、一切それに書込み貼込み、其後も斷えず心にかけて、增補訂正の資料に氣が附く每にその所在を臺本に書込み其資料を出來得る限り一纏めにして置き、そう云う材料が積り積つた何年かの後に初めて再版に取かかる。而かも其再版は單に筆を入れるのみでなく、頭から書き直すと云うのが、父の遣り口であつた。此態度が最もよく現われて居るのは、隱居論の再版である。隱居論は前記の通り明治二十四年に初版が出たので、其時は四六版二百六十二頁の小册子だつたが、それから二十四年たつた大正四年の再版には、菊版七百八十三頁の大冊になつた。著者は其再版の序文中に斯う書いて居る。

『(前略)斯くて著者は聊か之が爲めに微力を致し、數年を費して明治二十四年に至り辛うじて「隱居論」なる一小册子を公にすることを得たり。然れども、本邦に於ては、古來此制度の發達したるにも係らず、之に關する學者の論著は從來殆ど絕無にして、文書記錄の徵證すべきもの亦た甚だ乏しく、加ふるに著者の淺識寡聞なるを以てせしかば、當時或は渉獵の未だ周ねからず、稽査の未だ盡さざるもの

あり、或は論據精嚴を缺くが爲めに、往々其斷案を他日に留保するの已むを得ざるもの亦た是れなきに非ざりき。著者常に之を憾とし、爾來其補正に志すこと二十有餘年、論資を得る每に之を貯へ、斷案の落想する每に之を錄し、………之に關する新法令、新訓令新判決例の出づる每に之を筆錄して他日の資と爲し、以て今日に至れり。………今や………再び筆を執つて之を修補せんとするに當り、舊著の行文論旨共に未熟にして一讀汗顏すべきもの少からず、其他分類編次等に至るまで、全篇に亘りて意に滿たざるものありたるを以て、更に稿を起して之を改案し、參ふるに二十餘年間隨時收聚筆錄せる論資を以てしたるが爲めに、全篇其面目を改め、舊態を存するは僅に其小部分に過ぎざるに至れり。』

此序文を讀んで聯想するのは、一九二一年に出たウエスターマルクの「人類婚姻史」(Westermarck, The History of Human Marriage)增訂版の序文である。其序文中に斯うある。

『本書初版以來經過せる三十年間に、婚姻及びそれに關聯する事項、殊に低級諸民族の婚姻制度の研究著しく進捗せるを以て、余は全問題再考の必要を見たり。余は多くの新材料を追加せり。或舊材料は削除せられたり。以前には甚だ不充分に取扱はれ又は殆ど取扱はれざりし婚姻の種々相が詳細に論議せられたり。批評家によりて投ぜられたる異論は、愼重に考慮せられたり。或場合には舊說が更に高調せられたるも、他の場合にはそれが訂正せられたり。他の論者によりて主張せられたる新說は充分に吟味せられたり。多くの點に於て內容が組替へられたり。斯くして本書は全篇を通じて書き改められ、前版の文章中其儘殘れるものは極めて少なき程なり。』

この二つの序文は其內容が頗るよく似て居り、殊に最後の一句に至つては、所謂符節を合するが如しで相互に勦說と云つてもよい位である。もし「隱居論」第二版の方が「人類婚姻史」增訂版より前に出たのでなかつたならば、穗積の序文はウエスターマルクから着想したのだと云われたかも知れない。さりとてウエスターマルクが穗積の眞似をする筈もなし、畢竟暗合に外ならぬが、双方共忠實な學者である以上此暗合は寧ろ當然である。尙明治三十五年に出た「五人組制度」と二十年後大正十年の五人「五人組制度論」とについても同樣な事が云い得るのであつて、後者の序文にも隱居論第二版の序文と似た趣旨が書いてある。

六　文語體から口語體へ

父は斯く著書の內容について入念であつたのみならず、其文章用語についても實に凝り性であつた。隨て頗る遲筆で、一氣呵成に書き飛ばすなどと云う藝當は出來ず、一字一句を苟しくもせぬと云う行き方であつた。草稿を改むること常に數回、私などならとくに印刷所に廻してしまう所を中々手離さず、どうでもよさそうな文章の末を、ああでもないこうでもないとひねくつて居る。用語についても、例えば「何然」と云う形容語を使いたいと思うと、その正確な字畫意義及び出所を突止めないと安心しない。よく「孟子に何然と云う言葉があつたと思うが、どこにあつたか捜して呉れ」と云うようなことを命ぜられた。孟子の「浩然」位ならすぐ見附かるが、時には一向見當の附かぬ捜し物

をさせられて閉口し、斯んな面倒な何然ならイッソ使わないことにした方がよさそうなものだなどと思つたこともある。何しろ國學の家に育つて漢學を叩き込まれたのだから、假名遣から用語文章がやかましかつた筈である。

所がこの國學漢學仕込の父が、他方ではローマ字にもエスペラントにも同情をもち、碑文を漢文で書くことを非難し、又私が臨時國語調査會制定の「かなずかい」を用いるのにも小言を云わなかつたのは、寧ろ不思議な位であつた。而して父自身晩年には口語體を用い、愈々の最終目的たる法律進化論は口語體で書き始めた。これについては父の知己の方々の間には、折角の名文が「である」になつてしまつてはと遺憾に思われた人があるかも知れず、父自身としても文語體の方が書きよいのであつて、「わしの口語體はどうも硬くていかぬ。書きにくい。書きにくい。」と自身云つて居た。それならば何を苦しんで口語體を用いるのか。それには父に一見識あつたらしい。父は文章に興味をもつたが、文章のために文章を書いたのではない。云わんと欲する所を盡すために文章を書いたのだ。父が斯う云う話をしたことがある。

『古川柳に（父は古川柳が好きであつた）、「下女のふみ恰もはなしする如く」と云うのがある。川柳のおきまりで下女を嘲笑した句だが、しかし「恰もはなしする如く」手紙が書ければ大したもので、それが文章の極致であり理想である。わしはどうかわしの著書を廣く永く讀んで貰いたい。而して又自分の思つて居る通りを過不及なく理解して貰いたい。それにはどうしても「恰もはなしする如く」書かねばならぬ。實はわしに取つては頗る骨が折れるのだが、これから一つ骨を折つて口語體を勉強しよう。』

七　法律進化論の組立

扨て斯う云う次第で法律進化論其ものの起稿が段々と遅れ、結局一部分きり脱稿出版に至らなかつたが、全體の組立は立案されて居た。即ち左の如きシステムになる豫定であつた。

第一部　法原論
- 上巻　原形論
- 中巻　原質論
- 下巻　原力論

第二部　法勢論
- 上巻　發達論
- 中巻　繼受論
- 下巻　統一論

即ち合計六巻で、一巻二册宛として十二册と云う計畫であつた。「法原」「法勢」と云うことは、「水源」「水勢」として考えて見ると早分りがしよう。ここに法律と云う河がある、其水源に遡つて、どこの林中の泉とどこの山中の湖水と云うことを突き止めようと云うのが「法原論」であり、其諸水源から出た水が、或は合し或は離れ、右に折れ左に曲り細流終に大河となつて海に入るまでの徑路を研究しようと云うのが「法勢論」である。

而して右の第一部「法原論」中の上巻「原形論」が、大正十三年七月に法律進化論第一册第二册として出版されたのであるが、法律は如

何なる形態で發生するものかと云ふ研究で、潜勢無形の法律が段々と形を成すに至る進化を詳論し、法律文體の變遷にまで及んで居る。

中卷の「原質論」は、如何なる種類の規範が法律の內容となるかを論究するのであつて、信仰規範德義規範及び習俗規範について順次それが法律化する現象を說かんとする。信仰規範中に於ては、第一にタブーと云ふ原始的禁忌規範の法律化を論じ、次に祭祖及びトーテムを取扱い、終りに一般的に宗教と法律との關係を說く。德義規範中では、特に禮儀の法律化を論じた上で、一般に道德と法律との關係に及び、習俗規範については、一般に慣習の法律化を論ずる外、各種の慣習についてそれを論證しようと云ふのである。この第一部中卷の豫定計畫中タブーと法律との關係に關する部分が、今回法律進化論第三册として出るのである。

下卷「原力論」は、如何なる「社會力」が法律の原動力となるかの研究であつて、此部分で最も重きをなすのは、復讐の研究及び民約論の研究だろうと思ふ。

第二部「法勢論」中の上卷「發達論」は、法律の「內因的進化」即ち人種・民性・地勢・政體・宗教・德教・輿論等の如き、法律が行われる境域內に自發內在する原因に基く法律の進化を論じようと云ふのである。

中卷「繼受論」は、法律の「外因的進化」即ち外民との接觸に起因する外法の模倣採用及び外國の學說が立法裁判等に及ぼす影響を論じようと云ふのである。

下卷「統一論」は、法律の「世界的進化」即ち法律は文化の上進に隨つて段々世界化される傾向を有し、各國民は結局自國特有法と世界共通法とによつて支配されるに至ることを論じようと云ふのである。

八 「常にそれを思ふによつて」

斯う云ふ計畫の下に愈々法律進化論の筆を起し、大正十三年七月に第一册第二册が出たので、續いて第三册即ち第一部中卷「原質論」を纏めにかかつたのであるが、他方十四年三月に樞密院副議長となり、十月には議長に任ぜられると云ふ、父の身上に大變動があつた。其際の事情を今ここで述べる必要はないが、父が樞密院議長に就任した二三日後のこと何心なく父の書齋にはいつた私は、父の仕事机の上の眞正面に、今まで見なかつた小さな「ついたて」型の色紙立が置いてあるのを見出した。其色紙には父の自筆で、上部に「座右銘」と橫書きし、中央に By always thinking unto them. とあり、下部に Sir Isaac Newton と書いてある。今まで座右銘の標語などもつて居なかつたのであるから、どうした譯かと思つて尋ねた處、父は例の諄々と大體左の通り語つた。

『或人がニュートンに、あなたはどうして斯樣な種々の大發見をなさつたか、と尋ねた所、"By always thinking unto them."「常にそれを思ふによつて」と云ふ答だつた、と云ふ話を嘗て何かで讀んだ。成程ニュートンが地球と其上の諸物體との關係に常に思を潜めて居なかつたならば、林檎の落ちるのを見ても引力の理に氣附かなかつたであろう。わしは深くこのニュートンの言葉に共鳴する。自分は五十年來常に法律進化論を思つて居る。五十年來思つて居なが

ら、六卷計畫中の一卷二冊を公にし得たに過ぎぬことは、先哲に對しても恥入る次第だが、常に研究著述を念として日夜忘れぬ點に於ては、敢てニュートンにも讓らぬ積り、隨つて其言葉をモットーとして座右に掲げるまでもないことであつた。所が今回圖らずも身に餘る大任を御承けすることになつた。それについては、「樞密院議長は他に適任の方もあろう、法律進化論を書き上げるのはあなたより外ない。あなたの爲すべき所は前者でなくて後者だ。」と云つて止めて吳れた。自分ももとより其覺悟で、再三御辭退したのだが、事情どうしても已むを得ない。わしは常に話す通り十六歳のときに宇和島藩から貢進生として出たのであつて、文字通り貢ぎ物として國家に差出されたものと自分では考えて居る。況んやそれ以來全然國費を以て仕立てられ、五十餘年間引續き莫大の國恩を蒙つて居るのであるから、國々が汝を要すると云うことになれば、結局一身の勉强都合を以て引下る譯には行かないのである。而して愈々御承けした以上は、微力を盡して御奉公申すこと勿論であるが、他方研究著述の素志を忘れたくないと云うことが、此際特に痛切に考えられる。それ故兼々同感であつたニュートンの言葉を目前に掲げて、自ら志を勵すのである。」

斯う云う意氣込で父は其後も、公務の多端に拘らず、一日も研究著述を廢さなかつたと云つてよい。早起な父は、文字通り「朝飯前の仕事」として原稿を書くのが常だつた。今朝は二枚書いた、今日は三枚書いたと云い云いした。四枚書いた五枚書いたと云う日は、終日上機嫌だつた。而して斯う云う場合になつても父の特色は飽くまで維持され、一方では日暮れ途遠しと歎息しながら、例によつて急かずあせらず、好い加減に片附けてしまうと云う風は少しもなかつた。法律進化論第三冊の原稿は斯くして徐々に出來て行つたのである。

九　學者の死

所が翌大正十五年四月の初め、さしたる事ではないと我人共に思つた數日の病臥で父は歿した。折角の御役目を充分果し得なかつた遺憾は申すまでもないこと、もうやがて脫稿と云う所までになつて居た法律進化論第三冊が、どんなにか父の心殘りであつたろう。現に其原稿中、「タブーと婚姻」と題する一章の如き、はたから見てはもう其位でよさそうなものと思われたのだが、父自身にはまだ滿足出來なかつたものと見え、病床に持込んで橫臥の儘讀み返して居たが醫師に制止されたので末娘の市河晴子に枕許で音讀させ、自分は赤鉛筆を手にしつつ聽いて居り、問題の個所に來ると、取上げてしるしを附け、又先を讀ませて居た。其中に急に容態が變つたのである。而して意識が稍不鮮明になつてからも、頻りに物を書く手附をして居た。即ち父は正に法律進化論第三冊の筆を執りつつ倒れたのである。賴山陽が日本政記の原稿に筆を加えつつ眼鏡もはずさずに死んだと云うことを、父は兼々憧憬的に話して居た。又父は劇が好きで、故澤村宗之助が贔負役者の一人だつたが、宗之助が壺坂のお里に扮した儘舞臺で倒れたとき、俳優の死として理想的だと讃美した。而して其父が今又ここに「倒れて後已む」の素志の通り、學問の舞臺の上で倒れたのである。

斯くして父は兼々理想にして居た「學者の死」を遂げたのであるか

ら、其點は定めて滿足して居るであろうが、最後まで握つて居た此原稿には、何程か心が殘つて居ることであろう、せめてこの法律進化論第三冊だけは物にしたい世に出したいと、私は父の死の瞬間から思ひ込んだ。そこで早速原稿の整理に取りかかつたが、これが必ずしも容易な仕事でなかつた。殆ど脫稿しては居たのだが、やはりまだ諸所に問題が殘つて居て、續き具合のシックリせぬ所、字の脫けて居る所、言葉遣いのハッキリせぬ所、何のためかわからぬ符號の附いて居る所などに出過ふ毎に、「ここは一體どうなるのですか」と問い確むべき其人のない頼りなさが、今更ながら身にしみたことである。しかし最後の十三年間父の著述の協力者として、其原稿の所在、其文章用語の特徴、慣用の符號の意味印刷製本についての好みなどを、父自身の次には最もよく知つて居る國學院大學教授硝木直一郎氏が、故人に對する情誼から非常な熱心で此仕事に當られたので、ここに法律進化論第三冊として「法原論」中「原質論」のタブーに關する部分を公にし得ることとなつた。而して此遺著は「穗積奬學財團」の事業として刊行されるのであるが、財團は明治三十九年に東京帝國大學在職二十五年を記念するため父の故舊學友によつて設立されたもので、其後の父の著書の主要なものは皆此財團の費用で刊行された。　は常にこの一千餘名の財團設立者諸氏の厚誼を感謝し、法律進化論第一冊の序文にも、「如何なる幸運にや、著者は此の如く溫き友情の雰圍氣の中に學者として活きる」と喜んで居る。所が者の歿後更に篤志を寄せられる諸君子が多く、同財團は倍加せる資金を以て父の遺著の出版を其一事業とすることとなつたのであつて、父は今又此の如く溫き友情の雰圍氣の中に學者として安らかに瞑し得るのである。私は此際最早多言せぬ。ただ「父の笑顏が見るえ樣だ」と云いたい。

婦人と功名心の問題

婦人と功名心

山川菊榮

たしか高等一年——今の尋常五年——ぐらゐの時でした。先生が『皆さんは大きくなつて何になります』といふ質問を出した時、六十人ほどの女生徒は顔を見合せたなり、返事に詰まつてゐました。そのうちで只二人、勇敢に手をあげた人があつた。その一人は級長で、もう一人は副級長でした。第一に名を指された級長は、

『私は大きくなつたら高等師範を出て先生になります。』と答へました。第二に指された副級長は、

『私は英語を勉強してロンドンに留學します。』と答へました。あとの五十幾人かは、何と聞かれてもモヂ／＼して顔を赤めたり、袂をひねつたりするばかりで、全く返答に窮してゐたものです。其頃は丁度日清戰爭の終つたあとの傲りたかぶつた戰勝氣分と、日露戰爭に對する準備時代の、敵愾心の横溢した時代でしたから、男の兒といふ男の兒はみな未來の大將を以て任じてゐたものでした。然し女の兒には、たゞ漫然と『お嫁に行く』といふ沒個性的な仕事よりほか、未來といふものに對する何等の抱負も空想も芽ぐむ種を蒔かれることなしにゐるのが常でした。婦人の典型として先生の推奬する松下の禪尼や山內一豐の妻の話は、現代の子供の生活には緣もゆかりもない昔話で、花咲爺のお伽噺より以下の感銘を與へ得ないのは云ふまでもないことでした。かうして私達の時代の女はたゞボンヤリと育つて來ました。何をアテどもなしに只だ學校に行き、たゞ家事を見習ひ、たゞお嫁に行き、そしてたゞ死ぬばかりに。この目的のない、信念のない生活は必然に婦人の興味を目前の、小さな利害に限定せずにはおきませんでした。女の子達は、その母親と同じく、よるとさはると、顔や着物の品評、個人の噂話に日を暮してゐたものです。戰爭があらうと、何萬の人が死なうと傷つかうと、女の世界はすべて其等の世間の出來事には一切頓着なく、たゞ顔と着物の品評と人の噂で持ち切つてゐました。女にとつては全ての女は競爭者としか映じないらしい。恰も封建的な職人が全ての同業者を仲間として信頼せずに商賣敵として猜疑し嫉妬するように、女もまた女といふ女をまるで仇敵のように觀察し、競爭者のように追ひ拔くしか考へぬらしい。

女には功名心がないといふ人があるかも知れぬ。然し女として育てられた私から見れば、女の功名心は性的魅力の一事に集中するように導かれて來たといふのが適當なように思はれます。その性的魅力によつて富み又は名譽ある男を虜にすること、そして夫以外にも出來るだけ多くの男を出來るだけよく魅すること、この點に女の功名心は集中されてゐたので、勢ひその手段としての顔や着物の問

題が興味の中心となつたことは怪しむに足りないのです。

○

功名心といふことを、單に世間的な成功に對する野心といふ意味に解せずに自己の才能によつて傑出することに對する望みといふ意味に解するならば、これは何人にもあるのが當然でもあり、又適當に指導せねばならぬ本能でもあるに違ひないと思はれます。今日のところ、男の場合には、これはたゞ手段をえらばず世間的に成功することに對する野心としてのみ養成せられ、女の場合には、かういふ男を虜にすることによつて自己の種々なる慾望を滿足させるために役立つように導かれてゐるようです。誰しも子供の時には持つ『勉強してエラクなりたい』といふような無邪氣な野心をかういふ卑俗な、功利的なものに育てあげるのは、ひとり教育者といはず世間全體、即ちさういふ思想傾向を發生し維持しつゝある社會組織の罪であるといはねばなりますまい。人各々自己の才能を十分に發達させる機會を持つことが社會にとつて有利である限りは、男といはず、女といはず、何でも好む道に從つてその功名心を滿足させるように導くべきではないでせうか。

私などの子供時代には、それでも『先生』とか『洋行』とかいふことを理想とした子が一人でも二人でもあつたゞけ女の眼界が廣まりその功名心の心の的が高まつてゐた譯です。私の母の時代、祖母の時代の子供に、同じ質問をかけたなら、『よい家へお嫁に行く』とでもいふより外に答への出來る子は、恐らく一人もなかつたでせう。今日では婦人の職業範圍が擴大されてゐるだけ、その自力による功名心の滿足の機會も多くはなつてゐるでせうが、然し女が男に頼らずに生活し、性によらず、勞働によつて生活することを正しいとする信念が婦人の倫理を形づくる根本的な信條とならぬ限りは、功名心を正しく生かすこと、即ち眞實に自己の才能を十分に發揮することによつて得る滿足は、女には味はふことの出來ない性質のものではなからうかと思ひます。

フエミニ・テイの探求・實現

本間　久雄

女性の幸福への道——このことは、さまざまの方面から考へられるであらうが、しかし、どういふ方面から考へるにしても、その根本の基礎は、たゞ一つであると私は信ずる。それは外でもない。女性が、眞に女性の本當のもの、眞の女性らしいもの、女性そのもの——一言にして云ふと、所謂フエミニ・テイに眼ざめ、それを實現しようと努めることである。

ギリシヤの昔しの哲人は、「汝自身を知れ」と云ふことを力說したが、この言葉の含む眞理は女性の場合にも直ちに當て嵌め得る。吾れ自身の特質や性向やらを知らないではどんなに努めても結局精力の浪費に終る。だから、先づ、自分がどういふ仕事に適するか、社會の一員として、どういふ役目を演ずるのが、最も多く、自分といふものを生かし伸す所以であるかといふことを、あらかじめ知ることが

は、その人に取つて、幸福――眞の意味の幸福を贏ち得る第一の道である。眞の意味の幸福は、結局、その人の生來持つてゐる本具的な素質を、思ふさま素直に伸長させること、言葉を換へていふと、その「人」自身を最もゆたかに實現することに外ならないからである。

女性の幸福といふことも、結局これに漏れない。

これは極めて平凡な道理である。しかしこの平凡な道理も決して正しく近代の女性に受け入れられてはゐない。幾世紀もの永い間、男性のために虐げられ、その女性としての「人」を全く無視されてゐたといふ憤りに燃えた近代の女性け、所謂フエミニズムといふ男女對等運動を興した。

この運動の中心意圖である女性の開發、又は女性の解放といふことには、私も心からの賛意を表することに躊躇するものではない。この運動が、正しい意味で、十全の効果を擧げた場合には、女性の幸福は、おのづから贏ち得らるべきだからである。

しかし、又、いかなる運動にも利弊が相伴ふやうに、このフエミニズムといふ運動にも、弊の伴ふことが免れなかつた。それは外でもない。女性の男性化、又は女性の中性化といふ奇現象であつた。すなはち、女性が男性の虐げから脱し、女性を男性と對等の位置に置かうと焦燥する自然な、しかし、誤られた結果として、男性のすることは、女性にも出來るといふやうな、一種の反抗的氣運を女性の間に醸し出し、その結果、又、女性をして徒らに男性を模倣させる傾向を形成したことである。

このことの誤つてゐることについては、既にイギリスの碩學ヘブロツク・エリスが、その著社會衞生學の中で論じてゐる。

「これまでの婦人運動は、大部分、女性が、男性を模倣すること女性が男性と同じ仕事と權利とを獲得すること、そのことの中に閉ぢ込められてゐた。もつとひろく云へば婦人としてよりは、男子又は人間としての諸要求を獲得するのが在來の目的であつた。」

エリスはかう云つて、更に、當來のフエミニズムは、上記のものではなく、全く別な道を取るべきものであることを述べて、次のやうに云つてゐる。

「しかし上のやうな婦人運動は、婦人運動のたゞ半分の仕事に過ぎない。而もそれは決して重要な半分ではない。女は、男が女のやうになり得ないと同じやうに、決して男のやうにはなり得ない。男女をして、お互ひに離るべからざるものならしめるのは、男女のこの「同じくない」と云ふことである。そしてこの男女の「同じくない」といふことは又男女をして人生を構成する上にお互ひに當然の分け前を取らしめざるを得ない所以のものである」

エリスのこの言葉はたしかに眞である。生理的に、能力的に男に女の出來ない領域があると同じやうに、女にも能力的に生理的に、男の出來ない領域がある。つまり男女は「同じくない」のである。そしてこの「同じくない」領域を、男女がそれ〴〵探求し、開發してゆくところに、男女それ〴〵に取つての相互の幸福があり得る。

さて、男女に取つてエリスのこの「同じくない」領域は何であるか。科學者はこれをマ

スキリニテイとフミニ・テイといふ言葉で云ひ表してゐる。しかし一歩進んでそのマスキリニテイとフミニテイの本質如何といふ問題になると、今日の科學では、未で解決を與へて與れない。尤も科學上、この兩者の特質を擧げ得ないことはないかも知れないが、それは多くは、在來の男女を研究對象として、それから抽象し出した特質に過ぎない。それでは、吾々は不滿足である。

吾々の、こゝで、最も重大に考へたいことは、在來とは異つた新しい典型の女性を研究對象として、それから探し出した特質といふことである。即ち、こゝで吾々の問題とするフミニ・テイは女性の過去に關するものではなく、その將來に關するものである。女性のもろ〳〵の可能性を豫想した上の問題である。

詩人メエテルリンクは、女性を以て「吾々には見られない偉大なるものゝ覆面したる姉妹である」と云つたが、女性自らその覆面を取つて、その「偉大なるもの」――フミニ・テイ本來のもろ〳〵のすがたを發揮實現するとき――その時こそ女性の最も幸福な時である――が何時來るか？心ある男性はひとしく、その時を待ち望んでゐるであらう。

女は所詮女

人見　絹枝

「女性の幸福への道」こんな御質問をうけてからもうかれこれ十日にも成るのに私しの頭には一寸もまとまつたことが浮んで來ません。

女と名のつく私ですが、まだ女はどうしたら幸福になるだらうかといふことを、考えたことは無いのです。毎日〳〵忙しく暮して居るこの現在行つて居る忙しい毎日の仕事が一番私しには幸福な樣でそれ以外には別に幸福に成りたいとも又成つて見たいとも考えた事が無い位でありますからことに他の人々の幸福感等はわかりません。

「女性の幸福」と云つて見ましても今の樣に女子か奧樣で無ぐて外樣に成つては一體どこが幸福なのか各自各樣にその幸福の道を求めることと、私しは思うのであります。此の間年末の買物に久し振に三越に行つて見ました。

大阪の町を歩いても、東京の淺草邊を歩いても美しい吸ひつけられる樣なあでやかな着物を身につけて、ころげる樣なフエルト草履をはいた今樣の私し位の年の人をよく見ますが矢張私しは二ケ月振に來た三越の中で、幾十人か着物の陳列棚の前に貴金屬品の前に立つてゐるこの種の人等を見ましたが、此の人々は又此の人々で女性の幸福への道は私しなんかの到抵察しられぬ所を求めていらつしやる事と思つた。

私しの恩師二階堂トクヨ先生の樣に一生女子體育の道に男も從ひえぬ仕事に先生の幸福はひそまれても居るのでしやう。

こんな事を考えていたら十人が十人共同じ女性とは云へその幸福な道のたどり方は異つてゐるのはよくわかつてゐますが私しは今度三ケ月許ロシヤ、ポーランド、英國、フランス、スエーデンと相當多くの國の女性につき合つて見ましたが一度も外國の婦人をしらぬ私しにはよく洋行歸りの「人等が日本の女子はしつかりやらねばいくじがない、何の役にも立たない」ことをよく云つてゐつしやるものでその通りだ！　位に考えてゐましたがそ

の感じがむしろ反對位に成つたのです。

むりに日本の女が外國の婦人を一から十迄まねる必要はない様です。外國の婦人に大いに眞似をさしてやりたいものも日本の女は多くもつて居る様に思はれます。先輩の人等の中にも男女平等をよく唱えていられる様に思ひますが私しはこの意味から云つて無理にアメリカ等の思想を入れて男女平等を唱える必要は無いかとも思ひます。たゞおことわりは重々しておきますが私し一個人の考えで今年やつと二十を一つ超した者の云ふことであること丈をおふくみ下さる様に……

私のやつてゐる運動競技の方でも私しの趣味上からこぢつけて云つて見まして男子が十六歳にも成れば力の方では決してどんな女でも勝てないのです。

十六歳に成つた許りの男の子だと思つてもホップ・ステップ・ジャムプの如きは樂に私しの十一米六二五位を破つて居ます。體力にともなつて智力の方でもたまには男子をしのぐ才能を持つ女性もありますが男女の同年輩の者を比べて見ましたら決して同じと云ふことはないだらうと云ひます女學生と中學生の同じ二年生でもたしかに智力の働きは平等のものではない様です。

女は女らしく。……私しはこの言葉を今の人々はとりちがえて考えて居るのではないだらうかとよく考えさゝれます。それは運動等を盛にやる、それを女らしくして置けと云はれる人もありますが私しは女が運動したから女らしく無い……とは云はれぬだらうと思ひます。

むしろ女の身女の智力で無理に男子の中に出シヤバラなくてもいゝと思ふ。女らしく無い女が多くないでしやうか……私しはよく考えて見るのは昔しからもつて居た日本の女性の美しい情緒……それから生れる美しい女性の幸福が次第にすたれてその幸福感が他にうつつて行く様に思はれますがその爲にかえつて現代の女性の心にみにくい情緒が働いてきたない跡を新聞の三面に出してゐるのではないでしやうか。

運動場であんなにあばれ廻る私しが此の様な事を云ふのは大變おかしく思はれますが私しは昔しから日本の女性のもつ美しい優しい女らしい幸福をいつまでも保つてゆきたいと思ふ主義の者です。

先帝陛下の大喪に合つてもあまり平常と變らぬあうき〳〵した今の女學生等を見ると私しは腹が立つ様に成ります。

運動競技の方でも決して日本の女子は眞實味のない皆に浮調子の選手の多いのは今の「女」と云ふものゝ心を現しているものではないでしやうか。

男子の人等の心それも又昔しの人等とちがつて、變な、どこに天皇陛下の臣かと思はれるたましいのぬけた様な人をよく見ますがせめて女子丈でも十分その足どりをしつかりふみしめて進んでゆきたいものです。

夫を助け、子を育て、大黒柱をよりかためよく小さい時分に家の後を繼ぐ姉に祖母が教えて居たこの言葉を忘れもしませんがこの三つを正しく守つて、心に何の不滿も持たず、何事も善意に世の中をわたつて行つたら又私し等女性はその幸福が浮んで來るのではありますまいか。まだ〳〵日本の女子があまり大きな野心のもとに男子の間にたちまじる女らしくない女をよして心根の固い何事にぶつかつても崩れぬ精神をつくることが何よりも女

性の幸福への路にたどりつく所ではないでしやうか。

私し自身修養の途にある若い者の事とてその道をいろ〳〵とさがしてゆく所ですから以上の考えはたゞ私の頭にうかんだことをかきつらねたにすぎませんからよろしく皆様の御考へをあふぎ一面無作法の點をおゆるしあらんことをおねがひするところであります。

女の職業能力

松本亦太郎

家庭外に女が仕事をするに就ての問題は過去の國狀から攻究した丈けでは十分に解らない。昔は生活費が低く一家内で男は女を扶持し得た、其代り男が女に過大の要求をした。而して社會では女の教育及び職業に就て何等の好機會を與へなかつた。女は勢ひ家庭の事に從ふ外に生存する道は無かつた。然るに最近海外諸國から影響され生活費が増した上、人間の欲求が擴大して、一家の支持上女も收入を得る事が必要になり、又女自身が精神的に向上し男の御用を務めて許りゐる事が出來ないで或度までは男の拘束から脱出し獨立する事を望むようになつて來た。夫から社會の組織及び機能が複雜、緻密、活潑になり、新職業が發生し、女の仕事を要求し、或種の仕事は男より女の方が遙に適任であるを見出だすに至つた。歐米の例によると社會が進む程女が家庭外の仕事に從事する度が多くなつてゐる。男女協調で働く國と重に男丈けが働く國と對抗すれば前者が勝つ事は明かである、國際的社會競爭に落伍せざる爲には女に働いて貰はねばならぬ。今日の家庭生活、社會生活、國際生活に適應する準備をする爲に女を教育する事が急務になつて、然る準備機關の具備しない民族は民族競爭に於て劣敗者とする運命を有すると見ねばならぬ事になつて來た。

女が高等教育に堪へる能力があるかの問題は事實が既に之を解釋し、歐米では何等かの形に於て大學や專門學校は女に開放せられ日本でも同樣である。勿論女が入學を欲しない部門はあるが、入學せる部門に於ては女の學業成績は概して良好であつて、女より劣る男の學生は幾らもある。女の研究業績を見れば專門學校や大學の學業に堪へないなどとは言へない。日本で若し女の修學に對する制限を解放したなら、女の修學者の數も增し成績も益々擧がつて來る事は實際多數の女學生を扱つた者には明かに豫想される事である。心理學で小學から大學に至るまでの男女の智能を研究した結果に於ても男女間に劃然たる優劣の區別が認められない事は學業成績に現はるる所と略一致する。尤も現狀に於ては男に適しない學科がある如く女に適しない學科がある。若し女の大學を設け主として女を教育する爲に學科を按排したなら女は愈々其材能を發揮するに至るであらう、市俄古大學やコロンビヤ大學内に特に女に對して設けたる諸學科があるのは注意すべき施設である。

人間の性能を優劣價値の系列に整理すると多人數中で半分は中段價の性能を有するが殘り四分の一は上段に向ひ趨異し、四分の一は下段に向ひ趨異する、上段趨異の頂上は天才であり、下段趨異の極は低能である。而して性能趨異性は男の方が強い、女の中心保存性が男より強い。そこで天才も精神薄弱も男の方が女より多い、勿論天才程度に趨異する女

はあるが男程數が多くない、趣異度も小さい、學的に定められた世界拔群人の品等順に操ると女順第一女性は男女混合順第三十七位に當り、女順第二女性は男女順第百十八位に當る。拔群男女各千人の品等順を對照すると向上的趣異度は男の方が多い事は明かである。尤も西暦十四世紀後は拔群女子の出現が著るしく增加した。然し天才に於ける男女差異を標準にして男女一般の差異を論ずるのは趣異法を知らない誤りである。才能趣異の極端に於ては男女間に著るしい差異があつても才能中段に於ては餘り差異の無い事は前に述べた如くである。而して世の中の實務は中段材能があれば之を遂行するとを得るのであるから、日本や歐米に於て女に開放された種類と程度の職業なら女は裕に之を遂行する能力を有してゐる。大戰の頃米國には九百萬人、英國には五百萬人の女が家庭以外の職業に從事してゐたが、其成績の優良なる事を一般の社會が認め、社會の事業の一半は女子に委任するのが正當である事を合點するに至つた。米國では職業可能年齡の女が既婚未婚合計三千萬人位ある中で約三分の一が家庭外の業務に從事する、女の職業は世間普通に既になつてゐる。問題は職業を指導し女を適所に置く事にある。

感覺穎敏、手指の技巧敏速、機械的事務及び計算、對人的溫和を要する職業に女は適する、細い實驗、醫師、文藝、教職宗教的事業圖書館博物館業務には女は既に好成績を擧げてゐる。拔群女八六八人中の約四割三三七人は文學者である。政治勢力者七八人宗教六四人、俳優五六人、音樂四九人學者二〇人美術一七八人等である。窮屈なる拘束を蹴りつゝ女は文學、宗教、藝術に其天才發射の途を拓いた。最後に現はれる問題は結婚生活と職業生活を如何に調和す可きやにある。此問題を論ずる餘白が私に與へられて無い。

現代女性の望む幸福

三宅やす子

現代の女性が望んで居る幸福のめあては何か、それを實現するためにはどんな事が障碍になつて居るかといふようなこと、あはせてどうしたらそれが除かれるかといふことの感想を云はれて、何だらうと考へて見たら、浮き上つた答案は、今も昔も女性の本來の望みには大した變りもないといふこと、只望んでも得られないものは諦めて居たけれど、今ではあながち諦めなくても可いと覺つた位のところでせう。

大體、現代的な女性に、めあても何も無いのではないかと思ひます。と云つて云ひ足りなかつたら、目的も標準もないのを彼女等の普通の事大げさに云へば誇りにもして居るのです。まるで考へない、望まない、なるようにならせてゆく、と云つて、風にまかせて漂つて居る浮草のようなのでなくて、自意識の下に自分の好きな事だけやつてゆく、勿論氣の乘らない事と云つたら一つだつてしない、と云ふのが現代の女性の通有性なのですから、もし其人達に、あなたの幸福の目標は何ですかと訊いたら、「親切な男の人と贅澤な暮しをしたいのよ」と言下に答へるでせう。さう旨い具合には行かないと云はれたら、「可いわ餘計なお世話よ」と云ふに極つてます。

勿論、考へない、と一口に云つて了つて

も、現代の「考へない」は、昔の「考へる」以上です。何もかもわかつて了つてよく〳〵しないと云つた方がましかも知れません。或は知つたか振りでも大膽に押し通して、他を批評したりやり込めたりするだけの度胸は皆持ち合せて居ます。

彼女等の女王のやうな希望が、現實には打ちこわされて了つても、ビクともしないでせう。「虞美人草」の藤尾が笑ひ出して仆れる心理は、當時の女性には、驚くべき新らしさだつたけれど、今では、大抵の女は、藤尾の誇を持つて居ないものはありません。

人によつて自分達の望んで居る幸福がさう容易く眼の前には現れて來ないに極つてます。素晴しい生活、凡ての意味で、胸のすくやうな痛快な生活はなか〳〵許されさうもないのに、それが駄目と極るまでは、決して駄目だとは思つて居ないところに、現代人らしさを見ます、それならどうしてそれを實現させようかとなると──なまじ努力や知惠を用ひない方がよささうです。何故かと云へば、皆が皆、今の女の人の考へて居るやうな空想が實現されたとしたら、それこそ世の中は闇にもなり兼ねません。

兎も角、あたり構はずに進んでゆく勇氣が與へられて居るのですから──さうさせるやうにもうぐるりの事情が次第に變つて來て居ますから、今の女性はもう幸福です。以上希ふ將來の幸福を具體的に何かとつきつめてしまつたら、高い教養を受けた人でも、普通には賤しいとされて居るやうな職業の女性でも、昔の女も今の女も何の變りのないことに失望?しなでは居られないでせう。只つい一二年前迄のやうに尤らしく理づめに男性に突き當つてゆかないだけ、づつとおとなになつたのだと思ひます。

幸福を描く

早川美奈子

「女性の幸福への道」と云つた意味の原稿をいゝ、いゝ、なんでも書く様との仰せこんなむづかしい事について哲學者でもなければ教育家でもない私に立派な意見もあるはづがないのに何故かとんだ御命令が來たものだと考へて居りましたら私は一體非常に幸福さうに見えるのだそうです。「貴女は一年中嬉しさうね、苦勞なんかちつともないでせう、ほんとにお幸せよ」と友人の一人が申しました。なる程それで改造社では幸福の見本の様に見える私に「幸福への道」をおたづねになるのだなと思ひました。

さう言はれて見ると私は全く幸せです。第一女に生れた事から幸せです。子供の頃は「お馬に乘つた軍人サンになれないからつまらないなあ」などゝ考へた事もありましたが今ではそんな事も思ひませんし女なるが故に男に劣つた待遇をされた事は今まで一度もない様で正直のところむしろ割がよかつた方が多い様です。こんな事を申しますと婦人參政權運動あたりの新進婦人方は「女は法律上準禁治産のあつかひを受けて居るのですよ、それに民法の八百十三條ノ二や刑法百八十三條などに對して貴方は不公平だと思はないのですか」と御憤慨なさるかとも存じますが一體物事を法律によつて解決しなければならないといふ事はもうその事がすでに不幸で

す。參政權なども夫や子が所有して居れば妻や母は所有して居るも同然ですし婦人自身が代議士になれなくとも代議士はおろか幾人かのそれ以上の子を一人の母が持つ事は不可能ではないと思ひます。私は「お怒りになつて男性と喧嘩なさるおひまにそんな法律の必要のない夫をお持ちになつて自發的にそんな條文は訂正する樣な男性にお子樣方を御敎育なさつたら如何です」と申し度いのです。私は何でも男と同じ事をしなければ氣のすまないといふ男性化した女性は性來好みません。女はどこまで行つても女で決して男と同じものではありません。女子が男子と同じ、職業につき男子と同樣に何事もしようとするから不幸や不平が絶えないのではないでせうか、男性は外で各方面に活動し女性は世界を美化し融和して行く爲に造られたのではないでせうか、女性のない世界を想像したらどんな殺風景なものでせう、女性は常に美と愛とに生きるべきものです。その女性が外へ出て競爭場裡に立たうといふ事は不自然なのだと思ひます。女性に最も適當な女性でなければ出來ない事業が他にあると思ひます。それは妻として美しき家庭を建き母としてよき子孫を養ふ事です。たとへ他に職業を持つて居たとしてもこの天職に比ぶればそれは副業にすぎないものではないでせうか。とはいへ私は婦人が職業を持つ事に絶對に反對するものではありません。私は青山女學院で塚本はま子先生のお敎へを受け、當時は今以上にやんちやなお轉婆娘で隨分お小言を頂戴致しこわい先生だと内心恐れをいただいて居りましたがその後御子息御夫妻が有名なアマチュア音樂家なので御家庭の有樣を知る機會を得外に出て立派な活動をなさりつゝ大勢のお子樣方を皆立派なしかもよい方にお育て上げになりこんな愛に滿ちた家庭を建設なさつた先生は實に尊敬すべき方だと敬服して居ります。けれど誰にでもこの眞似は出來るものではないと思ひます。凡人には職業と家庭とは往々兩立しがたいと思ひます。藝術家などで職業の爲老年まで家庭を持つ事もなしに專心されて居るのを見る時に頭の下る樣な氣が致しますが「何てお幸せな」といふ感じは起つて來ません。やはり女性としては崇高なけれど淋しい生活なのではないでせうか、幸福といふ點からはむしろ孫にかこまれながら子等の立派な生長を樂しんで居る平凡な名もない老婆の方が幾十倍か優つて居るのではないでせうか、所謂偉い婦人になるといふ事を幸福になるといふ事とは決して同一のものではないと思ひます。偉くしかも幸福な婦人もないとは言へませんが多くの場合一致しないものゝ樣です。富や社會的地位などのあまりに高すぎるのもそんなものではないでせうか、まして有名等といふ事は決して幸福とは何の關係もないものです。今日の場合有名の大部分は新聞雜誌で製造したものですがその新聞雜誌たるや大方は(改造は例外だそうです)よくも無責任にあんな法螺が吹けると思ふ事を平然と書きたてます。それを見て有名を慕つて或は有名を利用しようとして集る輕薄な連中が知人の大部分であるにいたつては幸福にならうと望む婦人は夢々有名などにされない樣御注意あつてしかるべきです。脱線して居ると紙數がつきます。

結局私は凡そ世界には絶對の幸福といふものはないと思ひます。けれどどんな地位にあつても境遇にあつても自分の現在に滿足し自

分の仕事を喜びをもつてする事の出來るものは最も幸福です。婦人の天職なる美しき世界よき家庭の建設に一家の協力と愛を助けとする愛する親の爲兄弟の爲夫の爲子の爲總ての不滿も苦しみも喜びをもつて受け入れ最大の滿足と最大の幸福感を以て從事する事の出來るものこそ女性として最も幸福でありこれこそ「女性幸福への道」なのではないでせうか。

一九二七・一・七

殼を破つて出る修業と目標

鶴見祐輔

總じて、日本の社會は、男でも女でも、個性の強い人は住みにくいやうに出來てゐる。ことに女の人はさうである。從つて功名心のある男よりも、功名心のある女の方が骨の折れる國である。男なら溫厚の長者といふお面を被つて暮すか女なら良妻賢母の殼の中に巣喰つてゐれば安全である。

しかし個性の強い者は、どうしてもこの殼の中から出てくる。出まい〱と氣をつけても、つい片足を出したり、尻尾を出したりする。所詮出るものなら、思ひ切つて全身素面で出てくることである。

それではどうして出てくるのか。男の方はまだ簡單であるが、女となるとさう安直にはゆかない。それは、女は三つの不利益な條件を持つてゐるからである。その一つは社會的狀態である。今日の日本では女の働く範圍が狹いし、また社會の空氣は婦人の家庭外の活動に同情がない。その二は長い習慣のため、日本の婦人は智識才力を研く機會が乏しかつた、從て今日の日本の女性は男性と拮抗するだけの能力を持つてゐない。その三は、經濟的不利益である。日本の民法も社會習慣も、女には男のやうに財産權を與へてゐない。私はことに、この第三の點を具體的な日本の婦人の弱味だと思ふ。何かと言へば經濟上の點で男に押へられてしまふのである。英米で婦人の活動の目ざましいのは、何といつても婦人たちが自分で勝手に使へる金を持つてゐるからだ。

そこで具體的問題として、個性の強い日本の婦人がその功名心を滿たすには、どうしたらいゝかといふと、第一に頭をつくることで、第二に金をつくることだと思ふ。何事もそれからである、と私は思ふ。頭の出來てゐない人が、一時の感情に激して色々やつてみても、つまりは駄目だと私は思ふ。それから頭が出來たら、今少し理財の觀念を養はなければゐけないと思ふ。この二つの用意が出來て初めて、女の功名心が充され得るのだと思ふ。歐米の婦人たちが、あれだけの位置に達するためには、隨分長い間戰つてゐる。ゆえに英米の婦人たちは、日本の女性よりは、理性が發達してゐる。ことに數理の觀念に明るい。

それでは、實際問題として、日本の婦人は良妻賢母たる以外に何をしたらゐゝかといふに、文學、藝術などの方面のことは、從來でもあることであり、またこれ等のことは人々の天分であるから、皆が皆出來るわけのものではない。西洋には社交界といふ花やかな舞臺が女性のためにある。美しくして活氣ある幾多の女性が歷史に殘つたのは社交界のためである。しかし日本の社會には社交界といふものはない。醫者のある日本では社交方面に

も、良家の子女の働く部門が閉されてゐる。また貴族時代が永久に去らんとする現代に於て社交界といふものは、世界各國でも衰へてゆくであらふ。

將來の婦人の働く部門は、なんと言つても、經濟界と政治界である。いゝの惡いのと言つたところで、時代の歩みと時計の針は止めることは出來ない。日本の婦人も遠からずして、經濟界と政界とで、男性と拮抗して活動する時が來るであらふ。殊に婦人參政權の實施と共に婦人の政治運動は案外早く初まるであらふ思ふ。功名心のある婦人方は、その日のために準備することである。

しかし過渡期の日本に於て、私が日本の婦人方にして貰ひたいと思ふ活動は、教育と、ジャーナリズムである。人の師となるといふことは、母となると同じやうに、女性に適した仕事である。もつと偉大な教育家が婦人の間から出てゐゝ筈だと思ふ。それから、現代世界の大現象である新聞界といふものに、何故もつと女性の天才が現れないのか。私には不思議に思はれる。日本だけでなく、どこの國でもまだ婦人記者の偉大な人が現はれないのはどうしたわけか。

婦人問題に關する本を讀でみると、その結論の一つに、女性は色々の點に於て男性に優つてゐる。例へば忍耐力のごときは遙かに上である。しかし、創造力に於て男子に及ばない。と書いてある。成程さう言へば、今までの世界文化史のうちで、獨創的の仕事が婦人の手に成つたものは甚だ少い。偉なる發明、哲學、宗教、音樂、美術、そんなものゝ起りはみんな男性が成してゐる。若し本當に偉大な功名心を持つた婦人が居たら、この世界歴史の先蹤を破つて、新しい貢獻を、新しい光を、人類文化の上に投ずるやうな知腦的事業をされたら如何である。さうしたら婦人問題の研究者たちに、獨創力に於ては、女性は男性に劣る、などゝいふ結論はされないことになるであらふ。

それは我々男性が、女性に對する一の挑戰である。素よりその爲には、男性に於て、一切の平等的條件を女性に與へるといふ覺悟を以つての上である。(一九二六・一二・二八)



饒舌錄（感想）

谷崎潤一郎

ちよつとお斷りをしておくが、十一月號の改造の豫告に私が新年から文藝時評を擔任するとあるけれども、實は時評をするつもりはない。時評と云ふと、どうしても月月の小說や戯曲を一と通りは見なければならない義務を生じる。これが私には時評を書くことそれ自身よりも餘計たまらない苦痛な仕事だ。何も現代諸家のものが一讀に値ひしないと云ふやうな譯ではさらさらないのだが、いつかも「藝術一家言」の時に云つたやうに、矢張り文藝物の鑑賞は、それが發表された時より多少の時日を置いてからの方がいいやうな氣がする。創作の批評は三面記事とは違ふのだから、さう骨を折つてレーテスト・ニユースを集める必要はあるまいし、諸家の方でも每月每月傑作ばかりが書ける譯でもあるまいから、それを一一取り上げられたら定めし迷惑千萬であらう。尤も掘り出しものをするとか、隱れたる天才を發見するとか云ふやうなことが、批評家としての任務でもあり、またその虛榮心を滿足させる所以でもあらうが、私はさう云ふ責任や野心はキレイサツパリと放棄する。ズルイと云はれても差支へはない。誠に後進に對しては冷淡であるかも知れないが、一人の作家を見出すために百も千もの駄作を讀む暇はないのだから、不親切と云ふ批難に對しては始めから詫まる。で、その方面は他の適當な批評家に任せて、私はいつも多少世間が問題にするやうになつた作物を、後でゆつくり讀むことにしてゐる。それも必ず讀むと極まつた譯ではなく、まあ氣が向けば手に取つて見る程度だから、アテにならぬこと夥しい。

さう云ふ譯で每號何かしら文學藝術に關することを書くには書くが、思ひ出すままを獨り言のやうにしやべるのだから、標準も範圍も極まつてゐない。先達正宗白鳥氏に會つたら、「君は來年から改造へ時評を書くのかね、時評を書くといろいろの人から議論を吹つ掛けられる、すると默つてゐる譯にも行かないので、つい應酬する、いやいや

ながら自然文壇に活躍をする形になつて、うるさいもんだよ」と云つて居られたが、成る程さうなつたら大變だ。私なんかにはとても遣り切れたものではない。そこで私は成るべく當り障りがないやうにして行くが、萬一誰かが喰つてかかつても相手になることは御免を蒙る。先鋒であらうが後鋒であらうが、此方の都合で一切默殺することにするから、それは豫め御諒承を願ひたい。——と、先づ斯う豫防線を張つて置いて、さて何から書き出したものか、實は店開きに何か纏まつた問題を捕へて花花しく打つて出たいのだが、新春早早、連日の屠蘇機嫌で頭が悪い。今月のところはブラリブラリと散歩をするやうな氣分で參らう。

○

いつたい私は近頃悪い癖がついて、自分が創作するにしても他人のものを讀むにしても、うそのことでないと面白くない。事實をそのまま材料にしたものや、さうでなくても寫實的なものは、書く氣にもならないし讀む氣にもならない。私が毎月の雜誌に現はれる現代諸家のものを讀まうとしないのは、そのせゐも餘程あると思ふ。ちよつと最初の五六行へ眼を通して見て、「ハハア自分の身邊のことを書いてゐるな」と氣が付くと、もうそれつきり直ぐイヤになる。個人的乃至は樂屋的興味のために見ることはあるが、さうでなく、身邊雜事や作家の經驗をもとにしたもので、イヤ氣にならずに、どんどん引き摺つて行かれるやうな作品はめつたにない。數年前に讀んだ永井荷風氏の「雨瀟瀟」、近松秋江氏の「黑髮」、——まあ此の二つが記憶に殘つてゐるくらゐなものだ。斯う云ふと何か、小說はうその話に限る、無いことを有るやうにでつち上げたものでなければならぬ、と、そんな主義でも抱いてゐるやうに取られさうだが、決してさう云ふ次第ではない。事實小說でもいゝものはいいに違ひないが、ただ近年の私の趣味が、素直なものよりもヒネクレたもの、無邪氣なものよりも有邪氣なもの出來るだけ細工のかかつた入り組んだものを好くやうになつた。此れは或ひは良くない趣味だと思ふけれども、さうなつて來た以上仕方がないから、まあ當分は此の傾向で進んで行かう。

そこで私は成る可く現代に緣の遠い題材のものを讀むことになる。歷史小說か、荒唐無稽な物語か、寫實物でも半世紀前の作品か、或ひは現代を扱つてゐても日本の社會とは非常にかけ離れた西洋のものなら、矢張り一種の空想の世界として見る氣になれる。で、去年は大分歷史小說を漁つて見たが、日本の物では中里介山氏の「大菩薩峠」、西洋の物ではヂョウヂ・ムーアの Heloise and Abelard" 及び "Ulick and Soracha"（此れは二つともどう發音するのだか、前のは「エロイーズとアベラール」、後のは「ユリクとソラハ」であらうか。）スタンダールの "The Charterhouse of Parma" "The Abbess of Castro" その他一二篇、——先づこんな物にいろいろの意味で興味を感じた。介山氏の「大菩薩峠」は今でこそ大變な評判になつたが、私の知つ

て居る限りで最も早くあの作品に眼を着けたのは泉鏡花氏であつた。「あれはただの通俗小說ではありませんよ、なかなか趣向が變つてゐます、あいつは是非讀んで御覽なさい。」——鏡花氏がさう云つて激賞したのは、たしか大正八九年頃、同氏と里見君と私の三人で、或る晩赤坂の待合で飲んだ時のことだつたと思ふ。その時泉氏は荒筋を話して下すつたが、それきり私は忘れてしまつて、大毎の夕刊に載り出してから、改めて前の方を通讀して見た。尤も一氣に讀んだのではなく、一度は奈良ホテルに滯在中風邪を引いて臥床した時に、ふと思ひ出して第二卷と四卷とを取り寄せて讀み、二度目は自宅で、此れも病中に殘りの部分を讀んだのだが、此の本のお蔭で私は少からず無聊を慰められたことを介山氏に感謝しなければならない。そして「たゞの通俗小說でない」と云ふ泉氏のお說に、私は勿論同感である。第一文章に氣品がある。「何何であります」と云ふやうな書き方に、幾分廻りくどいところがあり、筆が少少粗いのを憾みとするが、そこに却つておつとりとした優しみがあつて、惡達者なのより幾らいいか知れない。介山氏の「大菩薩峠」一と度出づるや、此れを眞似した澤正式劍戟趣味の作品が續續現はれ、此の頃はまた大衆文藝と云ふやうな物が流行り出したが、此れだけの氣品のある文章はその後一つとして見當らない。思ふに「大菩薩峠」がただの通俗小說ではない所以は、實に此の氣品にあるのである。筋がどうの、性格がどうのと云ふことは、寧ろ第二の問題である。聞くところに依ると、介山氏は模倣者が澤山現はれたのをヒドク氣に病んで居られるさうだが、その點に於いては介山氏たるもの安じて可なりだ。

それに此の作は決してチヤンチヤンバラバラの劍戟趣味の小說ではない。チヤンチヤンバラバラはほんの上つ面に過ぎないので、底を流れてゐるものは机龍之介を中心とする氷のやうな冷やかさ、骨に沁むやうな寒さである。嘗て此の小說を菊池寛氏が戲曲にすると云ふやうな噂があつた時、私は此れは菊池君の世界ではなくて、寧ろ佐藤春夫の世界だ、春夫に戲曲を書く腕があればあの中の一と場面、——たとへば古市の備前屋でお豐が自殺するところ、或ひは龍之介が船大工與兵衞の小屋に匿まはれてゐるやうなところ——を一と幕物に書き直したら、或ひは此の作を貫いてゐるペール・パッションが出るであらう。私が書いても温か過ぎる、矢張り春夫でなければいけない、と、さう思つたくらゐであつた。

作中に出る人物は多くタイプが描かれてゐるのみで、性格迄は掘り下げてない。就中女性の取り扱ひは不得手と見えて、お豐お君お雪など皆同じやうな感じを與へる。けれども不思議に机龍之介の性格だけはほんたうに生きて動いてゐる。龍之介が出て來る場面は必ず光彩陸離としてゐる。古來の大長篇小說は「水滸傳」にせよ「ミゼラブル」にせよ、人間を多く出すと云ふことが主になつて、性格などの書けてゐるものは一つもないが、興味は外にあるのであるから、それで差支へはない譯である。が、兎にも角にも主人公の龍之介があれだけ書け

てゐれば、ああ云ふ長篇小說としては、その他の人物はタイプだけで結構である。私かに思ふに机龍之介の性格の或るものは、作者介山氏自身の中に潜んでゐるのではなからうか。別に內面描寫などがしてある譯ではないのだが、ただぽうつと場面へ出現するだけで、鬼氣迫るやうな感じを與へる。それがくだくだしい描寫や說明がないだけに、一層生きてゐるやうに思へる。

あの小說は第一卷が一番面白く、先へ行く程詰まらなくなると云ふのが一般の世評のやうだが、私は必ずしもさうは思はない。初めの方は事件がどんどん展開するから、見やうに依つては面白いけれども、何分筆が非常に粗い。京都から大和紀州地方を舞臺にしたあたり、——特に「淸姫の帶」のくだりなど、折角いい背景を使ひながら、もう少し纖細に書いてくれたらばと、聊か惜しいやうな氣がする。しかし此の時分は作者も若かつたのだらうから仕方がないとして、二卷三卷と進むにつれて、段段筆がこなれて來てゐる。大每へ載せ出してからは際立つてよくなつた。同時に事件小說から氣分小說へ移つて來たので、此れが或ひは一般受けのしない所以であつたかも知れない。それに龍之介が引つ込んでしまふと、全くだれて、ただ徒らにだらだらとした場面の多いには參らせられた。（つづく）

明治文學研究資料展覧會

▼會期　昭和二年自一月十九日至一月廿五日七日間

▼會場　銀座松屋呉服店樓上

▼出品目錄

第一部　戯作、飜譯小說、政治小說、小說劇、詩

第二部　雜誌

第三部　初期雜著（隨筆、狂詩、狂文、狂歌、繁昌物その他）政治、經濟、哲學、文學批評

第四部　社會主義文獻、虛無黨小說、南蠻文獻、その他

今回は第一回の試みとして明治初年から日淸戰爭前後までの出版物を出陳しました。但し第二部と第四部は明治大正にまで跨つて集めてあります。外に贊助者出品の珍らしい文化資料、原稿、寫眞、錦繪その他あり　なほ當日は寫眞版入の說明付詳細目錄、繪葉書も調製して御希望の方に實費でお頒ちします。五百部の限定版ですからなるべく早く申こんで下さい。

▼入場無料

主催　愛書趣味社

贊助　青山督太郎　木村毅　坪內逍遙　吉野作造　癈姓外骨　齋藤昌三　柳田泉　內田魯庵　尾佐竹猛

後援　改造社

資本金六千九拾壹萬圓

王子製紙株式會社

我ガ社ハ明治五年ノ創立（本邦最古）ニシテ總テノ洋紙製造ニ於テ最モ豊富ナル經驗ト熟練ヲ有ス

本社 東京府北豊島郡王子町
營業所 東京市麹町區永樂町一丁目一番地（郵船ビルディング内）

東京府北豊島郡王子町 王子工場
同町大字下十條 十條工場
東京府南葛飾郡龜戸町 龜戸工場
大阪市北區善源寺町 都島工場
同市東淀川區北長柄町 淀川工場
静岡縣庵原郡富士川町 岩淵工場
富山縣伏木町 伏木工場
福岡縣小倉市篠崎 小倉工場
北海道勇拂郡苫小牧 苫小牧工場
朝鮮新義州 朝鮮工場
樺太大泊町 大泊工場
樺太豊原町 豊原工場
樺太野田 野田工場

主ナル製品

一、上等印刷紙
一、筆記用紙及書學用紙
一、其他諸紙
一、諸包紙及模造紙
一、新聞及雑誌用紙
一、製紙原料パルプ
一、普通印刷紙
一、卷煙草用紙

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。

煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が茲に面白い一つの禁煙方法がある。『カロット』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、適量の朝鮮人參の精氣を含んで居るから、根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き精凉な甘味は輕い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない。殊に口中の惡臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但しこれは眞劍に煙草をやめよぅとする人でなければお勸め出來ない何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗してこの效力に驚いてゐるのでもわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病、消化不良その他禁煙したら屹度治り肥つて來ると感じてゐる方は是非之のカロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

（送料内地十八錢　臺朝樺四十五錢）

代金引換内地卅錢　臺朝樺五十五錢

發賣元　東京大森不入斗八二八　榮川堂

代理店　東京市京橋區瀧山町十三　振替東京五二九壹壹　天下堂

海に生くる人々

—葉山嘉樹著—

M・P生

同じ著者の「淫賣婦」といふのを讀んで、僕もそのとき感心させられた一人だつた。それがこの作者のものに接した最初の印象である。だから、僕には、この作者は好いものを書く人だといふラクインが押さつてる譯だ。それが僕をしてこの「海に生くる人々」といふ長編を愛讀させる大きな一つの機緣となつて居る。つまり、吾々が一つの文學を創作し、或はそれを愛讀するのは、夏は氷が欲しくなり、冬は暖爐が慕はしくなる様に、吾吾の心の渇望を、それに依つて滿したいからである。そして、一つの文學を愛讀する心理は、いふまでもなく、それが吾々の心の渇望を滿してくれるといふ事實に起因する。

○今、葉山氏のこの「海に生くる人々」を讀んで見ると、何かしら、斯うした吾々の心の渇ゑを滿してくれる。何かしら、吾々の求めて居たものにブッ突かる。

固より、どんな作者でも、それが生活の內部に、實在として內在してゐない力を表現するとは出來ない。それが內在する力であつて、しかもそれが、生活に取つて非常に大切な力であるにも拘らず、吾吾の日常生活において、著しくそれを缺乏してゐる時、作者は、その藝術の世界において、その必然性を示してくれる。本來、內在する勢力において、新しい力とか、古い力とかいふものが、區別されてある筈はないのであるが、何かしら、吾々が必然の力を求めて居る時、それが吾々の感覺で味はへる様に表現されるから、吾々はそこに或る新しさを感じる、生命の新しい力を感じる。そしてそこに、何かしら「生の快感」を覺えるのである。

葉山氏の「海に生くる人々」が、斯うした意味で、ある新しい力を現代の生活から呼び起すものであるとを僕は感じたのである。

僕などの様に、船乘の生活に經驗の無い者に取つては、船乘の生活の表面の事實そのものだけでもすでに新しいものである。勿論、この作者が、自己の海上生活の體驗を、斯くの如く客觀的な態度で描出しようとした興味の焦點は、水夫の生活の表面的事實に在るのではなく、現代資本主義社會制度の下における、一個のプロレタリアとしての水夫の生活の內面的描寫に在る。そして、斯かる作者の意欲は、その個々の人物に對する極めて自由な觀照的態度と、その犀利な心理的泒察と、その必然的な描寫的筆致とをもつて、讀者に快感を與へるまでに滿足する事に成功してゐる。

○斯うした長編物の常として間々退屈を感じたり、重複の煩はしさがあつたりするのは止むを得ない事だが、之れには、事件を餘りに多く、忠實に盛り過ぎて、却つて藝術的效果を薄弱にした所が無いではないが、先づその弊は少ないと謂へやう。殊に、無產派の藝術といふやうな、或る主義主張の下に製作される藝術に於ては、その「主義」に拘泥し、或はその主張を忠實に宣傳する事に性急な爲に、人物の觀察に偏見多く「必然」を外れたがる傾きのあるものだが、この作においては、さうした嫌ひが目立たぬのは、何よりもうれしい事であつた。

○筆觸も、斯うした思想味がかつたものとしては、勢ひ味澁になりたがるものだが、これはそんなに味澁の方ではない。時々、何をいつてるのやら分らない様なとこにブッ突かるけれと、いはゆる「新しい傾向」のものとしては、サラサラと、キビ〱として居る方である。

活字をルビ付にしたのは、廣く一般大衆や文字上のプロレタリアに讀ませたいといふ心根が思ひやられて、これは「營利的」といふ問題をはなれて、好い事だと思つた。況んや無產階級の藝術と稱し、或は社會主義の文學と呼ぶ所の作品にはおいてをやだ。然らば、用語、文章においても、極めて平易に、通俗的に書くべきである。之れではまだ少し難解ではないかしら。(東京日日批評定價壹圓五拾錢送料十八錢改造社發行

私法學序説

—廣濱嘉雄著—

本書には民法總論、わが民法總則編の通則性、契約の自由、私法の妥當、私法學の對象と方法の五編の論文を收めたものである、從來の法律論が「法」あつて「人」が從屬した觀を呈したのが本書においては正にトレミイの天動說を破つたコペルニカスの地動說の如く生々しき「人」を中心にした法律論である。新らしき倫理觀念が舊き倫理觀念といかに本書のうちに融合調和して法的理解を生んで居るか私法を研學するものに本書は實に親切なる指導書でありよき研究の道連れである。(菊判四四一頁三圓送料廿二錢改造社發行)



保瀬の家

正宗白鳥

人

保瀬健一(六十五歳)
長男久(四十餘歳)
妻みや子(四十歳くらゐ)
次男勉(三十五歳)
妻くら子(二十歳くらゐ)
三男直(三十餘歳)
四男四郎(三十未滿)
妻ちは子(二十五歳くらゐ)
塚原萬助(五十くらゐ)
番人源七(四十くらゐ)
おしま(三十餘歳)
乞食ある男
ある女

時

晩春

(一)ノ一

保瀬健一の別莊の庭園の四阿。

健一の三男直(三十餘歳)が其處に腰を掛けて、所在なさゝうに煙草を吸つてゐる。瀟洒たる衣服を身につけてゐるが、袴は着けないで、後から出て來る兄弟達にくらべると稍々ダラシのない樣をしてゐる。

長男久の妻みや子(四十近い年齡の、肉附の豐かな女)が、直の方を目差して出て來る。

直は無關心で迎へる。

みや子 (ニコ〳〵して近づいて)あなたがいつの間にか影を隱しておしまひになつたから、多分こんな所で晝寢でもしてゐらつしやるんだらうと思つてましたのよ。……廣間では皆さんのお話がはずんで、大變に賑かなんです。

直 さうですか。(氣のなさゝうに答へて)お察しの通り、晝寢でもしたいんですが、今日は落着いて寢てゐられる部屋は、何處にも見つからないし、……さうかと云つて、眠氣醒ましに裏山の方へ登るには大儀だし、さつきから、半分うたゝ寢をしてるつもりで、かうし

てるんです。

みや子　氣樂ねえ、あなたは。あなたは（身心の疲勞してゐるやうな態度で腰をおろして）あなたは、今夜は此方にお泊りになるんでしたね。

直　いや、歸りませう。みんなと同じ汽車で歸ることにしませう。獨りものだから後へ殘つて泊つて行つたつていゝんですが、親爺に取つゝかまつて、愚痴の聞かされ役にされちやたまりませんからね。

みや子　でも、あなただけでも、二三日くらゐは泊つてゐてお上げにならなければ、お父さまがお淋しくお思ひになるでせう。今日こんなに賑かだつたあとだから尚更。

直　しかし、親爺の慰め役を僕一人に押付けるのは、少しひど過ぎますね。（生欠伸を洩らしながら）親爺が獨り者で、僕が獨り者だから、話が合つていゝなんて思はれちや、割に合ひませんよ。

みや子　誰れもそんなこと思つてやしなでせう。（輕く云つて）……それに、あなたの獨身は、外の人の獨身とはよつぽど譯が違ふんですからね。此間くら子さんから、あなたの最近の御消息を聞いて感心しちやつたの。若いうちはあなたのやうにして日を暮した方が面白いんですわね。

直　面白いものですか。（そんな話はしたくなささうに云つて、相手の顏を見上げて）姉さんが僕の後を追つてこんな所へ來て、話を持掛けるのは珍らしいことだが、皆んなの代表となつて僕に何か言聽かせようとするんですか。……今日は親爺の誕生日だから、この機會に僕を取つちめて、僕の身體を縛りつけようと企んでるんぢやないですか。

みや子　あなたを取つちめる？（訝しげに云つて）變なことを仰有るのね。あなたが罪人でわたし達がお巡りさんの役目を勤めるんですか。變ですわね。

直　ぢや、姉さんは、僕に用事があつて此處へ來たんぢやありませんね。……さうですか。……僕は、兄貴や姉さん達が僕に相應した婦人を見つけて結婚させるやうに計劃してるんぢやないかと思つてゐたんですよ（戯談らしく云ふ）

みや子　だつて、わたし達に勸められておとなしく結婚するやうなあなたぢやないんですもの。

直（戯談らしく）なあに、腹の中では世間並に結婚したくつて溜らないのかも知れませんよ。上べは超然とした風をしてゐてもね。

みや子　うまいことを云つてゐらつしやる。（笑つて）でも、あなたが嘘にでもそんなことを仰有るやうになつたのは不思議ですね。

直　いや、不思議と云へば、あなたが態つこさうに僕の所へ來てこんな話をするのが不思議ですよ。義姉さんといふ義姉さんのすべてが、僕を除け者にしてゐたんぢやありませんか。

みや子　いゝ加減なことを仰有い。……外の方はどうだか知りませんが、わたしは直さんを除け者になんかした覺えはありませんよ。この機會にそれだけはよく云つて置きますわ。（眞面目に云ふ）

直　ハヽヽ。そんなに六ケしく氣に掛けなくつたつていゝんです。僕は除け者にされるのを不平に思つちやゐないんですから。（ふと快活に云つて、遠くを見やつて）まあ、山の方を見て御覽なさい。晩春の景色はいゝぢやありませんか。僕は家庭がないせいか、若葉の山

を見てると、次第に感傷的な氣持になりますよ。

みや子　(相手の見てゐる方を見て) 本當に今日はいゝお天氣ですわね。

直　風がなくて溫か過ぎて、何だか眠くなりさうですね。……姉さんも眠つたさうな目をしてるぢやありませんか。

みや子　わたし、昨夕はまんぞくに寢てゐないんですもの。それに、あなたと顏を見合つてゐると、催眠術でも掛けられてるやうに、ひとりでに眠くなつて來ますわ。

直　ぢや、芝生の上へでもベンチの上へでも横になつてお休みなさい。僕が此處で見張りをしてゐますから、安心して眠るといゝんです。

みや子　まさか。……(座を立つて) わたしは廣間へ歸りませうよ。默つて出て來たのだから。……あなたもあちらへいらしつちやいかが?

直　後からまゐりますよ。

みや子出て行く。

直は、無關心で見送つて、煙草を一本吸ふと、別莊番源七 (四十歲くらゐ) が、咥へ煙管で、ノソ〱入つて來て、直を見つけると、目顏を曇らせて、四阿へ近づく。直は、無關心で迎へる。

直　今日はいゝお天氣だね。

源七　左樣で御座います。昨夕の空模樣では、今日は危かしいやうに思はれましたが、日本晴れに晴れて、皆樣も大助かりで御座いましたな。

直　降られちや、折角の誕生日も臺無しだつたのだよ。お目出度い日だね。……お前も此間うちは掃除に忙しかつたらうね。暫く晴れも來ないで打やつてたんだから。

源七　お掃除は毎日ボツ〱やつてますから、何でも御座いませんが、……わたくしは今日は大變に心配いたしました。あなた樣には申上げても御機嫌を惡く遊ばさないから申上げてもよろしう御座いますが、昨夕、その四阿に夫婦連れの乞食が寢て居りました。

直　このベンチの上にか (不快な目で腰掛けを見る)

源七　ハイ。二人とも惡い病氣を持つてゐますのでせうか。眉毛が拔けて、頭の髮も薄くなつて、見ても氣色の惡いやうな顏付をして居りました。

直　なぜそんな奴が庭の中へ入り込んだのだらう?

源七　何處にも泊めて呉れる所がなかつたので御座いませうが、二人ともシヤア〱として、わたくしが朝早く氣がついて、追拂はふとすると、出て行くから飯を喰はして呉れと云つて、たゞぢや動きませんのです。

直　それで、飯を喰はしてやつたのか。

源七　爲方が御座いません。……四國では、さういつたお遍路さんが幾組も八十八ヶ所詣りをして居りますが、お大師樣の御利益願ひに皆んなが、御報謝をいたします。

直　それで、お前も慈善事業をやつたのだね。(夢見るやうに) 遍路笠を被つた巡禮姿を空想してると、おれには風流に思はれるが、さういふカツタイ面を、實際に目の前へ見せつけられちや、さぞいやな

ものだらうな。

源七　今朝寢起きにそいつを見せつけられた時の氣味の惡さつたら御座いませんでした。……今日は大旦那樣の御誕生日で、お祝ひがあるのだから、そのお祝ひの施行のつもりだと云つて、御飯を惠んでやりましたが、その乞食夫婦の夫婦仲のよろしいことゝ云つたら、私は見てゐて感心いたしました。

直　さうかね。（感心したやうに云つて）しかし、お前は何だつて、そんないやな話をおれに話すのだ？

源七　御誕生日の話を聞かせて惠んでやつた後で、氣に掛かることが御座いました。それで心配して居りましたが、もう大丈夫でせう。

直　何のことだ？

源七　その二人が、今日のお祝ひの御馳走のお餘りを頂きにまゐりやしないかと存じまして。……女の乞食が、歸りがけに、身内が寄つて集つて誕生日を祝ふやうな人間が、世の中にはあるのか、さう人間にあやかりたいものだと申しますと、男の乞食が、おれには、一年の内で誕生日が一番の惡日だ。こんな日が世の中になければよかつたのだと申しました。それからおれの誕生日は、四月の三十日だが、今日は何日になるのか。昨夕は滿月のやうだつたが、新の曆の日取りは月では分らないと申しますから、わたくしは、うつかり、今日は四月の三十日だと、云はずともいゝ餘計なことを云ひました。さうしますと、乞食夫婦はビックリしまして、それは不思議な御緣だ。この御別莊の旦那とおれと、同じ月同じ日に生れたのかと、いやなことを云つて出て行きました。

直　成程、それは不思議な御緣だ。しかし、その乞食はいつまでもこの土地に逗留してはゐまいよ。二人は何處へ行くか、行先をお前に話さなかつたのか。

源七　身延のお山へまゐるつもりだと申してゐました。……氣になつて、後で下町へ行つた時に大勢に、訊ねましたが、今日そんな人間は通つてゐなかつたと云ひますので、わたくしは氣掛りでならなかつたので御座います。裏山にでも隱れてゐて、お祝ひの御馳走の出來た時分に、勝手口に、あの顏を二つ並べて覗きやしないかと存じまして。

直　源七もよつぽど苦勞性なんだね（さう云つて笑ひながらも、氣になるらしく）兎に角、そんな奴の寢てゐた所に腰を掛けてるのは不愉快だ。おれも彼方へ行かう。（立上つて）このベンチは汚れてるぢやないか。おれはさうと知らないで、こんな所で休んでゐたのは馬鹿だつた。黴菌にでも取つゝかれちやかなはない。（次第に神經を惱ましながら、衣服をふるつたりして）後でよく拭いといて與れ。

彼れが奥へ入つて行くと、他の一方から源七の妻おしま（三十餘歳）が、夫を搜し〳〵入つて來る。

おしま　こんな所へ何しに來てるだね。まだあの乞食のことが氣になるのかい。お前もよつぽど苦勞性なんだね。

源七　直樣もさう仰有つた。おれはどうもあの二人がまたやつて來やしないかと思はれていけないよ。二人がお屋敷の何處かへ隱れてやしないかと思はれてならないよ。

おしま　いやなことだ。お前が生じつか憐れみを掛けて御飯を食はせ

たり、いたはつたりするからいけないんだ。わたしの云つたやうにお巡りさんに云つて追つぽり出しやよかつたのに。

源七（妻に叱られて恐縮しながら）本當にさうした方がよかつた。あの時、おれは一生に二度や三度の善根は積んどきたいと思つたもんだから。

おしま　善根が笑はせらあ。今から老人見たいなことしてどうするだ。

源七　ハヽヽ。おれ達には善根も慈善も柄にないことだな。……今直樣がこのベンチは汚れとるからよく拭いとけと仰有つたよ。また誰れか此處へ來なさるかも知れないから、お前は雑巾を持つて來てよく拭いて置け。

おしま　あんな乞食の寢てた所を掃除するなんていやなことだ。お前はまた、何だつて直樣なんかにあのカッタイ乞食のことを云つたのだな。餘計なこつちやないか。そんなことよりも、先つきのやうないゝ機會に、肝心なお給金の値上のことでも賴めばいゝのに。氣が利かないたらありやしない。默つとりや、百年立つたつて、上げて呉りやしないよ。

源七　そりや直樣にお賴み申すこつちやないや。

おしま　ぢや、誰れにお賴み申さうと思つてるんだい。奥樣を持つた人に、お給金の値上話を持出したつて、お取上げになりやしないよ。此方の若旦那の御連中は、みんな鹿爪らしい顔をしてゐても、太郎も次郎も三郎も、みんな奥樣次第なんだから、駄目なのさ。それで、奥樣の御連中は、氣を揃へて吝くつて細かくつて、お話になつたもんぢやない。……直樣は御獨身だから、譯を云つてうまく持掛けりや、案外此方の話に乘つて呉れるかも知れないよ。……それに今日はお祝ひ日だ。此間から毎日わたしが云つてるのに、お前はまだ身に染みて感じないのだね。今日のやうな日に、誰れかを取摑まへて切出さなければ、またと再び、こんないゝ機會があるものぢやない。

源七　さう八釜しく云ふなよ。お祝ひの最中にそんな話が言出されるものか。今夜どなたかお泊りになつたら、お暇な時を見計つて、おれが上手にお願ひすることにしよう。默つて見てゐろ。

おしま　危いもんだな。（奥を顧みて）あゝ勉樣御夫婦がいらつしやつた。わたしはあちらへ行つてゐよう。あの奥樣はギス〳〵してゐで、わたし大嫌ひさ。

おしまは、遙かに會釋して出て行く。次男勉（三十五歳）紳士然たる扮裝して、妻のくら子（三十歳未滿）と並んで、何か話しながら出て來る。

勉は、行きかける源七を呼留めて、

勉　煙草を忘れて來たから。持つて來て呉れ。マッチも一しよに。それから冷水を一杯汲んで貰ひたいよ。汲立ての新しい奴を直ぐに持つて來て呉れないか。

源七　ハイ。（足早に出て行く）

夫婦はベンチに腰をおろす。

くら子　あたし、二三日此方へ泊つて行かうと思ふのよ。あなたもそのつもりでゐて下さらなきやいけないわ。

勉　だつて、お前はさつきまでは、今日のうちに歸りたがつてゐたち

やないか。

くら子　でも、あたしは姉さんやさは子さんなんかと、同じ汽車で歸りたかないんですもの。

勉　どうせ二時間ばかりの道だ。誰れと一しよだつて、そのくらゐな辛抱は出來さうなものだ。

くら子　だつて、たとへ一時間でも半時間でも、無意味な辛抱をして神經を痛めるのは愚かなことぢやありませんか。あたしは、さは子さんが御亭主に對する暴慢な態度を見るに忍びないの。

勉　四郎もあれで滿足してるんだから結構だよ。あの夫婦はおれ達よりも一時代若いんだね。

くら子　あたしのことをくら姉ちやんなんて、甘つたれた聲で云はれるだけでも、あたし溜らないの。

勉　情味があつていゝぢやないか。

くら子　あなたはさは子さんのことゝ云ふと、何時も贔負目に見るのね（目顏に角を立てて）あの甘つたれた聲に情味なんかあるものですか。あれはあたしを馬鹿にした聲なんだわ。……さつきピアノを彈いた時の御自慢らしい樣子を見て御覧なさい。お前達には西洋音樂は分るまいと云つた顏付をして、あたしの方を見てたぢやありませんか。それにあなたはいゝ氣になつて、あんなまづいピアノに感心してゐたのね。先日新井さんに訊くと、さは子さんのピアノなんか、全くなつてゐないんですつて。そんな者に感心するあなたが、よつぽどお目出たいのよ。

勉　どうせ素人の餘興なんだから、さう六ケしく考へなくつたつていゝだらう。（妻の目を避けるやうに山の方を見る）

くら子　そのくせ、隨分打算的なのよ。兄さんや姉さんには、いやにおべつかつかつてるの。（夫の目の前へ進み出て）だから、皆んなを返して、あたし達だけ後へ殘つてゐようぢやありませんか。

勉　しかし、親爺の愚痴を聞かされるのは閉口だよ。

くら子　お父さんの愚痴くらゐ何でもないわ。さは子さんの生意氣や姉さんの常識自慢を見せつけられることを思へば。

そこへ、源七が吩咐けられた物と、雜巾とを持つて入つて來る。勉はコップを取つて冷水を一息に飲干して、煙草に火を點ける。源七は雜巾で圓卓やベンチを拭ふ。くら子は話の邪魔者として煩さうに源七の所行を見てゐる。

勉　この頃は釣魚は出來ないんだらうね。

源七　さあ、どうで御座いますか。

くら子　源七は殺生は嫌ひだと何時か云つたことがあつたのね。釣魚なんかしたことがないんだらう。

源七　ハイ。わたくしは海の漁も山の獵もしたことが御座いません。……若旦那は殺生がお好きでゐらつしやいますか。

勉　二三日此方に泊るやうだつたら、退屈さましに釣魚でもしようかと、今ふつと思ひついたゞけなんだ。

源七　あなた樣がお泊になるので御座いますか。

くら子　あたし達は暫く此方に來たことがなかつたのだから、今度は一日二日泊つて行くことに極めてるのよ。

源七　それはお珍らしう御座いますね。

勉（向うを見て）みんなが庭へ下りて來るやうだよ。

くら子　あたし、あなたと打合せときたいことがあつたのに。（源七に向つて）大旦那様も此處へいらつしやるんだらうから、お前は肱掛椅子を此處へ持つてお出でよ。

源七　ハイ（出て行く）

くら子　老婢とおすみには、お父さんのお世話をさせなきやならないんだから爲方がないけれど、外の人はみんな東京へ歸らせるやうに話をして下さいね。本當にお父さんの傍にゐたい人は一人もないんだから、あたし達が後を引受けたと云へば、みんな喜んで歸つてよ。姉さんは、御自分の子供をあたしやさは子さんに接近させちや教育のためによくないと思つてるんだから、子供達が此方で遊んで行きたがつても、連れて歸りますよ。舊弊な型を有難がつてる大變な教育家なんだから恐れ入つちまふわ。（夫に向つて口早にさう云つた後で、奥の方へ二三歩寄つて）皆さん此方へいらつしやいな（と快活に云つて手招きする）

（幕）

（一）ノ二

（一）と同じい庭園の一隅。山に添つて樹木が茂つてゐる。（一）の四阿は、遠くに一端を現はしてゐる。

直が、木蔭に置かれた肱掛椅子に身を投げかけて午睡をしてゐる。

そこへ、悪疾の乞食姿の男女（同行二人と記した古びた遍路笠を被り、風呂敷包を背負つて、草鞋脚絆の旅仕度をしてゐる。杖は自然木を用ひてゐるが、あたりを憚つてゐるやうな態度で入つて來る。

その男　おらがあしこへ出て行つたら、みんなが吃驚するだらうか。おら、先つき谷川を越える時に、水鏡で自分の顔を映して見たのだが、鬼のやうにも亡者のやうにも見えなかつたぜ。

その女　さうだとも。……人間は人間に違ひないのさ。……お前だつて、年中一しよに暮してゐても、わたしの顔に愛想を盡かしやしないだらうね。

その男　馬鹿なこと云ふもんぢやない。長い間苦勞を分合つて來た仲ぢやないか。

その女　わたしはガラス窓の側を通つても、自分の顏が映りやしないかと思はれて、身震ひすることがあるよ。

その男　おれもお前も、長い間鏡といふものを見たことがないのだな。（と、感じたやうに云つて、ふと氣持を變へて）イヤ、おれも詰らないことを云出したものだ。

直が夢に魘されたやうな聲を出す。男女がその聲に氣付いて、直の方を見る。

その男　こんな所に人が眠てゐる。このお屋敷の方だらうな。

その女　こんな御立派な廣いお家を持つてゐながら、わざ／＼外へ出て窮屈さうに午睡なんかしたりして。酔興な人ぢやないかね。

その男　この人は恐ろしい夢でも見てゐるんだね。大變に魘されてゐる。

その女　起して上げようか。

その男　まあ打遣つて置け。おれ達がだし拔けに聲を掛けたら、ビックリするだらう（四阿の方を見て）見ろ、皆樣があしこへお出掛けになつとる。丁度いゝよ。

二人が行きかけると、直はふと目を醒まして、異樣な二人を見るそして、今まで見續けてゐた惡夢がまだ醒めきらないやうな氣持で、默つて二人の後姿を見詰めてゐたが、やがて、夢を振拂つて椅子を離れる。

直　オイ待て。何處へ行くのだ。

二人は足を留める。直はその方へ近づく。

その男　今日は大旦那樣の御誕生日のお祝ひをなさると承りましたからわたくしどももお惠みに預りたいと存じまして（恭しく會釋しながら、上目で直を見る）

直（相手の目使ひに恐れを感じながら）お前達は昨夕ここの四阿に寢てゐたと云ふぢやないか。……まだこの邊に愚圖々々してゐたのか。

その男　先を急ぐ譯ぢや御座いませんから、この裏山で一日草臥休めをして居まりした。この裏山にはわたくしどもの休息に誂へ向きの洞穴が御座いますが、あゝいふ所が昨日見つかつてゐたなら、此方樣の四阿なぞを拜借いたさなくつてもよろしいので御座いました。

（シャア／＼した態度で云ふ）

直　他所の庭へ無斷で入つちやいけないぢやないか。

その男　わたくしどもを泊めて與れる家が御座いませんので。

直　……これから身延の方へ行くんださうだな。それなら汽車に乘つたらいゝぢやないか。……汽車賃がないのか。

その女　使ひ殘しの金がない譯ぢや御座いませんが、汽車にはなかかな乘せて貰えません。（哀れつぽく云ふ）

その男　わたくしは強いて身延へお詣りしたいとは思つてゐないんで御座います。遙々身延まで足を運んだつて、變つた御利益があらうとは思はれませんが、家内が寢言にまで身延々々と申しますので、そちらを當てに出てまゐりました。

直　……使ひ殘りの金を持つてるのなら、お祝ひのお餘りなんかをせがみに來なくつてもいゝぢやないか。

その女　お仕合せな此方の大旦那樣の御運にあやからせて頂きたいんで御座います。

直（男の方を見て）今日がお前の誕生日ださうだね。

その男　左樣です。……わたくしと同じ日にこの世に生れた此方の御主人のお顏を拜ませて頂きたいと存じます。

直　だつて、今朝お前に會つた別莊番の話によると、お前は今日の誕生日を呪つてたと云ふぢやないか。……おれは今いやな夢から醒めたと思ふと、もつといやな者を見せつけられた。早く出て行つて與れ。（手眞似で押やらうとする）

その男（冷笑して）門前拂ひを喰はされつけてるわたくしだ。あなたなんぞに怒鳴られたくらゐでは、ビクともいたしませんよ。

その女　門番の人が親切で、溫い御飯を惠んで下すつたのだから、御主人樣はよつぽど情け深い方に違ひないと思つてゐました。（男に

向つて出て行けと仰有るものを。無理に入つて行く譯には行くまいよ。此間の晩のやうに突飛ばされない前に出て行くことにしよう。

その男　おらは、誕生日のお祝ひの様子を、外からでもちよつと覗いて見たいと思つてたのに。

　心殘りのしてゐるらしく四阿の方を見やると、女はその手を執つて引張るやうにして出て行く。

その男　おら、もう歩くのが大儀になつた。またあの洞穴へ行つて、居られるだけ居ることにしよう。

その女　わたしは一足でも先きに行かなきや氣が濟まないよ。

その男　おらには先きも後もありやしない。

　二人の姿は見えなくなつたが、かういふ話聲だけが聞える。

　直はその話聲に耳を留めてゐると、木の間から源七が出て來る。

源七　彼奴またやつて來た（と、いまいましさうに云ふ）

直　お前は蔭で聞いてゐたのか。

源七　ハイ。あなた樣が此處にゐらつしやらなかつたら、彼奴無遠慮に、皆樣のゐらつしやる所までまゐつたかも知れません。

直　おれも餘計な邪魔をしないで、彼奴等の行きたいところまで行かせた方がよかつたかも知れないよ。さうして皆んなを脅してやりやよかつた（本心らしい口吻で云ふ）

源七　いや、そんなことになつたら、わたくしが皆樣に叱られます。

直　あの二人の夫婦仲のいゝのには呆れたよ。氣色が悪くなるよ。あんな化物見たいな顔をしてゐても、夫婦となると仲がいゝものなんだらうか。

源七　あんな顔でも毎日見てると、馴れつこになつて、何ともなくなるんぢや御座いますまいか。

直　さうさ。……その代り、どんないゝ女でも毎日見てると、馴れつこになつて、何ともなくなるんだらうね。詰りは同じことなんだね。

源七　詰りは同じことだと仰有つても、若旦那樣も、汚い女よりや奇麗な女の方がよろしう御座いませう。

直　それはさうさ。一つお前に奇麗な女を見せてやらうか。……此方に集つてる奥樣は、揃ひも揃つてお容色はあまりいゝ方ぢやないんだが、おれだけは、まだ獨身者だから、殘り者に福が授かるかも知れないぜ。

源七　若旦那樣は御兄弟中で一番の美男子でゐらつしやるから、美しい奥樣がお出來になるに違ひないと、わたくしの家内が申しとります。

直　有難いな。いやな奴に會つて胸を悪くしたあとで、さういふいゝことを聞かされると、いくらか氣が晴れるよ。……さあ、あちらへ行つて、葡萄酒でも一杯やつて、そろそろ歸り仕度に取掛らうか。

　元氣よくさう云つて行かけるところへ、みや子が入つて來る。

直　僕は此處で午睡をしてゐましたよ。もう歸る時刻なんでせう。

みや子　あなたは悠長に午睡なんかしてる場合ぢやないのよ。早くあちらへいらつしやい。重要な會議がこれからはじまるところなんです。

直　重要な會議？……そんな者があるんですか（氣輕に云つて）ぢや

行きませう(と、行きかけると)
みや子　まあ、お待ちなさい(と、引留めて)重要な會議は何だか、あなたは御存じないんでせう。
直　知りませんね。
みや子　それが意外なんですの。わたし達もちつとも氣がつかなかつたんです。……お父さんは誕生日を機會に、皆んなを此處へ集めたのは魂膽があつたんですよ。
直　成程。……今年の誕生日のお祝ひが少し大袈裟なのが、少し變だと思つてゐた。(熱心になつて)それで、姉さんは今親爺の魂膽に氣がついたんですね。
みや子　今のところ、わたしだけがいくらか察してゐますのよ。……お父樣は今度隱居の決心を極めて、今日の誕生日に家族の前でその發表をしようと思つてゐらつしやるの。
直　成程。……それで、姉さんはなぜ會議の題目を僕に豫告しようとなさるんです?
みや子　お父樣は兄弟の中で、あなたを特別に愛してゐらつしやるのです。……お父樣はあゝいふ方だから、不斷顏にも口にも現はしてゐらつしやらないけれど、直さんだけは愛してゐらつしやるに違ひありません。
直　それは僕にも腑に落ちませんね。僕は親孝行をした覺えはない筈なんだが。
みや子　いゝえ、一つだけ親孝行をしてゐらつしやるわ。それは大切なことなの。
直　何だらう?
みや子　あなたゞけが、いつまでも獨身でゐらつしやるぢやありませんか。
直　それが親不孝でなくつて却つて、親孝行になるんですかね。
みや子　お父樣はわたしをはじめ、くら子さんをもさは子さんをも、御自分の息子さんのお嫁さんを一人殘らず嫌つてゐらつしやるんですもの。
直　ハヽア。みんなが自分の女房ばかりを大事にして、一人の親を粗末にするといふんですね(得心したやうに微笑を浮べる)
みや子　それはお父樣のヒガミなんですよ。あなたはさうお思ひにならないわね。
直　そりや、久兄さんやあなたはさうぢやないでせうが……
みや子　それで、お父樣はこれから皆んなの前でどんなことを仰有るか知れないんですから、割にお父樣に愛されてるあなたは、取做し役になつて下さらなきやいけませんよ。さうしなきや、兄弟の間にどんな恐ろしい内輪もめがあるかも知れませんわ。
直　姉さんは僕を買被つてるんですね。僕にはそんな役は勤まりませんよ。……兎に角會議の席へ行つて見ませう。
みや子　今朝から皆んなが誕生日氣分でいゝ氣になつてる間に、わたしだけはお父樣のお腹の中が心配でならなかつたんです。
直は先に立つて出て行く。みや子隨いて行く　(幕)

(一)ノ三

別莊の廣間。

老主人保瀨健一（六十五歲。顏面體軀甚しく衰弱を現はしてゐる。羽織袴を着してゐる）が上座に端座し、長男久、次男勉、三男直、四男四郞、久の子供二人（十歲前後）など、及び、みや子、くら子、さは子など、それ〴〵に祝日にふさはしい服裝をして、左右に居並んでゐる。庶務掛塚原萬助も末座に控へてゐる。

健一　おれの誕生日の祝ひも目出たく濟んだ。家族が一人も殘らないで此處に集つて吳れやうとは思はなかつたのに、よく揃つて來て吳れたな。おれも仕合せだと云つていゝ。還曆の祝ひの時にはお前達のお母さんがまだ生きてゐて、此處におれと並んで坐つてゐたのだが、おれはあの後四度も五度も誕生日が祝へようとは思はなかつたよ。割合に丈夫であつたさだ子が急病で亡くなつたのに、老衰してゐたおれが、よくこの年まで生續けて來たものだと、おれは今日も獨りで不思議に思つてゐた。（目顏には何の喜びもないやうな表情で一座を見廻して）お前達はみんな丈夫さうで結構だ。みんな平和で暮らしてゐるやうで、保瀨の一族には災難の影もないやうだな。……あなたはお仕合せだと、他人もよくお世辭を云つて吳れるよ。あなたの御子息は皆んな出來がいゝと褒めて吳れる。親兄弟に迷惑を掛けるやうなヤクザ者が一人もゐないのを喜んで吳れてる者が多い。……おれが今日の日倒れても、保瀨の一家の基礎はぐらつく氣遣ひのないやうに思はれてゐる。おれは今の今此處で安心して目を瞑つてもいゝ譯だ。今から三十年前に、おれの親爺がさう云つて、さも安心したやうな顏して、おれの顏を見守りながら死んで行つたのだ。……その親爺の死に際の平和な顏が、今目の前に見えるやうだ（それを見詰めてゐるやうな顏して、暫く言葉を噤む。やがて）親爺は仕合せな人間だつたよ。さうして、自分の築上げた世を、次の時代のおれに渡して吳れた。親爺は身體は死んでも、自分の生命はそのまゝにおれに讓つたつもりだつたから、仕合せな人間だつたよ。……しかし、おれは親爺とは違ふ。親爺と同じ心持にはなれないんだ。……お前達もさう思つてゐて吳れ。（一座を見廻して）……おれは今日の誕生日を境にして隱居することに極めた。それでこの別莊に住むことに極めてるのだ。お前達はみんな一人前になつてるんだから、今後はおれを心當てにするな。親爺は今日の誕生日に息を引取つてもうこの世には生きてゐないと思つてゐて吳れ。若い者には老人は目障りだらうから、結句さうした方がお前達のためにもいゝに違ひない。今日の誕生日にお前達は親爺を生きながら埋葬したと思つてゐればいゝのだ。どうせもう五年か六年の壽命も覺束ないおれだ。お前達に別れるのに名殘りが惜しいとは思はないが、お前達の方では尙更さうだらう。老ばれのおれの顏が見られなくなるのが、お前達の不幸になる譯はないのだから。

彼れは聲に力を籠めてから云つてゐるうち、次第に疲勞を感じる。

健一（强いて微笑を洩らして）おれの演說はこれでおしまひだ。お前達の意見は贊成でも反對でも聞きたくないよ。云ひたいことは後で、お前達同士でいくらでも話合ふことにしろ。……財產の處分やその外の事務上の事は、塚原に訊いて吳れ。

彼れは、これだけを云つて、一座の人々には目も向けないで、力のない足取りで入つて行く。

一座の人々は、呆氣に取られて老人を見送つた後で、互ひに顔を見合はす。

久　おれにはお父さんの意思が分らないよ。誰れか思當つたことがあるか（聲は潜めながら嶮悪な顔して訊く）

勉　おれにも分らない。お父さんの云ふことがあんまり世間外れがしてるので、おれ達兄弟は親爺の實子ぢやないのかと思つてゐたよ。

直　親爺は氣が狂つたのぢやあるまいな。多少變な目付はしてゐたけれど。……（四郎を見て）四郎はどう思ふ。お前の新思想で判斷してどう思ふ？

四郎　僕にも分らないさ。……しかし、お父さんがあゝ思つてるのならそれでいゝぢやないか。

直　さうだ。あゝ一圖に思込んでるのなら、勸告したつて駄目だらうよ。

久　兎に角、塚原君から、實務のことについて聞かなきやなるまい。（と云つて、塚原の方を見て）君、お父さんから吩咐けられてることがあるのなら、皆んなの前で報告して呉れたまへ。

塚原（當惑した顔して、心持座を進めて）それがどうも、皆様の前では甚だ申上げにくいので御座います。大旦那様は獨りでお考へ遊ばして、處分法を明細にお書留めになつて、わたくしにお渡しになりました。それを今日皆様の前で讀上げろといふ御命令なんで御座いますが、どうも困りました。明細書は此處に持つて居りますが（懐から書付を取出して）是非皆様に御覧に入れなければならないものなら、何方かに代讀して頂きたいので御座います。

四郎　ぢや、僕が讀上げようか。その書き物を寄越したまへ。

塚原に最も接近して坐つてゐる四郎は、塚原から書付を受取つて、

四郎　僕が代讀してもいゝんですね（と、一座を見廻す）

久（不安を感じてゐるらしく）まあ待て。四郎が讀むべきものぢやあるまい。

四郎　重大な一家の處分法を若輩が讀んぢやいけないと云ふんですね。……僕も強いて讀みたかありません。兄さんお讀みなさい。

四郎は書付を持つて、久の所へ行つて手渡しする。皆んなが緊張した目でその方を見る。久は書付を一瞥すると顔色を變へる。

久　これは一先づ塚原君に預けといた方が穩當だらう。（と云つて塚原を招く）

塚原　わたくしもさう思つて居りました（久の側へ進んで、書付を受取る）

久　こんな非常識なものを、我々が眞面目に聽くのは馬鹿なことだ。

勉　親爺は精神に異狀があるんぢやないか。

四郎　どうだつていゝぢやないか。僕等は自分々々の道を歩めばいゝんだ。お父さんもさう云つてたぢやないか。

勉　兎に角、我々四人だけで塚原君の部屋へ行て、その書付を見て打合せをしようぢやないか。

久　さうだ。お互ひに重大な事なんだ。

四郎　重大な事と云つてどんな事だらうな。財産は一錢たりとも我々に譲らないと云ふのだらうか。

皆んな沈默して不安な思ひに捉はれてゐる。

（幕）

（二）ノ一

一年後の同月同日の朝。

庭園は元のまゝである。四阿は元の通りである。

着古した衣服を着けた直は、源七と話をしながら入つて來る。

直　去年の今日は大變溫かゝつたが、今年は薄ら寒いぢやないか。

源七　昨年は溫かう御座いましたから知ら。わたくしは些とも覺えてゐませんが。

直　天日に照らされるのが暑くつて、草原に寢ころんぢやゐられなかつた。それで、この四阿で日を避けて休息してゐたことをおれは覺えてるよ。

源七　今日もよく晴れて居りますから、次第に溫かくなりませう。

直　兄貴の連中は正午前にはやつて來るんだね。

源七　ヘイ。もう汽車にお乘りになつてる筈です。

直　おれは、あの後間もなく旅に出たので、殆んど一年間は身内の誰れにも會はないのだが、この一年の間にはいろ／＼な事があつたものだね。

源七　大旦那樣があんなに出拔けにお亡くなりになつたことは、夢のやうに思はれます。

直　おれも、親爺の死亡の通知には驚かされたよ。……さう云へばあの時、變な乞食が來て脅かしたぢやないか。迷信家だつたら、親爺はあの乞食に咀はれたやうにでも思ふだらう。……あの乞食はあの後どうしたらう。

源七　さあどうで御座いますか。あいつは氣味の惡い奴でした。

直　しかし、今考へると、彼奴の云つたことは大して氣味の惡いことぢやないよ。却つて、親爺の云つたことが氣味が惡いよ。

源七　わたくしは大旦那の御演說は承りませんでしたが、あの後は大變な騷ぎのやうで御座いましたね。……さう云へば　あの時、あなた樣は、お美しい奧樣をお迎へになつて、わたくしどもに見せてやらうと、お約束なすつたぢや御座いませんか。

直　お前も詰らないことをよく覺えてるね。（相手の戯談を生眞面目に聞いて不快を感じたらしく）おれも今は美しい奧さんなんか考へてもゐないよ。

源七　なぜお考へになりませんのです？　御兄弟のうちで、あなた樣ばかりがいつまでもお獨りでゐらつしやるのを、わたくしや家内はいつも不思議に思つてるんで御座いますよ。

直　おれは一年の間、親爺が乞食に物をくれるやうなざまで投げつけて與れた僅かな金を持つて、他鄕をうろついていろ／＼なことをやつて來たが、今は一文無しだ。それで、此處の軒下にでも四阿にでも寢かして貰はふと思つてやつて來たのだ。昨夕の夜汽車の三等の堅い腰掛の上で小さくなつて、まんぞくに眠ることも出來ないでやつて來たのだから、實は兄貴達が着くまでに、一睡りさせて貰ひ

たいくらゐなんだよ。

源七　ぢや、あちらで御ゆつくりお休みなすつちやいかゞでせう。

直　昨夕からおれは飯も食つてゐないのだ。さつきから、お前に温い飯を一杯惠んで貰ひたいと思つてるんだよ。

源七　御飯前なら、早くさう仰有ればよろしかつたのに。

直　お前は相變らず、慈悲深いんだね。……(ふと、重々しく)しかし、源七。おれは、一年前にお前を脅かしたあの男と同じな人だぜ上べにあんなカツタイ面はしてゐないだらうが、あの男と同じなんだ。……あの男には生死を共にする女房があるのに、おれにはさういふ結構な者のないのが、違つてゐるだけだ。

源七　御戯談を仰有る。ハヽヽ。

直　ぢや、まあ戯談にでもして置け。……しかし、おれの正體が分つた時に吃驚しないやうに用心をしてゐろ。吃驚するのはかまはないが、おれを突出さないやうにして呉れ。

源七　(相手の様子が眞劍らしいので、少し氣味を惡がる)飛んでもないことを仰有る。……あなた様は今の旦那様と血を分けた御兄弟ぢや御座いませんか。

直　六十五歳にもなつた實の親でさへあゝなんだからね。……兄弟が何だ。(力強く云つたが、)ハヽヽ(と輕く笑つて、ふと調子を柔らげて)一年の間、獨りでいろ／＼な世を見て多少修業して來たおれだ。力み返つてそんなことを云つたつてはじまらないな。

源七　朝御飯を召上るのなら、早速支度をいたしませう。

直　次手に煙草を惠んで貰ひたいものだな。昨夕から煙草にまで餓えてゐるんだよ。

源七　承知しました。

出て行きながら、そつと直の方を顧みる。直は、疲れてゐるやうにベンチに横たはる。すると、疲勞が一時に出たらしく、寢息を洩らす

そこへ、おしまがみや子を誘つて入つて來る。みや子は前よりも華美な服裝をして、前よりも富豪の女主人らしい態度を保つてゐる。

みや子　直さんが今日此處へ來ようとは思ひも染めなかつたのよ。

おしま　皆様が今日お揃ひになるやうにお打合せをしてゐらつしやるのかと、わたくしどもは思つてゐました。

みや子　わたしは直さんが何處で何をしてゐるのか知らなかつたの。(直の傍へ近づいて)あしこで寢てゐるぢやないの。

おしま　さつき出抜けにいらつしやつた時、大變お疲れになつてゐらつしやるやうで御座いました。

みや子　(憐れむやうに)旅疲れをしてるやうね。……眠つてるのなら、寢かしときませうよ(目を轉じてあたりの景色を眺めながら)久振りに此方へ來ると、せい／＼する。

おしま　あ、旦那様もいらつしやいました。

久、入つて來る。前よりも富豪の主人らしい堂々とした態度を保つてゐる。

みや子　あちらへ行つてお茶の用意でもしてお呉れな。

おしま　ハイ(出て行く)

久（直に目を留めて）なんだ。直がこんな所へ來てゐたのか。

みや子　よく眠つてるんだから起さないでゐらつしやい。

久　親爺の葬式にも歸つて來ないで、今日何のために此處へ來たんだらう？

みや子　それは分つてゐますさ。あの人も文無しになつたのぢやありませんか。

久　直も無能な奴ぢや、おれの兄弟中で御多分に洩れない方だが、よく何時までも獨身でフラ〳〵暮してゐられることだ。

みや子（あたりを憚るやうに）でも、直さんが今日といふ今日、不意に歸つて來て呉れたのは、わたし達には天の助けなのよ。直さんだけはわたし達の味方になつて呉れる望みがあるの。だから、直さんが目を醒ましたら、柔しくしてお上げなさい。わたしは、去年の今日、偶然直さんに話したこともあるのだし、あの人にはお嫁さんの世話をしたいと思つてゐますの。

久　この男はおれ達が勸めたくらゐで、オイソレと結婚するかどうだか。

みや子　結婚したくなつてるんですとも。あの顏を見て御覧なさい。あれ前に似合はない淋しい元氣のない顏してるぢやありませんか。あれは浮世の苦勞に疲れたつていふ顏ぢやなくつて。男はいくら威張つても、いつまでも獨身でゐると、あんなに元氣がなくなるんですよ。

久　久振りで會ふ、とおれでも直が懷かしく思はれるよ

みや子　さうでせうとも（いかにも同感したやうに云つて）勉さんや四郎さんは、傍に随いていろんな惡智慧を貸す人があるんだけれど……

久　おれには、くら子やさは子の目が怖いよ（憂鬱になる）

みや子　それはあなたの氣のせいなんです（冷笑して）いつまでも迷つてゐちや、男として意氣地がないぢやありませんか。お父さんが、早く亡くなつたことは、あの人達の得にもなつたんですもの。……わたし達に詰らん疑ひをもつたにしても、お腹の中では決してわたし達を恨んでやしません。わたくしが保證しますわ。

久　成程お前に保證して貰ふ外、天にも地にもおれの心の安心を保證して呉れるものはないんだからね。

みや子　さう云つて、あなたもわたしの所爲にしちやいけませんよ。御自分の所行は御自分で責任をもつてゐらつしやらなきやいけませんよ。

久　おれの責任とお前の責任とに區別はつきやしないよ。

みや子　此處へ來てまで理窟詰めの言合ひをしたつてはじまらないわ。……お互ひに詰らないことを云つて氣持を惡くするよりは、直さんを起しませう。

久　それもさうさ。（直の傍へ寄つて聲を掛ける）オイ、起きないか。こんな所で寢てると風邪を引くぜ。

直、驚いて目を醒ます。そして、不思議さうに久の顏を見る。

久（笑ひ〳〵）何だ、寢呆けてるのか。……今日はよく來て呉れた。偶然お前の歡迎會を今日此處で開くやうな譯になつたね。

直　僕の歡迎會を？　それはどうも不思議だ。

みや子（微笑して）わたしはどれほどあなたをお待ちしてゐたか知れませんのよ。

直　何故です？

みや子　わたしは、昨年の今日、あなたにお約束したことがあるぢやありませんか。

直　そんなことがありましたかね。（思出せないらしく）僕は親爺の葬式に出なかつたのが氣に懸つてたから、一週年の忌日には歸つて來るつもりでしたが、此間から死んだ親爺の亡靈見たいなものに導かれたので、何の氣なしにうか／＼と此處へ歸つて來ました。今日は死んだ親爺の誕生日でしたね。氣味の惡い演說をやらかして、僕等を脅かした日でしたね。

みや子　お父樣の亡靈に導かれたなんて、直さんも案外に迷信家なのね（不快に感じてゐる）

直　去年姉さんは、親爺が兄弟中で僕を特別に贔負にしてゐたやうなことを云つて、僕を喜ばしてゐなすつたが、僕だつて親爺に愛されちやゐなかつたんですね。親爺の申渡書のなかには、僕に對しても殘酷だつた。僕よりもあの子守女見たいな女の方が、親爺には價値があつたのだから可笑なものさ。

久（嚴かな口調で）しかし、親爺も心に疚ましいところがあつたと見えて、あの後安眠が出來なかつたらしいよ。絕えず催眠藥を用ひてゐたらしい。それで、過度にさういふ藥を用ひたことが、死亡の原因になつたんだね。……源七は親爺の死んだことについて何か云つてゐなかつたか。

直　いや、何も云はなかつた。此方から訊きもしなかつた。……しかし、親爺が安眠が出來なかつたと云ふのは、僕には少し呑込めないね。親爺は自分が子供の我儘な感情を害したのを神經に病んだといふのは、僕には合點が行かないね。

久　そりや、お前がまだ子供を有たないから分らないのさ。子供に對してあんな不實な事をしちや神經に障る譯だよ。

直　でも、あの親爺は世間一般の親とは違つてるんだからね。

久（もどかしさうに）ぢや、お前はおれの言ふことを信じないのか。醫者がさう斷定してゐる。

直　僕はさう思つたゞけなんだが、……側にゐた兄さんやお醫者がさう認めたのなら間違ひはないだらう。

みや子　お父さんはあなた方御兄弟が思つてゐらつしやるやうな冷酷な方ぢやなかつたの。わたしには、以前から、お父さんのお腹の中に温いところのあることがよく分つてゐたんです。

直　まあ、そんなことはどちらでもいゝでせう。……僕は饑えてるから、朝飯を源七に賴んで貰ふ筈になつたのだが、まだ支度が出來ないのか知ら……あちらへ行つて催促しませう。お話は腹がくちくなつてから伺ひます。

みや子　へえ、あなたはまだ朝御飯を召上らなかつたの？

直　本當の一文無しで今日此處へ辿りついたんですよ。

　直はさう云ひながら出て行く。

みや子　直さんも催眠藥の欲しさうな人ね。……だけど、あの人の催眠藥には結婚が一番なのよ。

久　まあお前のいゝやうにして呉れ。……おれは駄目だ。

　ベンチにぐつたり腰をおろす。

みや子　駄目だなんて、あなたは何が不滿足なの。こんないゝ時候に、あなたは一家の家長として威張つてゐられるぢやありませんか。それにあなたのためには、人の出來ないことでも實行するやうなわたしが、蔭身離れずにあなたの側に随き添つてゐるのぢやありませんか。くら子さんやさは子さんは、新しがつてえらがつてゐても、とてもわたしの半分も、御自分のお匹偶のために眞心を捧げてやしないんです。……さあ、目をよく開けて青葉の美しい麗らかな景色を見て御覧なさい。あなたには御自分の幸福がちつともお分りにならないのね。

久　それは分つてるよ。……お前はあちらへ行つて、直の朝飯の世話をしてやつちやどうだ。

みや子　さうねえ。それに今日の持做しの準備に取掛らなきやなりませんわ。御馳走のとなんかわたしが考へて指圖しますから、あなたはそこらを歩いていい空氣でも吸つて、心を落着けてゐらつしやい。

　さう云つて出て行く。

（幕）

（二）ノ二

（一）の三と同じ廣間

久をはじめ四人の兄弟と、彼等の妻三人とが居並ぶ。

久　今日は珍らしく揃つたね。……こんな會議見たいな鹿爪らしい眞似はしなくつてもいいんだが、皆んなが珍らしく一しよになつて、直までも偶然此處に落合つたのをいゝ機會に、一言云つて置きたいと思つてるんだよ。（議長然として眞面目に云ふ）

他の者は默つてゐる。

久　外ぢやないがね。おれは家長の權利を放棄しようと思つてゐる。

他の者は默つてゐる。

久　おれ達を除外して財産の處分をも勝手に極めかけた親爺は、實行に着手する間際になつて亡くなつたのだが、おれは、國家で極めた當然の權利をも自分の手で利用しなかつた。……おれの言葉の意味はお前達にも分つてるだらう。

他の者は默つてゐる。

久　おれはお前達の行動に少しも干渉をしなかつたし、第一、財産だつて、當然の相續者として當然に受繼いでいゝ筈のものをも、充分には自分のものにしなかつたぢやないか。それはお前達も了解してゐるんだらう。

他の者は默つてゐる。

久　それだけではない。おれは今度も家長の權利を放棄する前に、お前達のためには、出來る限りは自分の所有物を頒たうと思つてゐる。

みや子頷く。

久　おれは決して、ひとり手におれの手に歸した物を私しようとは思つてゐない。だから、今日から後は、おれの生活には關つて呉れないやうにして呉れ。お前達はおれの存在を心に置かないやうにして呉れ。おれを世にないもの同樣に思つて呉れゝばいゝのだ。

勉は氣六ケしく默つてゐる。四郎は微笑する。

みや子　あなたはなぜ出拔けにそんな非常識なことを仰有るんです？

久（みや子の方を見て）お前は默つて聞いてゐればいゝのだ。

みや子　でも、わたしもこの會議に並ばされた一人ぢやありませんか。そんな氣紛れなことを仰有るもんぢやありませんよ。

久　いや、おれは一人で長い間熟考した揚句でから決心したのだ。

みや子　いゝえ、あなたは、つい先つき此處へ汽車で下りるまで、何も考へてなんかゐらつしやらなかつたぢやありませんか。あなたが此間うち物を考へてゐらしつたかゐらつしやらなかつたか、わたしにはよく分つてゐますわ。

勉　まあ、姉さんは默つてゐらつしやい（と云つて、久に向つて）兄さんは僕等に兄さんの生活に關つて呉れるなと云つたが、僕等は今までだつて、兄さんの生活に懸り合つた覺えはない筈ぢやないか。僕は今まで、兄さん以外の兄弟の生活についても一言も、懸合ひをつけたことはなかつたよ。

久　ぢや、おれに對して少しも不平はないんだね。

勉　それは斷言する譯に行かないが、（氣六ケしい目で一座を見廻す）

四郎　皆んなが久兄さんに對しては一點の不平もないことに、衆議一決しようぢやないか。……お父さんが生きてゐて、去年此處でやつた演說の主旨が實行されてゐたなら、我々はみじめな目に會つてるんだからね（快活に云ふ）

一座暫く默つてゐる。

直　僕は長い間留守をしてゐたので、實際の事情は分らないが、去年の親爺の演說に比べると、兄さんの今の演說は非常に貧弱だね。六十五の親爺でさへあんなに我々を驚かしたのに、男盛りの兄さんの言葉は何と云ふ元氣のないことだらう。存在を認めるなゝんて、自分で云ふことぢやないね。

みや子　本當にさうですとも。

直　僕には合點が行かない。……僕は親爺が死んだ後では、皆んな慾を出して財產の奪合ひをやつてるに違ひないと思つてゐたよ。……僕が死んだ親爺の誕生日にノコノコやつて來たのも、內心慾に引かれて、分前をせびるために來たことになるんだが、さういふ野心を抱いてゐる僕が、歡迎されるは變だ。……かうして見渡したところ、皆んなが奥齒に物の挾まつてるやうな顏してるぢやないか。兄弟が若葉のいゝ時節に大磯の別莊に遊びに來てるといふ晴々した様子はちつとも見えないぢやないか。……（四郎に向つて）四郎、お前はそんな思はせ振りな顏してゐなくつてもいゝだらう。

四郎　いや、僕にも云ひたくつても云へないことがあるよ。……兎に角、親爺が死んだために、我々の時代が來たんぢやないか。……だから、過去のことを忘れて、不平のないことにしとかうぢやないか。久兄さんが自分の存在を忘れて呉れと云ふのなら、望み通りに忘れて上げたらいゝぢやないか。……（久を見て）兄さんはそれでいゝんだらう。會議はこれで終結したことにしようぢやないか。

直　贊成。

久　おれの云つたことに異議はないんだね。

皆んな默つてゐる。久はなほ不安な顏して出て行く。みや子隨い

て行く。

直　どうも腑に落ちない。……親爺の亡靈がこんな變な會議を見せに、おれを導いて來たのだな。

　久の後に隨いて出て行く。

四郎（勉に向つて）兄さんはまだお父さんの催眠藥に疑ひを挿んでるんだね。……だつて、いゝぢやないか。無用な事に精神を使ふのは馬鹿だよ。

　出て行く。さは子も隨いて行く。

くら子　兄さんは蟲のいゝことを云つてるわね。……でも、あたし達は潔白なんですからね。死んだお父さんにだつて恨まれてやしないんだからいゝぢやないの。……なにをまた詰らないこと考へてゐらつしやるの？　あたし、この廣間は大きらひなの。だつて去年のお父さんの顏が目に見えるやうなんですもの。さつきの兄さんの聲がお父さんによく似てるんだから、聞いてゐて氣持が惡いつたらなかつたのよ。……さあ、庭へでも出て行きませう。

　くら子、座を立つて出て行く。勉も隨いて行く。

（幕）

（二）ノ三

（一）ノ二と同じい庭園の一隅。

直が木蔭に置かれた肱掛椅子に身を投げかけて午睡をしてゐる。

そこへ、乞食姿のその男とその女とが、前の場に出た時よりも一層見窄らしく、且つ疲れた樣子をして出て來る。そして、直を見つけて驚く。

その男　これは妙だ。またこの人がこんな所で午睡をしてるよ。

その女　この人はよつぽど午睡の好きな人なんだね。

その男　この前はこの人に怒鳴りつけられて追拂はれたのだが、今度はまさかあんな邪慳なことはしないだらうな。人のよさゝうな顏をしてゐる。……聲を掛けて目を開けさせようか。

その女　この人はこの前と同じやうに魘されてるぢやないか。

　二人は直の側へ寄る。

その男　旦那樣

　直、目を醒まして驚く。

直　お前達も一年目で此處へ戻つて來たのか。おれも一年目で今日此處へやつて來たのだよ。

その男　へえ、旦那樣も何處かへ行つていらつしやつたんで御座いますか。

直　おれもお前達と同じやうに方々をうろついて來たよ。お前達は身延へお詣りすると云つてゐたが、お詣りを濟まして來たのかい。

その男　お詣りはいたしましたが、何の御利益も御座いません。二人は喰ふや喰はずで一年の旅を續けました。

その女　身延には半年あまりも居りました。御信心が足らなかつたものですから、大した御利益は御座いませんのでした。何處まで行つても落着ける場所が見つかりませんので、生れ故郷へ後戻りをして居ります。

直　お前達でも生れ故郷へ歸りたくなるのかい。故郷の者に相手にさ

れる望みを有つてるのかい。

その男　わたくしは、家内に誘はれて身延へまゐりまして、また家内に連れられて、故郷の方へポツ〳〵歩いて居りますが、ちつとも樂しみに思つてるのぢや御座いません。……このお屋敷の後の山の洞穴にでも住まつてゐる方が、よつぽど氣樂なんで御座います。

その女　お宅樣の召上り物のおあまりでも頂けましたら、三日でも四日でも、洞穴で草臥休めをいたしたいので御座いますが(女らしく媚びを浮べて云ふ)

直はその女の媚びを見てギヨツとする。そして、そこを立去らうとしながら、足が縛りつけられてゐる樣で動きかねる。

その男　此方の御別莊番の方はお情深い方で御座いましたが、今も此方にゐらつしやるんで御座いますか。

直　あの男は無事で此處に住んでゐるよ。しかし、お前と同じ日に生れたといふ此處の御主人樣はあの後間もなく死んぢやつたよ。

その男　大旦那樣がお亡くなりなすつた？　御運のいゝお方だと思つて居りましたのに。……何御病氣で御座いました？

直　いえ、それがよく分らないんだ。金があるから誰れかに咀はれたのかも知れないね。

その女　ぢや、毒藥でもお飮みになつたんで御座いますか。

直(不機嫌らしく)おれは知らないよ。お前達が咀つたのぢやあるまいな。

その男　飛んでもないことを仰有る？(取つてつけたやうに云ふ)

直　去年の今日は、お前達の來た後で、親爺は魔物にでも取付かれてるやうな樣子だつたよ。誰れかに咀はれてたらしかつたね。誕生日のお祝ひとは思はれなかつた。……今日だつてさうだ。兄弟が大勢寄つてゐても、折角の御馳走があんまり賣れないらしいよ。お餘りがどつさりあるから、お前達に振舞つてやらう。……お前達に喰はせるために拵えてゐたやうなものだ。

その女　それはお有難たう御座います。

直　しかし、食物のなかに毒が入つてるかも知れないぜ。

その男　わたくしどもは毒ぐらゐは恐れやいたしません。御馳走を充分に頂いて、この屋敷でころりと往生が出來るものなら結構で御座います。

直　直ぐに持つて來させるから待つてゐろ。(直出て行く。その男冷嘲を含んだ目で見送る。)

その女　人間の壽命は分らないもんだ。

その男　おれの咀ひが利いたのかも知れないぜ。

その女　そんな馬鹿なことがあるものか。

その男　おれと同じ日に生れた人間が一人くたばつたのだ。おれはいくらか胸が透いたやうに思はれる。

その女　お前がさう云ふ量見だから、身延樣でも御利益を授けて下さらないんだよ。

その男　人間がみんな死ぬるのだと思ふ外に、おれ達に樂みがあるか。へゝゝ

さう云つて、彼れは、直の腰掛けてゐた肱掛椅子に腰をおろす。

その男　さあ、お前も此處へ腰を掛けないか。おれと並んでお庭の景

色を眺めてゐるやうぢやないか。

その女　あの若旦那がわたし達に親切さうな口を利いたのは、どうも不思議でならないよ。

その男　追出されるまでも、おれは此處でかうして休んでゐよう。

そこへ、源七が料理を盆に載せて持つて來る。その男が主人然と椅子にかかつてゐるのを見ても咎めない。

源七　一周年目にお前達の來たのは、佛のお導きのやうだ。さあ、そこで御馳走になんなさい。

その男　有難う。……大旦那はお亡くなりなすつたさうだね。……若旦那の世になつて、お前さん達の給金は少しは増して貰えたのか。

源七　いや、誰れの世になつても、おれ達の懷中加減は同じことだ。

その男　それぢや詰らないな。（料理の盆を手に取つて、女を見て）さあ、御馳走にならうぢやないか。……おれ達は何年目でこんな結構な御馳走に有りついたことか。

その女（源七に向つて）有難う御座います（と云つて、箸を採る）

源七　今日の御馳走はお前さん夫婦に食べさせるために拵えたやうなものだ。そのつもりで頂きなさい。死んだ旦那樣の供養だ……

亡き主人の靈を追弔してゐるつもりで、目を瞑つて雙手を伸べて禮拜の眞似をする。その男夫婦は美食に舌鼓を打ちながら上目を使つて、不思議さうに源七を見る。

源七、目を開けて、夫婦と目を見合せていやな顏をする。

源七　さあ、食べる物を食べたら出て行きなさい。今日はいゝお天氣だ。かういふいゝお天氣に夫婦連れで氣儘な旅の出來るのは羨ましいよ。

その男　お世辭にもおれ達を羨んで呉れるのはお前さんくらゐなものだ。

その女　お前さんがこんな親切に惠んで下すつたことは、一生忘れませんよ。

その男　おれ達は直ぐに出て行かにやなるまいな。此處はおれ達に緣故のある家ぢやないのだから。……さあ出掛けようか。

二人は源七に挨拶して出て行く。さつきから木蔭から覗いてゐた久とみや子とが入つて來る。

久　氣味の悪い乞食だな。何處かで見たことがあるやうだが。……

みや子　あなたの氣の迷ひなのよ。

久　さうかなあ。おれの氣の迷ひなのか。……おれは、死んだ親爺と母親とがあゝいふ姿で現はれたのかと思つてたよ。（と沈んだ聲で云つてから、源七を見て）源七、勉や四郎はもう東京へ歸つたのだらうな。

源七　ハイ、皆樣お歸りになつたやうで御座います。

直がつか〳〵と入つて來る。源七は食器を持つて出て行く。

直　僕だけはまだ此處にゐるよ。

久　お前はおれの云つたことに同意したのだらうな。

みや子　直さんは、氣儘な放浪生活なんぞ止して、いゝ加減で溫い家庭をおつくりなさいね。わたしは屹度あなたのお氣に入るやうなお嫁さんの候補者を見つけて待つてるんです。

直　それはまあ見あはせませう。去年の親爺の演說と今年の兄さんの

演說で僕の心は腐つてしまつた。溫い家庭も冷たい家庭も、子供の製造は厭ふべきことですね。

みや子　兄弟中であなたお一人がいつまでも淋しさうぢやありませんか。

直　御好意は感謝することにして、僕はこれから、また一人で浮世を放浪しませう。あの乞食は二人連れだつたが、僕は一人で放浪だ（ふと銳い目付して久を見て）しかし、僕は分前を貰ひませう。

久（ふと激昂して）何の分前だ？

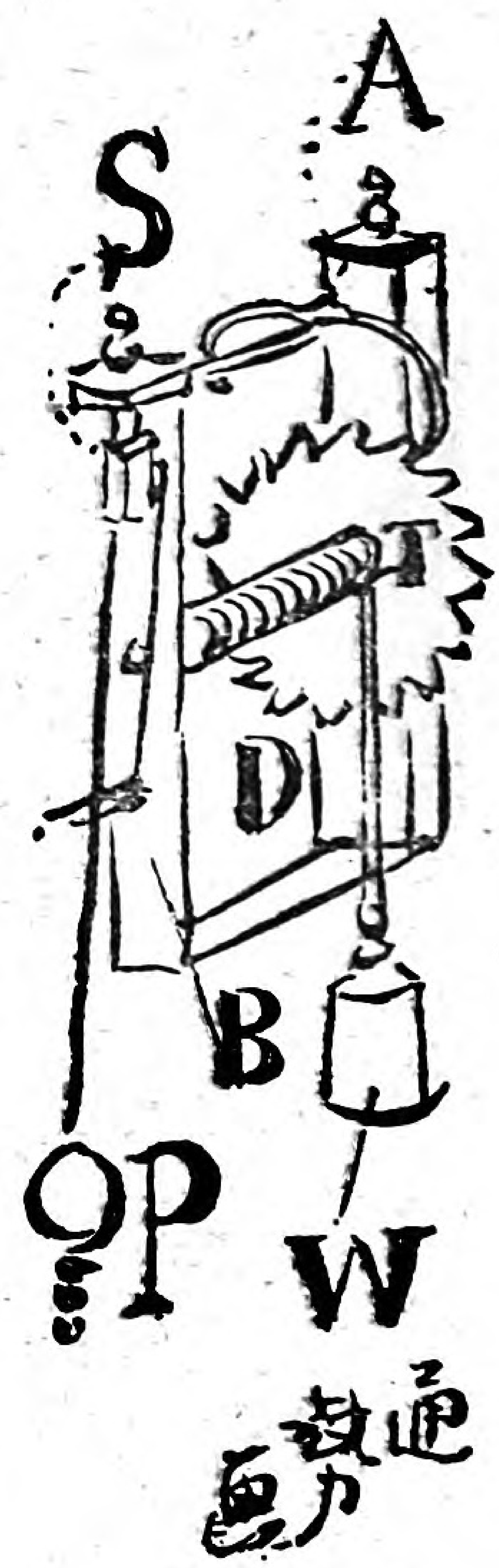
直（冷笑して）分つてるくせに。

久　お前も親爺の死因に疑ひを挾んでるんだな。

直（芝居口調で）外の兄弟ほどにも疑ひを挾んぢやゐないよ。たとへ疑ひを抱いてるにしても、僕はハムレットぢやない。その疑ひのために煩悶苦惱はしないよ。……たゞ分前を充分に貰ひたいのだ。さうすれば、兄さんの望み通りに、兄さんの存在を忘れて、僕は放浪の旅へ出て行く。

みや子（微笑して）今日は兄さんも直さんも、みんながどうかしてゐるのね。陽氣の加減で皆んなが逆上してるんですね。……もうお風呂が沸いたでせうから、二人で一しよにお入りになつて、頭をお休めになるといゝのよ。

（幕）



花園の思想

横光利一

一

丘の先端の花の中で、透明な日光室が輝いてゐた。バルコオンの梯子は白い脊骨のやうに突き出てゐた。彼は海から登る坂道を肺療院の方へ歸つて來た。彼はかうして時々妻の傍から離れると外を歩き、また、妻の顔を新しく見に歸つた。見る度に妻の顔は、明確なテンポをとつて段階を描きながら、克明に死線の方へ近寄つてゐた。──山上の煉瓦の中から、不意に一群の看護婦達が崩れ出した。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

「さやうなら。」

退院者の後を追つて、彼女達は陽に輝いた坂道を白いマントのやうに馳けて來た。彼女達は薔薇の花壇の中を旋回すると、門の廣場で一輪の花のやうな輪を造つた。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

「さやうなら。」

芝生の上では、日光浴をしてゐる白い新鮮な患者達が、坂に成つた果實のやうに累累として横たはつてゐた。

彼は患者達の幻想の中を柔かく廊下へ來た。長い廊下に添つた部屋部屋の窓から、絶望に光つた一列の眼光が冷たく彼に迫つて來た。

彼は妻の病室のドアーを開けた。妻の顔は、花瓣に纏はりついた空氣のやうに、哀れな朗かさをたたへて靜まつてゐた。

──恐らく、妻は死ぬだらう。

彼は妻の顔を寢臺の横から透かしてみた。罪と罰とは何もなかつた。彼女は處女を彼に與へた滿足な結婚の夜の美しさを回想してゐるかのやうに、端整な靑い線をその顔横の上に浮べてゐた。

二

彼と妻との間には最早悲しみの時機は過ぎてゐた。彼は今迄醫者から妻の死の宣告を幾度聞かされたか分らなかつた。その度に彼は醫者を變へてみた。彼は最後の努力で彼の力の及ぶ限り死と戰つた。が、彼が戰へば戰ふほど、彼が醫者を變へれば變へるほど、醫者の死の宣

告は事實と一緒に明克の度を加へた。彼は衰れて了つた。彼は疲れて了つた。彼は手を放したまま呆然たる藏のやうに、虚無の中へ坐り込んだ。さうして、今は、二人は二人を引き裂く死の断面を見やうとしてただ互に暗い顔を覗き合せてゐるだけである。丁度、二人の眼と眼の間に死が現はれでもするかのやうに。彼は食事の時刻が來ると、默つて匙にスープを掬ひ、默つて妻の口の中へ流し込んだ。丁度、妻の腹の中に潜んでゐる死に食物を與へるやうに。

あるとき、彼は低い聲でそつと妻に訊ねてみた。

「お前は、死ぬのが、ちよつとも怖くはないのかね。」

「ええ。」と妻は答へた。

「お前は、もう生きたいとは、ちよつとも思はないのかね。」

「あたし、死にたい。」

「うむ。」と彼は頷いた。

二人には二人の心が硝子の兩面から覗き合つてゐる顔のやうにはつきりと感じられた。

三

今は、彼の妻は、ただ生死の間を繋つてゐる一疋の怪物だつた。あの激しい熱情をもつて彼を愛した妻は、いつの間にか盡く彼の前から消え失せて了つてゐた。さうして、彼は、あの激しい情熱をもつて妻を愛した彼は、今は感情の擦り切れた一個の機械となつてゐるにすぎなかつた。實際、此の一人は、その互に受けた長い期間の苦痛のために、もう夫婦でもなければ人間でもなかつた。二人の眼と眼を經へだててゐる空間の距離には、ただ透明な空氣だけが柔順に伸縮してゐるだけである。その二人の間の空氣は死が現はれて妻の眼を奪ふまで、恐らく陽が輝けば明るくなり、陽が沒すれば暗くなるに相違ない。二人にとつて、時間は最早愛情では伸縮せず、ただ二人の眼と眼の空間に明暗を與へる太陽の光線の變化となつて、露骨に現はれてゐるだけにすぎなかつた。それは靜かな眞空のやうな虚無であつた。彼には横たはつてゐる妻の顔が、その傍の藥壺や盆のやうに、一個の美事な靜物に見え始めた。

彼は二人の間の空間をかつての生き生きとした愛情のやうに美しくするために、花壇の中からマーガレットや雛罌粟をとつて來た。その白いマーガレットは虚無の中で、ほのかに妻の動かぬ表情に笑を與へた。また、あの柔かな雛罌粟が壺にささつて微風に赤々と揺らめくと、妻はかすかな歎聲を洩して眺めてゐた。此の四角な部屋に並べられた壺や寢臺や壁や横顔や花々の靜まつた靜物の線の中から、かすかな一條の歎聲が洩れるとは。彼は彼女のその歎聲の秘められたやうな美しさを聽くために、戸外から手に入る花と云ふ花を部屋の中へ集め出した。

薔薇は朝毎に水に濡れたまま揺れて來た。紫陽花と矢車草と野茨と芍藥と、菊とカンナは絶えず三方の壁の上で咲いてゐた。それは華やかな花屋のやうな部屋であつた。彼は夜毎に燭臺に火を點けると、もしかしたらこつそり此の寄ざめた花屋の中へ、死の客人が訪れてゐはしまいかと妻の寢顔を覗き込んだ。すると、或る夜不意に妻は眼を開

けて彼に云つた。

「あなた、私が死んだら、幸福になるわね。」

彼は默つて妻の顏を眺めてゐた。そして、彼は自分の寢床へ歸つて來ると憂鬱に蠟燭の火を吹き消した。

四

彼は自分の疲れを慰めるために、彼の眼に觸れる空間の存在物を盡く美しく見やうと努力し始めた。それは彼の感情のなくなつた虚無の空間へ打ち建てらるべきただ一つの生活として、彼に殘されてゐたものだつた。

彼は彼の寢床を好んだ。寢床は妻の寢室と同じであるとしても、輕症者の靜臥すべきベランダにあつた。ベランダは花園の方を向いてゐた。彼は此のベランダで夜中眼が醒める度に妻より月に惱まされた。月は絶えず彼の鼻の上にぶらさがつたまま皎々として彼の視線を放さなかつた。その海の斷面のやうな月夜の下で、花園の花々は絶えず群生した蛾のやうにほの白い圓陣を造つてゐた。さうして月は、その花花の先端の縮れた羊のやうな皺を眺めながら、蒼然として海の方へ渡つていつた。

さう云ふ夜には、彼はベランダからぬけ出て夜の園丁のやうに花の中を歩き廻つた。濕つた芝生に抱かれた池の中で、一本の噴水が月光を散らしながら周圍の石と花とに戲れてゐた。それは穩かに庭で育つた高價な家畜のやうな淑やかさをもつてゐた。また遠く入江を包んだ二本の岬は花園を抱いた黑い腕のやうに曲つてゐた。さうして、水平線は遙か一髮の光つた毛のやうに、月に向つて膨らみながら花壇の上で浮いてゐた。

から云ふとき、彼は絶えず火を消して眠つてゐる病舍の方を振り返るのが癖である。すると彼の頭の中には、無數の肺臟が、花の中で腐りかかつた黑い菌のやうに轉がつてゐる所が浮んで來る。恐らくその無數の腐りかかつた肺臟は、低い街々の陽のあたらぬ屋根裏や塵埃溜や、それともまたは、齒車の嚙み合ふ機械や飲食店の積み重なつた器物の中へ、胞子を無數に撒きながら、此の丘の花園の中へ寄り集つて來たものに相違ない。しかし、此れらの憐れにも死に逝く肺臟の穴を防ぎとめ、再び生き生きと活動させて巷の中へ送り出すこの花園の院長は、もとは、彼の助けてゐるその無數の腐りかかつた肺臟のやうに、死を宣告された腐つた肺臟を持つてゐた。一人の傷ついた肺臟が、自身の回復した喜びとして、その回復期の續く限り、無數の傷ついた肺臟を助けて行く。これが、この花園の中で呼吸してゐる肺臟の特種な運動の體系であつた。

五

ここの花園の中では、新鮮な空氣と日光と愛と豐富な食物と安眠とが最も必要とされてゐた。ここでは夜と雲とが現はれない限り、病舍に影を投げかけるものは屋根だけだつた。食物は海と山との調味豐かな品々が時に從つて華やかな色彩で食慾を增進させた。空氣は晴れ渡

つた空と海と山との三色の緑の色素の中から湧き上つた。物音とてはしんしんと耳の痛む靜けさと、時には娛樂室からかすかに上るミヌエツトと、患者の咳と、花壇の中で花瓣の上に降りかかる忍びやかな噴水の音ぐらひにすぎなかつた。さうして、愛は？　愛は都會の優れた醫院から拔擢された看護婦達の淸淨な白衣の中に、五月の微風のやうに流れてゐた。

しかし、愛はいつのときでも曲者である。此の花園の中でただ無爲に空と海と花とを眺めながら、傍近く寄るものが、もしも五月の微風のやうに爽かであつたなら、そこに柔かな愛慾の實のなることは明かな物理である。しかし、ここの花園では愛戀は毒藥であつた。もしも戀慕が花に交つて花開くなら、やがてそのものは花のやうに散るであらう。何ぜなら、此の丘の空と花との明るさは、巷の戀に代つた安らかさを病人に與へるために他ならない。もしも彼らの間に戀の花が咲いたなら、間もなく彼らを取り卷く花と空との明るさはその綿々とした哀曲のために曇るであらう。だが、此の空と花との美しき情趣の中で、華やかな女のさざめきが微笑のやうに迫るなら、愛慾に落ちないものは石であつた。此のためここの白い看護婦達は、患者の脈を驗べる妙巧な手つきと同樣に、微笑と秋波を名優のやうに整頓しなければならなかつた。しかし、彼女達といへども一對の大きな乳房をもつてゐた。病舍の燈火が一齊に消えて、彼女達の就寢の時間が來ると、彼女らはその嚴格な白い衣を脫ぎ捨て、化粧をすませ、腰に色づいた帶を卷きつけ、いつの間にかしなやかな寢卷姿の娘になつた。だが娘になつた彼女らは、皆ことごとく疲れと眠さのために物憂げに默つてゐた。それは戀に破れた娘らがどことなく人目を憚るあの靜かな惱ましさをたたへてゐるかのやうに。或るものはその日の祈りをするために跪き、或るものは手紙を書き、或るものは物思ひに沈み込み、また、ときとして或るものは、盛裝をこらして火の消えた廊下の眞中にぼんやりと立つてゐた。恐らく彼女らにはその最も好む美しき衣物を着る時間が、眠るとき以外にはないのであらう。

或る夜、彼女らの一人は、夜更けてから愛する男の病室へ忍び込んで發見された。その翌日、彼女は病院から解雇された。出て行くとき彼女は長い廊下を見送る看護婦達にとりまかれながら、いささかの羞づかしさのために顏を染めてはゐたものの、傲然とした足つきで出ていつた。それは丁度、長い使酷と粗食との生活に對して反抗した模範を示すかのやうに。その出て行くときの彼女の禮節を無視した樣子には、確に、長らく彼女を虐めた病人と病院とに復讎したかのやうな快感が、悠々と彼女の肩に現はれてゐた。

六

梅雨期が近づき出すと、ここの花園の心配は此の院內のことばかりではなくなつて來た。麓の海村には、その村全體の生活を支へてゐる大きな漁場がひかへてゐた。上に肺病院を頂いた漁場の魚の賣れ行きは擴大するより、縮少するのが、より確實な運命にちがひない。麓の活躍した心臟を壓迫するか、頂の死に逝く肺臟を默殺するか、此の二つの背反に波打つて村は二派に分れてゐた。既に決定せられたかや

うに、譬へ此の頂きに療院が許されたとしても、それは同時に盡くの奢の心臓が恐怖を忘れた故ではなかつた。

間もなく、これらの腐敗した肺臓を恐れる心臓は、頂の花園を苦しめ出した。彼らは花園に接近した地點を撰ぶと、その腐敗した肺臓のために買れ殘つて腐り出しただけの魚の山を、肥料として積み上げた。忽ち蠅は群生して花壇や病舍の中を飛び廻つた。病舍では、一疋の蠅は一挺のピストルに等しく恐怖すべき敵であつた。院内の窓と云ふ窓には盡く金網が張られ出した。金槌の音は三日間患者達の安靜を防害した。一日の混亂は半ヶ月の靜養を破壞する。患者達の體溫表は狂ひ出した。

しかし、此の肺臓と心臓との戰ひはまだ續いた。既に金網をもつて防戰されたことを知つた心臓は、風上から麥藁を燻べて肺臓めがけて吹き流した。煙は道徳に從ふよりも、風に從ふ。花壇の花は終日濛々として曇つて來た。煙は花壇の上から蠅を追ひ散らした勢力よりも、更に數倍の力をもつて、直接腐つた肺臓を攻撃した。患者達は咳き始めた。彼らの一回の咳は、一日の靜養を掠奪する。病舍は硝子戸で金網の外から密閉された。部屋には炭酸瓦斯が溜り出した。再び體溫表が亂れて來た。患者の食慾が減り始めた。人々はただぼんやりとして硝子戸の中から空を見上げてゐるだけにすぎなかつた。

かうして、彼の妻はその死期の前を、花園の人々に愛されただけ、眼下の漁場に苦しめられた。しかし、花園は既にその山上の優れた位地を占めた勝利のために、何事にも默つてゐなければならなかつた。彼の妻は日日一層激しく咳き續けた。

七

から云ふ或る日、彼はこつそり副院長に別室へ呼びつけられた。

「お氣の毒ですが、多分、あなたの奧樣は、」

「分りました。」と彼は云つた。

「此の月いつぱいだらうと思ひますが……」

「ええ。」

「私達は出來るだけのことをやつたのですが。……何分……」

「どうも、いろいろ御迷惑をおかけしまして、」

「いや……それから、もし親戚の方々をお呼びなさいますなら、一時にどつと來られませんやうに。」

「承知しました。」

「長い間でお疲れでございませう。」

「いや。」

彼はいつの間にか廊下の眞中まで來てひとり立つてゐた。忘れてゐた悲しみが、再び強烈な匂のやうに襲つて來た。

彼は妻の病室の方へ歩き出した。

――しかし、これは、事實であらうか。

彼はまた立ち停つた。セロのガボットが華やかに日光室から聞えて來た。

――しかし、よし譬へ、明かに、事實は妻を死の中へ引き摺り込まふとしてゐるとしても、果して、事實は常に事實であらうか。

──嘘だ。と彼は思つた。

彼は、總ての自分の感覺を錯覺だと考へた。一切の現象を假象だと考へた。

──何故にわれわれは、不幸を不幸と感じなければならないのであらう。

──何故にわれわれは、葬禮を婚禮と感じてはいけないのであらう。

彼はあまりに苦しみ過ぎた。彼はあまりに惡運を引き過ぎた。彼はあまりに悲しみ過ぎた、が故に、彼はそのもろもろの苦しみと悲しみとを最早僞りの事實としてみたくてならなかつた。

──間もなく、妻は健康になるだらう。

──間もなく、二人は幸福になるだらう。

彼はこのときから、突如として新しい意志を創り出した。彼はその一個の意志で、總ゆる心の暗さを明るさに感覺しやうと努力し始めた。もう彼にとつて、長い間の虚無は、一睡の夢のやうに吹き飛んだ。

彼は深い呼吸をすると、快活に妻のベッドの傍へ寄つていつた。

「おい、お前は死ぬことを考へてゐるんだらう。」

妻は彼を見て頷いた。

「だが、人間は死ぬものぢやないんだ。死んだつて、死ぬなんてことは、そんなことは何んでもない。分つたね。」──無論、何を云つてゐるのか彼にも分らなかつた。

妻は冷淡な眼で彼を見詰めたまま默つてゐた。

「お前は俺よりも、そんなことは良く知つてゐるだらう。死ぬなんて云ふことは、下らない、何んでもない、馬鹿馬鹿しいことなんだ。」

「あたし、もうこれ以上苦しむのは、いや。」と妻は云つた。

「そりや、さうだ。苦しむなんて、馬鹿な話だ。しかし、生きてゐるからつて、お前は俺に氣がねする必要は、少しもないんだ。」

「あたし、あなたより、早く死ぬから、嬉しいの。」と彼女は云つた。

彼は笑ひ出した。

「お前も、うまいことを考へたね。」

「あたしより、あなたの方が、可哀想だわ。」

「そりや、定まつてる。俺の方が馬鹿を見たさ。だいたい、人間が生きてゐるなんて云ふことからして、下らないよ。こんなにぶらぶらして、生きてゐたつて、始まらないぢやないか。お前も、もう死ぬがいい、うむ？」

「うむ。」と妻は頷いた。

「俺だつて、もう直ぐ死ぬんさ。こんな所に、ぐずぐず生きてなんか、ゐたかない。お前も、うまいことをしたもんさ。」

妻は彼を見てかすかに笑ひ出した。

「あたし、ただ、もうちよつと、此の苦しさが少なければ、生きてゐてもいいんだけど。」

「馬鹿な。生きてゐたつて、仕樣がないぢやないか。いつたい、これから、何をしやうつて云ふんだ。もう俺もお前もするだけのことは、すつかりして了つたぢやないか。思ひ出してみるがいい。」

「さうだわね。」と妻は云つた。

「さうさ。もう大きな顔をして、死んでもいいよ。」
妻は彼の顔から彼の心理の變化を見屆けやうとするやうに、默つて彼の顔を見詰めてゐた。
「お前は何だか淋しさうだ。お前のお母さんを、呼んでやらうか。」
「もういい。あなたが傍にゐて下されば、あたし誰にも逢ひたかない。」と妻は云つた。
「さうか、ぢや、」と彼は云つて直ぐ彼女の母に來るやうにと手紙を書いた。

八

その翌日から妻の顔は急に水々しい水蜜のやうな爽かさを加へて來た。妻は絶えず、窓いつぱいに傾斜してゐる山腹の百合の花を眺めてゐた。彼は部屋の壁々に彼女の母の代りに新しい花を差し添へた。シクラメンと百合の花。ヘリオトロオプと矢車草。シネラリヤとヒアシンス。薔薇とマーガレツトと雛罌粟と。
「お前の顔は、どうしてさう急に美しくなつたのだらう。お前は十六の娘のやうだ。お前はいつぱいのスープも飲まないくせに、まるで鷄の十五六羽もやつつけたやうな顔をしてゐる。不思議な奴だ。さては、俺の知らぬ間に、こつそりやつたと見えるな。」
「あの百合の花を、此の部屋から出して。」と妻は云つた。
百合の匂ひは他の花の匂ひを殺して了ふ。――
「さうだ、此の花は、英雄だ。」
彼は百合を摘むと部屋の外へ持ち出した。が、さて捨てるとなると、その濡れたやうに生き生きとした花粉の精悍な色のために、捨て處がなくなつた。彼は小猫を下げるやうに百合の花束をさげたまま、うろうろ廊下を廻つて空虚の看護婦部屋を覗いてみた。壁に狹まれた柩のやうな部屋の中にはしどけた帯や野蠻なかもじが蒸された空氣の中に轉げてゐた。まもなくここで、疲れた身體を横たへるであらう看護婦達に、彼は山野の淸烈な幻想を振り撒いてやるために、そつと百合の花束を匂ひ袋のやうに沈めておいて戻つて來た。

九

山の上では、また或る日拗く麥藁を焚き始めた。彼は暇をみて病室を出るとその火元の畠の方へいつてみた。すると、青草の中で、鎌を研いでゐた若者が彼を仰いだ。
「その火は、いつまで焚くんです？」と彼は訊いた。
「これだけだ。」と若者は云ひながら火のついた麥藁を鎌で示した。
「その火は焚かなくちや、いけないものですか。」
若者は默つて一握りの青草に刄をあてた。
「僕の家内は、此の煙りのために、殺されるんです。焚かないですませるものなら、やめてくれ給へ。」
彼は若者の答へを待たずに、裏山から漁場の方へ降りていつた。扁平な漁場では、銅色の壯烈な太股が、林のやうに竝んでゐた。彼らは沖からの艀が着くと飛沫を上げて海の中へ馳け込んだ。子供達は砂濱

で、ぶるぶる慄へる海月を攫んで投げつけ合つた。舟から樽が、太股が、鮪と鯛と鰹が海の色に輝きながら潑溂と上つて來た。突如として漁場は、時ならぬ曉のやうに光り出した。毛の生えた太股は、魚の波の中を右往左往に屈折した。鯛は太股に跨られたまま薔薇色の女のやうに觀念し、鮪は計畫を貯へた砲彈のやうに、落ちつき拂つて竝んでゐた。時々突つ立つた太股の林が搖らめくと、射し込んだ夕日が、魚の波頭で斬りつけた刄のやうな鱗光を閃めかした。

彼は魚の中から丘の上を仰いで見た。丘の花壇は、魚の波間に忽然として浮き上つた。薔薇と鮪と芍藥と、鯛とマーガレットの段階の上で、今しも日光室の多角な面が、夕日に輝きながら鋭い光鋩を眼のやうに放つてゐた。

「しかし、此の魚にとりまかれた肺病院は、此の魚の波に攻め續けられてゐる城である。此の城の中で、最初に討死するのは、俺の家内だ。」と彼は思つた。

事實彼にとつて、眼前の魚は、墮で彼の妻の死を早めつつある無數の勇敢な敵であつた。と同時に、彼女にとつては、魚は彼女の苦痛な時期をより縮めんとしてゐる情ある醫師でもあつた。彼には、その砲彈のやうな鮪の鈍重な羅列が、急に無氣味な意味を含めながら、黙々と沈默してゐるやうに見えてならなかつた。

十

此の日から、彼は、彼の妻を苦しめてゐるものは事實果して此の漁場の魚か花園の花々か、そのどちらであらうかと迷ひ出した。何故なら彼女が花園にゐる限り、彼女の苦しい日日は、恐らく魚の吐き出す煙があるよりも、長く續いて行くにちがひなかつたからである。

その夜の回診のとき、彼の妻は自分の足を眺めながら醫師に訊ねた。

「先生、私の足、こんなに膨れて來て、どうしたんでございませう。」

「いや、それは何んでもありません。御心配なさいますな。何んでもありませんから。」と醫師は誤魔化した。

——水が足に廻り出したのだ。

——もう、駄目だ。と彼は思つた

醫師が去ると、彼は電燈を消して燭臺に火を點けた。

——さて、何の話をしたものであらう

彼は妻の影が、ヘリオトロオプの花の上で、蠟燭の光りのままに細かく搖れてゐるのを眺めてゐた。すると、ふと、彼は初めて妻を見たときの、あの彼女のただ彼のみに赦されてあるかのやうな健かな笑顏を思ひ出した。彼は涙がにじんで來た。彼はソッと妻の上にかがみ込むと、花の匂ひの中で彼女の額に接吻した。

「お前は、俺があの汚い二階の紙屑の中に坐つてゐる頃、毎夜こつそり來てくれたらう。」

妻は默つて頷いた。

「俺はあの頃が、一番面白かつた。お前の明るいお下の頭が、あの梯子を登つた暗い穴の所へ、ひよつこり花車のやうに現はれるのさ。」

すると、俺は、すつかり憂鬱がなくなつちやつて、はしやぎ廻つたもんだ。とにかく、あの頃は、俺も貧乏してゐたが、一番愉快だつた。あれからは、俺もお前も、若い身空で苦勞をした。しかし、まア、いいさ。どつちも、わがままの云ひ合ひをして來たんだからね。それに俺だつて、お前に一度もすまぬやうなことをして來てないし、お前も俺にあやまるやうなことはちつともなかつたし、まア、俺達は、お互に有難がらなくちやならない夫婦なんだよ。何んだか、そろそろをかしな話になつて來たが、とにかく、お前が病氣をしたお影で、俺ももう看護婦の免狀位は貰へさうになつて來たし、不幸と云ふことがすつかり分らなくなつて來たし、こんな有り難いことはさう矢鱈にあるもんぢやない。お前も、ゆつくり寢てるがいい。もう少しお前が良くなれば、俺はお前を負んぶして、ここの花園の中を廻つてやるよ。」

「うむ、」と妻は靜に頷いた。

彼は危く涙が出さうになると、やつと眉根で受けとめたまま花壇の中へ降りて來た。彼は群がつた夜の花の中へ顏を突き込んだ。すると、涙が溢れ出した。彼は泣きながら冷たい花を次から次へと虫のやうに嗅ぎ廻つた。彼は嗅きながら激しい祈りを花の中でし始めた。

「神よ、彼女を救ひ給へ。神よ、彼女を救ひ給へ。」

彼は一握の櫻草を引きむしつて頰の涙を拭きとつた。海は月出の前で秘めやかに白んでゐた。夜鴉が奇怪なカーブを描きながら、花壇の上を鋭い影のやうに飛び去つた。彼は心の鎭むまで、幾回となく、靜な噴水の周圍を悲しみのやうに廻つてゐた。

十一

その翌朝早くから彼の妻の母が來た。彼女は娘の顏を見ると泣き始めた。

「君坊、どうした。まア、痩せて。もつと早く來やうと思つたんだけど、いろいろ用事があつて、」

彼の妻はいつものやうに冷淡な顏をして、相手の騷ぐ樣子を眺めてゐた。

「お前、苦しいのかい。おつ母さんはね、毎日お前のことばかり思つてたんだよ。早く來たくつて來たくつて、しやうがなかつたんだけど、皆家のものが病氣ばかりしてゐてね。」

彼は手紙に書かなかつた妻の、病狀をもう母親に話す氣は起らなかつた。彼は妻を母親に渡しておいてひとり日光室へ來た。日光室のガラスの中では、朝の患者達が籐の寢椅子に横たはつて並んでゐた。海は岬に抱かれたまま淑かに澄んでゐた。二人の看護婦が笑ひながら現はれると、滿面に朝日を受けて輝やいてゐる花壇の中へ降りていつた。彼女達の白い着物は眞赤な罌粟の中へ蹲み込んだ。と、間もなく、轉げるやうな赤い笑聲が花の中から起つて來た。

「まア、あんなに嬉しさうに。」

彼の横で寢てゐた若い女の患者も笑ひ出した。

「ほんとにね。でも、もうあなたも、直ぐあそこをお歩きになれますわ。」と隣りの痩せた婦人が云つた。

「さうでございませうかしら。でも、」

「ええ。ええ、昨日も先生が、さう仰言つてゐられましてよ。」

「あたし、あの露のある芝生の上を、一度歩きたくつて、しやうがありませんの。」

「さうでございますわね。でも、もう直ぐ、あんなにお笑ひになれますわ。」

看護婦達はまた花の中から現はれると、一枝づつ花を折つた。彼女達は矢車草の紫の花壇と薔薇の花壇の間を朗かに笑ひながら、朝日に絡つて歩いていつた。噴水は彼女達の行く手の芍藥の花の上で、朝の虹を平然と噴き上げてゐた。

十二

彼の妻の腕に打たれる注射の數は、日毎に増していつた。彼女の食物は、水だけになつて來た。

或る日の夕暮、彼は露臺へ昇つて暮れて行く下の海を見降ろしながら考へた。

――今は、ただ俺は、妻の死を待つてゐるだけなのだ。その暇な時間の中へ、俺はいつたい、何を詰め込まうとしてゐるのだらう。

彼には何も分らなかつた。ただ彼は彼を乘せてゐる動かぬ露臺が絶えず時間の上で疾走しつつあるのを感じたにすぎなかつた。

彼は水平線へ半圓を沈めて行く太陽の速力を見詰めてゐた。

――あれが、妻の生命を擦り減らしてゐる速力だ、と彼は思つた。

見る間に、太陽はぶるぶる慄へながら水平線に食はれていつた。海面は血を流した俎のやうに、眞赤な鱗を潜めて靜まつてゐた。その上で、舟は落された鳥のやうに動かなかつた。

彼は不意に空氣の中から、黒い音のやうな凶徴を感じ出した。彼は急いでバルコオンを降りていつた。向ふの廊下から妻の母が急いで來た。二人は顔も動かさずに默つて兩方へ擦れ違つた。

「あのう、ちよつと、」と母は呼びとめた。

彼は振り向いて默つてゐた。

「今夜は、キーポ、危いわね。」

「危い。」と彼は云つた。

二人はそのまま筒のやうな廊下の眞中に立ち停つてゐた。暫くして彼は病室の方へ歩き出した。すると、附添ひの看護婦がまた近寄つて來て彼を呼びとめた。

「あのう、今夜はどうかと思ひますの。」

「うむ。」と彼は頷いた。

彼は病室のドアーを開けると妻の傍へ腰を降ろした。大きく開かれた妻の眼は、深い水のやうに彼を見詰めたまま默つてゐた。

「もう直ぐ、だんだんお前も良くなるよ。」と彼は云つた。

妻は、今はもう顔色に何の返事も浮べなかつた。

「お前は疲れてゐるらしいね。ちよつと、一眠りしたらどうだ。」

「あたし、さつき、あなたを呼んだの。」と妻は云つた。

「ああ、あれはお前だつたのか。俺は、バルコオンで、へんに胸がおかしくなつた。」

「あなた、あたしの身體を、ちよつと上へ持ち上げて。窪んだか、谷の底へ、落ちていくやうな氣がするの。」

彼は兩手の上へ妻を乘せた。

「お前を抱いてやるのも、久し振りだ。そら、いいか。」

彼は枕を上へ上げてから妻を靜かに枕の方へ持ち上げた。

「何んと、お前は輕い奴だらう。まるで、こりや花束だ。」

すると妻は、嬉しさに揺れるやうな微笑を浮べて彼に云つた。

「あたし、あなたに、抱いてもらつたのね、もうこれで、あたし、安心だわ。」

「俺もこれで安心した。さア、もう眠るといい。お前は夕べから、ちつとも眠つてゐないぢやないか」

「あたし、どうしても眠れないの。あたし、今日は苦しくなければ、うんとお喋舌したいんだけど。」

「いや、もう默つてゐるがいい。俺はここについてゐてやるから、眼だけでも瞑つてゐれば、休まるだらう。」

「ぢや、あたし、暫く眠つてみるわ。あなた、そこにゐて頂戴。」

「うむ。」と彼は云つた。

妻が眼を閉じると、彼は明りを消して窓を開けた。樹の揺れる音が風のやうに聞えて來た。月のない暗い花園の中を一人の年とつた看護婦が憂欝に歩いてゐた。彼は身も心も萎れてゐた。妻の母はベランダの窓硝子に頰をあてて立つたまま、花園の中をぼんやりと眺めてゐた。もう何の成算も消え失せて了つたやうに。遠くの病舍のカーテンの上で、動かぬ影が萎れてゐた。時々花壇の花の先端が、闇の中を探る無數の青ざめた手のやうに揺らめいた。

十三

その夜、滿潮になると、彼の妻は激しく苦しみ出した。醫者が來た。カンフルと食鹽とリンゲルが交代に彼女の體内に火を點けた。しかし、もう、彼女は昨日の彼女のやうにはならなかつた。ただ最後に酸素吸入器だけが、彼女の枕元で、ぶくぶく泡を立てながら必死の活動をし始めた。

彼は妻の上へ蔽ひ冠さるやうにして、吸入器の口を妻の口の上へあててゐた。――逃がしはせぬぞ、と云ふかのやうに。妻の母は娘の苦しむ一息ごとに、顔を顰めて一緒に息を吐き出した。彼は時々、吸入器の口を妻の口の上から脱してみた。すると彼女は絶えだえな呼吸をして苦しんだ。

――いよいよだ。と彼は思つた。

もし吸入が永久に妻の苦痛を救ふものなら、彼は永久にその口を持ち續けてゐたかつた。だが、此の眼前の事實のやうに、吸入がただ彼女の苦しみを續けるためばかりに役立つてゐるのだと思ふと、彼は彼女の生命を引きとめやうとしてゐる藥材よりも、今は、彼女の生命を縮めた漁場の魚に、始めて好意を持ちたくなつた。しかし、醫師は、法醫學に從つて、冷然としてなほ一本の注射を打たうと云ひ始めた。ただ、生き殘つてゐるもののためのみに。

「いや、いや、」と彼の妻は彼より先に醫師の言葉を遮つた。

「よしよし、ぢや、もう打つのは止さう。」
「あなた、もうあたし、駄目なんだから。」と妻は云つた。
「いや、まだ、まだ、」
「あたし、苦しい。」
「うむ、もう直ぐ、癒る。大丈夫だ。」
「どうして、あたしを、死なしてくれないんだらう。」
「そんなことは、云ふもんぢやない。」
「こんなに苦しいのに、まだあたしを、苦しめるつもりかしら。」
今は、彼には彼女の死を希ふ意志が怨めしかつた。
「もうちよつとの辛抱さ。直き苦しくなくなるよ。」
「あ、もう、あなたの顔が、見えなくなつた。」と妻は云つた。
彼は暴風のやうに眼がくらんだ。妻は部屋の中を見廻しながら、彼の方へ手を出した。彼は、激しい愛情を、彼女の一本の手の中に殺到させた。
「しつかりしろ。ここにゐるぞ、」
「うん。」と彼女は答へた。
彼女の把握力が、生涯の力を籠めて、彼の手の中へ入り込んで来た。
「あなた、あたし、もう死んでよ。」と妻は云つた。
「もうちよつと、待てないか。」と彼は云つた。
「あたし、苦しいの。あなたより、さきに死んで、済まないわね。」
彼は答への代りに、聲を上げて泣き出した。
「あなた、長い間、ほんとに、済まなかつたわ。御免してね。」
「俺も、お前に、長い間世話になつて、すまなかつた。」と彼は漸く云つた。
妻は顋をひいてしつかりと頷いた。
「あたしほど、幸福なものは、なかつたわ。あなたは、ひとりぼつちに、なるんだわね。あたしが、死んだら、もうあなたのことを、するものが、誰もゐなくなるんだわ。」
萎れたマーガレットの花の傍から、彼女の母の泣き聲が、歎聲のやうに起つた。
「キーボ、キーボ、」
「お母さんにもすまなかつたわね。堪忍してね。兄さんにも、宜しく云つて。それから、皆の人にも。」
「ああ、ああ、心配しないでいいよ、もう直ぐ皆の者がやつて來るよ。」と母は云つた。
「あたし、まだ、待たなくちや、ならないかしら。苦しいんだけど。」
「もう直ぐだよ。さつき、電話をかけたんだからね、もう直ぐなんだから。」
「あたし、さきへ死ぬわ。もう、苦しくつて、」
「よしよし、安心してればいい。何も心配しなくてもいい。」と彼は云つた。
妻は頷くと眼を大きく開いたまま部屋の中を見廻した。一羽の鶏が、彼と母との啜り泣く聲に交へて花園の上で啼き始めた。すると、彼の妻は、親しげな愛撫の微笑を洩らしながら呟いた。
「まア氣の早い、鶏ね、もう啼いて。」

彼は、妻の、その天晴れ美事な心境に、呆然として了つた。彼はもう涙が出なかつた

「さやうなら、」と暫くして妻は云つた。

「うむ、さやうなら、」と彼は答へた。

「キーボ、キーボ、」と母は呼んだ。

しかし、彼女はもう答へなかつた。彼女の呼吸は、ただ大きく吐き出す息ばかりになつて來た。彼女の把握力は、刻々落ちていく顎の動きと一緒に、彼の掌の中で木のやうに弛んで來た。彼女は動きとまつた。さうして、終に、死は、鮮麗な曙のやうに、忽然として彼女の面上に浮き上つた。

――これだ。

彼は暫く、その眼前に姿を現はした死の美しさに、見とれながら、恍惚として突き立つてゐた。と、やがて彼は一枚の紙のやうにふらふらしながら、花園の中へ降りていつた。

――キーボ、

――キーボ、

彼は垣を越すと丘へ出た。

――キーボ

――キーボ、

彼は置き忘れられた子のやうに、どつかと草の上へ尻を落とすと、空しい靈を求めて泣き始めた。



明るい人

犬養健

九

碓氷峠に向つて僅かに登り坂になつてゐる町の中ほどの人力溜りで、禎三は藥瓶を下げたまゝ白堊の薄汚い黒板の面を覗いた。それから三日經つてゐた。翌々日といふのを高木が大事をとつて小切れの麵麭をさきに與へ、粥は一日延ばしたのだ。

「六百十五番地、下山。（鳥潟樣內）十時、一臺」と澤山の注文のなかの一つに記してあつた。禎三のゐるところは初めてゞは分りにくいのだ。

「この車、もうここを通つたんですか。二十四五の娘さんです」

「二十四五の——さあ——いましがた迎へに行つたばかりですよ」

藥局へ行つてゐる間に稍々小うるさい[illegible]くぶりの挨拶が濟むやうにと考へてゐた禎三は輕く失望した。彼は兎も角も眞直ぐに家へ戻つて行つた。

ふと今二十四五の娘さんと禎三が云つたのを車夫が怪訝な顏をした事に氣がついて、禎三は昨夜の出來事を同時に想ひ出した。そして彼は二十四五の初々しい娘といふ形容はないものかしらと考へた。松子は世間並みにはそのとほりに觀察されてゐるのだつた。彼は知らず知らず淋しい顏つきをして歩いた。だが松子の幸福な緣談を心から望むことの出來るのは、いま禎三にとつて一つの朗かな幸福だつた。

石を置いた低い山國風な町の屋根の向うに、丘のあちこちの貸別莊の三分の一が日のよくあたる戸を締めて、もう靜かな無表情な狀態に還つてゐた。その同じ眞上からの日が、昨夜このかた何となく心の輕く明るくなつてゐる彼に浸み透らうとしてゐた。

昨夜芳子が娘の眠てしまつた傍でコップのすがれた秋草を捨て、新しい野花を生け、そして下に敷くレースなどを選擇してゐるのを見てゐた禎三は、雜誌を伏せてこんな風に話しかけたのだ。

「おい、お前糸切り齒のところが少し空いてゐるね」そのやうに友達を歡迎しやうとしてゐる妻が彼はいぢらしくなつた。「幼稚な齒だな」

「これ？」妻はすぐに子供らしい八重齒を露はにした。「息を吸うとこゝから空氣が入るのよ。困るわ。」

「秋になつたら直すといゝね。蟲齒になるぞ」

娘のために夜氣を用心して火鉢を入れてあるその部屋で、芳子はさういふ事を云はれるのが嬉しいのだといふ微笑を見せた。

さて。――これを階下へ伴つてと。なかなかうまいでせう」

禎三はその得意な樣子をやはり觀察してゐた。それから彼は訊ねた。

「お前、ほんとに松子さんの來るのが愉快らしいね」

「えゝいけなくつて」

「いけない事はないよ」電燈の覆ひのこしらへる柔かい影が、彼の落ちついた眼に丁度工合がいゝのだ。「でもあのひとのことで俺に時どき矢を向けるのは誰だつたね」

「何云つてるの」芳子は輕くあしらつた。

「お前は妙に單純なところがあるね」禎三はもう一度あらためて妻を視つめるやうにした。「さう鈍感でもない癖に。――どうして昔のとほりにそんなに單純でゐられるんだ」

えゝわたしの級ではさうね、下山さんとHさんとがあなたと氣が合うわ。――昔からの芳子の持つ一つの力を彼は考へてゐた。

「どうせわたし單純なのよ」

「おい褒めてやつてゐるんだよ」

「さう。どうもありがたう」

「何んだ。冗談にしてしまうのら止さう」

禎三は稍々不機嫌になつて、讀む氣もない今しがたの雜誌をとり上げてしまつた。火遊びに似たそのやうな會話を彼は本當のところ、その時欲してはゐなかつた。

「――あなたの云う事分つてゝよ」

芳子ははじめて仕事を切りあげて火鉢の傍に寄つて來た。

「お止しなさいね。愠るの」

鐵瓶が低く沸つてゐた。芳子は良人に向つて子供つぽく振舞ふ時と、二十五に達した母親、良人の話相手、知りぬいてゐる從妹として振舞ふ時とを氣まぐれに使ひわけてゐた。

「お前、俺が要領がよすぎると思つてはゐないかね。狡いとは」今彼女は後者を採つた。

「そんな事思つてないわ」

「お前の間ぬけな性質につけ込むやうだと、俺はどうもあんまりいゝ人間ぢやない」

「そんな事、わたし考へてゐないわ」

「この雜誌を見て御覽。どの邊だつたかな」禎三は今しがた目をとほした頁を搜し出した。「こんな西洋の漫畫が出てゐるんだ。危機一發といふ題だ。二十四になつたこの娘がやつと結婚にありついたところだ。それをこんな繪にしてあるんだ」

彼は瀧の落ち口で、ひとりの娘が流れに枝をさし伸べてゐる樹の上の青年にあやうく助けられてゐる漫畫を妻に見せた。

「これを見てね、俺は何だか不愉快だつたんだよ。――松子さんは二十五だね。――松子さんは結婚に少しづつ不適當な人にならうとしてゐるのかね。俺はそんな風に考へたくないんだ。――俺は正直に云うと、どうも松子さんが可哀想になつて來てゐるよ」

「分つてるわ。――それでいゝのよ」

「それでお前、俺がそんな風に考へるの、厭ぢやないかね」

「厭ぢやないわ」

急に眞面目な話に入る跋のわるさを、芳子は氣の弱い笑顏と低いつ

ぶやくやうな返事とにあらはした。

「どうしてだらう」過度な自己穿鑿を經驗して來た禎三は妻の心理狀態が十分に呑み込めないのだつた。「お前、さうぼんやりといふ風ぢやないのだがな」

「だつてあなたは松子さんにちつとも厭味な應對をしてゐないぢやないの。さうでなかつたら――わたしだつて慍るわ」

彼等は火鉢を隔てゝ稍々淋しい笑顔を見せた。

「あなたなかなか松子さんには潔癖にしてゐるわ」やはり二三年前の自分の心のなかのものを毛ほども感づかなかつたのだ。禎三は聞きながらさう反動的に思つた。――「分つてゝよ」

「さういふ風に解つてゐるんだと有り難いんだ」十二三の頃に一時目立つて十六七にはさうでもなくなつた芳子の稍々長い顎の特徴の痕を、禎三は一方からの光線の工合のためかふと氣がついてゐた。「お前と冗談ばかり云つて暮したくはないからね」

芝居がかつた言葉を避けやうとして、禎三はまだ何か云ひ足りない心持で考へてゐた。火鉢を入れてもやはり冷え冷えする密な夜氣につゝまれて、二人はいま謙遜な穴居動物の一對のやうだつた。だが禎三は從兄妹同志の夫婦のあひだでも或る瞬間にたがひの心の九分九厘まで開いて見せあひ、いとしみあふ事は出來るが、あとの一厘はやはり生きる自衞のためにむづかしいのだと感じてゐた。その冷靜な觀察はさしあたつて妻への愛情を刺戟したが。

「分つてゝよ」と芳子が同じ單純な答を繰りかへしてゐた。「ぢやあ、ほかの人のことを考へて見ませうか。M子さんね（それは彼等が三津へ引込む前によく來た女流文筆家志望の娘だつた。）あの人はわたし厭だつたわ。自分の眼を自慢するやうに、じつと人を視つめたりして。――あの人は何だかわたしの留守に來て貰ひたくなかつたわ。あなたも嫌つてゐたけれども。――それからS子さんは、（これは男のやうに活潑な女流畫家だつた。）あなたの顔に煙草の烟を吹きかけて嘲させたりするけれども、わたし何だかさつぱりして好きだわ。それにあれで素直だし。あの人はあなたと對等の勉强友達だと思つてゐるわ。――わたしだつて用心しない事はないわ。嫌ひな人は嫌ひなんですもの。――でも松子さんは安心してゐるわ。あゝいふ人だし――何故でせう。何だか好きだわ」

芳子は困惑して笑ひ出した。自分に就て解剖をはじめて見て、ちよつと手が着きかねると云つた樣子だつた。

「優越感といふのかも知れないよ。わるい奴だ」

「さあ。――それはの人が縁遠くてゐる事なんぞ、響いてゐるかも知れないわ。でもわたしもつと本當に好きなのよ。校友會でみんなが下山さんはお姉さんの方がはきはきしていゝ人だなんて云ふと、わたしいゝ氣持がしないのよ。それは幹子さんだつていゝ方だけれども。でも松子さんを貶さないでもいゝわ」

禎三は足を投げ出した儘考へ續けてゐた。貨物列車が遠くを通つてゐた。禎三は現在そこで饒舌つてゐる妻が死んで、松子とどこか繁華な街頭で立ち話をしてゐる夢を、最近伊豆で見た事があつた。そして明くる朝一ぱいの陶醉に近い斷れ斷れな空想はその夢についてゞあつた。――人間の頭のなかにはあらゆる雜多なものが住み得るのだ。創

成熟の地球が何もかもごつたであつたとしても、いまゝでの人間の空想を掻き集めたらそれにひどくは劣らないに違ひない。それでこそ生命が宇宙のエネルギイの――惰性のあらはれだと云へるのだ。自分を恥ぢた聯想から禎三はこんな別の事に頭を向けて、知らず知らず不機嫌に似た生眞面目な顔に變つてゐた。

「あの人のことをこんなに褒めるの、わたし達だけかも知れないわ」

「さうかも知れない」

「だから喧嘩も出來ないぢやないの。――なんて嘘よ」

彼は火鉢のすぐ向う側の妻へ動かされた眼差を擧げた。

「お前はどうも性、惡といふはうぢやないやうだね」

「あら今ごろ氣がついたの」芳子はさらに冗談を混ぜた。「えゝ、いつぞや佛蘭西から歸つて來た時に安着のお祝ひ云つてあげたら、松子さん、いま云つたやうな事を書いて寄したわ」

自分たちほど松子の美點をみとめてゐる者はない。――その禎三夫婦のみとめてゐる美點とは根本から人を惡意に眺め得ない點だつた。自分について內氣で謙抑でありながら、また妙に無心で大まかで、自身でけ氣のつかないユウモラスなところのある點だつた。要するに昔のとほりの一種ぼんやりした美しさがその儘そつくり育つた點だつた。

自分たちほど松子の美點を認めてゐる者はない。――この芳子の言想は、松子がいまになるまで獨身でゐるといふ事實で、ある點まで證明出來るやうに禎三には思はれるのだ。少くも禎三はさういふ事を空葉してゐた。だがこの關係は逆に禎三にとつてもほゞ同樣だつた。松子は過去の禎三を知つてゐた。謂はゞ自分を發見した頃の禎三を知つてゐた。自分が自分で發見したばかりの才能や生活力に自足して、それを晴れやかに肯定してゐた頃の禎三を知つてゐた。人と隔たるおそれを生れつき知らないと云つた風の活き活きした禎三を知つてゐた。さういふ禎三をみとめてゐた。松子は禎三の結婚の小さい祝宴に六七人の同級生と列つて、芳子を幸福ものだと批評したのだ。さういふのが松子だつた。成育の眞盛りにあつた松子だつた。その後禎三は彼の心のなかに多量にあつたストイックな好みや、自分の本性に適した生活のたてられない時代の人間に特有な弱氣から好んで自分を厳しく批判した。好んで自分を叱つた。無口になつて行つた。いぢけた。外へ出なくなつた。それは長い曇り日だつた。彼は仲間の友人から「君はまだまだ寶石を持つてゐるよ」と云はれたいに係らず、誰のさういふ援助をも受けまいとした。嗤ふ値うちのある愚かさだつた。だがその間にも、松子は時をりの芳子への便りにいつも芳子を幸福ものゝやうに云ひあらはした。幸福ものゝやうに扱つた。禎三の病氣を禎三にとつて唯一の蹉跌だといふ風に云つて寄したのはやはり松子だつた。それはマルセイユ經由のリオンの繪葉書で來た。海邊の家で芳子が少しでも良人のその日その日に變化を與へようとして讀ませたので、禎三はよく覺えてゐる。そして芳子が感動したのはその點だつた。禎三もまたさういふ松子によつて以前の明るい自分を思ひ出した。彼まで明るくなるのだ。否芳子まで明るくなつてゐる。親類の大半からは法律學でも修めなかつた報いの我儘病のやうに云はれ、始終眼の前に同じ退屈な島の輪廓を眺めたりしてゐると殊更そんな風になるのだ。松子は彼にとつて、生活力を頭から肯定してゐた頃の自分の影だと云つて

もそれほど誇張ではなかつた。彼が松子に出會つた時に、まるで寄宿學校時代の運動家仲間に出會つた場合のやうに、(梶田もその仲間の一人だつたが)昔の屈托のなかつた自分を思ひ出して、自然と今もそのとほり屈托のない氣質になつて見せながら應對する癖のあるのも、同じ理由からだつた。——こんな事は彼の持つ一つの錯覺かも知れなかつた。彼の生活のなかの一つの痴愚かも知れなかつた。しかしその錯覺や痴愚を彼はどうも棄てにくかつた。過誤の多い人生のなかで過誤のなかにも素通りしにくい眞實があると云つても、たゞの警句に終るとは彼には思へなかつた。少くもその錯覺のなかにも彼といふ躓きやすい氣質を育てる力はあるやうに思へた。そして一つの痴愚としても、彼の場合は彼として努力を經て來た痴愚だと云ひたかつた。田舍にとぢ籠り、また田舍からやつと出て來た禎三は八重子のあの食慾のやうな勢で、自分を多少甘やかす吐け口、自分で自分の取り得を眺めなほすに必要な吐け口を激しく貪りたかつたのだ。それは畢竟生物である禎三にとつて謂はゞ生きる力の一部だつた。またさういふ吐け口が生活のなかで入用なほどに彼は健康と自信とに打撃をうけてゐたから。

いま禎三はさし當り、天性明るい人間を二人知つてゐるやうに思つた。芳子と松子と。單純なのか幼稚なのか、兎も角も禎三の性質とひき比べて明るいとは云へるのだ。そして容貌の美しいと美しくないとの差異があり、境遇が物淋しいと充實してゐるとの差異があり、それゆゑ生活に對する抵抗力にもどこか差異が出來てゐるが、そのふたりは互ひに友情を持ちあはせてゐた。激しくは現はさないが長く續いてゐる友情を持ちあはせてゐた。ことに結婚の遲れてゐる事實でそろそろなにかと取り沙汰をされ、何となく舊の友達に逢ふことに氣おくれのしはじめてゐる松子と、ほかのすべての同級生と違つて地味な文筆業者に嫁ぎ、良人と一緒に家に閉ぢこもつて、いつの間にか快活な交際の範圍から遠ざかつた芳子とは、この二三年たがひに感じあふめいめいの目立たない値うちが昔とは違つてはつきりして來たやうだつた。つまり學校のなかでの友達が人生のなかでの眞實な友達に變らうとしてゐた。そして禎三は、そのふたりの友情を亂すだけでも罪の深い事だと感じるのだつた。これが松子への引力をある境以上につのらせまいとする彼の努力に大變役立つのだ。なぜならば彼もその無爲な二三年の間に自信のある性格の強い友達から蔑まれ、相當に移りやすい生活のうつり變りを經驗して來たので、變ることのない友情の美しさや力や値うちを心から識つてゐたからだつた。それは禎三一家にとつて理屈以上だつた。事實だつた。そのあまりにはつきりした事實に拘束されるのを厭つて、禎三は空想の奥底で時をり妻に叛くのだつたが。——

十

町の車夫は間違へてゐた。禎三の家のタオルをまぶしく干してある緣側で、松子はもう芳子と並んで紅茶を飲んでゐた。林の枝々をとほして白い紅茶碗はきらめき、湯氣をたてゝゐた。禎三の靴音で二人は日に向つて一樣に眉を寄せて見せた。

「ほら、今ごろぼんやり歸つて來ましたわ」

改まつて茶碗を置かうとしてゐる松子へ芳子が笑つてゐた。鮮かな笑ひ顔だつた。それは彼女が家庭的な感情をよせてしまつても悔はないほどの、隔てのない客の前でよくやる癖だつた。だが女の客にむかつて氣の利いた會話を輕く投げるといふ方でない禎三は、妻のその機轉のためにいつもいきなり落ちついた居心地を分けて貰へた。この場合も同樣だつた。今さら改まるには一度會つてゐるし、さうかと云つてこの前は子供の病氣にまつたく取り紛れてゐたといふ妙な工合の立場が、それで調子よく救はれたわけだつた。

「松子さんはね、もう足のはう、お直りになつたんですつて」

松子の挨拶を中途で遮るやうにして芳子が云つた。松子は笑つてゐた。

「登山家はどうも危險ね」

松子は笑つてゐた。

「それで、今日はもう御自分の足袋なんですつて」

松子はやはり笑つてゐた。それから松子は氣づいたやうに——寧ろ自身の馴れない應對の堅苦しさをまぎらすためのやうに帶の間から西洋封筒を取り出した。

「これ、兄からのお見舞でございます。番地を存じないものでわたくしのところへ寄しました」

「もうそんなに擴まつたの。八重子も四つの時から大變な交際ね」

「お禮狀を出すより仕樣がないよ」禎三はさういふ子煩惱の妻を振り返つた。だが鉄雄を話題にすることは彼にも不思議に樂しかつた。「お兄さんは今どちらですか」

「大阪へ三四日泊りで參つた筈でございます」

「やはりお仕事のはうですか」

「××新聞の郵便飛行の器械をしらべるとか云つて。でももう歸る頃でございませう」

「いつだつたか、公共會館でお目にかゝつたきりです。ル・メニルを聽きに行つたのですから十一月でしたか」

「十一月の——中頃でございませう。さう云つて居りましたから」

松子がそれを斷定するやうに答へた。暗い凹凸の多い路の落葉の音を禎三は一瞬間思ひ出した。だが彼はその話をいま避けたかつた。

「松子さんはお早かつたんですね」禎三は腰かけながら、好んでまぶしい方へ顏を向けてゐた。「人力の溜りで聞いたらまだのやうに云つて居りましたよ」

「だから、ぼんやり歸つて來ましたつて云つたのよ」

「どういふ譯だ」

「松子さん玩具屋のガラス窓のなかゝらあなたにお辭儀なさつたんですつて。ねえ、二度もですつて……」

「そんなにも致しませんわ」

芳子へは前の儘の笑顏で、禎三には多少當惑を見せると云つた風のあしらひ方を松子がした。

「きつと外から御覽になるとガラスが光つて居りましたんでせう」

玩具屋といふのは町の郵便局の前の奥まつた構への家だつた。その郵便局の屋根の避雷針では百舌鳥が啼いてゐた。丘のあちこちの日當りのいゝ家の戸がもう締る道理だつた。彼はその天邊の百舌鳥を自分

の朝らしい澄んだ――少くとも澄む方へ望んでゐる心持の表象のやうに感じて、氣をとられながら歩いてゐたのだ。――紅茶々碗が一つ增えて再びカタカタと音がたつた。眼の前の日向ぼっこをするやうに休息してゐる松子に、禎三は何の力瘤を入れる必要もなかつた。彼は自分も日向ぼつこのやうな事をして、松子のおつとりしたところに何處か人を暢氣にする作用のあることを感じてゐた。それに五年經つたとすれば禎三も五年だけ壯年の落ちつきに近づいてゐるに違ひなかつた。眼の前の松子はそれだけに何處か老けてゐた。何處か老けて裝つてゐた。老けるといふ言葉が不穩當ならば少くもあの過剩なもの、溢れでゐるやうなものは何處かへ行つてしまつてゐた。先日輕石まじりの庭で存外稚々しい印象をうけたのは、古い柄のを使つてゐる構はない浴衣のためだつた。いま芳子と並んでゐる松子のネルは、二三年前の彼女ならば選ぶ筈のないものだつた。それはもう、持ち主の若さに甘えてそれ自身が樂しんでゐるやうな色と柄ではなかつた。時をり出會つても別に話題といふものが出て來ないので、たゞその眼差や語尾や動作や、そして最後に着物の色などが記憶に殘る禎三にとつては、さういふ變化が殊更はつきり眼につくのだ。それは四歲の子供の母親である芳子のとさほどの變りがなかつた。一年半ほどのうちに松子は翌年繰りかへす事のないかたちの、本當の衣替へをしてしまつたわけだ。大きい變化だつた。なぜもう少しは華やかにしないのだらう、まだ娘の儘でゐるのは松子の責ではないではないかと禎三は腹立たしく思つた。好んで半端なまぶしい方へ顏を外らせてゐた彼も、その沈んだ、地味な、へり下つた、どこか孤獨な色合ひへは時々眼を注いでゐた。彼自身は元來けばけばしい女の裝を好まないのに。

「今日の松子さんのお持ち込みの荷物、それは大變なのよ。本當にわるいわ」

と芳子が良人に訴へてゐた。

「ちつともそんな事ありませんわ」

「でもあんまりわたし達、人騷がせになつて困つてしまうわ」芳子は緣側のすでにほどいた大きい紙包みのなかのものを良人に見せた。だが口ではさう云つてゐるものゝ、彼女は疲れきつたところへ不意の氣安い新らしい手助けをうけた、その快活さを現はさずにゐられなかつた。「これ二重鍋でせう。まあわたしへ下さつたお土産ね。八重子にはぐるぐる廻る電車を下すつたのよ。本當にいけないわ。(實際二階ではゼンマイの時どき空まはりする音が響いてゐた。)――それで八重子の分でせう。それからあれはまあ、あなたへと云うんでせうね――」

「まあ森島さんになんて、云ひませんでしたわ」

松子は耳を赤くして又もや笑ひ出した。笑ひやめてはまた一段低い聲でゆつくり笑ひ足した。

「さう？　ぢやあさういふ事にしませう」芳子も松子に影響されて、快活ではあるが出過ぎない物言ひを心がけてゐた。「兎に角わたしが疲れてゐる頃だらうつて、(彼女は良人に向いてゐた。)――察しがおよろしいのよ。(彼女は輕く松子を揶揄した。)――おかずこしらへて來て下さつたんですつて。うちはずつと罐詰つゞきだつたのね」

「でも芳子さん、姉が大ぶん手傳つたのよ」

松子は今からその料理の有難味を辭退して置くやうな口振りだつ

た。

「さう。お姉さんにもよろしく仰つて置いて下さいませんか」禎三も形だけ改まつて見せた。また實際京子にまで手數をかけることは、あまり大袈裟に過ぎて引け目を感じた。「ふだんはすつかり御無沙汰してゐるのに」

「御無沙汰なんぞ、お互ひでございますわ」

「芳子はすつかり田舎者になつて、外國郵便といふと何だかなほ臆劫に考へるのです。それで彼地へもちつとも御返事を上げなかつたやうですが」

「それはもうお話のついたところよ」松子ならば返事を遲らせても怒らない、から伊豆で良人に横着なことを云つてゐた芳子が困つて遮つた。「それはもうお詫びがかなつたのよ」

「電報のやうな葉書もあげて置くものね」

松子も引き込まれて冗談を云ふやうになつてゐた。

「だからわたしの方は間遠になるわけよ。こつちからはまさかいつも繪葉書といふわけにもゆかないでせう。それに書からうと思ふと書くことが澤山出て來て、結局やめてしまふものね。松子さんはさういふ事なくつて」

「さあ、そんな風に考へておいて下さると都合がいゝんですけれども」禎三の前で松子は時どき思ひ出したやうに丁寧な言葉使ひに還つてゐた。「わたしの筆不精にはもう母なんぞあきれてゐましたわ。それに書くことが要領がわるいと云つて」

筆不精、筆不精といふのはどういふ程度の人のことを云ふのかしらんと、外國住ゐの主婦の使ひさうな白い瀬戸物の食器に眼を向けながら禎三はそんな事を考へてゐた。翅を光らせた蜜蜂が二三羽、その厚ぼつたい蓋の透き間からもぐり込まうと焦つてゐた。それは町はづれにある移動式養蜂場の蜜蜂で、禎三の家の塵埃箱の果物の皮を毎日あさりに集る仲間だつた。塵埃箱に出入することを思ひ出して禎三は瀬戸物を蜂から奪ひあげた。彼の顔いろのうつるその蓋にPeking, なにがしと外人商店の名が録してあつて、幹子の持ち物だつた。

「獨逸人の店ですね。——なにかたつぷり入つてゐますね。芳子が大助かりでせう」

「それはあなたの方ぢやないの。——森島はこの頃ぶつぶつ云つて御飯を食べてゐるのよ」

「何しろ晝と晩とずつと同じでしたから」

「でもお子さんがおわるい時にはどうしてもさうなりますのね」松子は例の大き過ぎる眼をゆつくり芳子へ外らせてゐた。「わたしなんぞも姉の子で覺えがありますわ」

「お姉さんて——」

「九州のよ。——坂井の。あつちは氣候がわるいし弱い子だものですから、家であづかつて、今年から學校へ入れましたの。此處へ連れて來てゐるのよ。母が世話を引き受けた筈なんですけれどもいつの間にかお鉢がこつちへ廻つてしまつて。——それが時々病氣するでせう」

「そんな事、およしなさいよ。松子さん」

「だつてさうは行かないわ。手がないのですもの」

「それでもお止しなさいよ。今からお子さんの世話なんぞ。――わたしのやうな眞似して。あなた世帯じみてしまふぢやないの」

禎三は言葉の調子で停めてゐるのかと聞き流してゐたが、妻の顏を見てその案外眞面目なのに氣がついた。芳子は蜜蜂の小うるさい陽なたにさらした笑顏でそれを紛らせてはゐたが。しかし彼女は自分から無關心に老けやうとしてゐる松子を、しきりと歯痒がつてゐるのだつた。――

階下の陽氣な話聲がいつまでも續くと云つて娘が拗ねはじめたので、結局ふたりは粥の加減を階段をあがつた取つつきの、もとは西洋式に二階に附いてゐた風呂場の跡らしい二疊ほどの洗面場で見ることにした。そこならば娘は時どき手軽に母親に顏を見せて貰へる譯だつた。同時に禎三も例の物置き部屋――引越した日にこほろぎが啼き、芳子が梶田に泊りに來ることをすゝめた部屋に入つて椅子のうへに足を投げ出した。十町ほどさきの離れ山といふ名の小死火山に、二三人づれの白い人影が蟻のやうな緩さで幾組か迂回した徑を登つてゐた。松子と芳子とは七輪の傍でなにか高笑ひしてゐた。「いやあね」とか「相變らずね」とか「まあどうして」とか「そんな事あるものですか」とか云つた芳子の稍々故意に子供つぽい口調から推して、さほど可笑しくもない事を面白可笑しく笑つてゐる樣子だつた。その響き工合でふたりの前の窓がさつぱりと開け放してあることが分るのだ。高木が八重子に許した粥は猪口一杯の米に二十四杯ほどの水といふ割合で、つまり普通の粥の三倍の薄さになるのだつた。語尾を少し高める癖のあるその松子の説明を禎三は日射で熱してゐる窓際――二疊の部屋とは正反對の方向に附いてゐる縁側で聞いてゐた。人生の落ちついた日はとかく平凡な日と共通してゐるのだ。ふたりはまた猪口で汲む小めんだうな水の勘定で大袈裟に面白がつてゐた。扉の透き間から見える彼等はまるで快活な主婦と内氣な主婦とのひと組のやうだつた。そして禎三は、松子がやゝ憐れみを惹く種類の人間になり變らうとしてゐる事實が、彼にとつていまの氣安さの原因になつてゐることに氣がついてゐた。彼はそこに聲を間近く聞きながら當りまへに足を投げ出してゐるのだ。そして彼の前には晴れた日の退屈なほど晴れやかな景色が展望されてゐるのだつた。だが松子が彼の憐れみを惹く――

あまり大きい變化だつた。

ふと禎三は梶田が雜木の間をぶらぶら登つて來るのを認めた。禎三が呼びかけて梶田が手で應じた。しかし梶田は同時に短い視線を階下に外らせてゐた。客のあることを氣づいたのだなと禎三は感じた。なぜならば正面の縁先きには松子の置いた暗碧の洋傘――それだけが洋行歸りらしい好みの洋傘が陽に晒されて、先刻は例の蜜蜂がその飴いろの骨にまで拔け目なくたかつてゐたのを知つてゐたからである。だが梶田はすぐに眼をまた上へ向けた。

「いゝんですか」

「下山さんだ。上つて來たまへ」

しかし階段で足音のした時に戸外のいきさつを知らない芳子が聲をかけた。

「おや、梶田さん。今日は」

「八重子さんはどうですか」

「ずつとまあ順調でなります。お蔭さまよ」

それらの聲を聞いてゐた禎三は梶田がしばらく板の間で立ち留るものと思つて、彼の方から椅子を起きあがつた。ところがもう扉が開いて、梶田がどういふ譯かせかせかと入つて來た。梶田は望遠鏡の筒袋を肩から掛けてゐた。そして正面の眺望のなかの離れ山に眼をつけるやいきなり妙に陽氣に云つた。

「やあ見える」

「何の騷ぎだ」

「さつきニコルと鍋井がピクニックに出かけたんですよ」といふのは梶田が泊めて貰つてゐる米國陸軍大尉とその親友のやはり大學生の名前だつた。「きつとあすこにぞろぞろ登つて行く仲間なんだらうな」

「君は行かないのかい」

「冗談云つちやいけない。片つ方は蘇蘭土の山地聯隊でせう。そこへ鍋井が山岳會員と來てゐるのだからうつかり三人で歩いた日にはひどい目に會つてしまふ。けふは早晝を一所に食はされたんだけれども、僕あ後から行くかも知れないつて云つて御免蒙つてやつた。まあ鍋井の望遠鏡でこゝから醜態を覗いてやらうと思つて」

梶田は窓閾に腰かけたまゝひとりで活氣に溢れて望遠鏡の焦點をあはせ、禎三にも覗かせたりした。

「歐洲戰爭のときの進軍の勢で歩かれては堪らないね」

梶田はそれを大變可笑しがつた。廊下に響くほどに笑つた。

「あいつ、ニコル、細つそりしたやうな身體で實によく食ふんですよ。精力絶倫だ。まあこつちで云へば氣の若さが高等學校の生徒ですね。僕なんぞ到底敵はない」

「仕事が愉快で溜らないと云つた風だね。僕はそこがちよつと好きなんだ」

そのロバアト・ニコルといふ青年士官はラングエイヂ・オッフイサアの官名で日本へ三年ほど來てゐるのだが、年末にはいよいよ本國へ歸ることになつてゐた。その紀念に麻布聯隊の將校室へ歐洲大戰の實寫々眞を額に入れて贈りたい希望で、自作の說明英文を一兩日前に鍋井から梶田を通じて禎三に飜譯してくれと賴んで來たのだ。「わが勇敢なる聯合軍は」——「これ實に毒瓦斯使用の嚆矢にして」——こんなユウモラスでないこともない文章を譯す手間を禎三は實は厭つたのだが、ニコルが大戰當初は牛津の歷史學科に通つてゐて、軍人といふよりは學生に近い若々しさを現はしてゐるところに親しみを持つて引き受けたのだつた。

「あの飜譯文は一體だれが恭々しく臺紙に書くんだね。君かい」

「まさか。引續いた緣故で君に賴むやうな事を云つてゐましたよ」

「僕は御免だ」

「御馳走をして賴んでしまふと云つてゐたつけ。——芳子さんはベイビーが病氣では一所にお招ぎするの、かへつて失禮かしらんて、鍋井に尋ねてゐましたよ」

「わたし？」

と板の間の芳子が引きとつて云つた。

「病人がなくつたつてわたし厭よ」

「なぜです。わりに氣持のいゝやつですよ」

「でも英語の會話なんぞ、それこそ恭々しく御辭退よ。出來やしないわ」

「なに、日本語を毎日四時間づつ勉强させられてゐる男ですよ」

「握手だの御飯の食べ方だのつて御免だわ」芳子はなかなか頑强だつた。「松子さんに急ごしらへに教へて戴いても、どうも追つつかないやうね」

煮物の沸騰して灰かぐらを起させたらしい松子の應酬はよく響かなかつた。梶田は急に口をつぐんだ。しかし口をつぐんでも梶田はそれで部屋の話と板の間の話とのあひだに結び目をこしらへたわけだつた。

「夜あけになると本當にほつとしましたわ。――何だかあたりが明るいともう大丈夫だつて氣になるのね。――それを森島は、さういふ時にかへつて目に見えないで凶い事がありさうだなんて云うでせう――さう云はれると何んだか落ちついて眠てゐる八重子の顔がいつもよりか綺麗すぎるやうな氣がしたりして。――身體を使ふよりもそんな事でだんだん疲れて行くのね」

芳子が娘の重態だつた頃の噂をしんみりとつゞけてゐるのを、禎三と梶田とは此方でもぼつぼつ雜談をしながら、ひとしく前よりも聞き耳をたてゝゐた。

「あら松子さん。まだおぐしの後のはう、灰が落ちてゐなくつてよ。一寸そつちを向いてらつしやい」

「君の天邊にだれか立つてる。あぶない奴だな」望遠鏡を向けながら梶田は遠い距離を持つた物語をたしかめる時のむつつりした貌を見せてゐた。「覗いて見たまへ。ちよつと外國の登山家の寫眞のやうですよ」

禎三がかはつて焦點を合せた。と、板の間でこんな會話が起つた。

「松子さんおぐしのしんをぬいたのね」と芳子が後ろから調べてゐるのでもあらう。「分つたわ。それで何だか妙なのよ。あなたは前の方がやつぱりいゝわ」

「さうでせうか」

「いゝしんをお入れにならないのならそのやうにしなくつちや。――それでおぐしが少し老けて見えるのよ」

「彼地でから變へましたの」

「なぜ」

「いくらわたしだつて帽子はかぶりますもの。いゝしんなんぞ――」

「だつてこつちぢや帽子おかぶりにならないぢやないの」

「いゝのよ。――丁度このくらゐでいゝのよ」

「なぜいゝの」

「だつてちつとは齡にあはせなければ」

「齡、齡つて、あなたお孃さんぢやありませんか」芳子の聲にはさつきから押し隱してゐた不平を爆發させるやうな響きがあつた。「あなた駄目よ! そんな事ぢや。ほかの級のひとを御覽なさいよ。あなたお孃さんぢやないの」

「――わたしそんな事に不精になつたのよ」

「それが困るわ」と芳子はやゝ語調を冗談に戻してゐた。「よくつてよ、わたしが結ひ直してしまうから。前のおぐしあんなにあなたに釣

り合つてゐたぢやないの。いかにも松子さんのおぐしだつたわ。このおべべの色だつて馬鹿々々しいわ。自分に似合ふものをわざと着ないひとは馬鹿よ」

芳子の昂奮が感傷に過ぎるので、禎三は山の崖に飛び出してゐる岩のうへの人物から眼をそらせて、梶田の顔いろをうかゞつた。良人らしい輕い羞恥を感じたのだ。そして彼は同じやうな羞恥が梶田をとらへてゐるのを見出した。梶田は近視眼の人間のするやうな氣むづかしい眼差で離れ山を眺めてゐた。梶田は少し感動すると默り込んでしまふ。寄宿舎で鐵拳制裁をうけさうになつたのもさういふ癖が大ぶん損をしてゐるのだ。だが梶田はすばらしく若い。梶田の感覺は新鮮なのだ。禎三は梶田が人並みな口調で、ニコルの學生氣質を自分なんぞ到底敵はないなどと云ふのが可笑しかつた。

（つゞく）

或女の話

越後新發田で大杉榮君一家と隣合はせに十數年住んだと云ふ或る女が、榮君の生ひ立ちについて面白くものがたれる一節に「大杉さんのお母さんは大阪の粹筋の人で非常の別嬪でお父さんも評判の美男子でした。榮さん兄弟は九人でしたが、お母さんはその世話に手が廻りかねて榮さん兄弟は時々綿の出た衣物を平氣で着ておられるのを見ました。榮さんは小供の時は非常に物柔しい人で弟さんや、妹さんをいたはることが一通りでなかつた。或夜などは一寸前きの見えない暗いところを弟さんや妹さんのために小さな豆ランプを點して菓子買ひに行つたりなどしていました。その人がどうしてあんな恐ろしい社會主義者なぞになつたのでせう、私の家は大杉さんの家とは壁一重のこととて大へん親密に交際していました。私は榮さんの直ぐの妹御とお友達でしたが、私の家に大きな柿の木がありました、その柿の木に登りながら果實をうまそうにむいでいる榮さんの姿が今でもありありと目の前に浮びます、榮さんのお母さんは、子宮病を切開して新潟病院であえなく果てられましたが、そのときの榮さんのお父さんの嘆きと病院に對する憤怒は一通りでなく、新潟病院を對手取つて訴へたりなぞされました。今では新潟病院がどんな名前で存在していますかそれさえ私は知りませんが、當時大隊長か何かの役目であられたお父さんの面影もハツキリ思ひ出せます。その後、私の家ば或事情ありて北海道に移り住みましたが吹雪に暮るる新發田の夜を懷ふたびにそのかみがなつかしまれます、一番妹さんのあやめさんは赤ん坊のときだけしか知りません、新發田の溝口さんの城があやめ城と申しますからあやめと名前をつけたと仰有つたあのとき、お母さんの愛嬌のあるお姿をも思ひ出されます。私が十六、七のとき榮さんは名古屋の幼年校へ合格したと勇ましく新發田を發たれてから一度もお逢ひしたことはありません――……或る女は現に東京で看護婦をしている。そして四十を一つ位越しているだろう……さびしい姿の人のいゝ女である。



老彫刻家の道徳心

武者小路實篤

老いたる彫刻家は若いモデルをつかつて仕事をしてゐる。仕事はほゞ出來上つた。

老いたる彫刻家は自分の作品を見た。そして滿足したやうに微笑した。彼は見てゐる内に作品を愛しないわけにはゆかなかつた。そして作品を通して又モデルを愛しないわけにゆかなかつた。

實はその反對かも知れなかつた。

彼は今六十八であるが、彼は彫刻をやりだして今になるまで、今度のモデル程美しいモデルを見たことがないやうに思つてゐる。しかし彼はいつでも仕事をしてゐる時、モデルの美しさに驚嘆しないことは稀であるが、今度は殊に驚嘆したやうに自分では思つてゐる。

見れば見る程完全で、不思議な美しさが感じられてくる。それは實に一寸した曲線のむすびつき、凹凸の關係なのだが、其處に無限の味のあることに感心しないわけにはゆかなかつた。そしてその無限の味は部分にも全體にも一種特別な優しさをたゞよはしてゐた。完全した女性、彼はそれをこのモデルの身體で初めてぶつかることが出來たやうに思つた。

彼は一通り作品を見て滿足してあらためてモデルを見た。そして兩方を丁寧にもう一度見くらべた。彼は段々不安を感じて來た。

モデルに比較するゝ自分の作品は單調に見へて來た。彼はそれが何處からくるかはつ切りしなかつた。其處で彼は默つてモデルと作品とを見くらべてゐる内、段々あはてゝ來ることを感じた。なぜこの秘密がつかめないのだ。

若いモデルは老彫刻家を崇拜してゐた。モデルは自分の身體が、實に美しいものとして其處に形をとつてあらはれたのにおどろいてゐた。彼女はそれ迄に二三の彫刻家や畫家のモデルになつたことがあつたが、それ等の人のつくつた畫や彫刻を見ると自分の肉體に愛想をつかさないわけにはゆかなかつた。

ある時はたゞ肉のかたまりにすぎなかつた。ある時は貧弱そのものであつた。ある時は血がかよつてゐなかつた。しかもどれも自分に似てゐた。自分としか思へなかつた。しかしこの老彫刻家の仕事をするのを見てゐると不思議に自分の肉體はかゞやくものになつてくるのだつた。生きて來た。自分で氣がつかなかつた若々しさや美しさや、優美さが、不思議に自分の身體からかゞやき出した。モデルは藝術家によつてから感じがちがうものかと思つた。そして自分の彫刻が出來

上るのがうれしくつて仕方がなかつた。自分の肉體は完全した美をあらはし、人々の心をひきつけないわけはないと思つた。自分の美を自覺した女の滿足が、彼女の心を占領した。

彫刻家は自分の作品の背中に手をおいて暫く手のひらの觸覺を味はつて見た。そして彼は遠慮しながらモデルの背中に自分の手をあてゝみた。老彫刻家もモデルも默つてゐた。しかし老彫刻家の態度は何か神聖なものにふれるかのやうな態度だつた。

モデルは背に大きな手の平が靜かにおかれるのを感じた。それは實にかるくではあつたが、老彫刻家の手のひらの筋肉が動くのが感じられた。老彫刻家は目ではモデルの身體の神秘が味覺出來なかつたのだ、それで今彼は自分の手のひらの觸覺でその秘密をさぐり出さうと思つたのだ。

老彫刻家は一分近く手のひらをモデルの背の上にのせて居た。そして又自分の彫刻の上にシワだらけの手をおいた。そして何か感じたやうに目ではみえない程ある處の土をけづり、他にそれをおぎなつた。そして又手を彫刻の上におき、そして又モデルの背中に手をおいてみた。全心の笑が彼の口のわきにたゞよつた。

彼は又歸つて彫刻の上に手をおき、さらにみえない程の土をけづつた。そしてモデルと作品をみくらべた。彼はつぎに作品の左の腕を手ににぎつてみた。そして又モデルの同じ處をかるく握つてみた。

モデルは段々冷靜をうしないかけて來た。身體がさむけをしてくることを感じた。しかし老彫刻家の仕事を尊敬するモデルはそれを靜かに耐えた。しかし彫刻家はモデルの身體のふるへを感じないわけにゆかなかつた。

老彫刻家はあはてゝ手をはなした。そして彼は又彫刻の方へ歸つた。しかし彼は作品の左の胸をいぢつてみるだけで、何にもしなかつた。

その時、モデルは老彫刻家の目がぬれてかゞやくのをみた。そしてモデルは自分も泣きたいやうな氣がし、涙ぐんで來た。

老彫刻家は默つて作品とモデルとをみくらべて少しづゝあらゆる處に手を加へはした。しかしモデルの身體にさわらうとはしなかつた。

彼はさわりたいのは山々だが、モデルの若い純粹な心をふみにぢる勇氣はなかつた。

モデルはさわつて下さつてもいゝと云ひたかつた。しかしモデルもさう云ひだす勇氣はなかつた。

老彫刻家は思ひ切つたやうに、仕事をへた。そしてモデルに感謝した。

モデルは

「あしたも來てよろしいか」と云つた。

老彫刻家は暫くだまつて考へて居たが、

「暫く休みませう」と云つた。

もうこの上仕事をやるには手のひらの觸覺よりたよりにするものはないのを老彫刻家は知つてゐた。そしてそれは許されないことのやうに思へた。又よし許されたにしろ、その時は女の肉體は神聖な姿をくづさずにゐられるか、どうか、彼は疑はないわけにはゆかなかつた。

老彫刻家はまもなく一寸した風邪がもとで死んだ。

それから二三十年後である。

その彫刻の所有者が、その彫刻の背をさすつた。その所有者は天才ある若い彫刻家であつた。彼は不意に涙が出て來た。彼はその背の觸覺に驚嘆したのだ。不思議な生々した感じをうけた。彼は他の部分にも遠慮なく手をふれた。しかし其處には彼の求めるものはなかつた。彼は又背にさわつてみた。前の感じは迷ひではないかと思つた。しかし背の觸覺は依然として彼をおどろかし、よろこばした。

永遠女性と云ふものはから云ふ感じではないのかと彼は思つたほどであつた。

彼はこの感じが他の場所でも味はへたら、この作者は何と云ふ恐ろしい作者だらうと思つた。そして作者の力が其處までおよばなかつたことを嘆じた。

彼はその作者の道德性と、處女にたいするあはれみとは感じることが出來なかつたのだ。

(二六、一二、三〇)



暗夜行路

志賀直哉

「釣込まれるものか」彼に思つた。

實際彼には今、其所に坐つてゐる直子の姿は眼に入らなかつた。何所からか凝つと自分を見据えてゐる運命の惡意だけが感じられるのだ。

漸く、彼の意識は直子の上に還つた。彼はまるで蛻脱の殻の直子を見た。それは現在使はれてゐる傀儡ではなく、既に使ひ捨てられた傀儡だつた。

「おい」謙作は聲をかけた。直子はきこえなかつたやうに眼さへ動かさなかつた。只呼吸と共に圓い肩と胸とが靜かに高まり、沈んでゐた。

暫くして、謙作はこんな事を云ひ出した。

「此事は兎に角、總て私に任せて呉れ。お前はそれを打明けたといふ所で、する事は濟んだのだ。それで、あとは私一人で、どうか解決する。お前がそれに今後も出て來るのは邪魔になる。若し未だ隱してゐる事があれば云つて貰はないと困るが、それがなければお前はもう退いてゐて呉れ。俺はその事でお前を憎みはしない。それでいゝだらう。」

「…………」

「お前も知つてる通り私はこれまで、さういふ事で祟られて來た。それだけにさういふ事には俺だけの特別な考へ方や感情がこびりついてゐる。矢張り自分流儀で解決するより仕方がない。なまぢつか人は入らない方がいゝ。分つたね？　私は本統にお前を憎みはしない。お前を自分の一部だといつも思つてゐるのだ。これは二人の上に降りかゝ

六

謙作は勿論、此話をその儘に聴いたのではなかつたが、それが彼の最も恐れて居た事だけに打撃は大きかつた。自身の暗い出生、それから苦しめられぬいた擧句、漸く直子との結婚で幾らか生活に曙光を認めたと思ふと、又、此不意な出來事で彼は一時は全く打ちのめされたやう感じた。直子に打明けられた瞬間、彼は身心一時に不思議な硬直を覺え、

「人生が若しさう云ふものなら、これからは其氣でつきあふばかりだ」自棄な氣持からそんな事を思つた。不思議にその事だけで自分を呪はうとする運命の惡意に對し、彼は寧ろ反射的に身構えをしないではゐられなかつた。要も直子もその傀儡に過ぎない。それを使ふものが自分には敵なのだ。

つた災難だ。お前の罪だとは思はない。過失とは思つても罪とは思はない。全く災難だ」

「…………………」

「俺の云ふ意味は分つたらう？」

「…………………」直子は物憂さうに細くした上眼を的もなく据え、返事をしなかつた。謙作は不圖、これは直子は氣が違ふのではないかと云ふ不安に襲はれた。彼は思はず語氣強く云つた。

「頭が變になつてやしないか。氣持を確り持たないといけないぜ。俺の愛情を疑つちやあいけないぜ。おい．はつきり返事をしないか」

此時、直子の顏には凍りついたものが僅かにゆるんだやうな一寸した表情が浮んだ。それで謙作は漸く安心した。

「よし〳〵。分つた。然し、いゝ加減にしないと疲れる。疲れていゝ事は決してない。お互に不愉快な事はなるべく忘れて……。さうだ。何しろ惹込まれて馬鹿を見るのが一番いけない。起つた事は仕方がない。逃げてばかりゐるのも悪いが、拘泥つてそれにひき廻はされ、不幸になるのが一番馬鹿氣てゐる。分つたね。氣を靜めて、もう眠るやうにしよう。そして明日二人で直謙の墓参りをしよう。暫く墓参りをしなかつた。お榮さんも行きたがるだらう」

直子は急に烈しく泣き出した。泣きながら咽ぶやうに何か云ひ出した。早口でよく聽きとれなかつたが、謙作は、

「よし〳〵。もうよろしい。よろしい」さう云ひながら、自然な心持で、揺れ動く直子の頭を自身の胸に抱きしめてやる事が出來た。

嵐の蒸々した氣候はその前ぶれだつた。謙作は明け方になつて軒に雨の音を聽きながら漸く眠つた。そして翌日午近く眼を覺ますと、雨は止み、曇り日のまゝ烈しい南風が吹いてゐた。彼は重い頭で前夜の事を悪夢のやうに憶ひ浮べた。彼は起きて直子やお榮と顏を合はせる事が甚く重荷に思はれた。直子の寢床は奇麗に片づけられてあつたが、家の中はしんとして、まるで人氣がなかつた。暫くすると遠く臺所の方から、三和土の上を高下駄で歩く仙の足音が聽こえた。

彼は起きて寢間着の帶を〆直しながら縁へ出て行つた。庭へ向いた硝子戸には未だカアテンがひいてあり、彼はその裂け目から戸外を覗いて見た。庭木は未だ何れも支へ丸太がしてあつて、それが風に揺られ、キシ〳〵と音をたてゝ居た。彼は背を丸くして、お榮が一人草とりをしてゐる姿を見た。

縁傳ひに茶の間へ行つて見たが直子はゐなかつた。彼は勝手へ行き仙に訊いた。

「何やお頭が痛むたら云ふて、休まはりましたえ」

「奥の部屋か」

「へえ」

「飯は食つて寢たのか？」

彼は玄關の間を抜け、その部屋へ行つた。直子は夜着に顏を埋め、よく眠入つてゐた。彼はそつと夜着の襟を上げて見た。汗ばんだ赤い顏は發熱でもしてゐるやう思はれた。が、額へ觸るとさうでもなく、只、如何にも疲れた風で、そんな事をされても直子は少しも知らずに眠つて居た。

茶の間には麵麭と紅茶が用意してあつた。

彼は庭のお榮に、

「此方へ來てお茶をあがりませんか」と聲をかけた。お榮は默つて起つと、兩手をひろげて下げ、腰をのした。

「直ぐいらつしやい」

「お榮は勝手へ廻はり、手を洗つて入つて來た。

「直子さんどうなの？」

「熱はなさゝうだけど」

お榮が前夜の事を何とは知らず、心配して居る事は分つて居たが、謙作はそれを口にする氣はしなかつた。

「こんな日に草とりなんかしなくてもいゝのに」

「今朝方降つたんで、よくとれるから」

お榮とかうして紅茶を飲むのは久しぶりだと思つた。彼の過去はそれ自身決して樂しいものではなかつたが、淡い氣持でそれらを憶ひ出すと、お榮に對しても、その時代に對しても親しい心持が湧いて來た。

「あの便所の前に植はつてる木は珍らしいのね。東京の方にはない木でせう？」

「あるでせう、庭木としては。あれは樫ですよ。此邊の樫はみんなあれだけど、さう云へばあの葉の小さい樫はこつちでは見かけないやうだな」

暫くして、謙作は、

「今日一緒に墓參りをする筈だつたが、駄目だから出掛けます。若し直子が少しでも病氣のやうだつたら、仙に云つて、醫者を呼ばして下さい。只、疲れただけだらうとは思ふけど……」

から云つて出て行つた。



善魔

長篇「安城家の兄弟」の一部

里見弴

一の一

「貴方、あたし知つてる？」

卓袱台を隔て丶眞正面の席から、いきなりから聲をかける女があつた。――煙草の煙と酒の香に、濁り霞んだ空氣には、誰の口から出たとも知れない言葉が、綾を織り、搔い潜り、衝き當り、爆け飛び、斷片になつて、わけのわからない騷音の渦を巻かせてゐたが、そのなかを、なんの苦もなく、それだけが、すうツと眞直に昌造へ來た。

「知つてる！」

ためらはず答へたが、一度も逢つたことのない女だつた。たゞ、眞中から分けた大きな束髮と、跳つ返り娘でも好みさうな華美な一重羽織の色とが、（あれだな！）と思はせたのだ。それも、訊かれた咄嗟の謂はゞ出來心で、その女がいつからそこに來て坐つてゐたか、昌造の醉ひ痴れたあたまには、ほとんどそんな覺えさへなかつた。

「ぢア誰？」

「名前は忘れた。繪を描く人だ」

四五年前に、北といふ先輩の小說家が、ちよつとのま好きだつたらしく、時折噂に出るのを聞いてゐただけで、別段そんな突飛な髮でも結ひさうだとか、さういふ色合の羽織でも着さうだとか、想像で見當をつけるほどの豫備智識があつたわけではないのだけれど、なんとなくその藝者に違ひないと直覺された。よく一時代前の女の子が描いたあね樣、あれのいくらか進步したくらゐの筆致で、元祿美人の横向の立姿を幇間の羽織の裏に見せられたことがあり、それの作者が矢張り同じ人だつたので、名を忘れた償ひの氣持からも、取り敢ずその特徴を指して答へたのだ。

「さう！」

子供が、どこかで憶えて來たばかりの謎か何かを云つて、父親に正しく解かれた時のやうな、盈るところのない滿足をもつて、その答へが許し諾はれた。

「よく知つてるだらう！」

昌造も嬉しく笑へた。見かけよりは、心持で好きになれさうだつた。が、では名前を訊かう、でもなく、すぐまた大勢ごつたの會話に

立ち戻り、まぎれ込んで了つた……。

正座に昌造、並んで同年輩の作家、畠山がゐた。この二人は、夕方から近くの座敷天麩羅でいゝ加減飲んだ擧句に、前から案内をうけてゐたこの沖津といふ待合へ來て、それからは、主人役の好みに任せて生のまゝのウヰスキイでコップの献酬を始め、その把手のついた陶器の瓶を、見る間に一本からにして了つたのだから、よほどもう怪しかつた。歌川は、女形とも思へない大きな膝を片胡座に組んで、拔目なく一座の活氣をあほりたてゝゐた。その下に、どうしても片腕は懷から出せない講釋師が、酒のためにます／＼蒼白み、紋服の肩を聳かして、場合によつては一席辨じさせやうと思つてつれて來た贔屓客の歌川をさへ、隔のない大聲で喋りつけた。華美な羽織を着た女は、その間に小さく挾まれてゐたが、時々講釋師が、手首のない方の肩を揺りつけながら、そろ／＼呂律のまはらなくなりだした卷舌で、頻と何か話しかけるのを、藝者らしくもなく、困つたやうな顔をして、どうやら切りぬけてゐた。昌造には、それもいゝ感じで眺められた。どつちも初對面の、その講釋師も、藝者もよかつた。……間もなく、その女はゐなくなつた……。

誰だかが來て、階下の座敷に、川崎が來てゐる由を、昌造にだけ知らせた。川崎といふのは、若手ながら名の聞えた歌舞伎役者で、無理に頼まれて、昌造は、生れて肇ての脚本を、その男にはめて書かされたりした緣故から、わりに親しく交際つてゐた。つれは、と訊くと、日頃川崎を贔屓にする醫者が二三人で、會つたことはないが、いづれも耳に馴染んだ名前ばかりだつた。

酔ふと、ぢつとしてゐられなくなる性の昌造は、いつの間にかふらふらッと廊下へ出て行つた。出會頭に、ちよく／＼逢ふ若くて美しい藝者が、

「あら、いらつしやい」

「なんだい、丸髷なんぞ結やアがつて」

と、肩へかけやうとする手を把つて、

「大へんねえ！……どこ？　おしも？」

「新婚旅行だ！　一緒に行かう！」

「いやよ！」

「來いよ！　一體、丸髷なんて生意氣だ！」

「あら。だつて、二十五日ですもの。」

「二十五日？　なんだい、二十五日なら天神様ぢアないか」

「二十五日會！」

「しやらくせえ！　何が二十五日會だい！」

「大へんな虎ね。……一體どこに行くつもりなの？」

「新婚旅行だ！　かうやつて手をつないではいつてつて、ひとつおどかしてやらうぢやないか、ねえ！」

「だつて、どこイ行くの？」

「どこだつていゝよ！」

「あゝ、川崎さん……」

「なんだ、今まであつちにゐたのか」

「えゝ」

「ぢアなほいゝ！　今度は御亭主と一緒に來ましたつて……」

「いやアよ！」
めちやくちやに醉つてゐながらも、有繋に一人ではいりにくかつたのだ。無理に、小なみといふその若い妓の手を把り、肘を組み合せて、招かれもしない、而も未知の人の座敷に闖入した。
と、第一に目にはいつたのは、足かけ四年ぶりのわか子だつた。
(作者註。――これは、この長篇のもつと前の部分に出る、春江といつて、昌造が三年間うち込んでゐた同じ土地の藝者の實妹である。春江は、突然昌造から離れて他へ嫁入つてゐる。だから、順を追つて書いて來てゐるとすれば、讀者には、これ等は既に馴染の深かるべき筈の人物なのだ。)
「反つた！」
小なみと腕を組んで、そこに突つたつたまゝ、昌造は、さも冗談らしく、言葉どほり仰天してみたが、その實、何か重たいものが、グン！と胸へぶつかつて來た感じだつた。
が、そのあと、有名な博士たちの前に、いきなり大胡座で坐り込んで了つてからのことは、昌造に、なんの記憶も殘つてはゐなかつた。
……玄關に川崎を送り出しながら、うしろからその猫背を叩いて、
「おい！　洋服なんぞよせよ！　みつともねえ！」
など〻、頻とその業態に似合はしからぬ身なりを譏してゐたやうな氣はする……。
……いつの間にか、前の二階座敷の、今度は隅つこの方で、わか子の胸にかぢりついてゐる自分自身を意識した時に、昌造は、
(こいつはいけねえ。惡くすると、これア今夜は泣くぞ！)
と思つた。酒の廻り具合で、どうかすると矢鱈に涙もろく、謂ふところの泣き上戸になる癖も、まだぬけきれなかつた。
「おい！」
平氣で、ほかの女と何か話し込んでゐるわか子の體を搖ぶつて、「おい！　おい〳〵おい〳〵、おわかちやん！」
「はい、はい〳〵はい〳〵、なアによ！」
「なんにも云ふなよ！」
「ふゝゝふん」
と、丸味のある鼻聲で笑つて、「なんにも云つてやアしないわ―」
「云ふなよ、云ふなよ！　うつかりなんか云ふと泣くぞ！」
「あんたこそ……」
「だけど、つまんねえなア」
「そーら！」
「やつてる、やつてる！」
歌川が、振り向いて、好意のある笑ひ聲をたてると、すぐまたくるりと、彼方を向いて了つた。廣い肩幅で、帛山や講釋の貞城から、昌造たちを蔽ひ隱すやうな位置に尻をいざらせたのが、感傷的になつてゐる昌造には、身にしみて嬉しかつた。
(嬉しいといふやつが曲者なんだ。これア、惡くすると今夜は泣くぞ……)
……そのまゝわからなくなつて、その次に自分をとり返した時には、新聞紙を敷いた金盥を半分頭に被つて、ぢかに疊の上にへたばつてゐた。まだがや〳〵人聲はしてゐたが、わか子はどうしたらうと、

あたりを見廻すでもなく、安い紙の匂ひから顏を遠ざけながら、そこに汚いものが出してないのに氣を樂にした。と思ふと、又嚔ひが出て、

「ハックショイ」

年増の女が振り返つて、

「しイさん、どうなすつて？」

「鼻の穴から、御飯粒が飛び出しやアがつた。どうれで、いやにむづ〳〵すると思つたよ」

「いゝね」

と、歌川の聲で、「布團を被つて、鼻から飯粒を飛ばしてるなんざア、よッぽど愛嬌があるね」

「やつてる者の身にもなつてみろよ。なか〳〵愛嬌どころの騒ぎぢァねえや」

で、そのあとをまた、昌造は、翌朝までなんにも知らなかつた。浴衣で、ちやんと寢床にねかされてゐた。もう電燈は消えて、雨戸の隙から、白ッぽい光がさし込んで來るだけの薄暗さを、一體こゝはどこだらうといふ、不安な氣持で見廻した。有難いことには、どうやら昨夜のまゝの部屋らしかつた。

けれども宿醉の胸の重さから、すぐ昨夜の有様が思ひ出されると、毎々のことながら、矢つ張り、馴れて平氣ではゐられなかつた。もう何百遍といふほども繰り返した泥醉の翌日の自己嫌惡に、忽ちつく〳〵も顫へ、頸筋からぞう〳〵と鳥肌だつほどに氣が滅入つて了つた。一番わるいことは、ところ〴〵、まるで梯子段から足を踏み滑らしたやうに、ぴたりと記憶が杜絶えて、その間の自分の云つたり仕たりに、少しも自信のもてない點だつた。招ばれて來てゐた川崎は別として、一見の識もない博士たちの座敷に闖入して、どんな傍若無人な振舞をしたか。それはまだいゝとしても、一番やりきれないのは、わか子の胸に顏を埋めて、甘ッたるい泣言を並べたてながら、しく〳〵鼻でも啜つてゐたとしたら……。

「うーん、うん！　あ、あゝゝあア」

その考へをぶち毀し、なんとか氣持を轉じやうと、思はずそんな唸り聲をたて、ゴロリと寢返つてみたが、それくらゐで誤魔化しのつく胸苦しさではなかつた。おまけに、この沖津といふうちは、川崎に招ばれて、前に二三度來たことがあるきりで、女中に知つた顏もなく、主人役の歌川が一緒に泊つてでもゐるのなら格別、一人おいてきぼりを食はされたのでは、今朝の寢起だけでも、いかにも器量がわるく、引込のつけやうがなかつた。一體昌造は、友達と一緒に遊びに行くのは好きだつたけれど、ひとに招ばれて、——かういふ場所の、所謂「おんぶの客」となることは、あんまり嬉しく思はない性だつた。それも、先にたつとか、おそくも主人役と一緒に歸つたのならいゝが、どろ〳〵に食べ醉つて、一人取り殘されたとなると、昨夜の威勢はどこへやら、こそ〳〵と肩をすぼめて、朝の待合を出るのも氣が利かなすぎるし、さうかといつて、むかひ酒であつさりなんか食つて歸るやうな寸法も、まさかそれだけを別勘定にしてくれとも云へず、招んでくれた人に對しては兎も角、待合の手前、いかにも圖々しいやうで可厭だつた。

地盤のわるい溜池の通りを、地響たてゝトラックが走つたり、盛にもう電車も動いてゐたが、廣い家内は、しんかんとして拂塵の音も聞えては來なかつた。

「あゝあ、あア」

内腿のあたりがモゾ〱して、居ても立つてもゐられない氣持だつた。またしても氣になつて來るのは、わか子の一件で、あすこまで行つたからには、きつと春江のことを云ひだしてゐるに違ひない。云へば、やたらに誇張された感傷から、惡くすると、これア、とても二度とは顔を合せられないほどの醜態を演じてるぞ、と思ふと、一時に世の中が暗くなつて、たて續けに出るのは、酒臭い溜息ばかりだつた。

二度寢をして、寢坊な女中たちの起きるのを待つどころの騷ぎではなかつた。腫れぼつたく、シパ〱と痛みながらも、安らかに合はさりさうもない眼瞼を無理に閉ぢ、薄い麻の掛布團のなかに手足をちゞこめて、宿醉の胸の惡さと、うづくやうな自己嫌惡とを、ちよつと突けばすぐガチャ〱ンと來さうなビードロかなんぞのやうに、そうツと目の前に見詰めてゐた。

……そのまゝで、やがて小一時間もたつたかと思はれる時分に、やつと雨戸を繰る音がしだした。先刻から、幾度か押さうとしては躊躇してゐた枕もとの呼鈴を、それで、たうとう思ひ切つて押した。はいつて來たのは、あんまり幅の利きさうもない、若い女中だつた。

「一體、いま何時頃です？」

「まだお早いんで御座いますよ」

「起きちアいけないかしら？」

「はア……」

「今から起きて、ばた〱させるのも氣の毒だな。……三平のやつ、まだとても起きやアしまいね」

（作者註。——これは、八年も前から、昵懇といふより、むしろ友達のやうな氣持で交際つて來た幇間で、前の部分でいろ〱重大な役を勤めてゐる。）

「お師匠さんですか？ さア、とてもまだ……」

「うーん。……弱つたなア……」

「でも、ためしに、電話で訊いてみませうか」

「あゝ、さうしてくれないか」

かうなつては、たよりになるのは三平ばかりだつた。昨夜、座敷天麩羅から一緒で、洲崎に來てからは、よその座敷へも廻つて、ずツとゐつきりにそばにゐたわけではないけれど、樣子を訊いて、一番正直に話してくれさうなのはその男だつた。醉つてなんの憶えもない間のことを、あとでいろ〱洗ひあげられるのは、辛いには違ひないけれど、それでも、かうだらうかあゝだらうかと、不氣味な想像で惱まされてゐるよりは、——氣になる醜の出來物を、ひと思ひに押し潰して了ふやうな、痛さの快感もあつて、よつぽどましだつた。それで、先刻から、兎も角三平を呼んで昨夜の一什一伍を聞き、なんとか引込のつけやうも相談しようと思つてゐたのだ。

女中は、布團の裾の方を廻りながら、

「おあけしませう」

「あゝ。……でも、どんな天氣だい？」

「いゝ。お天氣です」
　思はず溜息になつて、
「あゝあ、やりきれないなア！」
「ぢア、もうちつとかうして置きませうか」
「うーん」
　弱りきつた氣持から、そんな些細なことでも、きつぱりとはきめられないで、たゞ曖昧な唸り聲をたてた。
「昨夜は……」
　あとが笑ひ聲になつて、「大へんな御機嫌で御座いましたわねえ」
「さうかねえ。なんだか、まるつきり憶えがないんだ」
「お召物をおぬがせするのに、重くつて、みんなよつてもう……」
「おーや、おや」
「ずゐぶん骨が折れましたわ」
「御免々々！　もう、お澱しつこなしさ」
　戸袋のそばから笑つて、
「どういたします？　少しづゝすかすくらゐにして置きませうか」
「あゝ、ほんの少しね」
　三平が來るまでには、どんなに早くつても、まだ二時間やそこら間がありさうだつたので、――それに、胃のうしろから腰へかけて、消化不良の凝が、背柱の兩側に、鐵のボートでも入れられたほどぎこちなく突ッ張つてゐたので、時間つぶしなり旁々、按摩をよんで貰はうと思ひ、雨戸をすかして出て行かうとする女中を呼びとめて、それを云つて賴んだ。

　九月末の朝風が、冷たく、爽に流れ込んで來た。どうやら目前の處置だけはついたので、苛立しい胸の間もいくぶんさがつた氣持で、昌造は、雨戸の彼方の青空に、ぼんやり眺め入つてゐた。
　ほどなく、女中に手をひかれて、盲目の女按摩がはいつて來た。わりに上手で、よくつぼに指がかゝつた。
「うーん、それだ〳〵！」
　顏をしかめながら、逆に背の方からも押し返すやうにして、「どうだい、はつてるだらう？」
「えゝ、なか〳〵……」
「飲みすぎだ。肩より、胃のうしろから腰の方を……。あゝ、そこ〳〵！」
「旦那のは、いつでもこゝにきまつてますから……」
「へーえ。揉んで貰つたことがあるかね」
　春江と別れてからは、この土地にはめつたによりつかず、現に昨日も、上京して來れば必ずそこを宿屋と心得て、幾日でも氣安く寢泊りしてゐる日本橋の待合、濱村から出かけて來てゐる人だつた。こゝ四五年といふもの、この土地で按摩をとつた憶えなどなかつた。――で枕の上で首を捻向け、按摩の顏を見あげながら、「違ふだらう。誰か人違ひをしてやアしないかい？」
「ずゐぶん久しく御療治いたしませんでしたけれど……」
　いかにも盲目らしい片意地と落つきとで、
「松川家でしよつちうなにいたしましたから……」
（作者註。――春江と逢つてゐた待合の名だ。）

「あゝ、さうか？」
掏摸になつて、敵地にでもゐるやうな心細さに、それは、懷しく嬉しく響いて來るひと言だつた。「ぢア、君は、……えゝと、なんとか云つたな。……えゝ、なんだつけか、……あゝ！　お鐵ッさんだつたかな……」
「えゝ、さうです」
按摩も嬉しさうだつた。
「あゝ、さうか！　ふーん、ずゐぶん久振りだつたね」
「今でも、時々旦那のお噂が出ますよ」
ちよつとてれて、
「先生もおかみさんも達者かね？」
「えゝ、おかげさんでまア……。たゞ今は、旦那は……？」
「うん。田舍にひッこんぢやつた。逗子にゐるんだよ」
「さうですか。どうれで、ちつともお見えがないと思つてました」
「でも、よくわかつたねえ」
「それア、一度でもお體を摑ませて頂きました方でしたら……」
「さうかねえ。えらいもんだなア」
「松川家さんもやめてお了ひなさいまして……。女將さん、今どちらにおいでゞせう」
「つい半年ばかり前までは、鎌倉に來てゐたんだがね、この頃またこつちに歸つてる。どつか、青山六丁目だかにゐる筈だ」
「さうですか。女將さんも、ずゐぶん強い療治がお好きで……」
「それから、よく、先生に針をして貰つてたさ。……考へると、なんだか、ずゐぶん古いことのやうな氣がするなア」
「えゝ。でももう二三年になりますからねえ」
「二三年どころか、四五年になるよ」
「さうでせうか。そんなになりませうかしら」
「さうさ。大正八九年ごろだもの。もう さうなるんだよ。早いもんだ」
「あゝ、さうでせうかねえ」
と、いやに追憶的な調子になつて、「わたしがあすこのうちへ來ましてからでも、もう今年で八年目ですものねえ」
「さうかい。ぢアもう夙に年期といふやうなものはすんじまつたんだらう？」
それから、その稼業の雇傭關係について、別段さう面白くもない話など聞いてゐるうちに、ウ、ウーイ、ウ、ウーイと、盛に溜飲がさがり、凝のあとがむづ痒く、體ぢうがあつたまるにつれて、うつら〳〵睡氣ざして來た。
「お早うございー！」
ひどく景氣のいゝ三平の聲に目を覺した時には、もういつの間にか按摩の歸つたあとで、雨戸のすきからさし込む光さへ、眩しいほどの眞晝になつてゐた。
「おい、驚いたねえ」
「どうなさいました」
いきなり、枕もとへ來てペタリと坐ると、相手のてれを自分に引きうけて、斜視のやうに、鴨居のあたりへ目を飛ばし、早速パナマの鍔

煙草入を、膝の上にとり出しながら、「またあれからやりましたか」

「何を」

「何をぢやアありませんぜ」

云ひながら、踊がある、といつた手つきで、胸から頸へ、ちよいとひとつ、逆にこきあげてみせた。

「またつて、昨夜やつたのかい？」

「あれ？ 皆目憶えなしですか？」

「だつて、金盥ンなかには、他になんにもなかつたぜ」

「それア貴方、一旦始末をつけて、まだ怪しいつてんで、急いで持つて來た金盥ですもの……」

「さうか。あの前にもうやつちやつてるのか」

「どうも驚いたよ。何しろいきなりなんで……」

「いつ、どこでさ」

「わかちやんに抱かれてゝ、あんた……」

「え？ かけちやつたのかい？」

「いゝえ、それア有樂に離れてからですけれど、なんかあてがはふつて間もないから……」

「ぢかに疊の上か」

「まて、いふやうなわけでね」

「おーや、おや！」

我が身ながらも、汚らしく、淺猿しかつた。

「とてもお話ンならねえなア！」

「ならない。とても女なんぞ出來ッこない」

三平は故意とむごたらしく、「何しろ食つたものが天麩羅だ……」

「よせやい！」

「あとが金盥を被つて、鼻からおまんまッ粒を噴き出さうといふんだから、まア、手もなく權九郎ですね」

「なんとでも云へ！ 大抵覺悟はきめてるんだ。さア、それから先どうした！」

「おや？ まるでこつちが調べられてるやうな具合ですね」

「泣いたか」

「え？」

「泣いたかよ」

「誰が」

「誰がつてやつがあるかい、俺がさ」

「いつ？」

「僕ッたい頓馬だなア。おわかちやんを捉まへて、くだらねえ泣言でも並べやアしなかつたかつて訊くんだよ！」

ケロリとした顔つきで、

「いゝえ」

「シユンコウ（春江の符牒）のことでも云やアしなかつたかい？」

「それア、感心に云ひませんでしたね」

「さうか」

と、しんから吻として、「俺ア、それがもう何より氣にかゝつたんだ。……よしく！ それさい出なけれアしめたもんだ。げろを吐くくらゐは兵家の常だ」

「なんです、そヘイカの常つてのは」
「戰場なれば御免候へ、だよ」
「きたねえ戰場だなア」
「よし！　それアもうそれでいゝから、太田さんの座敷の有樣を、逐一申しあげてみろ！」
「や、どうも、大した元氣で、吃驚しましたねえ。あつしも、まさかいきなりあばれ込まうたア思はなかつたから……」
「一體、お前は、あん時、階下の座敷の方に行つてたのかい！」
「ゐましたとも」
「さうしたら、いきなり俺がはいつてつたのか？」
「あたしがね、……あとで思やアよせばよかつたんだが、川崎さんが見えてます、つて、ちよいと貴方だけに耳うちをしたもんだから……」
「さうかい、お前かい。なんだか、さう聞いたら、急に逢つてやりたくなつちやつて……」
「小なみちやんと腕組かなんかで、新婚旅行だ、新婚旅行だつてんで……」
「さうだよ、あいつ、丸髷なんぞに結つてやアがるから……」
「へーえ、なか〳〵わかつてるところもあるんですね」
「それでて、太田さんなんて人は、洋服か和服か、どんな顏をしてたか、まるつきり憶えがないんだ。――ほんとにそれア、きれーに憶えがないんだ。今度逢つても、俺にやア、とても誰だかわかんないよ――
「御自分のそばに煙草盆がなかつたもんだから、太田さんの前に、一本ぽーんとほつぽり出して、『おい、つけてくれ！』――あれにやアあたしも驚いたよ、ひや〳〵しちやつてね」
「さうかい、やつたもんだなア！」
然しこの話は、先方に與へた感じも、決してさう不愉快なものではなかつたらうといふ自信がもてたから、我ながら、自分の醉態に呆れはしたけれど、別段心は暗まなかつた。「それから？　……なんかほかに失禮なことなんぞなかつたかい？」
「そんなこたアありませんでしたね」
「それア、招ばれもしないのに、いきなり知らない人の座敷に、のこ〳〵はいつて行くのからして、あんまり禮を知つた話ぢやアないけどさ。……でも、別に、彼方が不愉快がるやうなこともなかつたんだね？」
「いえ、そんなこたアありません、面白い人だつて、あとでなか〳〵評判がよウがしたぜ。……いえ、ほんとに！」
「ぢア、そのうち、川崎やなんかと一緒に、どつかに來て貰つて、ひと晩のむかな？」
「いゝでせう。尤、あの方たちは、さうはあがりませんけどね……」
「ところでだね……」
「へえ」
「どうだらう、このまゝ歸るのも具合がわるいが……」
「いゝぢアありませんか。むかひ酒といふやつで、一杯熱いのをおやんなさいましなね」
「俺ね、招ばれッぱなしつてのは可厭なんだがね、このまゝこゝにゐて、夕方からでも、歌公に來て貰つて、お返しをしちまひたいんだが

どうだらう、あんまり事が速急すぎるかね？」

「御免なさいまし」

その時、襖のそとで聲をかけて、笑顔に愛嬌のある、肥つた女中がはいつて來た。「お早う御座います。……なんて、今日は、どうしたんだかみんな揃つて寢坊しちまつて、いつまでもほつたらかして置きましてすみません。……三平さん、昨晩はどうも……」

「いやどうも、誠に……」

持つて來てくれた蜜水をうけとりながら、昌造が世話をやかした詫びの心持も籠て、わりに丁寧な頭のさげ方をした。

「どういたしまして」

と、これも、鋭感にその心持をうけて、なんでもないといふ氣持を笑つてみせてから、

「貴方には、お手水をお使ひなすつてからと思つて、持つて參りませんでしたよ」

「一體、今、何時頃なんです？」

「もう、かれこれお午です……あゝ、それから、先程歌川さんからお電話で、どうぞよろしく、お大事になさいましつて……」

「まるで病人扱ひだ」

三平が、咽を鳴らして笑つたが、急に眞顔になつて、「どうなさいます？　ゴロさん、（歌川の符牒）ほんとにお招びなさいますか」

「うん」

氣の弱い昌造は、この、土地でも一二と云はれる待合で、自分のやうな書生あがりを、二三度の顔馴染くらゐで、すぐ客にしてくれるものかどうか、そんな遠慮があつた。けれども三平は、そこらには一向無頓着で、

「もし招ぶんなら、今のうちにさう云つとかないと、あれがまた、どつかに出かけちまひますぜ」

「なんとか云つてたよ、――今日とか明日とかから稽古が始まるつて……」

「なに、それだつて、はなのうちなら、なんとか誤魔化して、早くぬけて來ますよ」

「どなたです？」

ちよつと氣どつて、眉毛を片つぽだけ吊りあげるやうな顔して、三平の方へ問ひかけた。

「いゝえね、歌川さんをね、……昨夜御馳走になつたから、今日すぐ招び返さうつてんですがね、惡い癖で、こちらは、いやにさういふとこが几帳面だもんだから……」

「あゝ、さう！」

と、ひどく勇みたつて、ぢアすぐお電話をおかけしませうか」

「いえ、よござんすよ。かけるんならあたしがかけますから。……どうなさいます？」

と、あとを昌造の方へ、「だいぶお辛さうですが、何も無理に我慢してまで……」

「なに、大丈夫ですよ。日中は、ちつとへこたれるかも知れないが、**これで灯がついてみろ、忽ち元氣百倍して……」**

「また金盥を被りますか」

「あツはゝゝあ」
　嗄のある高ッ調子で、遠慮なく笑はれたのが、――その隔のなさが却つて昌造には嬉しかつた。
「いゝとも！　お安い御用だ！　金盥くらゐなら何遍でも救つて御覧にいれるから、すぐ電話をかけて來いよ」
「へ！」
　尻を輕く三平が立つて行つたあとに、その、三十を二つ三つ出たかと思はれる女中は、柄にもなくてれ臭さうに、眼を逃して、
「ずゐぶんよくお天氣が續きますわねえ」
「うん」
　昌造も、好意を感じてゐるだけに、輕く口が利けなかつた。「でも、もうだいぶ秋めいて來ましたね」
「えゝ、昨日だつたか、赤蜻蛉が飛んでましたつけ」
「さうかい？」
　かういふ場所の生活とは、恐らく縁の遠いその云草がひどく昌造を興がらせた。
「へーえ、いつの間にそんなものを見つけたんだい？」
「赤蜻蛉ですか？　それア貴方、洗濯がありますもの。物干にあがつてるとツー、ツと、……」
「成程ね、物乾で見るか」
「あら、どうして？　物乾でなくつたつて、赤蜻蛉くらゐ……」
「でもさ、いかにも話の種が田舍びてゝ面白いからさ」
　昌造の心は、ふと、逗子の、借家ながら二千坪近い芝生の庭に遊んでゐる子供たちの方へ、ふら／＼と歸つて行つた。十年以上にもなる放蕩生活ながら、さういふ場合に、ふと來る寂しさ、いぢらしさに變りはなかつた。……徑一尺ほどの松林を控えた緣先の、海の上まで擴がつた空に、赤蜻蛉の群つて來るのも、鮮かに、想像の目前に浮び現はれて來た……。
「もう、戸、あけませうね」
「えゝ、あけてください。……あゝあ、あゝゝゝゝあ」
「まア、大へんな欠……」
「さア、そろ／＼起きるとしようかね」
　そこに、三平が、ドタ／＼と、いやに間拔じみた足音を響かせて駈つて來た。
「や、どうも……」
「どうしたい」
「來るんですね、これが。呆れたもんで……」
　十中八九無駄と思つてゐたのが、存外の返事で、三平はひどく嬉しさうだつた。その喜ひを、荒ッぽくこんな風に云ひ現はした。
「さうかい、來るかい、あの馬鹿……」
「來るんですね、年甲斐もなく……」
「まア、あんなこと……」
　女中も噴き出しながら、「さう、いらつしやるんですつて？」
「よし、さうときまれア、ひとつ、起きてやらうかな」
「起きて、ザブーンとひとつお風呂に飛び込んでいらつしやい」
「沸いてますか」

「えゝ、どうぞ……。今お加減を見させますから……」

と、呼鈴を押さうとしたが、よして「あゝこれがいけないんだ！　自分で行つて來よう！」

と、賑かな笑ひ聲を殘して出て行つた。

「いゝなア！」

昌造は、威勢よく身を起して、「いゝ女中さんだなア！　すつかり氣に入つちやつた！」

「いゝでせう？」

と、さも自分のものゝやうな顏つきで、「あれアどうして、なかなか……」

「なんてえ人だい？」

「お民さんてんですがね……」

「お民さんか。よーし！　あゝいふ人がゐてくれるんなら安心して、今夜もひとつ大に飲むかな」

青空に、一點の雲もなく、今日もまた、馬鹿にならない殘暑の厳しさだつた。

編輯だより

◇『改造』を買ひたいがどうも八十錢では：：の聲がある。我社は非常なる決心のもとに本月號から五拾錢に値下した。編輯上に於ては全部九ポを廢して八ポイント組とし、一段組を廢し、二段組若くは三段組とし、十七行組廿行組を廿三行組廿五行組とした。從來三百五十頁位の分量の内容が今回は二百十頁位で包容されることになつた。

◇本月號の雑誌は從來のそれより遙に内容が秀れて分量が多く、それで五十錢で讀めることになつた。

◇そして此の機會に編輯上にも大革新を行ふが、現在までは本誌は綜合雑誌として聊か偏していたやうなところもあつたが、今後は總ての新しい方面を開拓して百萬讀者の總てに必要な機關としたい。

◇かゝる急激の革新をすべての方面に斷行したが、しかしその質に於ては論文でも、創作でもこれ迄よりは一層力作を登載する、片々たる駄作は從來の如く登載しない。

◇本月號から驚くべく大部數平常の二倍以上の增刷を斷行した。茲にお斷りしておきたいのは本誌の急激の改革のため八ポイント活字が全部揃はず、ルビつきとそうでないものとがあるが三月號よりは一定した活字でやりたいと思ふ。

◇これ丈けの頁で、從來以上の分量の原稿では今迄より部數が二倍や二倍半になつても多大の缺損だ、冀くば百萬の讀者を得て二十錢か三十錢の價格で讀者に供給の出來る日を樂んで待ちたい。

◇本月號の創作欄は力作が集まつた、小さい活字で二段組でそして廿三行詰だから各篇短いやうに見ゆるが正宗氏のものは大作七十三枚横光氏四十三枚犬養氏四十一枚に達するものだ。

◇殊に里見氏の創作は筆者が多年取つて置きの題材で、カラマゾーフ兄弟のそれの如き期待のかけられるものらしい。

◇現代日本文學全集の第三回配本は『谷崎潤一郎集』に決定した。氏近來の力作『痴人の愛』全部も挿入することになつた。痴人の愛一册だけで二圓する。第二回配本は樋口一葉集北村透谷集である。全集の讀者にのみに改造社文學月報・無代贈呈する。何れも一月廿三、四日頃から配本する。第一回配本は混雑を極め配本おくれがあつたり、書面の返事がおくれたり失禮しました。

◇本年三月專門學校以上の學校卒業する者より改造記者壹名（政經を學習せるもの）出版部一名（文科を學習せしもの）營業部に一名（理財商業を學習せるもの）を採用す。志望者は履歴書と論文を添へ二月十日まで本社主幹宛に親展にて申込まれたし。年齢廿六歳以下體健勞を厭はぬ人がよろし。

◇今回本社は手狹な爲め麴町區内幸町一ノ三幸ビルヂング一階に引越しました。

◇政界には重くるしい空氣が漂ふてきた。もう一路解散への道しかなくなつた。此間にありて新興階級の目まぐるしい活躍のみが政界の淨化について期待される。札付を一掃することは此一擧にあり。大衆の勇敢なる努力と公明にして、因襲排斥に斷乎たる態度に出づることを希望する。此期を逸すれば悔ゆとも及ばじ。

◇英支の紛爭はたゞ英支の問題のみでない。英、日、佛、米等と支那との問題として進展しつゝある。支那側は帝國主義を根本から掃蕩する努力の連繋だ。芳澤公使が英國側に肱鐵砲を喰はして英國を敵役に廻したことがいゝか惡いかは別問題として、その意氣なり、主張なりを永遠に把持するには根本から日本政府の態度を革正せねばならない。すべての問題は小手先で解決が出來なくなつて來つつある。

◇この根本に横はる大問題は實に、制度、組織の問題である。資本主義を奉ずるものは資本主義者としてしか終局までの道行きは出來ぬ譯であるが。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	貳錢
半ヶ年	參圓	郵税不用
壹ヶ年	六圓	郵税不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和二年一月二十日印刷納本
昭和二年二月一日發行

東京市麴町區内幸町一ノ三
幸ビルヂング
編輯兼發行人
印刷人　山本三生

東京市外牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

（價五拾錢）

發行所
東京麴町區内幸町一ノ三
幸ビルヂング一階
改造社

振替東京八四〇二
電話銀座（一）四五五八
營業部（一）五〇四六
編輯部一七三三